

# 中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17)

## 家ノ城跡

2012

財団法人 広島県教育事業団



家ノ城跡発掘調査後遠景（北東上空から）

## 例　　言

- 1 本書は、平成 15（2003）～19（2007）年度にかけ、5 次にわたり実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う家ノ城跡（尾道市木ノ庄町木梨字家城東平所在）の発掘調査報告である。
- 2 平成 17 年度までの発掘調査及び整理作業は、日本道路公団中国支社（10 月から西日本高速株式会社中国支社が業務継承）との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）が実施し、平成 18 年度以降の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所との委託契約により調査室が実施した。
- 3 発掘調査の担当者は、次のとおりである。

### 第 1 次調査（平成 15 年度）

梅本健治（主任調査研究員）

東海アーナス株式会社が支援業務を行った。東海アーナスの調査員は藤田明弘、若林純也である。

### 第 2 次調査（平成 16 年度）

辻満久（調査研究員）、山田繁樹（調査研究員）

### 第 3 次調査（平成 17 年度）

岩本正二（事業調整監）、唐口勉三（調査研究員）

### 第 4 次調査（平成 18 年度）

唐口勉三（調査研究員）

株式会社イビソクが支援業務を行った。イビソクの調査員は持田透、松田繁である。

### 第 5 次調査（平成 19 年度）

岩本芳幸（調査研究員、現・広島県立白木高等学校）、新井真吾（調査研究員、現・北広島町立豊平南小学校）

- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理・写真撮影は、辻・岩本（芳）、賃金職員の氏房晃子・有原ひろみ・大田けい子が中心となって行った。

- 5 本書は、岩本（芳）が執筆・編集した。

- 6 本書で使用した遺構の表示記号は、次のとおりである。

S A : 柱穴列、S B : 建物跡、S C : 通路、S D : 構造遺構、

S K : 土坑、S X : その他の遺構

- 7 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

- 8 本書に使用した北方位は、すべて世界測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

- 9 第 2 図は、国土交通省国土地理院発行の 1 : 50,000 の地形図（尾道・府中）を使用した。

- 10 記録類及び出土品は、全て広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目 8 番 49 号）において保管している。

## 目 次

I	はじめに	(1)
II	位置と環境	(5)
III	調査の概要	(9)
IV	遺構と遺物（1郭周辺）	(16)
1	1郭	(16)
2	1郭東側切岸	(77)
3	北東尾根	(81)
4	北尾根・北西尾根	(83)
V	遺構と遺物（南東尾根）	(110)
VI	まとめ	(115)

## 挿図目次

第1図	中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図	(4)
第2図	家ノ城跡周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)	(8)
第3図	調査前地形図 (1 : 1,500)	(11)
第4図	調査区位置図 (1 : 2,500)	(12)
第5図	1郭周辺第3次調査トレンチ配置図 (1 : 600)	(13)
第6図	1郭周辺グリッド図 (1 : 600)	(14)
第7図	1郭周辺遺構配置図 (1 : 500)	折込み
第8図	1郭周辺断面図 (1 : 500)	(15)
第9図	1郭遺構配置図 (1 : 200)	折込み
第10図	SB 1 実測図 (1 : 80)	(17)
第11図	SB 2・SX 2 実測図 (1 : 80)	(19)
第12図	SB 2・4出土土器類実測図 (1 : 3)	(20)
第13図	SB 3 実測図 (1 : 80)	(22)
第14図	SB 4 実測図 (1 : 100)	(24)
第15図	SB 5・SX 1 実測図 (1 : 80)	(26)
第16図	焼土1・3・4 実測図 (1 : 30)	(27)
第17図	SA 1 実測図 (1 : 80)	(25)
第18図	SX 1 出出土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6)	(30)

第19図	S X 2 出土土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(31)
第20図	S X 12・13実測図 (1 : 40) . . . . .	(35)
第21図	S X 13出土土器類実測図 (1 : 3) . . . . .	(36)
第22図	S K 1・2・12・15・16・22実測図 (1 : 40) . . . . .	(37)
第23図	S K 5・S X 2 実測図 (1 : 40) . . . . .	(39)
第24図	S K 8・9・11実測図 (1 : 40) . . . . .	(41)
第25図	S K 10・13・14実測図 (1 : 30) . . . . .	(43)
第26図	S K 2・5・11・12・14出土土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(45)
第27図	S K 21・24・26・28~30実測図 (1 : 40) . . . . .	(47)
第28図	S K 25・32~34・38実測図 (1 : 40) . . . . .	(51)
第29図	S K 35~37実測図 (1 : 40) . . . . .	(53)
第30図	S K 21・25・27・28~30・33・35・36出土土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(55)
第31図	S K 39実測図 (1 : 40) . . . . .	(56)
第32図	S K 40~42実測図 (1 : 40) . . . . .	(57)
第33図	S K 37~40出土土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(58)
第34図	S D 11・12出土土器類実測図 (1 : 3) . . . . .	(62)
第35図	1 郭ピット出土土器類実測図 (1 : 3) . . . . .	(64)
第36図	1 郭トレンチ 1 出土土器類実測図 (1 : 3) . . . . .	(65)
第37図	1 郭トレンチ 2 出土土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(65)
第38図	1 郭トレンチ 3 出土土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(67)
第39図	S X 1・1 郭遺構外出土土器類実測図 (1) (1 : 3) . . . . .	(69)
第40図	1 郭遺構外出土土器類実測図 (2) (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(71)
第41図	1 郭遺構外出土土器類実測図 (3) (1 : 3) . . . . .	(73)
第42図	1 郭遺構外出土土器類実測図 (4) (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(74)
第43図	1 郭東側切岸実測図 (1 : 200), S C 1 土層断面図 (1 : 100) . . . . .	(76)
第44図	1 郭東側切岸土層断面図 (1 : 100) . . . . .	(77)
第45図	1 郭東側切岸・堀切1他出土土器類実測図 (1 : 3, 1 : 6) . . . . .	(79)
第46図	北東尾根遺構配置図 (1 : 200) . . . . .	折込み
第47図	北尾根・北西尾根遺構配置図 (1 : 200) . . . . .	折込み
第48図	堀切1・平坦面4 土層断面図 (1 : 100), 北尾根・北西尾根土層断面図 (1 : 200) . . . . .	(83)
第49図	1 郭周辺出土土器製品実測図 (1 : 2) . . . . .	(86)
第50図	1 郭周辺出土瓦実測図 (1 : 4) . . . . .	(87)
第51図	1 郭周辺出土石製品実測図 (1 : 2, 1 : 3) . . . . .	(88)
第52図	1 郭周辺出土鐵製品実測図 (1) (1 : 2) . . . . .	(89)
第53図	1 郭周辺出土鐵製品実測図 (2) (1 : 2) . . . . .	(90)
第54図	1 郭周辺出土銅製品実測図 (3) (1 : 2) . . . . .	(91)
第55図	1 郭周辺出土鐵製品実測図 (4) (1 : 2) . . . . .	(92)
第56図	1 郭周辺出土銅製品実測図 (5) (1 : 2) . . . . .	(93)
第57図	1 郭周辺出土銅製品他実測図 (1 : 2) . . . . .	(94)
第58図	1 郭周辺出土古錢拓影 (1) (原寸) . . . . .	(97)
第59図	1 郭周辺出土古錢拓影 (2) (原寸) . . . . .	(98)
第60図	南東尾根遺構配置図 (1 : 200) . . . . .	折込み
第61図	南東尾根地形図 (1 : 400) . . . . .	(109)

第62図	南東尾根 S X 1・2 実測図 (1:40)	.....	(110)
第63図	南東尾根 S X 3 実測図 (1:40)	.....	(111)
第64図	南東尾根 S D 1 実測図 (1:60)	.....	(111)
第65図	南東尾根出土遺物実測図 (1:2, 1:3, 1:4)	.....	(112)

## 表目次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧	.....	(2)
第2表	1 郡周辺遺構別出土古錢一覧表	.....	(95)
第3表	1 郡周辺出土土器類観察表1	.....	(99)
第4表	1 郡周辺出土土器類観察表2	.....	(100)
第5表	1 郡周辺出土土器類観察表3	.....	(101)
第6表	1 郡周辺出土土器類観察表4	.....	(102)
第7表	1 郡周辺出土土器類観察表5	.....	(103)
第8表	1 郡周辺出土土製品・瓦計測表	.....	(104)
第9表	1 郡周辺出土石製品計測表	.....	(104)
第10表	1 郡周辺出土金属製品計測表1	.....	(105)
第11表	1 郡周辺出土金属製品計測表2	.....	(106)
第12表	1 郡周辺出土古錢一覧表	.....	(107)
第13表	南東尾根出土土器類観察表	.....	(112)
第14表	南東尾根出土瓦・銅製品計測表	.....	(112)
第15表	1 郡遺構別中世土器類組成表	.....	(117-118)
第16表	1 郡周辺中世土器類組成表	.....	(119)

## 図版目次

巻頭図版	家ノ城跡発掘調査後遠景 (北東上空から)	図版 3 a	第5次調査区調査後全景 (北西上空から)
図版 1 a	家ノ城跡発掘調査後遠景 (北東上空から)	b	1郭西半部 (第5次調査区) 完掘全景 (直上から、上が東)
b	第3・4次調査区調査後全景 (北上空から)		
図版 2 a	第3・4次調査区調査後全景 (直上から)	図版 4 a	第5次調査前遠景 (北東から)
b	1郭東半部 (第3・4次調査区) 完掘全景 (北上空から)	b	第5次調査前近景 (北東から)
		c	第5次調査後近景 (北から)

- 図版 5 a 1 郡東半部（第3・4次調査区）完掘状況  
(南から)  
b 1 郡西半部（第5次調査区）完掘状況  
(南西から)  
c 1 郡西半部（第5次調査区）完掘状況  
(南東から)
- 図版 6 a S B 1 全景（北東から）  
b S B 1 西側根石検出状況（北東から）  
c S B 2・S X 2 検出状況（西から）
- 図版 7 a S X 2・S K 5 土層断面（南西から）  
b 焼土1検出状況（南西から）  
c 焼土2検出状況（南から）
- 図版 8 a S B 3 全景（北から）  
b S B 3 全景（北から）  
c S B 4 全景（北から）
- 図版 9 a 焼土4・S B 1-P 2 土層断面（南西から）  
b 焼土4完掘全景（北西から）  
c S B 5・S X 1 検出状況（北から）
- 図版10 a S A 1 全景（南東から）  
b S K 2 粘土部分半裁（南から）  
c S K 8 磁検出状況（南から）
- 図版11 a S K 9 磁検出状況（東から）  
b S K 10・13・14完掘状況（南西から）  
c S K 14遺物出土状況（西から）
- 図版12 a S K 11 検出状況（北東から）  
b S K 21 磁検出状況（西から）  
c S K 21 完掘状況（南東から）
- 図版13 a S K 25 磁検出状況（南から）  
b S K 32 完掘状況（北西から）  
c S K 33 遺物出土状況（東から）
- 図版14 a S K 33・34 完掘状況（西から）  
b S K 35 完掘状況（西から）  
c S K 36 遺物出土状況（東から）
- 図版15 a S K 36・37 完掘状況（東から）  
b S K 38 完掘状況（南東から）  
c S K 39 完掘状況（北西から）
- 図版16 a S K 40 完掘状況（南東から）  
b S K 41・42 完掘状況（南東から）  
c S X 12・13 完掘状況（北から）
- 図版17 a 北東尾根完掘状況（西から）  
b 北東尾根完掘状況（南西から）  
c 北東尾根完掘状況（北から）
- 図版18 a 北東尾根平坦面1 土層断面（東から）  
b 北東尾根平坦面2 土層断面（東から）  
c 北東尾根平坦面3 土層断面（東から）
- 図版19 a 北尾根完掘状況（東から）  
b 北尾根完掘状況（南から）  
c 北尾根平坦面5 土層断面（東から）
- 図版20 a 北尾根掘切2 土層断面（東から）  
b 北尾根掘切2・平坦面7 完掘状況  
(南から)  
c 北側平坦面4・土橋完掘状況  
(南東から)
- 図版21 a 掘切1 土橋部分（北東から）  
b 掘切1 土層断面（北東から）  
c 掘切1 北東部（北東から）
- 図版22 a 北西尾根完掘状況（南東から）  
b 1 郡西半部調査風景（南西から）  
c 家ノ城跡から鷺尾山城を望む（南から）
- 図版23 1 郡周辺出土土器類（1）  
(S B 2・4, S X 1)
- 図版24 1 郡周辺出土土器類（2）(S X 1・2)
- 図版25 1 郡周辺出土土器類（3）(S X 2)
- 図版26 1 郡周辺出土土器類（4）  
(S X 13, S K 2・5・11・12)
- 図版27 1 郡周辺出土土器類（5）  
(S K 14・21・25・27~30・33・35)
- 図版28 1 郡周辺出土土器類（6）(S K 36~38)
- 図版29 1 郡周辺出土土器類（7）  
(S K 39, S D 11・12)
- 図版30 1 郡周辺出土土器類（8）  
(1 郡ピット, トレンチ1・2)

- 図版31 1 郭周辺出土土器類（9）（トレンチ3、F 7、G 8区）
- 図版32 1 郭周辺出土土器類（10）（G 8～12区）
- 図版33 1 郭周辺出土土器類（11）（G13、H11・13区）
- 図版34 1 郭周辺出土土器類（12）（H13・14、I 10・11区）
- 図版35 1 郭周辺出土土器類（13）（I 12、J 9・10区 1郭第4次調査区、1郭東側切岸）
- 図版36 1 郭周辺出土土器類（14）（堀切1、北尾根、北西尾根）、1郭周辺出土土製品、1郭周辺出土瓦
- 図版37 1 郭周辺出土石製品、1郭周辺出土鉄製品（1）
- 図版38 1 郭周辺出土鉄製品（2）
- 図版39 1 郭周辺出土鉄製品（3）
- 図版40 1 郭周辺出土鉄製品（4）
- 図版41 1 郭周辺出土鉄製品（5）、1郭周辺出土銅製品、1郭周辺出土漆紙
- 図版42 1 郭周辺出土古鏡
- 図版43 a 南東尾根南半部（第1次調査区）調査後遠景（南上空から）  
b 南東尾根南半部（第1次調査区）完掘全景（南東上空から）
- 図版44 a 家ノ城跡（第2次調査後）遠景（北・鷲尾山城跡から）  
b 南東尾根北半部（第2次調査区）調査後遠景（南から）  
c 南東尾根南半部（第1次調査区）完掘全景（北から）
- 図版45 a 南東尾根南半部（第1次調査区）完掘全景（南から）  
b 南東尾根北半部（第2次調査区）完掘全景（北から）  
c 南東尾根北半部（第2次調査区）完掘全景（南から）
- 図版46 a 南東尾根平坦面1（北から）  
b 南東尾根平坦面2（北から）  
c 南東尾根平坦面3（北東から）
- 図版47 a 南東尾根平坦面4（北から）  
b 南東尾根平坦面4・5（北から）  
c 南東尾根SX1完掘状況（東から）
- 図版48 a 南東尾根SD1・SX1完掘状況（北から）  
b 南東尾根SX2土層断面（東から）  
c 南東尾根SX2瓦出土状況（東から）
- 図版49 a 南東尾根SX3土層断面（南東から）  
b 南東尾根SX3完掘状況（北東から）  
c 南東尾根SX3完掘状況（北西から）
- 図版50 南東尾根出土遺物

## I はじめに

家ノ城跡の発掘調査は、中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴うものである。中国横断自動車道尾道松江線は、中国地方を南北に貫き、瀬戸内海側の広島県尾道市から広島県世羅町・三次市・庄原市を経て日本海側の島根県松江市に至る総延長約137kmの高速自動車国道である。このうち広島県内の路線は約86kmである。本事業は、山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道を接続するだけではなく、西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって、中四国地域連携軸構想の推進、経済圏・商業圏の拡大、山陽・山陰間の交流促進、広域観光ネットワークの創造を図ろうとするものである。

当該事業地内の尾道JCTから世羅ICまでの区間については、本事業を推進する日本道路公团中国支社尾道工事事務所（以下「道路公团」という。）と広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は、平成11（1999）年7月から文化財等の有無及び取扱いについて協議を始めた。家ノ城跡については、県教委は現地踏査後平成14年2月13日に、道路公团に対しその範囲を回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と道路公团は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。

これを受けて道路公团では、平成15年3月10日に文化財保護法第57条の3第1項（現・第94条第1項）に基づく埋蔵文化財発掘通知を県教委に提出し、県教委から平成15年4月1日に工事着手前の発掘調査が必要である旨の通知を受けた後、工事を優先する部分から順次、発掘調査の実施を財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）に依頼した。平成15年4月からセンターの業務を引き継いだ財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）が、家ノ城跡の第1～3次発掘調査を順次実施した。その後、平成17年10月1日に当該事業は西日本高速道路株式会社（以下「西日本高速」という。）に引き継がれた。

さらに平成18年度から当該事業は国土交通省の直轄事業となつたため、西日本高速にかわり国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所（以下「国土交通省」という。）が家ノ城跡の発掘調査依頼を行つた。これに基づき、国土交通省と教育事業団は委託契約を結び、家ノ城跡の第4・5次調査を行つた。

第1次発掘調査は教育事業団から県教委あての文化財保護法第57条第1項（現・第92条第1項）に基づく埋蔵文化財の発掘調査届（以下「調査届」という。）を平成15年7月29日に提出し、県教委から発掘調査実施の通知（以下「調査指示」という。）を同年8月19日に受けた後、同年9月16日から10月31日まで実施した。第2次発掘調査は調査届を平成16年4月27日に提出し、調査指示を同年5月14日に受けた後、同年5月17日から6月11日まで実施した。第3次発掘調査は調査届を平成17年8月29日に提出し、調査指示を同年9月5日に受けた後、同年10月17日から11月11日まで実施した。第4次発掘調査は調査届を平成18年3月16日に提出し、調査指示を同年3月29日に受けた後、同年4月17日から7月21日まで実施した。第5次発掘調査は

調査届を平成19年3月14日に提出し、調査指示を同年3月29日に受けた後、同年4月16日から6月15日まで実施した。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所、尾道市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

なお、中国横断自動車道尾道松江線は尾道JCTから世羅ICまでの区間が、平成22年11月27日に供用を開始した。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告番	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次 鉄状堅堀群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
		第2次 1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日			
		第3次 西堅堀	平成15年11月10日～ 11月28日			
	曾川1号遺跡		平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区 旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡
		B地区 P2第一調査区	平成15年4月7日～ 5月23日			
		C地区 P2第二調査区				
		D地区 旧・P1	平成16年1月6日～ 2月5日			
(3)	池ノ奥古墳		平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町字津戸字天神	古墳時代後期	古墳
(4)	城根遺跡		平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次 5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
	曾川1号遺跡	E地区 旧・P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町大町字米田	绳文時代後期～ 中世	遺物包含層
(5)	曾川1号遺跡	G地区 旧・P3	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		H地区 旧・P3側道				
		I地区 旧・P4側道				
		J地区 旧・P2	平成17年1月11日～ 3月4日			
(6)	曾川1号遺跡	K地区	平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡
(7)	札場古墳		平成17年11月21日～ 平成18年1月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～ 古代	集落跡
	後山大平古墳		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(8)	北野山遺跡		平成18年7月3日～ 8月4日	三次市吉舎町字敷地	平安時代	仏教関連 の施設跡
(9)	向江田中山遺跡		平成18年4月17日～ 6月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～ 古代	集落跡
(10)	権現第1～3号古墳		平成17年7月11日～ 11月11日	三次市向江田町字権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳		平成18年4月17日～ 8月4日	三次市吉舎町字敷地	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳		平成20年7月7日～ 9月5日	三次市甲奴町宇賀字茶臼	古墳時代中期～ 古代	古墳
(13)	瀬戸越南古墳		平成19年6月25日～ 8月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡		平成19年7月9日～ 8月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代後期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)		平成19年9月25日～ 12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳		平成19年7月2日～ 9月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古墳
(17) 本書	家ノ城跡	第1次 南東郭群	平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市木之庄町木梨字家 城東平	中世	城 跡
		第2次 南東郭群	平成16年5月17日～ 6月11日			
		第3次 1郭周辺	平成17年10月17日～ 11月11日			
		第4次 1郭・北尾根	平成18年4月17日～ 7月21日			
		第5次 1郭・北西 尾根	平成19年4月16日～ 5月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳		平成19年4月25日～ 8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代中期	古 墓
	右谷遺跡		平成19年4月25日～ 8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代後期～ 古代	集落跡
(19)	和知白鳥遺跡(第1次)		平成18年4月17日～ 12月22日	三次市和知町字白鳥・四 拾賀町三重	古墳時代中期～ 古代	集落跡 古墳
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日～ 12月15日	三次市四拾賀町字段	古墳時代	集落跡
		第2次	平成19年9月25日～ 12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第1号古墳		平成20年4月21日～ 6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古 墓
	常定川平1号遺跡				古墳時代中期	集落跡
	常定川平2号遺跡				縄文時代	落し穴・墓
(22)	稻干場第2～4・11号古墳		平成19年10月9日～ 12月23日	庄原市口和町大月字稻干 場	古墳時代後期	古 墓

### 第1表の報告書一覧

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮跡跡・呉川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』 2006年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 呉川1号遺跡(△～D地区)』 2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 地／典古墳』 2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 呉川1号遺跡(E地区) 牛の皮跡跡(第4次)』 2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 呉川1号遺跡(G～J地区)』 2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 呉川1号遺跡(K地区)』 2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 札吉古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年

- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』 2009年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡』 2010年
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 横現第1~3号古墳』 2010年
- (11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大番奥池第1~3・7号古墳』 2010年
- (12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳』 2011年
- (13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 濱戸越南古墳』 2011年
- (14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14) 上陣遺跡』 2011年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白鳥遺跡(第2次)』 2011年
- (16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2~5号古墳』 2011年
- (17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡』 2012年
- (18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9~12号古墳・右谷遺跡』 2012年
- (19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19) 和知白鳥遺跡(第1次)』 2012年
- (20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 段遺跡』 2012年
- (21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳・常定川平1・2号遺跡』 2012年
- (22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22) 福干場第2~4・9号古墳』 2012年



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図 ((1) ~ (22) は報告書番号)

## II 位置と環境

家ノ城跡は、尾道市木ノ庄町木梨に所在する。尾道市は広島県の南東部に位置し、旧備後国に属していた。古くから瀬戸内海の港町として繁栄してきた。明治 31 (1898) 年、尾道市は広島県で 2 番目に市制を施行し、その後周辺部と合併して市域を拡大した。昭和 30 年代までは備後地方の最大都市であった。いわゆる「平成の大合併」により、平成 17 (2005) 年に御調郡御調町・向島町を、翌年には因島市、豊田郡瀬戸田町を編入し、現在に至っている。東は福山市、北は府中市・世羅郡世羅町、西は三原市、南は海を挟んで愛媛県と接している。面積は約 285 km<sup>2</sup>、人口は約 14 万 5 千人である。

尾道市は「坂の街」として知られ、風光明媚で、多くの古刹があることなどから、多数の観光客が訪れている。著名な作家が居を構えたり、尾道を舞台にした多くの文学作品が発表されていることから「文学の街」としても知られている。また、「映画の街」としても知られており、尾道を舞台にした映画が数多く撮影され、近年でも尾道を舞台にしたテレビドラマなどが撮影されている。

尾道市の陸上交通は、鉄道では山陽本線、山陽新幹線が東西に走り、高速自動車道路では山陽自動車道と西瀬戸自動車道（瀬戸内しまなみ海道）、中国横断自動車道尾道松江線が十字に交差している。海上交通を含め、尾道市の利便性が近年急速に高まってきている。

ここでは旧尾道市の遺跡を中心に述べていくこととする。

**旧石器時代～縄文時代** この時代の遺跡数は少ないが、大田貝塚<sup>(1)</sup>（高須町）は、松永湾西岸にある遺跡である。縄文時代前期から晩期まで継続したが、中期の土器が多い。多量の古式土師器・製塩土器が出土した他、約 80 体の縄文人骨が出土した。

**弥生時代** 弥生時代になると遺跡数は増加する。満越遺跡（浦崎町）では、「木の葉文」をヘラ描きした弥生前期土器が出土する竪穴住居跡が確認された。天満原遺跡<sup>(2)</sup>（高須町）では、竪穴住居跡 3 軒を検出し、中期中葉から後期の土器が出土した。堂垣内遺跡<sup>(3)</sup>（西藤町）では弥生時代後期の土器が多量に出土した。貝ヶ原遺跡<sup>(4)</sup>（御調町貝ヶ原）では、赤色顔料を塗った特殊器台が出土し、後期の墳丘墓があつた可能性がある。

**古墳時代** 古墳時代になると遺跡数はさらに増加する。黒崎山古墳（高須町）は、独立丘陵上に位置する備後地方最大級の前方後円墳で、全長約 70m である。埋葬施設は竪穴式石室で、須恵器・鉄刀・円筒埴輪などが出土しが、土取り工事により消滅した。大元山古墳（高須町）は、黒崎山古墳の約 300m 西側の独立丘陵上に立地する。未調査のまま浄水場建設により消滅した。全長 50 m 前後の前方後円墳と推定され、鉄鋒・鉄刀・鉄鎌・円筒埴輪・形象埴輪片などが採取されている。このような大型古墳は 5 世紀～6 世紀前半にかけて築造されたと考えられ、尾道の地理的要因と関係が深いと思われる。天神山古墳（木ノ庄町木梨）からは刀子が出土し、横穴式石室導入以前の古墳と考えられる。横穴式石室を埋葬施設とする古墳は広範囲に認められ、家ノ城跡が所在す

る藤井川流域では、2基からなる猪子迫古墳群（美之郷町）、大寺古墳（同）、池田山古墳（同）、殿山古墳（同）などがある。木ノ庄町には天神山古墳、菖蒲山古墳、実角古墳があるが、詳細は不明である。また、先述の満越遺跡は、古墳時代を中心とする製塙遺跡で、炉跡が検出され、製塙土器が出土している。古墳時代から奈良時代まで製塙が続けられている。

古代 古代の遺跡数はそれほど多くないが、本郷平廃寺<sup>(6)</sup>（御調町丸門田）は7世紀末に創建された寺院である。中国自動車道尾道松江線建設事業に伴い調査した曾川1・2号遺跡<sup>(7)</sup>（御調町大町）は繩文時代後期から中世にかけての遺跡で、1号遺跡から古代の掘立柱建物跡や8～9世紀頃の製塙土器が出土し、2号遺跡から12世紀前後と考えられる掘立柱建物跡や柱状高台付皿が出土している。

中世 中世になると尾道は高野山領大田庄の倉敷地となり、年貢の積み出し港として一層発展した。大田庄と尾道を結ぶ南北の交通路が重要となり、近世には石州街道に発展していった。尾道市内では多くの城館跡が確認されている。木ノ庄町域の城館跡として、土壘と堀切を有する単郭の城と考えられる門田城跡、3つの郭からなり土壘状の高まりをもつ家政城跡がある。金剛丸持倉氏館跡、木梨城跡については、詳細が不明である。鷺尾山城（木ノ庄町）は本城跡の約1m北側に位置する。標高約330mの最高所の郭を中心にそこから延びる3つの尾根に郭を配している。石垣・土壘・堀切・築山などの遺構が残る。

北部になるが、牛の皮城跡<sup>(8)</sup>（御調町大町）は16世紀の山城で、北郭群と南郭群からなり、両郭群とも大規模な畝状堅堀群を配している。本事業に伴い、北郭群の土壘を伴う郭や堅堀、郭群をとりまく畝状堅堀群などの調査を実施した。建物跡は検出されなかつたが、陶磁器や土師質土器などの土器類、石製品、金属製品などが出土した。末近城跡<sup>(9)</sup>（御調町植野）は15世紀後半まで築かれたと推定される小規模城跡である。郭・1間×1間の掘立柱建物跡・堀切などを検出したが、在地領主の拠点と考えられる遺構や遺物が出土していないことなどから、「村の城」と考えられている。

城館跡以外の遺跡としては、7,545枚という大量の古銭が出土した木梨遺跡<sup>(10)</sup>（木ノ庄町木梨）がある。尾道遺跡<sup>(11)</sup>（尾道市中心部一帯）は1975年から発掘調査が実施されている中世遺跡である。中世尾道が港町として繁栄したことを示す陶磁器類などの遺物や遺構が多数見つかっている。先述の曾川1号遺跡からも中世の掘立柱建物跡や土器類などの遺物が出土している。

## 註

- (1) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第9集』 1971年
- (2) 尾道市文化財協会『満越遺跡』 1984年
- (3) 天満原遺跡発掘調査団『天満原遺跡』 1986年
- (4) 広島県教育委員会『堂垣内遺跡発掘調査報告』 1977年
- (5) 広島県教育委員会『広島県文化財調査報告第17集』 1991年
- (6) 御調町教育委員会『本郷平廃寺』 1986・1989年

- (7) 財団法人広島県教育事業団『曾川1号遺跡一大町地区防火水槽設置事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 2005年
- 財団法人広島県教育事業団『曾川1号遺跡（A～D地区）』 2006年
- 財団法人広島県教育事業団『曾川1号遺跡（G～J地区）』 2008年
- 財団法人広島県教育事業団『曾川1号遺跡（K地区）』 2008年
- 財団法人広島県教育事業団『曾川1号遺跡（L・M地区）』 2010年
- 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡』 2005年
- (8) 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第3集』 1995年
- (9) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡』 2005年
- 財団法人広島県教育事業団『城根遺跡・曾川1号遺跡（E地区）・牛の皮城跡（第4次）』 2008年
- (10) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『末近城跡』 2002年
- (11) 尾道市教育委員会『尾道市木ノ庄町木梨発掘古鏡調査報告』 1964年
- (12) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『尾道中世遺跡発掘調査概報－尾道市土堂一丁目所在－』 1977年  
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『尾道中世遺跡発掘調査報告－尾道市土堂二丁目所在－』 1980年  
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『尾道－市街地発掘調査概要－1977～1980』 1978～1981年  
尾道市教育委員会『尾道－市街地発掘調査概要－1981』 1982年  
尾道市教育委員会『尾道遺跡－市街地発掘調査－1983・1984』 1984・1986年  
尾道市教育委員会『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－1986・1988～1991』 1988・1990～1993年 など
- 参考文献
- ・平凡社『日本歴史地名大系第35巻 広島県の地名』 1982年
  - ・角川書店『角川日本地名大辞典34 広島県』 1987年
  - ・広島県教育委員会『広島県遺跡地図VI（三原市・尾道市・因島市・竹原市・豊田郡）』 1999年



- 1 家ノ城跡 2 獅尾山城跡 3 金剛丸持倉氏前跡 4 木梨遺跡 5 木梨城跡 6 門田城跡 7 家政城跡 8 西知頭遺跡  
 9 大越古墳群 10 天神山古墳 11 山方遺跡 12 菖蒲山古墳 13 実角古墳 14 中山城跡 15 小見山城跡 16 古引山古墳  
 17 平原雄塚古墳 18 平原雄塚古墳 19 久都原遺跡 20 久都原第1号古墳 21 久都原第2号古墳 22 野々内遺跡  
 23 野々内第1号古墓 24 野々内第2号古墓 25 矢原山遺跡 26 摩耶行寺遺跡 27 蛭子城跡 28 安藤古墳 29 小原鷦鷯山跡  
 30 宇戸古墳 31 花伝寺遺跡 32 堂垣内西遺跡 33 堂垣内東遺跡 34 廬山古墳 35 古城山城跡 36 本郷古墳 37 大寺古墳  
 38 猪子追第1号古墳 39 猪子追第2号古墳 40 こくぞう山城跡 41 塚原古墳 42 大迫山城跡 43 小刀遺跡  
 44 池田山古墳 45 大想田山古墳 46 長者原土居屋敷跡 47 柳井古墳 48 大町山城跡 49 兵庫城跡 50 山王山城跡  
 51 今宮古墳 52 平山古墳 53 大峰山遺跡 54 天満原遺跡 55 松尾山城跡 56 開屋山城跡 57 黒崎山古墳 58 大元山古墳  
 59 阿草城跡

第2図 家ノ城跡周辺遺跡分布図(1:50,000)(○・●は中世遺跡、▲はその他の遺跡)  
 (広島県教育委員会『広島県遺跡地図VI(三原市・尾道市・因島市・竹原市・豊田郡)』 1999年による)

### III 調査の概要

家ノ城跡が所在する尾道市木ノ庄町木梨は、旧尾道市北部にあたる。北は尾道市御調町である。全体的に山がちの地形で、松永湾に流入する藤井川の支流木梨川沿いに平坦地が形成されている。中世には木梨庄という荘園があり、杉原氏が地頭職として支配をしていた。その本拠が木ノ庄町木梨である。西側の木ノ庄町市原には旧石州街道が通っており、交通の要衝でもあった。

遺跡は、木梨川西岸の独立丘陵上の北部に立地する。城跡は北から南に延びる尾根上に郭を並べている（第3図）。中心となる郭は、北端の標高 126～130m の最高所平坦面（以下「1郭」という。）及び1郭から南に延びる尾根上の2つの郭である。1郭は長さ約 60m、幅約 45m の広い平坦面である。1郭と周囲の宅地・水田との標高差は東側で 38m、西側で 68m である。1郭との間に浅い2条の堀切を挟んだ南の平坦面（以下「2郭」という。）は、標高 115～119m にあり、長さ約 60m、幅約 45m の広い平坦面をもつ。さらにその南の標高 110～112m にも長さ約 55m、幅約 30m の広い平坦面（以下「3郭」という。）がある。表面観察で、2郭と3郭の周囲には小郭が認められ、2郭の南東下には堅壠群が配されている。なお、2・3郭がある南側郭は路線からはずれており、今回の発掘調査の対象にはなっていない。

発掘調査は5次にわたり、1郭とその周辺の尾根に広がる小郭群の調査を実施した（第4図）。1郭のうち、南西部は路線外となるため、調査を実施していない。第1・2次発掘調査は1郭から南東に延びる支尾根（南東尾根）を対象に調査を行った。1郭との比高は約 30m である。第3・4次発掘調査は1郭東半部、1郭東側切岸、1郭北側の東西2つの支尾根部（北東尾根・北尾根）を中心に、第5次発掘調査は1郭西半部及び北西支尾根を中心に実施した。第3次発掘調査は、1郭及び周辺の尾根部の状況を確認するためのトレンチ調査で、トレンチの配置は第5図のとおりである。1郭にトレンチ 1～3（長さ 21～26m、幅約 3m）、1郭北側の尾根部にトレンチ A・B（長さ 22～28m、幅 3～7m）を設定した。また、第4次調査において切岸の調査を行ったが、急斜面であるため、全面発掘ではなく、トレンチ調査にとどめた箇所もある。

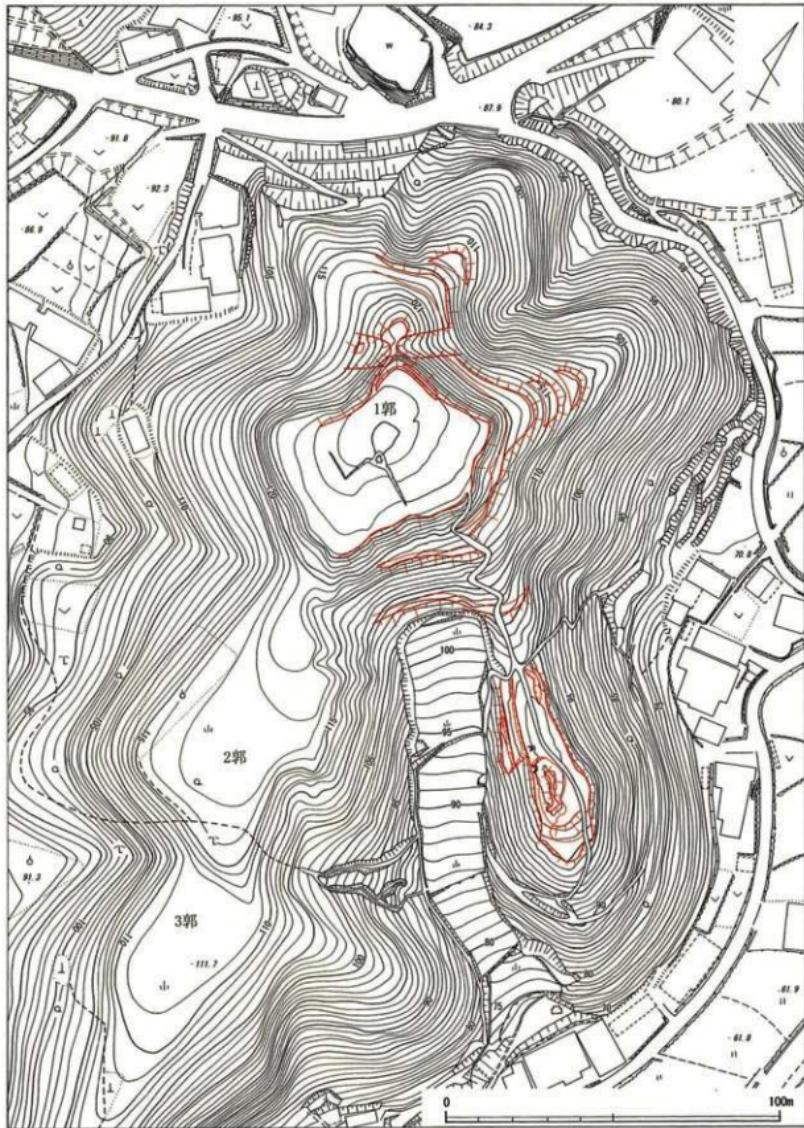
調査面積は第1次調査が 900 m<sup>2</sup>、第2次調査が 450 m<sup>2</sup>、第3次調査が 400 m<sup>2</sup>、第4次調査が 3,518 m<sup>2</sup>、第5次調査が 1,052 m<sup>2</sup>で、合計 6,320 m<sup>2</sup> である。遺跡の現状は尾根部が山林または荒地、1郭が荒地であった。1郭及び尾根部の平坦面は近年までブドウ畑など畑地として利用されていた部分も多い。発掘調査は、試掘調査の状況を基に、重機を使用して表土の除去作業を行った。その後、人力による遺構検出作業と遺構の掘り下げを行った。1郭の遺構面までは基本的に2層あるいは3層である。2層の場合は表土（黒褐色土）と遺構面の間に明褐色土が入り、3層の場合は明褐色土と遺構面の間に黄褐色土が入る。1郭は緩やかな斜面の高所側の地山を削って平坦面を造り出しているため、遺構面は高所側が地山、低所側が造成土になっている。ブドウ畑など畑地として利用されていたことから削平されたり、溝や穴などが掘られて破壊された部分も多い。発掘調査においては、基本的に 10m グリッドに分割し（第6図）、グリッド毎に遺物の取り上げを行った。

第3～5次調査を実施した1郭は、尾根頂部の岩盤を削平して平坦面を形成している。東半部を中心に、建物跡5棟（SB1～5）、柱穴列1、溝状遺構17条、土坑37基、焼土4か所、その他の遺構12基、多数のピットなどを検出した。SB1は2間×4間の掘立柱建物跡で、両側に並行するピット列があり、庇を伴うものと思われる。段状遺構SX2を伴うSB2は2間×3間の掘立柱建物跡で、南東側に並行するピット列があり、庇を伴う可能性がある。SB3は3間×3間の掘立柱と礎石を併用した建物跡、SB4は2間×6間の掘立柱建物跡で、いずれも総柱の建物である。段状遺構SX1に伴うSB5は、1間×3間の礎石建物跡である。SB1・3では根石を伴う柱穴が多くみられた。建物跡の周辺に散在する長方形土坑8基のうち5基は、底面や壁面に灰白色粘土を丁寧に塗っており、水溜めの機能が考えられる。また、北端部で3基並んだ円形土坑（SK10・13・14）を検出したが、底面に備前焼甕が据えられたものがあり、貯蔵施設として使用されたものと思われる。1郭西半部ではピットのほか、北部で不整形の土坑を9基検出した。ほとんどの土坑が性格不明であるが、そのうちの1基（SK35）からは、銅製懸仏と銅鏡6枚などが出土しており、墓壙である可能性も考えられる。

東側切岸では平坦面を2、通路を1、土坑を1検出した。北東尾根では平坦面を3、その他の遺構を1検出した。北・北西尾根では堀切を2、平坦面を6、通路を1、溝状遺構を1、その他の遺構を1確認した。いずれも岩盤を切り込んでいる。堀切1は、幅6～8m、最深部で深さ約2mであるが、全体を掘り切るのではなく、中央部は土橋状に高く残して通路として使用していたことが判明した。

第1・2次調査を実施した南東尾根（標高104m）では、幅19m、長さ63mの尾根頂部と西側斜面を中心に調査を実施した。近年まで畠地として利用されており、遺構面までは基本的には2層である。厚さ3～5cmの表土があり、その下に暗黄褐色土が堆積している。暗黄褐色土の下が岩盤を含む地山で、この面が遺構面である。尾根頂部中央には南北10m、東西7.6m、高さ1.5mの小山を残し、その周囲で平坦面を5面確認した。その他、土坑や溝状遺構・焼土面などを検出した。土坑は平面が長方形で、底面に白色粘土を貼っている。

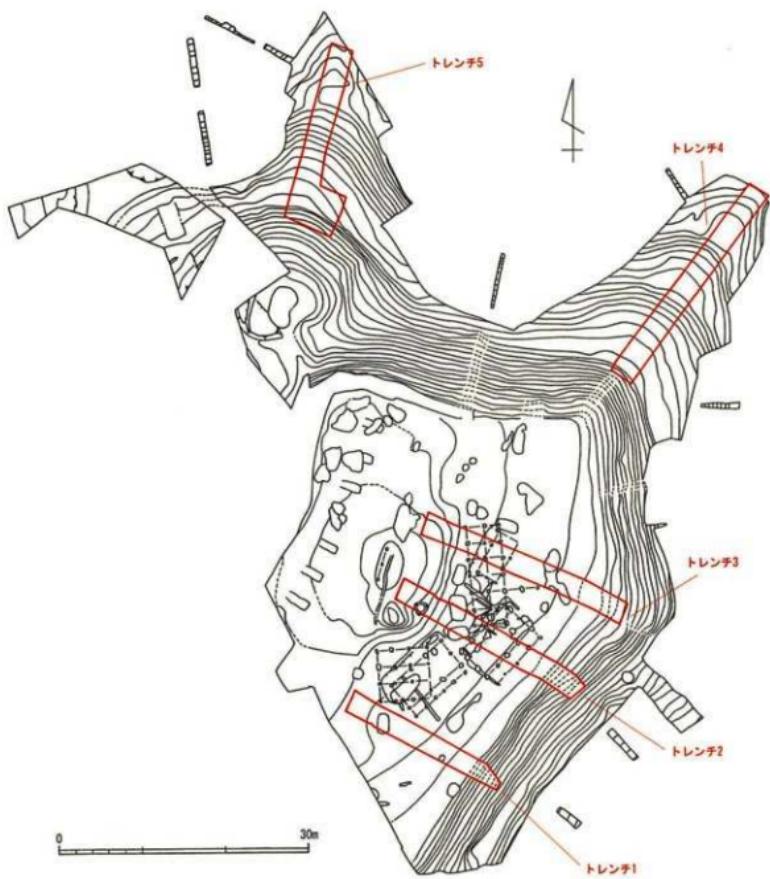
遺物は、1郭を中心に出土した。土器類は、土師質土器（皿・杯・椀・鍋）が多く、瓦質土器（鍋・擂鉢）、東播系須恵器（甕・擂鉢）、亀山焼（甕）、備前焼（甕・擂鉢）、常滑焼（甕）、瀬戸焼（入子・卸皿）、青磁（碗）、白磁（皿・四耳壺・水注？）、青白磁（梅瓶）などがある。その他、石製品（滑石製石鍋・温石・砥石・サイコロ・碁石など）、鐵製品（鉄釘・鎌・兜片・金具など）、銅製品（銅製懸仏・金具・古錢など）、鐵滓、炉壁などが出土した。土器類は14世紀代のものが中心である。



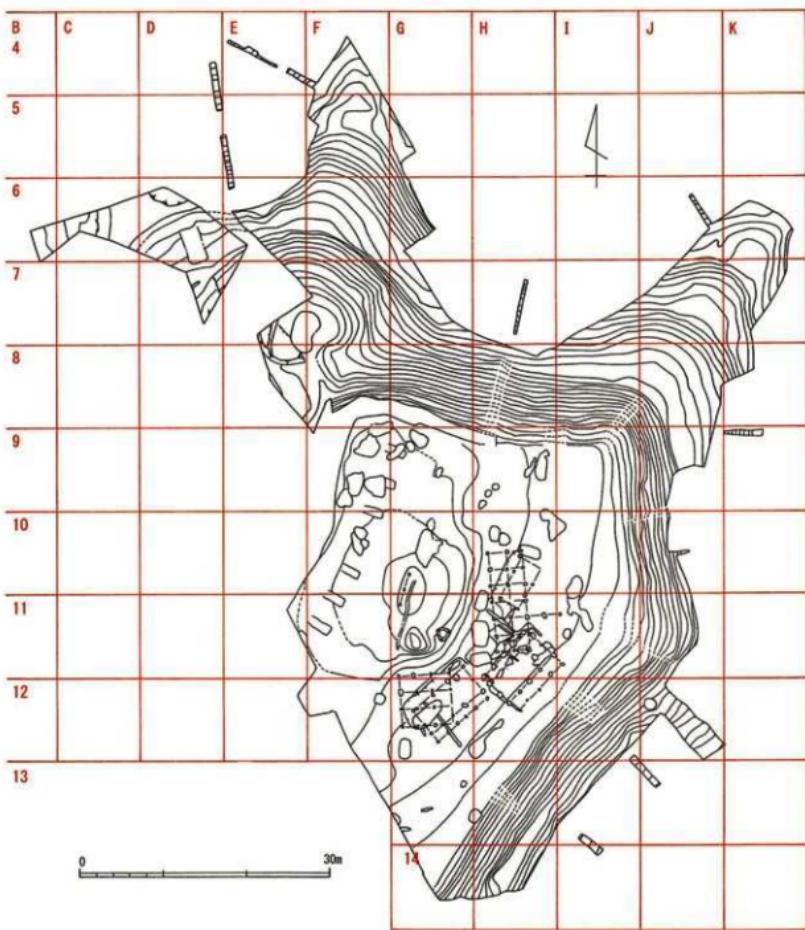
第3図 調査前地形図 (1:1,500)



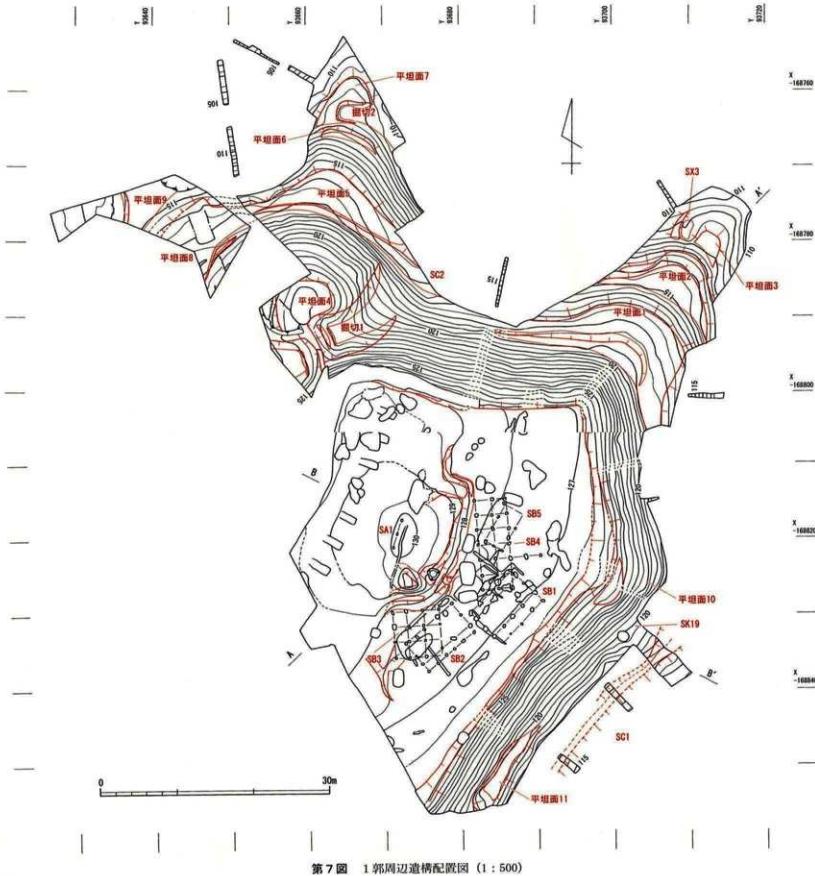
第4図 調査区位置図 (1 : 2,500) ■ 第1次調査区, ■ 第2次調査区, ■ 第3・4次調査区, ■ 第5次調査区



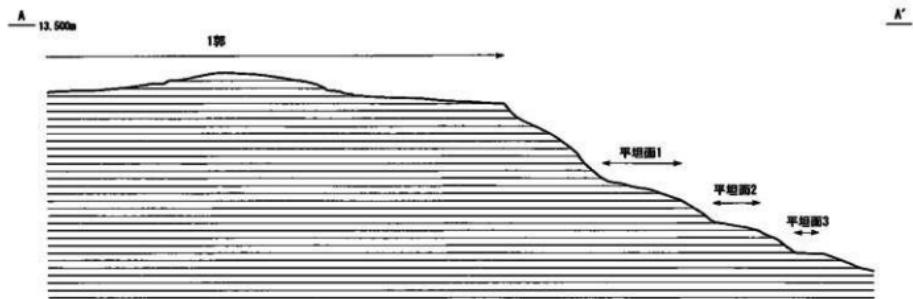
第5図 1郭周辺第3次調査トレンチ配置図 (1:600)



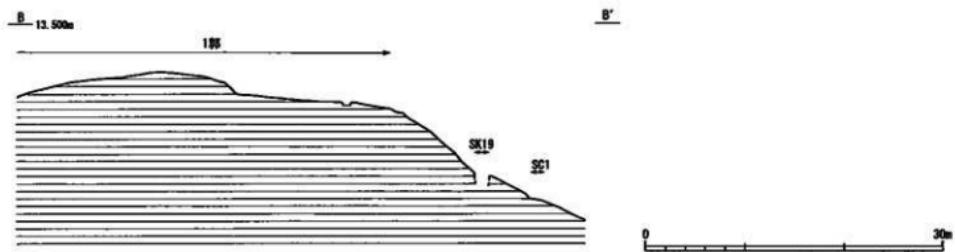
第6図 I 郭周辺グリッド図 (1:600)



第7図 1郭周辺造構配置図 (1:500)



15



第8圖 1郭周辺断面図 (1 : 500)

## IV 遺構と遺物（1郭周辺）

### 1 1郭

1郭は城跡最高所の郭で、長さ約60m、幅約45mの広い平坦面をもつ。後世の耕作などにより、地形が大きく改変されているため不明瞭な部分もあるが、全体を平坦にするのではなく、2～3の段があったものと思われる。中央には長さ約19m、幅約7mの削り残し部分が見られる。その削り残し部分の南部には一辻3.5m、高さ2.5mの三角形の高まりがあり、この部分が本郭の最高所である。後世の耕作等により、地形の改変を受けているとしても、郭の中央部を削り残して高台を作っていたのは間違いない。南東側に長さ26m以上、幅約15mの平坦面を造り出している。1郭内で建物跡5、柱穴列1、溝状遺構17、土坑37、焼土溜り4、その他の遺構12を検出したが、その大部分は南東平坦面に存在する。

なお、以下の記述では遺物の土器類は遺構毎に、その他の遺物は最後にまとめて記述した。

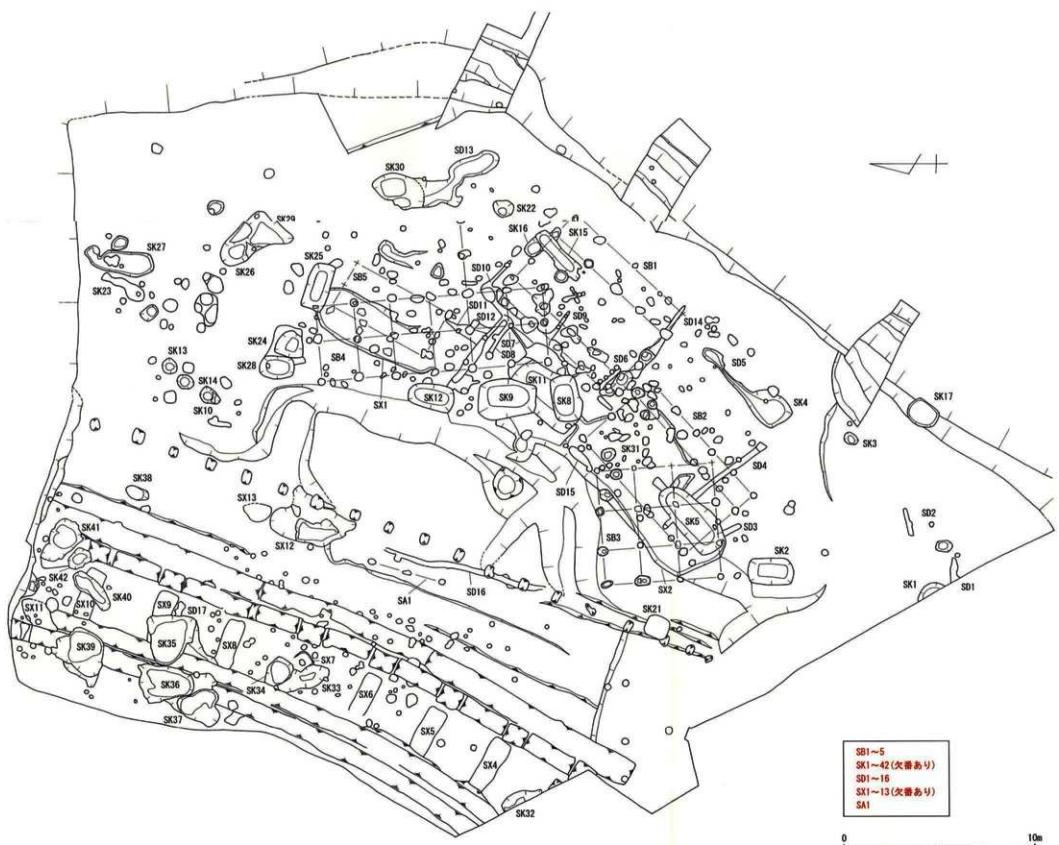
#### （1）建物跡

##### ①SB1

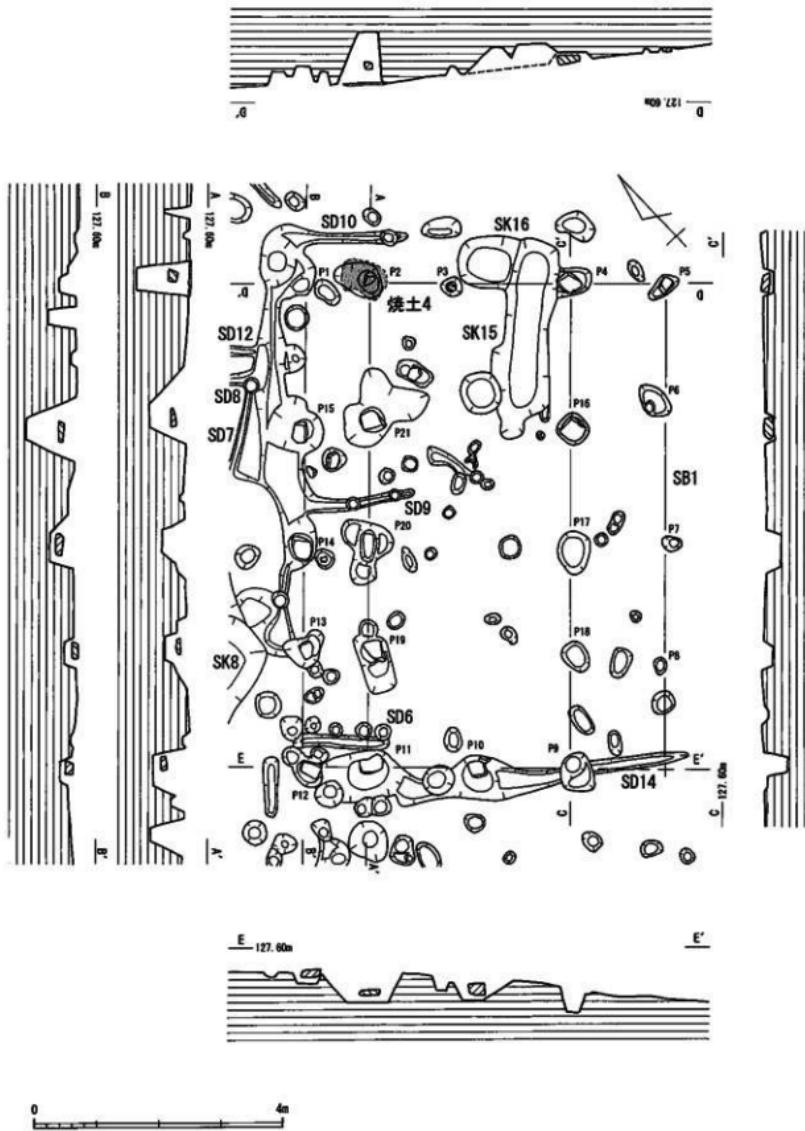
検出遺構（第10図、図版6-a・b、9-a）

SB1は、1郭東部中央に位置する建物跡である。2間×4間で、両側に庇を伴う。主軸は北東-南西方向で、主軸方位はN43°Eである。SB4と重複し、主軸方向の違いなどからSB1の方が古いと思われる。ピットの中に平らな石が入っているものが多いが、石が底にあるものは少なく、ピットは比較的深く、底から浮いた状態で検出されたものが多い。このことから、ピット内の石は礎石ではなく、根石と判断した。

桁行方向の規模は7.75m、梁行方向の規模は両側の庇部分を含めると5.75m、庇部分を除くと3.2mである。桁行方向の柱間距離は南側のP4-P16間が2.3m、P16-P17間が2.0m、P17-P18間が1.65m、P18-P9間が1.8mであり、北側のP11-P19間が1.85m、P19-P20間が1.7m、P20-P21間が2.0m、P21-P2間が2.2mである。平均1.94mであるが、最短1.65m、最長2.3mとはらつきがある。梁行方向の柱間距離は東側のP2-P3間が1.3m、P3-P4間が1.9mであり、西側のP9-P10間が1.5m、P10-P11間が1.7mである。平均1.60mであるが、桁行方向の柱間距離より短くなっている。なお、南東側の庇部分の柱間は4間で、庇の出は1.5mである。北西側の庇部分の柱間は4間、庇の出は1.05mで、南東側よりも狭い。庇部分の柱間距離は南東側のP5-P6間が1.9m、P6-P7間が2.3m、P7-P8間が2.0mであり、南端の柱穴は検出できなかった。北西側のP12-P13間が1.9m、P13-P14間が1.65m、P14-P15間が1.9m、P15-P1間が2.3mである。庇部分の柱間距離は平均1.99mであるが、最短1.7m、最長2.3mとばらつきがある。柱穴の平面形は一定ではなく、大きさも様々である。各柱穴の規模は、P2が長径0.83m×短径0.53m、深さ0.86mで、ピット上に焼土4がある。建物廃絶後に鍛冶が行われた可能性が高い。P3は長径0.35m×短径0.31m、深さ0.18mで、内部に0.14



第9図 1郭遺構配置図 (1:200)



第10図 SB1 実測図 (1:80) (アミ目密は焼土, アミ目粗は炭化物範囲)

m × 0.1m の根石がある。P 4 は SK15 によって一部削られており、現状で長径 0.57m × 短径 0.45m、深さ 0.18m で、内部に 0.34m × 0.3m の根石がある。P 9～11 は SD 4 と重複しているが、新旧は不明である。P 9 は長径 0.68m × 短径 0.63m、深さ 0.41m で、底面に長径 0.25m × 短径 0.22m の小ピットがあり、柱痕跡の可能性がある。P 10 は現状で長径 0.72m × 短径 0.75m、深さ 0.38m で、内部に 0.27m × 0.26m、0.14m × 0.1m の 2 個の根石がある。P 11 は長径 1.33m × 短径 0.75m、深さ 0.49m の大きな柱穴で、内部に 0.38m × 0.22m の根石がある。P 16 は径 0.47m、深さ 0.19m で、内部に 0.36m × 0.33m の根石がある。P 17 は長径 0.69m × 短径 0.53m、深さ 0.3m、P 18 は長径 0.50m × 短径 0.39m、深さ 0.18m である。P 19 はいくつかのピットが重なっているものと思われ、現状で長径 1.01m × 短径 0.52m、深さ 0.35m で、内部に 0.36m × 0.28m の根石がある。P 20 もいくつかのピットが重なっているものと思われ、現状で長径 1.02m × 短径 0.44m、深さ 0.39m である。P 21 は不整形の柱穴で、長径 1.47m × 短径 1.13m、深さ 0.53m で、内部に 0.36m × 0.34m の根石がある。

底部分の柱穴は、北西側が大きく、南東側が小さい傾向にある。P 1 は SD 9・10 の交点付近にあり、これらの溝によって一部削られている。現状で長径約 0.6m × 短径 0.33m、深さ 0.3m である。P 5 は長径 0.57m × 短径 0.29m、深さ 0.07m で、内部に 0.27m × 0.18m の根石がある。P 6 は長径 0.63m × 短径 0.42m、深さ 0.19m である。底面には径 0.18m の小ピットがあり、柱痕跡の可能性が考えられる。P 7 は長径 0.33m × 短径 0.24m、深さ 0.18m、P 8 は長径 0.28m × 短径 0.21m、深さ 0.05m である。P 12 は別のピットと重複しており、現状で長径 0.5m × 短径 0.4m、深さ 0.07m で、内部に 0.27m × 0.18m の根石がある。P 13 は長径 0.67m × 短径 0.5m、深さ 0.4m で、内部に 0.27m × 0.22m の根石がある。P 14 は長径 0.87m × 短径 0.53m、深さ 0.39m で、内部に 0.41m × 0.32m の根石がある。P 15 は SD 9 によって一部削られており、現状で長径約 0.93m × 短径 0.88m、深さ 0.79m で、内部に 0.33m × 0.24m の根石がある。

#### 出土遺物（第 57 図、図版 41）

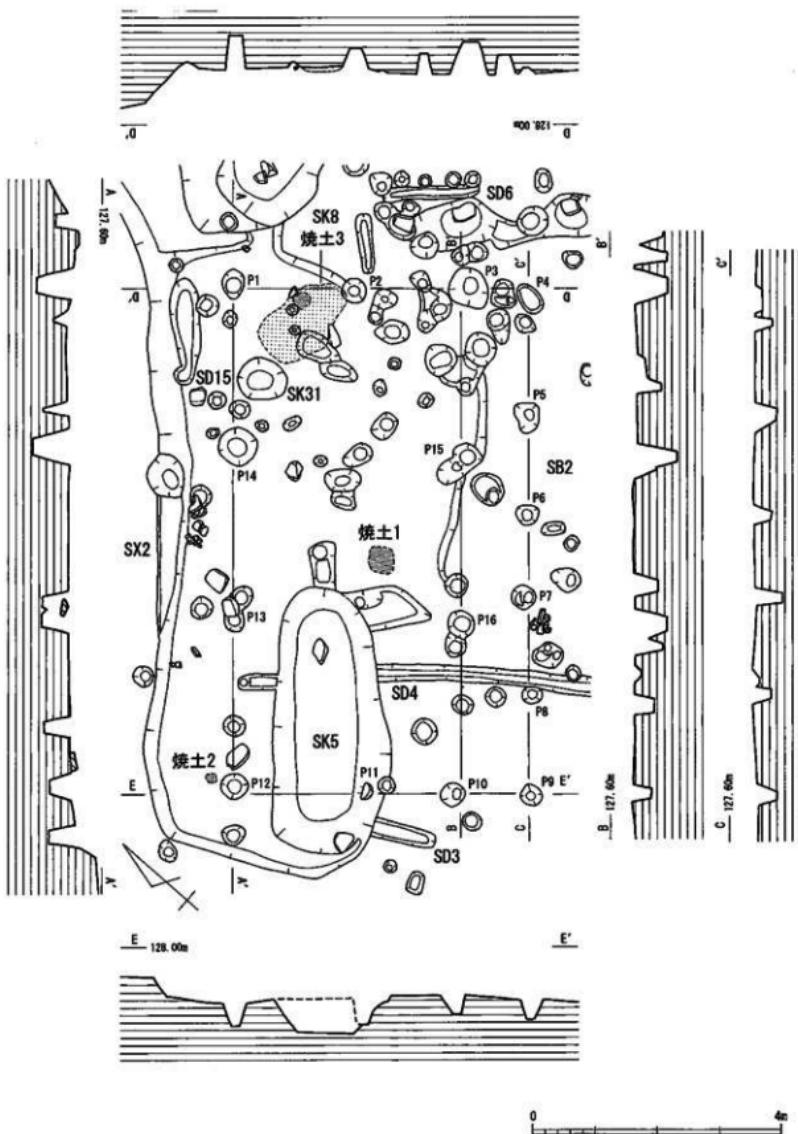
柱穴 P 11 から用途不明銅製品（292）のほか、銅製品片 1 点、鉄釘 4 点が出土している。その他、柱穴から土師質土器、備前焼が出土しているが、細片のため図示できなかった。

#### ②SB 2

##### 検出遺構（第 11 図、図版 6-c）

1 部中央東寄り位置する掘立柱建物である。緩やかな斜面を削って作り出した方形の平坦面 SX 2 に建てられている。2 間 × 3 間の建物跡で、南東側に庇がつく。SB 3 と重複するが、SB 3 は SX 2 を埋めた後に建てた建物跡である。

主軸は北東 - 南西方向で、主軸方位は N49° E である。SB 3 とは主軸方向が異なる。桁行方向の規模は 8.0m、梁行方向の規模は庇部分を含めると 4.75m、庇部分を除くと 3.65m である。桁行方向の柱間距離は南側の P 3-P 15 間が 2.65m、P 15-P 16 間が 2.65m、P 16-P 10 間が 2.7m であり、北側の P 12-P 13 間が 2.7m、P 13-P 14 間が 2.75m、P 14-P 1 間が 2.55m で、平均 2.67m である。梁行方向の柱間距離は東側の P 1-P 2 間が 1.9m、P 2-P 3 間が 1.75m であり、



第11図 SB2・SX2実測図 (1:80) (アミ目密は焼土, アミ目粗は炭化物範囲)

西側のP10-P11間が1.6m, P11-P12間が2.05mで、平均1.83mであるが、北西側が長くなっている。梁行方向に比べ、桁行方向の柱間距離が長い。なお、南東側の底部分の柱間は5間で、庇の出は1.1mである。底部分の柱間距離はP4-P5間が2.0m, P5-P6間が1.6m, P6-P7間が1.3m, P7-P8間が1.55m, P8-P9間が1.55mで、平均1.60mであるが、最短1.3m、最長2.0mとはらつきがある。

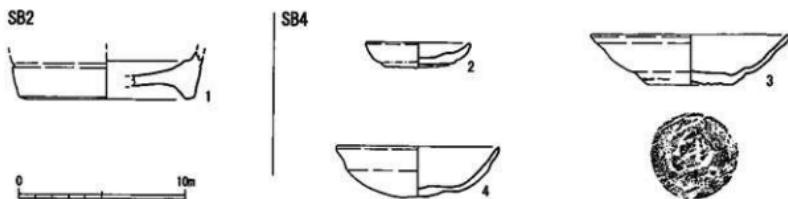
柱穴は地山を掘り込んでおり、径0.4~0.5mの円形のものが多い。各柱穴の規模は、P1が長径0.48m×短径0.37m、深さ0.54m, P2が径0.39m、深さ0.33m, P3が長径0.71m×短径0.64m、深さ0.54m, P10が径0.39m、深さ0.34mである。P11はSK5に切られており、現状で長径0.28m×短径0.15m、深さ0.21mである。P12が長径0.44m×短径0.42m、深さ0.35m, P13が長径0.37m×短径0.32m、深さ0.44m, P14が径0.62m、深さ0.6mである。P15は別のピットと重複しており、現状で長径0.47m×短径0.38m、深さ0.40mである。P16が長径0.47m×短径0.44m、深さ0.53mである。

底部分の各柱穴の規模は、P4が長径0.52m×短径0.34m、深さ0.31m, P5が長径0.5m×短径0.43m、深さ0.34m, P6が長径0.38m×短径0.33m、深さ0.29m, P7が径0.39m、深さ0.45mである。P8はSD4によって一部削られており、現状で長径0.33m×短径0.27m、深さ0.3mである。

建物跡周辺で焼土を検出している。中央部で焼土1を検出した。焼土1の平面形は方形で、SX2埋土を除去した床面で検出したことから、SB2に伴う可能性が高い。北隅付近で焼土3を検出した。炭化物層が広がり、それを取り除いた床面で検出した。上層に炭化物層から遺物が比較的多く出土した。建物の端に近く、炭化物層がかなり厚く堆積していることから、SB2廃絶後に形成された可能性が高い。なお、南西隅のP12付近で焼土2を検出した。建物内ではなく、建物外にあたる。小範囲の焼土である。なお、焼土の詳細については、別項(27ページの(2)焼土)に記載している。

#### 出土遺物(第12・49・56・58・59図、図版23・36・41・42)

柱穴P8から青白磁の梅瓶(1), P3から土錐(191), P1から板状鉄製品(281)と古銭(294・332)が出土した。



第12図 SB2・4出土土器類実測図(1:3)

1はP 8から出土した青白磁の梅瓶の底部である。高台を削り出し、外面底部及び高台端部を除いて、淡青白色の釉がかかる。素地は灰白色である。内面底部に粘土が付着している。SD11出土の梅瓶（第34図96）と同一個体の可能性がある。

その他、土師質土器（皿など）、瓦質土器、亀山焼の甕、青磁、滑石製の石鍋片が出土したが、細片のため図示できなかった。

板状鉄製品（281）は、重量 19.33g である。柱穴から鉄釘 8 点、不明鉄製品 1 点が出土した。柱穴から出土した鉄製品以外に鉄滓 2 点（68.73g）が出土している。

### ③SB3

検出遺構（第13図、図版8-a・b）

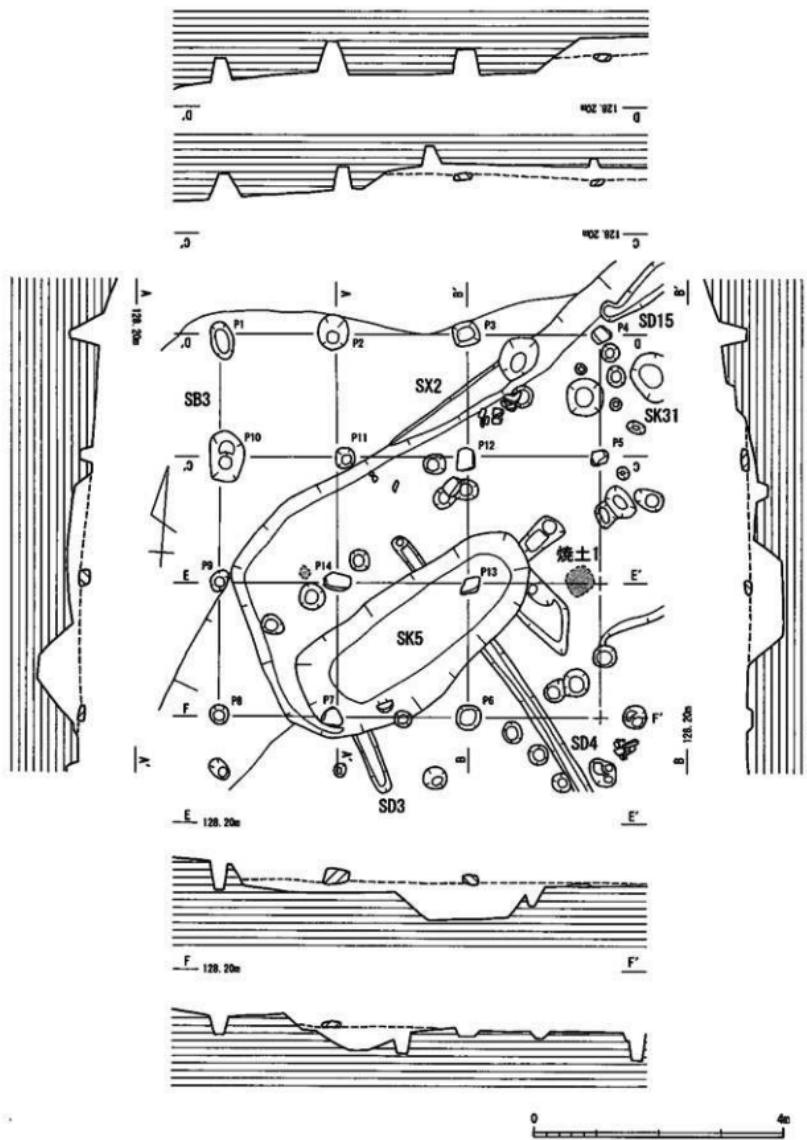
SB3は1郭中央南寄りに位置する3間×3間の南北方向の総柱建物である。主軸方位はN4°Wであり、SX2に伴うSB2とは建物の主軸方向が異なっている。SX2を埋めて整地した後に建てられている。柱穴と礎石を併用した建物跡である。整地部分については地盤が軟らかいこともあります。礎石立ちとしているが、それ以外の部分については、地山に柱穴を掘り込んでおり、基本的には掘立柱建物跡である。南東部の礎石あるいは柱穴が2か所検出できなかったが、SX2内にあることから礎石を使用していたと考えられ、後世にその礎石が失われた可能性が高い。SK5と重複しており、SK5の上面にSB3の礎石P7・13があることからSB3本遺構の方が新しい。

桁行方向（南北方向）の規模は6.1m、梁行方向（東西方向）の規模は6.0mで、ほぼ正方形の建物跡である。桁行方向の柱間距離は西側のP1-P10間が2.0m、P10-P9間が1.95m、P9-P8間が2.15mであり、中央西寄りのP2-P11間が1.95m、P11-P14間が2.0m、P14-P7間が2.15mである。中央東寄りのP3-P12間が2.0m、P12-P13間が2.0m、P13-P6間が2.1mであり、東側のP4-P5間が2.0mで、平均2.03mである。

梁行方向の柱間距離は北側のP1-P2間が1.8m、P2-P3間が2.1m、P3-P4間が2.1mであり、中央北寄りのP10-P11間が1.95m、P11-P12間が1.95m、P12-P5間が2.1mである。中央南寄りのP9-P14間が1.85m、P14-P13間が2.1mであり、南側のP8-P7間が1.85m、P7-P6間が2.1mで平均1.99mである。

礎石を使用しているのはP4・5・7・12~14の6箇所で、P6は礎石の抜き取り穴と考えられる。その他は掘立柱建物の柱穴である。礎石の規模は、P4が0.31m×0.29m、P5が0.27m×0.24m、P7が0.34m×0.27m、P12が0.35m×0.28m、P13が0.41m×0.26m、P14が0.44m×0.28mである。礎石の抜き取り穴と考えられるP6は、径0.42m、深さ0.12mの深いピットである。

柱穴は地山を掘り込んでおり、楕円形の大きいものもあるが、径0.3~0.4mの小型円形のものも見られる。各柱穴の規模は、P1が長径0.61m×短径0.37m、深さ0.39m、P2が長径0.56m×短径0.49m、深さ0.53m、P3が長径0.42m×短径0.39m、深さ0.42m、P8が長径0.32m×短径0.29m、深さ0.3m、P9が長径0.37m×短径0.28m、深さ0.46mである。P10は他



第13図 SB3 実測図 (1 : 80) (アミ目は焼土範囲)

の建物の柱穴が重複しているものと思われ、現状で長径 0.8m × 短径 0.55m、深さ 0.45m である。

P11 が長径 0.32m × 短径 0.3m、深さ 0.4m である。

#### 出土遺物

柱穴から土師質土器が出土しているが、細片のため図示できなかった。

#### ④SB 4

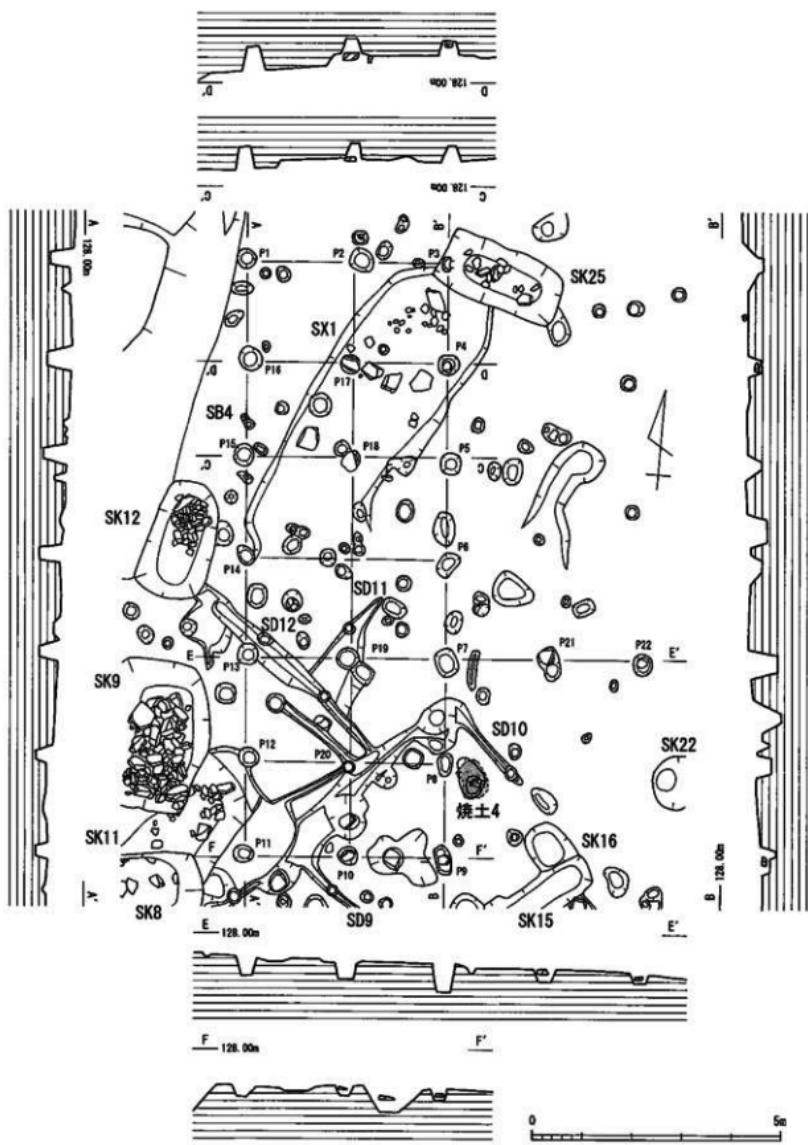
##### 後出遺構（第 14 図、図版 8-c）

1 郡中央北東寄りに位置する南北方向の細長い掘立柱建物跡である。2間 × 6間の総柱建物跡で、建物方位は N 5° W である。SB 1・5と重複している。主軸方向の違いなどから SB 1 より SB 4 の方が新しいと思われる。また、SB 4 の柱穴 P18 の上に SB 5 の礎石 P5 があることから、SB 5 より SB 4 の方が古い。なお、SB 4 中央部では明確な柱穴を検出することができなかつた。

桁行方向の規模は 11.85m、梁行方向の規模は 3.95m である。桁行方向の柱間距離は、東側の P3-P4 間が 2.0m、P4-P5 間が 1.95m、P5-P6 間が 1.95m、P6-P7 間が 1.95m、P7-P8 間が 2.05m、P8-P9 間が 1.95m、西側の P11-P12 間が 1.95m、P12-P13 間が 2.05m、P13-P14 間が 1.95m、P14-P15 間が 1.95m、P15-P16 間が 1.95m、P16-P1 間が 2.0m で、中央の P2-P17 間が 2.05m、P17-P18 間が 1.9m、P19-P20 間が 2.1m、P20-P10 間が 1.9m で、平均 1.98m である。梁行方向の柱間距離は、北から P1-P2 間が 2.2m、P2-P3 間が 1.75m、P16-P17 間が 2.1m、P17-P4 間が 1.85m、P15-P18 間が 2.05m、P18-P5 間が 1.85m、P13-P19 間が 2.0m、P19-P7 間が 1.95m、P12-P20 間が 2.0m、P20-P8 間が 1.95m、P11-P10 間が 2.0m、P10-P9 間が 1.95m で、平均 1.98m である。桁行方向と梁行方向の柱間距離の平均はともに 1.98m である。

桁行方向の P13-P19-P7 の東側の延長線上に P21・22 がある。P7-P21 の柱間距離は 2.05m、P21-P22 の柱間距離 1.95m である。桁行方向の延長線上にあり、SB 4 の柱間距離とほぼ同じであることから、SB 4 と関連することは間違いない。ただ、P21・22 の南北方向にはこれに対応する柱穴がないことから、柵や塀など SB 4 に付随する構造物があったと考えられる。

柱穴は、大部分が円形で、径 0.4~0.45m のものが多い。P1 は長径 0.42m × 短径 0.38m、深さ 0.46m、P2 は長径 0.53m × 短径 0.45m、深さ 0.43m、P3 は SK25 に一部削られており現状で長径 0.32m × 短径 0.16m、深さ 0.16m である。P4 は長径 0.41m × 短径 0.38m、深さ 0.28m で、内部に根石と思われる 0.24m × 0.18m の石が入っている。P5 は長径 0.44m × 短径 0.39m、深さ 0.31m、P6 は長径 0.52m × 短径 0.37m、深さ 0.25m、P7 は長径 0.56m × 短径 0.45m、深さ 0.54m、P8 は長径 0.47m × 短径 0.31m、深さ 0.4m、P9 は長径 0.6m × 短径 0.32m、深さ 0.33m で、内部に根石と思われる 0.23m × 0.19m の石が入っている。P10 は径 0.38m、深さ 0.2m で、内部に根石と思われる 0.29m × 0.19m の石が入っている。P11 は長径 0.41m × 短径 0.35m、深さ 0.25m、P12 は径 0.39m、深さ 0.35m、P13 は長径 0.43m × 短径 0.41m、深さ 0.4m、P14 は長径 0.45m × 短径 0.31m、深さ 0.44m で、北西端に長径 0.1m × 短径 0.7m の



第14図 SB 4 実測図 (1 : 100) (アミ目は焼土範囲)

焼土塊があった。P15は長径0.44m×短径0.39m, 深さ0.47m, P16は長径0.49m×短径0.46m, 深さ0.5mである。P17は径0.41m, 深さ0.3mである。P17の上に0.41m×0.24mの平らな石が置かれており、礎石と思われる。SB4以後にSB5以外の礎石建物があった可能性が考えられる。P18は径0.33m, 深さ0.31mである。P18の上に0.39m×0.27mの平らな石が置かれているが、SB5の礎石である。P19は長径0.46m×短径0.43m, 深さ0.32m, P20は溝状遺構SD7～9に一部削られており、現状で径0.23m, 深さ0.25mである。

SB4に付随するP21は別のピットが重なっている可能性があり、現状で長径0.68m×短径0.43m, 深さ0.25mで、内部に根石と思われる0.31m×0.28mの石が入っている。P22は長径0.43m×短径0.38m, 深さ0.15mで、内部に根石と思われる0.21m×0.18mの石が入っている。

#### 出土遺物（第12図、図版23）

柱穴から土師質土器の皿（2）・杯（3）・椀（4）が出土した。

2は土師質土器の皿である。口径6.0～6.2cm, 器高1.5cmと小型で、体部は内湾して立ち上がる。底部の切り離しは、回転糸切りと思われる。

3は土師質土器の杯である。復元口径11.8cm, 器高3.0cmで、体部は斜めにまっすぐ立ち上がる。底部の切り離しは、回転ヘラ切りである。板目痕が残る。

4は土師質土器の椀である。復元口径9.7cm, 器高3.05cmで、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部にスグが付着する。

その他、備前焼の甕、鉄釘1点が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。

#### ⑤SB5

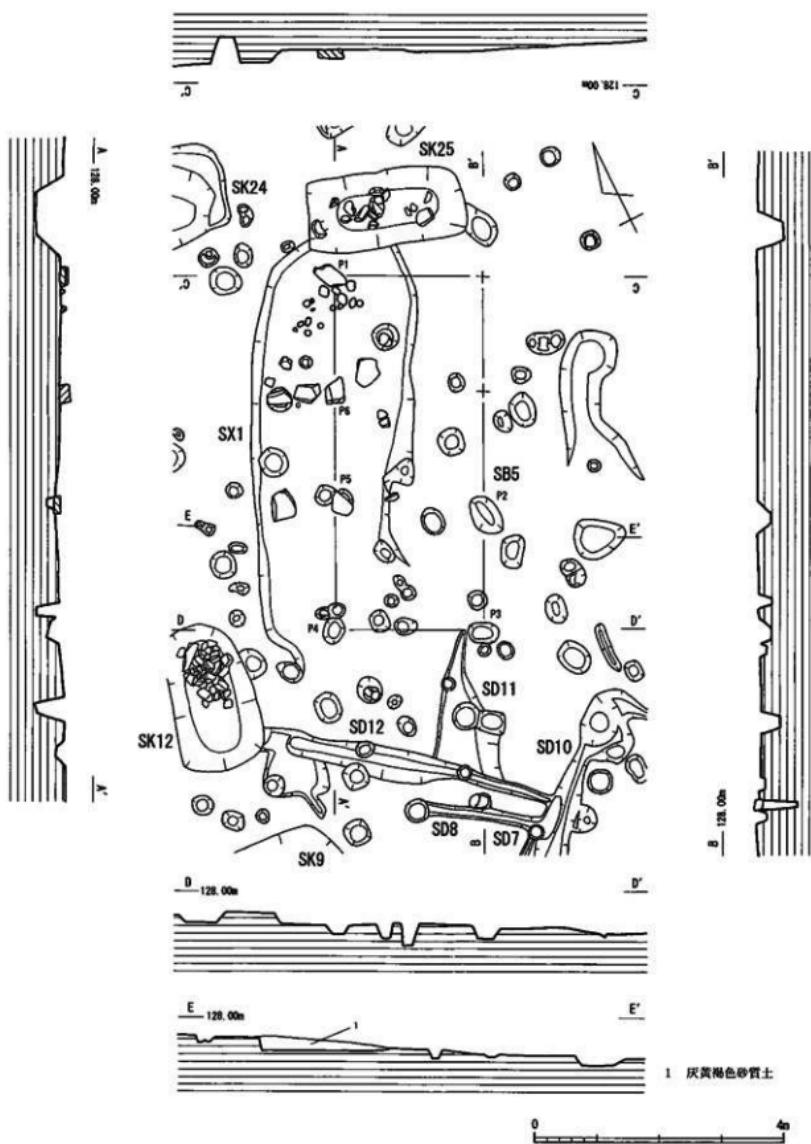
##### 検出遺構（第15図、図版9-c）

1郭中央北東寄りに位置する1間×3間の礎石建物である。緩やかな斜面の高所側である西側の地山を掘削することにより造り出した方形の平坦面である段状遺構SX1に伴う。主軸は北東～西南方向で、建物方位はN26°Eである。SB4と重複しているが、SB4-P18の上にSB5の礎石P5があることから、SB5の方が新しい。また、SX1とSK25ではSX1の方が古い。

東側及び南側の礎石は失われているが、礎石が伴っていたと思われるピットから建物を復元することができる。桁行方向の規模は5.6m、梁行方向の規模は2.35mである。桁行方向の柱間距離はP2-P3間が1.9m、P4-P5間が2.0m、P5-P6間が1.8m、P6-P1間が1.8mで、平均1.88mである。梁行方向のP3-P4間にピット（P3からの距離1.25m、P4からの距離1.1m）があるが、長径37cm×短径24cm、深さ36cmと深いため、礎石の抜き取り穴あるいは掘方とは考えにくく、SB5に伴うものではないと思われる。

礎石の規模は、P1が0.58m×0.28m、P5が0.39m×0.27m、P6が0.4m×0.28mである。礎石が伴っていたと思われるピットは、梢円形で浅い。P2が長径0.67m×短径0.43m、深さ0.2m、P3が長径0.49m×短径0.34m、深さ0.19m、P4は他のピットに切られており現状で長径0.44m×短径0.33m、深さ0.12mである。

#### 出土遺物



第15圖 SB5・SX1実測図 (1 : 80)

遺物は出土していない。

## (2) 焼土

### ①焼土1（第16図、図版7-a）

S B 2 内中央部で検出した焼土塊である。焼土1の平面形は方形で、長さ 0.60m、幅 0.32m、厚さ 0.07mで、周囲に炭化物が広がっている。S X 2 墓土を除去した床面で検出したことから、建物に伴う可能性が高い。

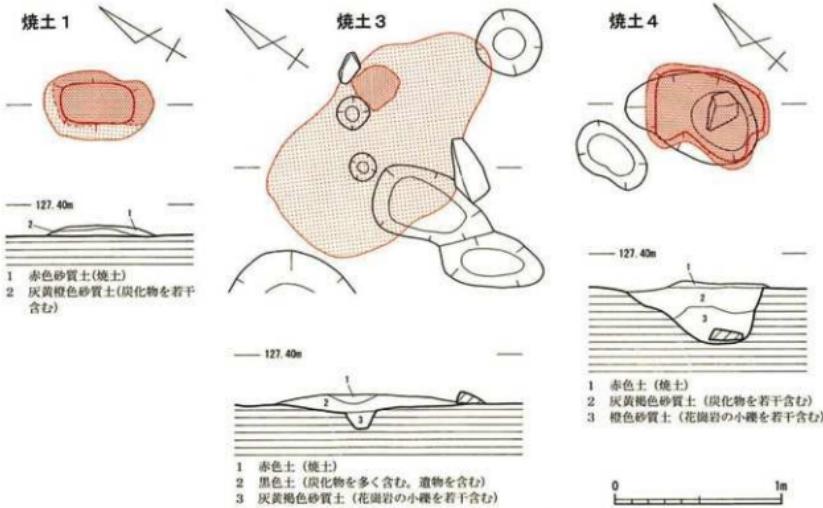
### ②焼土2（図版7-c）

S X 2 内で検出した焼土塊である。S B 2 の南西外側にあたる。平面形は方形で、一辺 0.17m の小範囲の焼土である。

### ③焼土3（第16図）

S B 2 内北隅付近で検出した焼土塊である。S B 2 内北隅付近には炭化物層が広がり、それを取り除いた床面で検出した。炭化物層（炭・焼土層）から遺物が比較的多く出土しており、S X 2 出土遺物として取り上げを行った。焼土の規模は径 0.24m、厚さ 0.05mで、焼土の下に炭化物を多く含む黒色土が長径 1.54m × 短径 0.95m の範囲に堆積している。建物の端に近く、炭化物層がかなり厚く堆積していることから、S B 2 廃絶後に形成された可能性が高い。

### ④焼土4（第16図、図版9-a・b）



第16図 焼土1・3・4実測図 (1:30) (アミ目密は焼土、アミ目粗は炭化物範囲)

S B 1 P 2 上面から検出した焼土である。長さ 0.74m、幅 0.55m の範囲に厚さ 0.04m の焼土が広がっている。SD 9・10 によって「コ」字形に形成された空間に存在し、東側の SK 15 とい

う細長い土坑も関連する可能性がある。SB 1 廃絶後に形成されたものと思われ、焼土下の灰黄褐色土が炭化物を含むことから、鍛冶炉の可能性が考えられる。

### (3) 柱穴列

#### ① SA 1

検出遺構（第 17 図、図版 10-a）

1 郭中央西寄りに位置する北北東—南南西方向の柱穴列である。主軸方位は N18° E で、1 郭高所部の裾にあたり、柱穴が 3 基並び、0.6m 東にはほぼ同じ方向に延びる SD 16 がある。柱間距離は P 1-P 2 間が 2.0m、P 2-P 3 間が 1.9m で、平均 1.95m である。柱穴は、P 1 は梢円形で長径 0.37m × 短径 0.28m、深さ 0.09m、P 2 は不整梢円形で長径 0.46m × 短径 0.23m、深さ 0.13m、P 3 は円形で径 0.33m × 0.29m、深さ 0.06m である。いずれの柱穴も浅い。埋土はいずれも単層で、P 1 が淡黒褐色土、P 2・3 が褐色土である。SA 1 周辺は削平を受けていることもあり、東西方向に対応する柱穴が見られないことから柱穴列とした。なお、SD 16 の東側には、SA 1 や SD 16 とほぼ同じ方向に約 2m 間隔で並ぶ径 0.4~0.7m の穴が 20 個弱あるが、これは城に伴うものではなく、現代にブトウ畑として使用された際に掘られた支柱用の穴である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

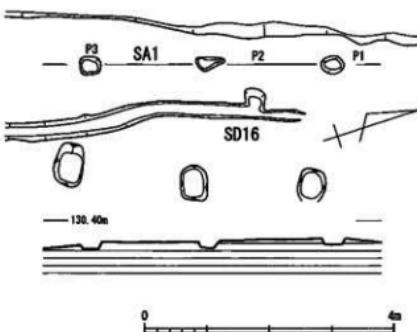
### (4) その他の遺構

建物跡と関連が深いものもあるので、ここで記述することにする。その他の遺構は、1 郭で 12 基確認した。SX 4~10 については、ほぼ同規模の長方形の遺構で、2.7~2.9m 間隔で平行している。また、新しいブドウ畑に伴う溝に直交していることから、ブドウ畑に伴う新しいものである可能性もあるが、断定できないため、遺構として取り扱った。なお、SX 3 については、「3 北東尾根」の項に記載した。

#### ① SX 1

検出遺構（第 15 図、図版 9-c）

1 郭中央北東寄りに位置する遺構である。緩やかな斜面の地山を削って、SB 5 を建てるために造り出した方形の平坦面である、主軸は北東—南西方向で、北端は SK 25 によって一部削られ



第 17 図 SA 1 実測図 (1:80)

ている。西半部が約2.5m幅で掘り下げられており、浅い土坑状になっている。東側は次第に浅くなり、東端は不明瞭である。現状で長さ6.72m、幅2.58m以上、深さ0.22mである。本来はSB5の東端までの幅(約4m)はあったものと思われる。SB4廃絶後に本遺構が掘られ、SB5が建てられたものと考えられる。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

#### 出土遺物(第18・52・55・57・58・59図、図版23・24・37・40・41・42)

土師質土器の皿(5~10)・杯(11)・椀(12~32)、瓦質土器の鍋(33)、常滑焼の壺(34)、鉄釘(210~212)、鉄製兜片(277)、銅製リング(288)、古錢(305・330)が出土した。

5~10は土師質土器の皿である。5~9は口径5.5~6.7cm、器高0.75~1.65cmである。10は口径・器高は不明であるが底径が6.4cmあり、他より大きいものである。体部は5・9が内湾気味、6が直線的、10が外反気味である。底部の切り離しは、7・8・10が回転糸切り、9が回転ヘラ切りである。7・8は内面底部が盛り上がり、深さがないため、容器としては非実用的である。

11は土師質土器の杯である。口径8.8cm、器高2.3cmで、杯としては小型のものである。体部は内湾気味に立ち上がる。底部の切り離しは不明であるが、外部底面はやや窪んでいる。

12~32は土師質土器の椀である。体部はいずれも内湾して立ち上がる。このうち12~29の口径は8.0~9.7cmで、器高は1.95~2.7cmである。器高2.2~2.4cmのものが多い。外面底部をわずかに窪ませるものもある。30は口径8.6~8.9cm、器高2.9cmで、口径の割には器高があるタイプである。31・32は口径9.6~9.7cm、器高3.4~3.5cmの深い椀である。32は底部が小さく、外面底部を窪ませている。

33は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、外面に断面三角形の突帯を貼り付けている。口縁端部は平坦である。

34は常滑焼の壺である。肩部が大きく張り、外面肩部に錢のスタンプ文が廻る。内面及び内面にススが付着しているが、割れた後に付着したものである。SX1から常滑焼片は6点出土しているが、同一個体と思われる。

その他、備前焼の壺、青磁が出土したが、細片のため図示できなかった。

277の鉄製兜片は重量25.65gである。また、210~212を含め鉄釘9点が出土した。

#### ②SX2

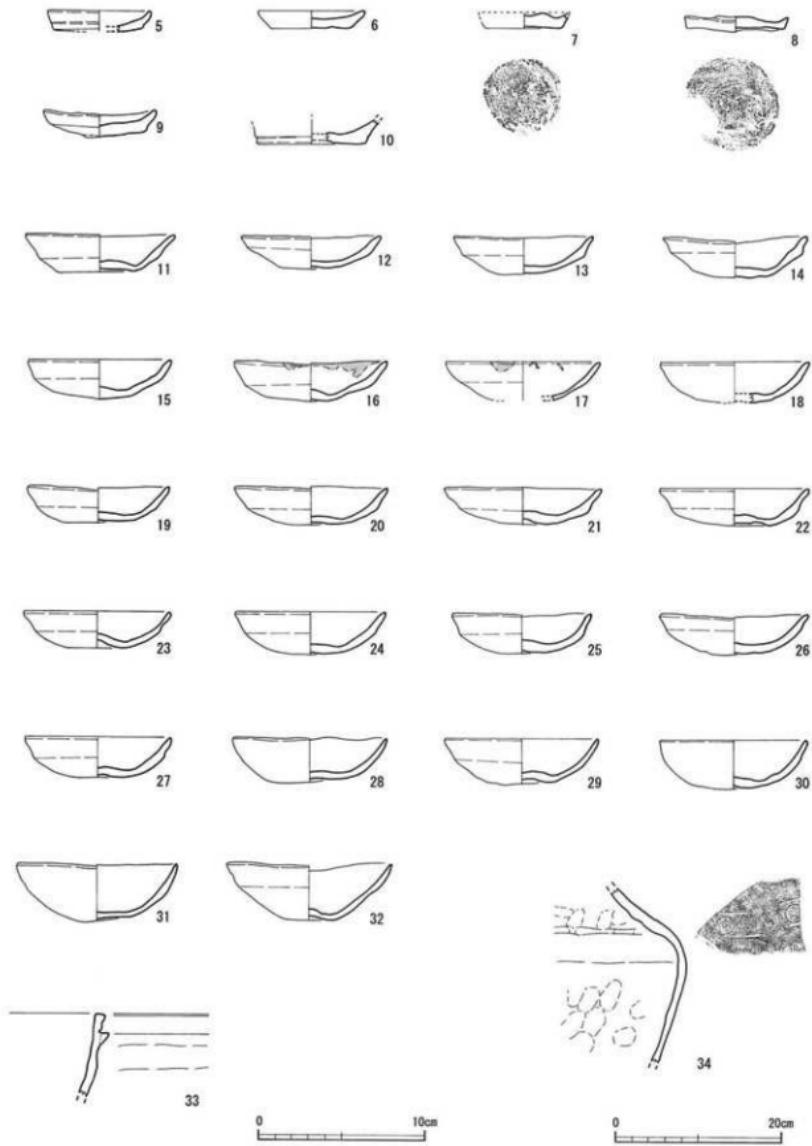
##### 検出遺構(第11・23図、図版6-c, 7)

1郭中央南寄りに位置する遺構である。SB2を建てるために、緩やかな斜面を削って作り出した方形の平坦面である。長さ約10m、深さ0.64mである。東に向かうにつれ次第に浅くなっているため、幅は不明瞭であるが、幅4.6~5.4mのところで段差ができる土坑状になっている。

SX2が埋められた後、SB3が建てられている。埋土は基本的には3層で、中層の明黄褐色砂質土で一旦整地が行われたようである。

#### 出土遺物(第19・52・54・58・59図、図版24・25・37・38・39・42)

土師質土器の皿(35)・杯(36)、瓦質土器の鍋(37~40)、東播系須恵器の擂鉢(41・42)、龜



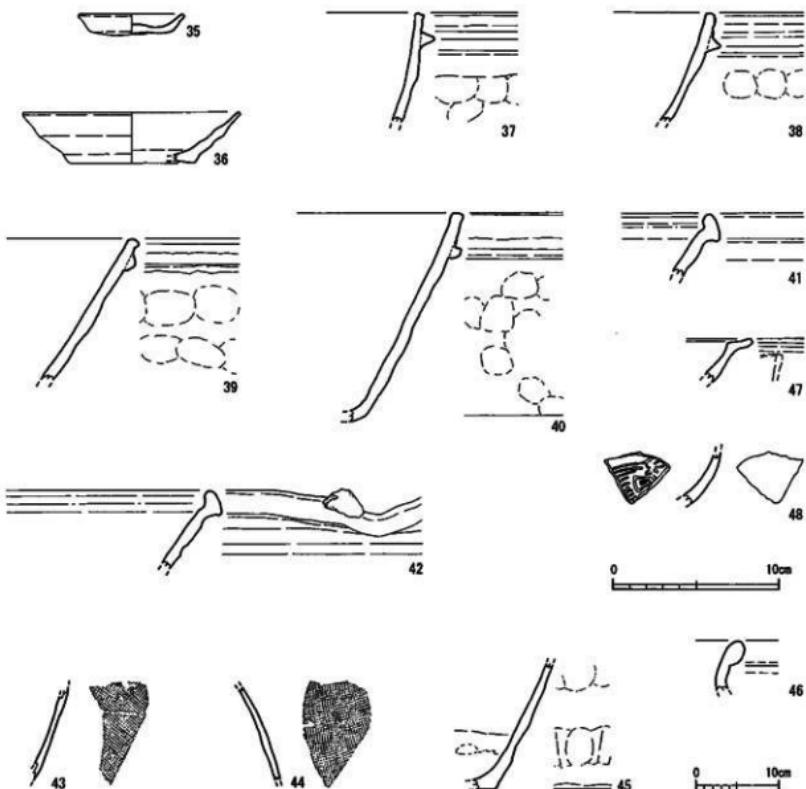
第18図 SX 1出土土器類実測図 (1 : 3, 34は1 : 6)

山焼の壺(43・44), 備前焼の壺(45・46), 青磁の皿(47)・碗(48), 鉄釘(213~229), 鉄製掛金(265), 古錢(295・296・300・301・303・306~312・314・319・321・325~329・331・333・334・336)24枚が出土した。SX2の北側の炭・焼土層(灰黄褐色砂質土)から多くの遺物が出士した。

35は土師質土器の皿である。復元口径6.2cm, 器高1.25cmで、体部は外反気味に立ち上がる。底部切り離しは、回転ヘラ切りである。内面に炭化物が付着している。

36は土師質土器の杯である。復元口径13.0cm, 器高3.0cmで、体部は直線的に立ち上がる。底部の切り離し方法は、不明である。

37~40は瓦質土器の鍋である。いずれも口縁端部は平坦に近く、外面に突帯を貼り付けている。



第19図 SX2出土土器類実測図 (1:3, 43~46は1:6)

外面体部に指頭圧痕が残る。37・38は体部がやや内湾気味に立ち上がる。39・40は体部が直線的に立ち上がり、内面体部の調整はナデである。37～39の突帯の断面は三角形で、40は方形である。37・39・40の外面体部にはススが付着している。37はH13区盛土出土破片と接合し、39・40はそれぞれG12区包含層出土破片と接合した。

41・42は東播系須恵器の擂鉢である。ともに体部は直線的に立ち上がり、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。内面に擂り目はない。42は片口がつき、片口部に粘土が付着している。42とG13区包含層出土の破片が接合した。

43・44は龜山焼の壺の胴部片である。いずれも外面に格子目タタキを施し、格子の単位は3mm×3mmである。

45・46は備前焼の壺である。45は胴部下半片である。底部から斜め上方にやや内湾気味に立ち上がる。46は口縁部片である。口縁部は外反し、端部を折り曲げて玉縁を形成している。

47は青磁の鰐皿の口縁部片である。内湾する体部に、水平に折り曲げた鰐状の口縁部がつく。端部はわずかに立ち上がる。口縁端部を除き、淡緑色の釉がかかる。外面の文様は蓮弁と思われる。二次焼成を受けている。

48は青磁の碗の体部片で、体部は内湾し、内面に印花文がある。全体に淡緑色の釉がかかる。

その他、須恵器系土器（壺など）、青白磁、滑石製の石鍋の体部から底部にかけての破片2点が出土しているが、細片のため図示できなかった。

鉄製品は、213～229を含め鉄釘58点、265の掛金1点が出土した他に鉄滓28点(568.4g)が出土した。

### ③S X 4

#### 検出遺構（第9図）

1郭西部中央に位置する方形の遺構である。主軸は南東一北西方向で、2.7m北東に同様の遺構S X 5がある。北西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって切られているが、現存長2.94m、幅0.86～1.08m、深さ0.04～0.13mである。埋土は淡暗褐色土の单層である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### ④S X 5

#### 検出遺構（第9図）

1郭西部中央に位置する方形の遺構である。S X 4の2.7m北東にあり、2.8m北東には同様の遺構S X 6がある。主軸は南東一北西方向であり、北西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって切られている。現存長2.61m、幅0.88～1.06m、深さ0.04～0.16mである。埋土は淡暗褐色土の单層である。

#### 出土遺物

瓦質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。

### ⑤S X 6

#### 検出遺構（第9図）

1 郭西部中央寄りに位置する方形の遺構である。SX5の2.8m北東にあり、2.7m北東にSX7がある。主軸は南東-北西方向であり、北西端は次第に不明瞭になる。長さ2.22m、幅0.80～0.91m、深さ0.11mである。埋土は淡暗褐色土の単層である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑥SX7

#### 検出遺構（第9図）

1 郭西部北寄りに位置する遺構である。SX6の2.7m北東にあり、2.9m北東にSX8がある。北西側でSK33・34と重複しているが、SX7の方が新しい。現状で長さ1.02m、幅0.88m、深さ0.13mである。埋土は暗褐色土の単層である。本来はSX6・8などと同様に南東-北西方向の主軸で、同程度の形態・規模であったものと思われる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑦SX8

#### 検出遺構（第9図）

1 郭西部北寄りに位置する方形の遺構である。SX7の2.9m北東にあり、2.8m北東に同様の遺構SX9がある。主軸は東南東-西北西方向であり、西北西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって切られている。現存長2.63m、幅0.91～1.03m、深さ0.05～0.14mである。埋土は淡暗褐色土の単層である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑧SX9

#### 検出遺構（第9図）

1 郭北西部に位置する方形の遺構である。SX8の2.8m北東にあり、2.9m北東に同様の遺構SX10がある。南西には同方向の溝状遺構SD17が隣接している。主軸は東南東-西北西方向であり、西北西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって切られている。西北西部はSK35と切り合いか関係にあり、本遺構の方が新しい。現存長2.87m、幅0.81～1.07m、深さ0.07～0.11mである。埋土は底部に一部淡褐色土があるが、大部分は暗褐色土である。SD17と隣接して平行し、埋土も同じことから同時期の遺構の可能性が高い。

#### 出土遺物

土師質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ⑨SX10

#### 検出遺構（第9図）

1 郭北西部に位置する方形の遺構である。SX9の2.9m南西にある。主軸は南東-北西方向

であり、北西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって切られている。SK40と重複しているが、SX10本遺構の方が新しい。現存長2.76m、幅0.87~0.98m、深さ0.04~0.14mである。埋土は明褐色土の单層である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑩ SX11

##### 検出遺構（第9図）

1郭北西端付近に位置する方形の遺構である。SK39の北東0.4m、SX10の北西1.2mにある。SX4~10とは主軸の方向が違い、北東~南西方向である。また、SX4~10に比べ、深い。北西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって切られている。現存長1.17m、幅1.34m、深さ0.3mである。

##### 出土遺物（第53・59図、図版37・42）

鉄釘（230~235）、古銭（335）が出土した。鉄製品は、230~235を含め鉄釘7点（78.77g）、不明鉄製品1点が出土した他に古銭片、鉄滓1点（10.72g）が出土している。

その他、土師質土器（皿など）、瓦質土器の鍋・すり鉢、備前焼の壺が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ⑪ SX12

##### 検出遺構（第20図、図版16-a）

1郭中央北寄りに位置する遺構である。SA1の北東にあり、P1との距離は1.8mである。北部でSX13と接する。平面形は不整形で、長円形の北東部が張り出したような形態である。底面は平らではなく、いくつかの段やピット状の窪みが見られる。規模は長さ4.53m、幅2.97m、深さ1.31mである。南側を深く掘り込んでおり、北側は浅くなっている。北部に焼土が集中する部分が見られ、その範囲は1.27m×0.83mである。焼土の内に0.05~0.2mの礫が3個認められた。

##### 出土遺物（第39図、図版32）

瓦質土器の鍋（138）が出土した。体部は斜めに直線的に立ち上がり、外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦である。

その他、土師質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ⑫ SX13

##### 検出遺構（第20図、図版16-b）

1郭中央北寄りに位置する遺構である。南部でSX12と接する。平面形は梢円形で、長径1.48m×短径0.83m、深さ0.28mである。西側が深く、東側に向かうにつれ次第に浅くなる。ほぼ全体に焼土が入っている。また、内部の0.1~0.2mの礫が2個認められた。

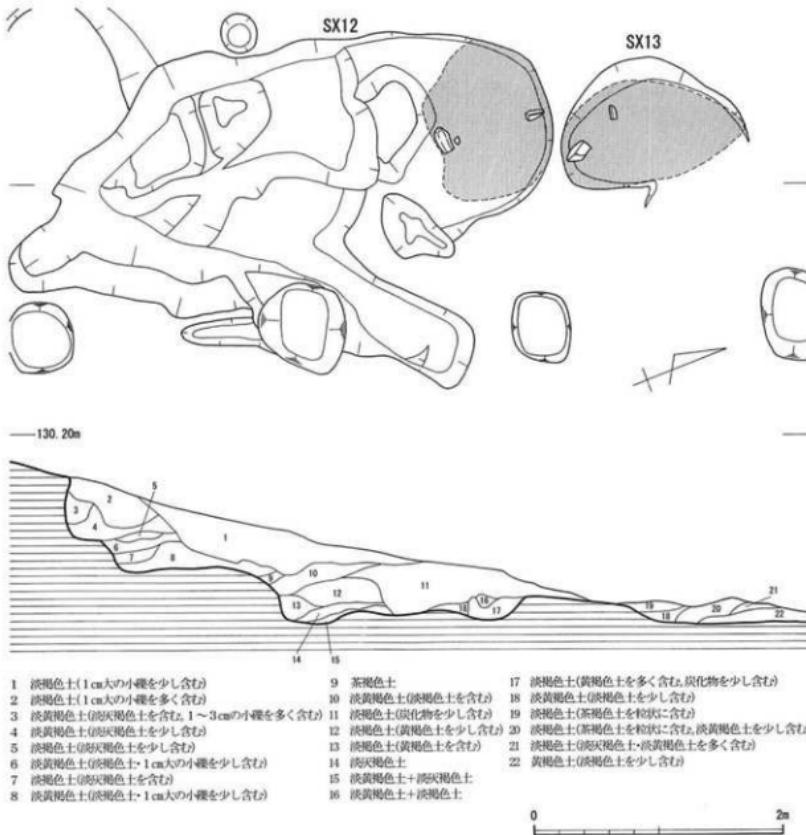
##### 出土遺物（第21・52図、図版26・38）

土師器の椀（49）、瓦質土器の擂鉢（50）、白磁の碗（51）、鉄釘（236）が出土した。

49は土師器の椀である。高台がつく大型の椀で、体部は内湾しながら立ち上がる。底部の器壁が1.3~1.7cmと厚く、口縁部に向かって次第に薄くなる。高台は貼り付けではなく、粘土から挽きだしたものと思われる。復元口径16.9cm、推定高台径10.4cm、推定器高6.35cmである。

50は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めにまっすぐ立ち上がり、口縁端部は平坦で中央がやや窪んでおり、内側にやや肥厚させている。内面に斜め方向の粗い擂り目があり、擂り目が交差している。擂り目の単位は6条と思われる。

51は白磁の碗である。体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。器壁は薄く、口縁端部を除き、淡青灰色の釉がかかる。皿の可能性もある。



第20図 SX12・13実測図 (1:40) (アミ目は焼土範囲)

その他、土師質土器、瓦質土器の鍋、備前焼の壺が出土したが、細片のため図示できなかった。鉄製品は 236 を含め鉄釘 2 点の出土のみである。その他に鉄滓 1 点 (545.91 g) が出土した。

### (5) 土坑

土坑は 37 基検出した。SK42 まで遺構番号を付いているが、調査段階で土坑としていた SK6・7・18・20 については、整理を進める過程で、土坑ではなく、礎石掘方あるいは柱穴の可能性が高いと判断した。このため、本報告書では欠番となっている。なお、SK19 については、「2-1 郭東側切岸」の項に記載している。

#### ① SK1

##### 検出遺構（第 9 図）

調査区南部に位置する円形の土坑である。南東側は調査区外に続いている。規模は現状で長径 1.54m × 短径 0.50m、深さ 0.06m である。埋土は暗褐色土の単層である。

##### 出土遺物

土師質土器（皿など）が出土しているが、細片のため図示できなかった。

#### ② SK2

##### 検出遺構（第 22 図、図版 10-b）

調査区南部に位置する土坑である。SB3 の南にあり、P8 からの距離は 1.3m である。底部から侧面にかけて灰白色粘土を約 0.2m の厚みで貼り付けている。埋土は黄橙色砂質土である。内部から礎は検出されなかった。平面形は方形で、長さ 2.38m、幅 1.43m、深さ 0.65m である。主軸の方向は南北方向で、方位は N 4° E である。

##### 出土遺物（第 26 図、図版 26）

土師質土器の皿が出土した。52 は灰白色粘土直上から出土した底径 6.8 cm の大型皿の底部である。外面底部は摩滅しているが、回転糸切りの痕跡がかすかに残る。

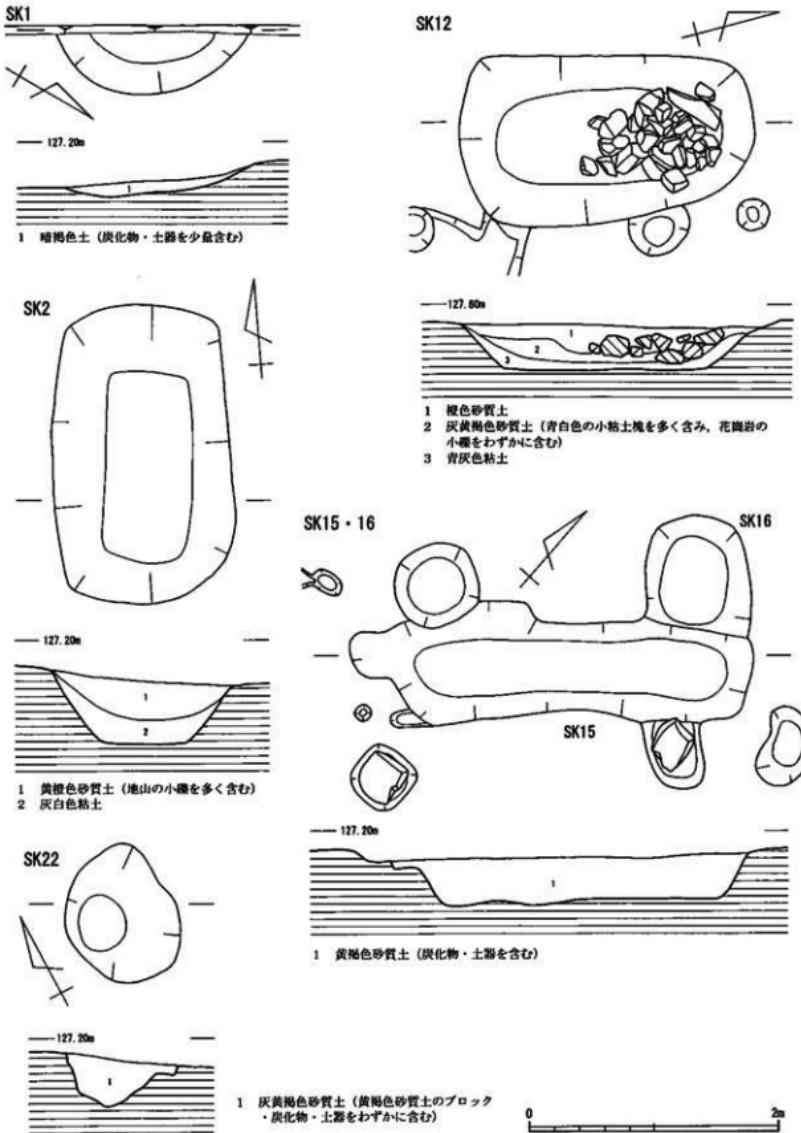
その他、瓦質土器の鍋が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ③ SK3

##### 検出遺構（第 9 図）



第21図 SK13出土土器類実測図 (1:3)



第22図 SK1・2・12・15・16・22実測図 (1 : 40)

1 郡南部に位置する土坑である。SB2・3の南東にある。平面形は長円形で、長径0.73m×短径0.58m、深さ0.24mである。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ④SK4

#### 検出遺構（第9図）

1 郡東部に位置する不整円形の土坑である。SB2の南東にある。SD5と重複しているが、新旧は不明である。現状で長径2.17m、短径1.72m、深さ0.11mである。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑤SK5

#### 検出遺構（第23図、図版7-a）

1 郡南部、SX2内に位置する方形の土坑である。平面形は長円形で、長径4.26m、短径1.90m、深さ0.63mである。SB2・3、SD3・4と重複している。主軸はSB2やSX2と同じ北東-南西方向であり、方位はN49°Eである。SX2が埋められた後に掘られた土坑で、SB2の柱穴P11を一部壊していることからSK5の方が新しい。SK5の上面にSB3の礎石P7・13があることから、SB3よりSK5の方が古い。SD4を一部壊していることからSK5の方が新しい。SD3との新旧関係は不明である。埋土は橙色砂質土の単層である。

#### 出土遺物（第26・52・56図、図版26・38・41）

土師質土器の椀（53）、瓦質土器の鍋（54・55）、東播系須恵器の甕（56）、鉄釘（237）、板状鉄製品（282）が出土した。全体的に土器の出土量は少ない。

53は土師質土器の椀である。体部は内湾して立ち上がる。底部を欠損するが、復元口径9.8cm、現存器高3.8cmの深い椀である。

54・55は瓦質土器の鍋である。いずれも口縁端部は平坦に近く、外面に三角形の突帯を貼り付けている。55は体部がやや外反気味に立ち上がり、外面体部に指頭圧痕が残る。

56は東播系須恵器の甕の胴部片である。外面に横方向の平行タタキを施す。内面はハケ目の部分と指頭圧痕が残る部分が見られる。壺の可能性もある。

その他、亀山焼の甕、備前焼の甕・擂鉢、青磁が出土したが、細片のため図示できなかった。鉄製品は、237を含め鉄釘9点、282の板状鉄製品1点が出土した他に鉄滓7点（387.81g）が出土した。

#### ⑥SK8

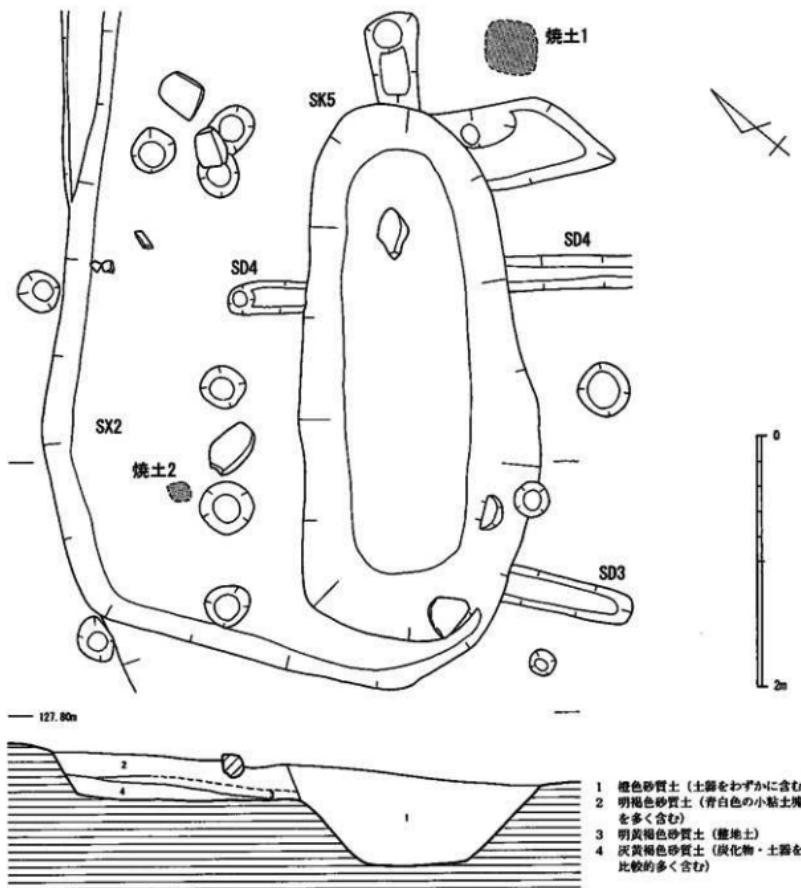
#### 検出遺構（第24図、図版10-c）

1 郡中央東寄りに位置する土坑である。SK11と重複するがSK8の方が新しい。平面形は長方形、主軸方向は東西で、方位はN81°Eである。底面に0.05~0.08mの厚みで灰白色粘土を貼っている。規模は長さ2.48m、幅1.52m、床面粘土までの深さ0.60mである。中央の粘土直上

で炭化物が集中する部分が見られた。埋土上層は橙色砂質土である。埋土中に角礫が数個見られた。底面の粘土除去後、0.1~0.35mの角礫が数個出土したが、本遺構に伴うものではなくSK11に伴うものである。

#### 出土遺物

上層の橙色砂質土から土師質土器（皿など）、備前焼の壺が、粘土直上から土師質土器の皿が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。備前焼の壺片はSK11出土の57と接合した。



第23図 SK5・SX2実測図 (1:40) (アミ目は焼土範囲)

## ⑦SK9

### 検出遺構（第24図、図版11-c）

1郭中央東寄りに位置する土坑である。SK11と重複するがSK9の方が新しい。平面形は長方形、主軸方向は南北で、方位はN2°Wである。底面に青灰色粘土を約0.2mの厚みで貼っている。規模は長さ3.02m、幅2.14m、床面粘土までの深さ0.75mである。埋土は橙色砂質土で、粘土上全面で0.05~0.45mの角礫が2~3層重なる状態で出土した。積み重ねた状態ではないので、土坑が本来の機能を終えた後に廃棄されたものと考えられる。

### 出土遺物（第51図、図版37）

遺物はすべて埋土である橙色砂質土からの出土である。滑石製の石錐体部を加工した温石(207)が出土した。

その他、土師質土器（皿など）、備前焼の甕、陶器片が出土したが、細片のため図示できなかつた。また、鉄釘2点、鉄滓1点（102.15g）が出土した。

## ⑧SK10

### 検出遺構（第25図、図版11-b）

1郭北部中央に位置し、北東から南西方向に3基並んで検出した円形土坑の1つで、SK10は南西のものである。3基の土坑は、完全に一直線に並ぶのではなく、ややずれている。0.5m北東にSK14がある。南側に新しいピットが重なっている。また、北東部にピット状の窪みがある。径0.81m、深さ0.41mであるが、北東一南北方向が長くなる可能性がある。埋土は橙色砂質土の単層で、SK13・14と同一である。

### 出土遺物

遺物は出土していない。

## ⑨SK11

### 検出遺構（第24図、図版12-a）

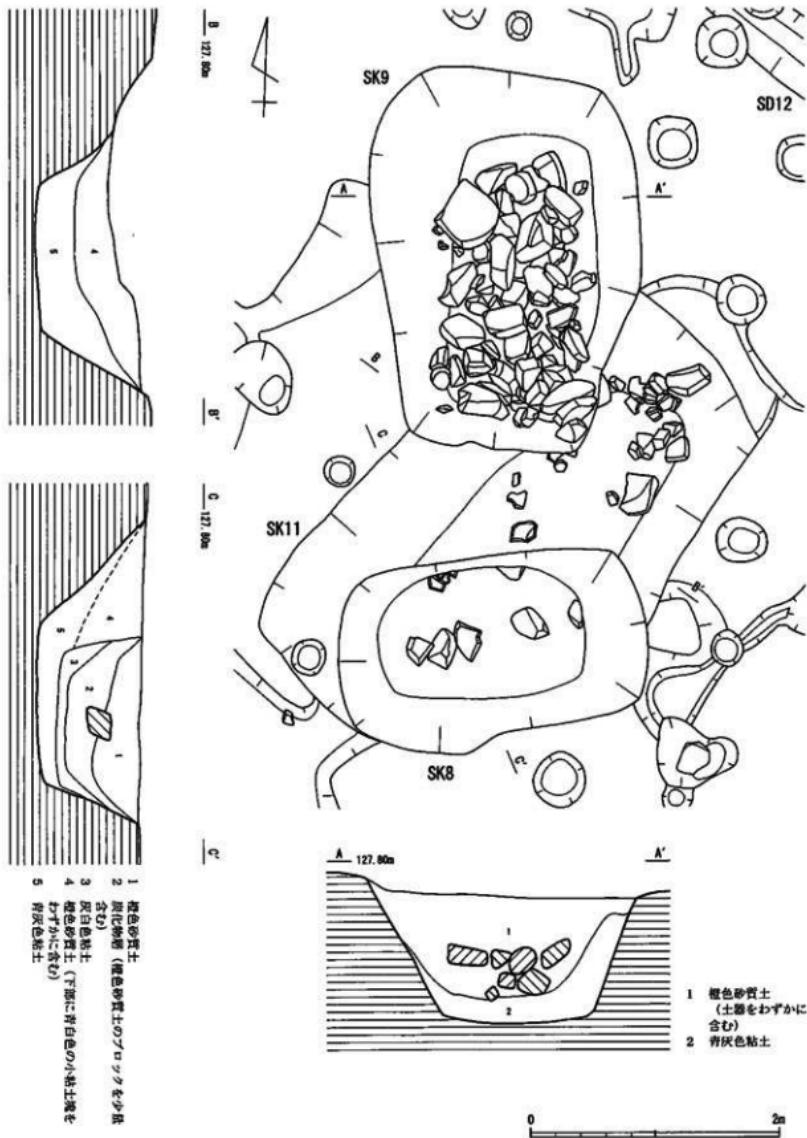
1郭中央東寄りに位置する大型の土坑である。SK8・9と重複しているが、SK11の方が古い。平面形は長方形、主軸方向は北東-南西で、方位はN33°Eである。底面全体に青灰色粘土が約0.3mの厚みで堆積している。埋土は橙色砂質土である。規模は、長さ4.10m、幅2.46m、深さ0.78mである。北東端で5~35cmの角礫が比較的多く出土した。

### 出土遺物（第26図、図版26）

亀山焼の甕(58)、備前焼の擂鉢(57)・甕(59)が出土した。亀山焼は橙色砂質土からの出土であるが、大部分の遺物は粘土直上からの出土である。

57は備前焼の擂鉢の底部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり、内面体部上部に淡黄褐色の自然釉がかかる。内面に擂り目があり、単位は11条である。SK8出土の破片と接合した。137と同一個体の可能性が高い。

58は亀山焼の甕の胴部片である。外面に格子目タタキを施す。格子の単位は3mm×3mmである。59は備前焼の甕である。底部から胴部下半にかけて残存し、胴部は内湾気味に斜め上方に立ち上



第24図 SK8・9・11実測図 (1:40)

がる。復元底径 34.8 cm である。SK 8 から同一個体と思われる破片が出土している。

その他、土師質土器、須恵器系土器が出土したがいずれも細片のため、図示できなかった。

#### ⑩ SK12

##### 検出遺構（第 22 図、図版 12-b）

1 郭中央に位置する土坑である。SB 4 の西、SB 5・SX 1 の南西にあたる。SB 5-P14 からの距離は 0.5m である。本遺構の西側は 1 郭の中で一段高くなっているが、SK12 はその法面を一部削って造られている。平面形は方形で、長さ 2.38m、幅 1.52m、深さ 0.49m である。主軸は南北方向で、N10° E である。底面に青灰色粘土が 0.05~0.2m の厚みで堆積している。埋土は 2 層で、上層が橙色砂質土、下層が灰黄褐色砂質土である。北半部粘土上に 0.1~0.5m の礫が集中して見られるが、遺構に伴うかどうかは不明である。

##### 出土遺物（第 26 図、図版 26）

灰黄橙色土から土師質土器の甕（60）が出土した。体部は内湾気味に立ち上がり、底部はやや崖んでいる。口径 9.0 cm、器高 2.55 cm である。

その他、備前焼の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ⑪ SK13

##### 検出遺構（第 25 図、図版 11-b）

1 郭北部中央に位置し、北東から南西方向に 3 基並んで検出した円形土坑の 1 つで、北東のものである。0.3m 南西に SK14 がある。長径 0.84m × 短径 0.76m、深さ 0.44m である。埋土は橙色砂質土の単層で、SK10・14 と同一である。

##### 出土遺物

土師質土器、鉄釘 3 点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。また、古銭片が出土した。

#### ⑫ SK14

##### 検出遺構（第 25 図、図版 11-b・c）

1 郭北部中央に位置し、北東から南西方向に 3 基並んで検出した円形土坑の 1 つで、中央のものである。SK10 の 0.5m 北東、SK13 の 0.3m 南西にある。長径 0.92m × 短径 0.78m、深さ 0.36m である。底面に据え置かれた備前焼の甕が出土した。胴部下位から底部にかけての部分が残存しており、口縁部から胴部中位にかけての破片は出土していない。埋土は橙色砂質土の単層で、SK10・13 と同一である。

##### 出土遺物（第 26 図、図版 27）

備前焼の甕（61）は、土坑の底面に据え置かれたものである。底部から胴部下半にかけて残存し、胴部は内湾気味に斜め上方に立ち上がる。復元底径 44.3 cm である。

その他、土師質土器（皿など）、不明鉄製品 1 点が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ⑬ SK15

##### 検出遺構（第 22 図）

1 郡東部中央に位置する土坑である。SK16と重複しているが、SK15の方が新しい。平面形は長円形で、主軸方向はN48°Eである。長径3.24m、短径0.92m、深さ0.33～0.44mである。埋土は黄褐色砂質土の単層である。SB1と重なっており、主軸方向はSB1とほぼ同じであるが、同時期に存在したとは考え難い。

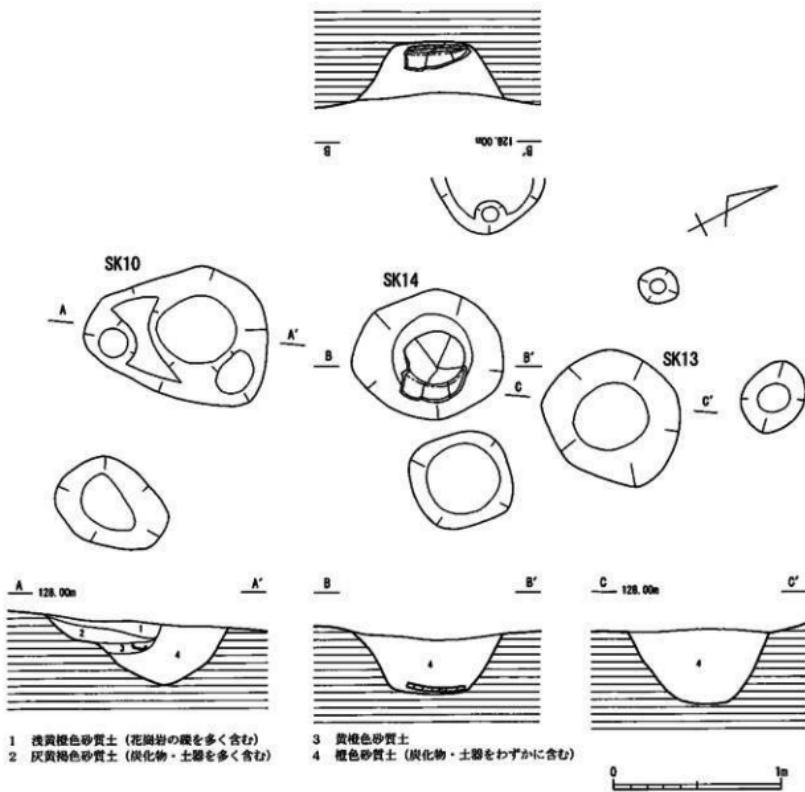
#### 出土遺物

備前焼の壺が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ④ SK16

##### 検出遺構（第22図）

1 郡東部中央に位置する長円形の土坑である。SB1と重なっている。SK15と重複している



第25図 SK10・13・14実測図 (1:30)

が、SK16の方が古い。現状で長径0.90m×短径0.84m、深さ0.45mである。埋土は灰黄橙色土の単層である。

#### 出土遺物

土師質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。その他に鉄滓1点(11.48g)が出土した。

#### ⑩SK17

##### 検出遺構(第9図)

1 郭南東端から東側切岸にかけて位置する土坑である。平面形は長円形で、長径1.65m、短径1.29mである。近現代の肥溜と判断し、深さ0.1mしか掘り下げていない。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑪SK21

##### 検出遺構(第27図、図版12-c)

1 郭南西部に位置する土坑である。SB3の西にあり、P10からの距離は1.6mである。第4次調査区と第5次調査区の境にあたり、第4次調査時には肥溜と考えていた。平面形は隅丸方形で、規模は1.26m×1.23m、深さ1.08mである。南東部は上部が削平され、浅くなっている。断面図には図示していないが、壁面及び底面全体に白色の粘土を薄く貼っている。内部は何層にも土が堆積していた。出土遺物から城に伴うものではなく、新しい遺構と考えられる。

#### 出土遺物(第30図、図版27)

陶器の擂鉢(62)が出土した。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は著しく肥厚する。内面には9条単位の擂り目を施す。備前焼系の陶器で、時期は17世紀以降のものである。

#### ⑫SK22

##### 検出遺構(第9図)

1 郭東部中央に位置する土坑である。SK15・16の1.9m北東にある。平面形は不整長円形で、長径1.07m×短径0.89m、深さ0.45mである。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

#### 出土遺物

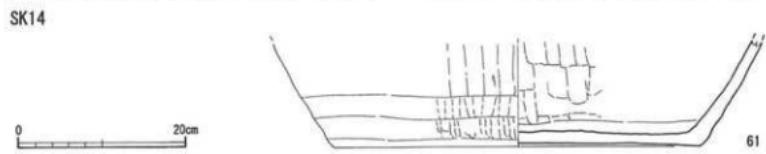
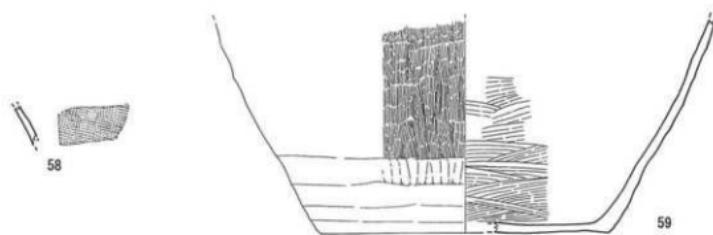
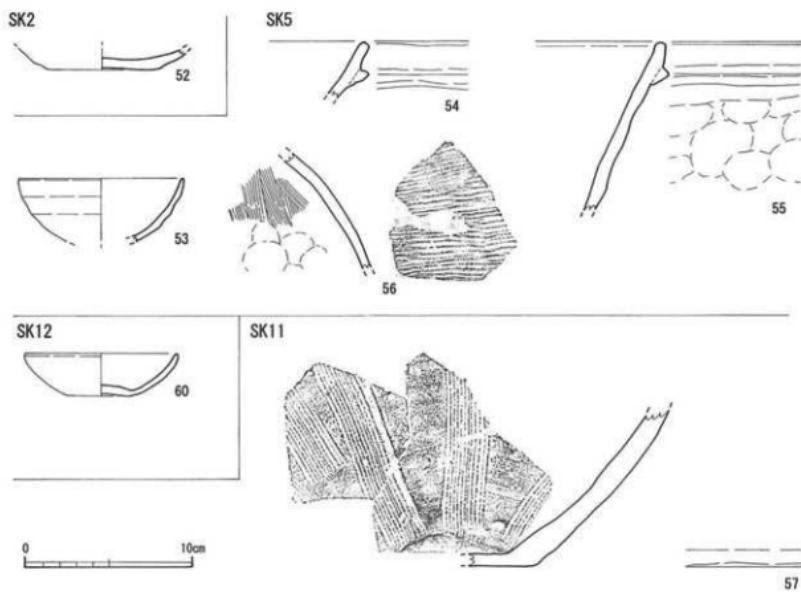
土師質土器、備前焼の壺、青磁、鉄釘1点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

#### ⑬SK23

##### 検出遺構(第9図)

1 郭北端中央東寄りに位置する不整形の土坑である。東側にSK27が隣接する。北東端でピットと切り合い関係にあるが、新旧は不明である。長さ約2.1m、幅0.38~0.77m、深さ0.13mである。細長い土坑で、北東部が狭くなる。底面は南西部にピット状の窪みがあり、土坑上面からの深さ0.22mである。

#### 出土遺物



第26図 SK 2・5・11・12・14出土土器類実測図 (1:3, 58・59・61は1:6)

遺物は出土していない。

⑩ SK24

検出遺構（第27図）

1郭中央北寄りに位置する土坑である。SB4の北側にあり、P2からの距離は0.6mである。西側にSK28が隣接する。検出時は1基の大型土坑と考えていたが、掘り進める過程で2基であることが判明した。SK28との新旧関係は不明である。平面形は不整円形で、長径1.52m×短径1.41m、深さ0.65mである。埋土は黄褐色砂質土の単層である。北部で0.15~0.2mの石を2個検出したが、壁から浮いていることから、SK24に伴うものではなく、埋没する過程で入り込んだものと思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑪ SK25

検出遺構（第28図、図版13-a）

1郭北東部に位置する土坑である。SB4の北東隅にあり、P3と重複しており、P3を削っていることからSK25の方が新しい。また、SX1とも重複しており、SK25の方が新しい。南東部はピットと重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は長方形、主輪は東西方向で、方位はN72°Wである。長さ2.60m、幅1.25m、深さ0.51mである。0.8~0.34mの川原石が約15個検出されたが、底面から約10cm浮いており、また、その配置に規則性もないことから、SK25に伴うものではなく、廃棄されたものと思われる。底面の一部に灰白色粘土が見られるが、埋土の大部分は黄橙色砂質土である。

出土遺物（第30図、図版27）

黄橙色砂質土から備前焼の擂鉢（63）が出土した。口縁部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや強く外傾させて面を作る。内面に縱方向の擂り目があるが、単位は不明である。I-11区盛土出土破片と接合した。

その他、土師質土器（皿など）、亀山焼、備前焼の壺、常滑焼の甕、不明鉄製品2点が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。常滑焼の甕片は、1郭東側切岸出土のものと接合した。

⑫ SK26

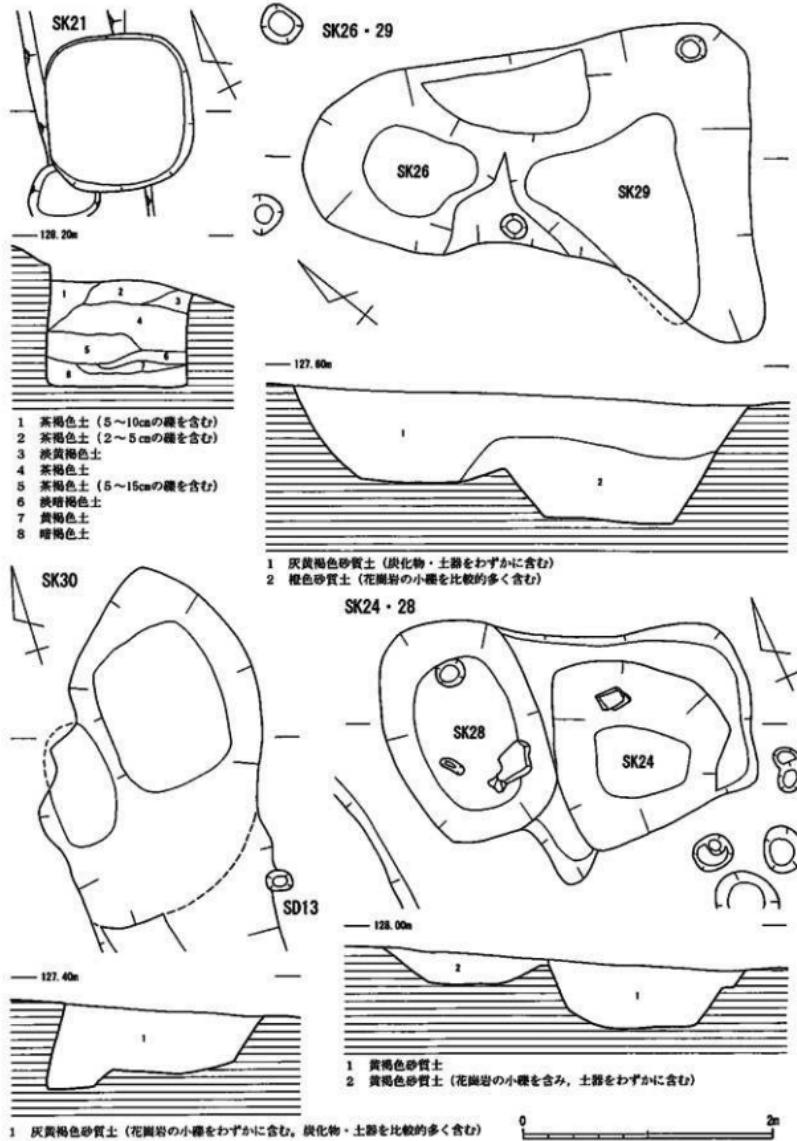
検出遺構（第27図）

1郭北東部に位置する不整円形の土坑である。SK25の3.5m北にある。SK29と重複しており、土層断面を見るとSK26の方が新しい。現状で長径1.62m×短径1.52m、深さ0.75mであるが、長径は本来もっと長かったと思われる。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑬ SK27



第27図 SK21・24・26・28~30実測図 (1:40)

#### 検出遺構（第9図）

1 郭北端中央東寄りに位置する土坑である。SK23の東側に隣接する。北端はピットと重複しているが、新旧は不明である。平面形は長円形で、長径約3.0m×短径1.34m、深さ0.06mで、北半部にピット状の窪みが幾つか見られ、土坑上面からの深さ0.30mである。埋土は灰黄褐色土の単層である。

#### 出土遺物（第30図、図版27）

土師質土器の椀（64）、備前焼の甕（65）が出土した。

64は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口径9.2cm、器高2.45cmである。

65は備前焼の甕の口縁部片である。口縁部は外反し、端部を折り曲げて玉縁を形成している。

その他、土師質土器の皿が出土しているが、細片のため図示できなかった。

#### ② SK28

#### 検出遺構（第27図）

1 郭中央北寄りに位置する土坑である。SB4の北側にあり、P1からの距離は1.4mである。SK24が東側に隣接する。検出時は1基の大型土坑と考えていたが、掘り進める過程で2基であることが判明した。SK24との新旧関係は不明である。平面形は長円形で、長径1.78m、短径1.22m、深さ0.35mである。底面に2つのピット状の窪みがあり、土坑上面からの深さは0.47mである。埋土は黄褐色砂質土の単層である。南部で0.05~0.17mの石を3個検出したが、底から約0.1m浮いていることから、SK28に伴うものではなく、埋没する過程で混入したものと思われる。

#### 出土遺物（第30図、図版27）

備前焼の甕（66）が出土した。口縁部から胴部上半が残存し、復元口径26.1cmである。口縁部は外反し、端部を折り曲げて玉縁を形成している。H-11区包含層から出土した破片と接合した。

その他、土師質土器の皿、須恵器系土器が出土したが、いずれも細片のため、図示できなかった。その他に鉄滓1点（171.99g）が出土した。

#### ③ SK29

#### 検出遺構（第27図）

1 郭北東部に位置する土坑である。SK25の北東1.8mにある。SK26と重複しており、土層断面によるとSK29の方が古い。平面形は正三角形に近い形をしており、一辺約2.50m、深さ1.01mである。底面は西側に寄っており、南西部はオーバーハングしている。埋土は上層が灰黄褐色砂質土、下層が橙色砂質土である。土取り穴の可能性も考えられる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ④ SK30

#### 検出遺構（第27図）

1 郡東部中央に位置する土坑である。SB 1 の北東、SB 4 の東。SD 13 と重複しているが、新旧は不明である。平面形は長円形で、底面は二段になっている。現状で長径 2.76m × 短径 1.95m、深さは東側が 0.46m、西側が 0.73m である。南西部は一部オーバーハングしている。埋土は灰黄褐色砂質土の単層である。

#### 出土遺物（第 30・50・53 図、図版 27・36・38）

土師質土器の椀（67）、白磁の壺？（68）、丸瓦（196）、鉄釘（238）が出土した。

67 は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部がやや窪んでいる。復元口径 10.3 cm、器高 2.25 cm である。

68 は白磁の壺？の胴部片である。素地は淡灰色で、外面には全体に淡青灰色の釉が掛るが、内面は釉が掛らない部分もある。

その他、土師質土器の皿、瓦質土器の擂鉢、亀山焼の壺、須恵器系土器、備前焼の壺・擂鉢が出土しているが、細片のため図示できなかった。また、238 を含め鉄釘 5 点、不明鉄製品 1 点が出土している。

#### ④ SK31

##### 検出遺構（第 11 図）

1 郡中央南寄りに位置する土坑である。SB 2 の内部北端付近にある。東側には焼土 3 が隣接する。平面形は円形で、長径 0.81m × 短径 0.68m、深さ 0.41m である。SB 2 の内部にあることから、同時期の遺構ではないと思われるが、新旧は不明である。埋土は暗灰褐色砂質土の単層である。

#### 出土遺物

土師質土器、鉄釘 2 点、不明鉄製品 2 点が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ⑤ SK32

##### 検出遺構（第 28 図、図版 13-c）

1 郡西部中央付近に位置する土坑である。西側は調査区外となるため、正確な形態・規模は不明であるが、平面形は長円形と思われ、底面は平坦ではなく幾つかの段を有する。長径 2.28m、短径は現状で 0.66m、深さは最深部で 0.58m である。埋土は淡褐色土の単層である。

#### 出土遺物

土師質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ⑥ SK33

##### 検出遺構（第 28 図、図版 13-c, 14-a）

1 郡西部北寄りに位置する土坑である。北側に SK34 がある。SK34 との新旧関係は不明であるが、埋土に大きな違いが認められないことから同時期に存在した可能性もある。SX 7 と重複しており、SK33 の方が古い。平面形は長円形で、2~3 の段を有する。長径 1.66m × 短径 1.16m、深さ 0.60m である。埋土は上層が淡暗褐色土、中層が明褐色土、下層が淡暗褐色土 + 黄褐色土である。中層から 0.1~0.2m の礫が数個出土した。

#### 出土遺物（第30・53図、図版27・38）

土師質土器の皿（69）・杯（70・71）・椀（72）、鉄釘（239）が出土した。

69は土師質土器の皿である。体部は内湾気味の部分と外反気味の部分があり、また、器高も一定していない。全体的に雑な作りで、底部の切り離し方法は不明である。口径5.6cm、器高1.05cmである。

70・71は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。70は形が歪んでおり、口径10.0～10.6cm、器高3.3cmである。71は口径10.7cm、器高3.35cmである。

72は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はさらに内湾を強める。底部の狭い器形で、口径8.7～9.2cm、器高2.8cmである。

その他、備前焼の壺が出土したが、細片のため図示できなかった。また、鉄製品は239の鉄釘1点のみである。

#### ⑩SK34

#### 検出遺構（第28図、図版14-a）

1郭西北寄りに位置する土坑である。南側にSK33がある。SK33との新旧関係は不明であるが、埋土に大きな違いが認められないことから同時期に存在した可能性もある。SX7と重複しており、SK34の方が古い。平面形は長円形で、北部と東部の底面は二段になっている。長径1.46m×短径1.25m、深さ0.68mである。埋土は下層が淡暗褐色土+黄褐色土、上層が淡暗褐色土である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑩SK35

#### 検出遺構（第29図、図版14-b）

1郭北西部に位置する土坑である。西側にSK36がある。SX9・SD17と重複しており、SK35の方が古い。また、西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって削られ、下半しか残存していない。平面形は不整円形で、西側が狭くなっている。長径2.64m×短径2.54m、深さ0.72mである。埋土は明褐色土であるが、暗褐色土の含有量によって、上中下の3層に分けることができる。

#### 出土遺物（第30・53～59図、図版27・38・41・42）

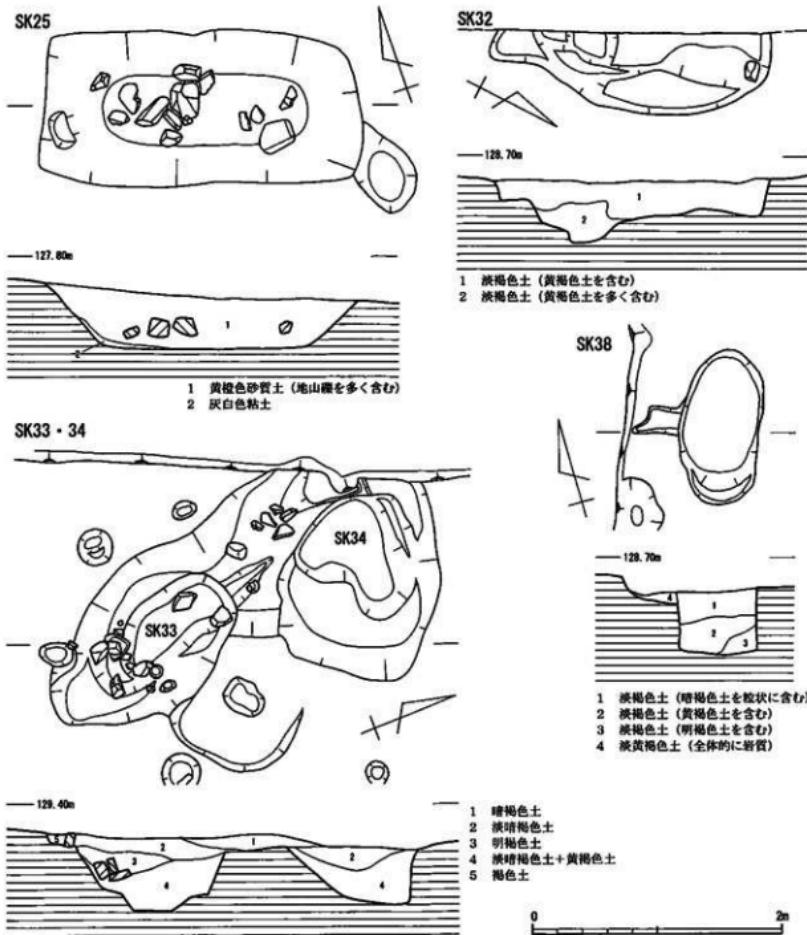
陶器の小壺（73）、鉄釘（240～242）、板状鉄製品（283）、銅製懸仏（287）、古銭（297・313・315・317・322・324）6枚が出土した。銅製懸仏は中層から出土した。

73は陶器の小壺である。外面胴部上半に3・4条の沈線がある。胎土は淡灰色で、外面に淡黄褐色の自然釉がかかる。内面は淡褐色であるが、釉ではなく焼成によるものと思われる。内面には暗茶色の物質が付着している。常滑焼の可能性がある。

その他、土師質土器（皿など）、亀山焼の壺、須恵器系土器、備前焼、石鍋の可能性がある滑石の小片が2点出土したが、細片のため図示できなかった。

鉄製品は、240～242 を含め鉄釘 6 点、283 の板状鉄製品 1 点、不明鉄製品 1 点が出土した他に、鉄滓が 1 点 (61.60 g) 出土した。なお、古銭片が出土しているが、322・324 いずれかの破片と思われる。

#### ⑪ SK36



第28図 SK25・32～34・38実測図 (1 : 40)

#### 検出遺構（第29図、図版14-c, 15-a）

1 郡北西部に位置する土坑である。北東1.8mにはSK39がある。SK37と重複しており、SK36の方が古い。東側はSK35と接する。平面形は不整長円形で、現状の規模は長径3.26m×短径2.03m、深さ0.91mである。埋土は基本的には4層である。断面図でみると、本土坑は本来もっと大規模で、長径4.4m、短径2.75m程度の規模で、北側及び西側に段を有していたようである。

#### 出土遺物（第30・53～56図、図版28・38・39～41）

土師質土器の皿（74～78）、瓦質土器の鍋（79）、亀山焼の甕（80）、備前焼の甕（81）、白磁の水注？（82）、鉄釘（243～248）、鉄製金具（266・267）、刀状鉄製品（275）、用途不明鉄製品（268・278・279）、板状鉄製品（284・285）、漆紙（339・340）が出土した。土師質土器は上層及び中層からの出土が多く、瓦質土器は上層中心、亀山焼は上層、備前焼は上層から下層、白磁は上層からの出土である。なお、SK39出土土師質土器の鍋（95）の一部がSK36から出土している。

74～78は土師質土器の皿である。74～77は小型の皿で、口径5.9～6.5cm、器高0.9～1.2cmである。74は体部が内湾気味に立ち上がるが、75～77は外反気味に立ち上がる。78は底径5.3～5.8cmの皿で、体部は内湾気味に立ち上がる。底部切り離しは、74・77が回転ヘラ切りで、板目痕が残る。75・78は回転ヘラ切りと思われるが、76は不明である。

79は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、外面体部に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦である。

80は亀山焼の甕の口縁部と胴部である。復元口径34.5cmである。頸部は直立気味に立ち上がり、鋭く屈曲しながら口縁部を外反させている。外面頸部は格子目タタキをナデ消している。接合はしないが、同一個体の胴部と思われる破片が出土している。格子の単位は4mm×4mmである。

81は備前焼の甕の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部は外反し、端部を折り曲げて玉縁を形成している。SK37・39、F9区表土から出土した破片と接合した。

82は白磁の水注？である。削り出しの高台を有し、高台径は4.8cmである。外面体部及び内面に透明釉がかかる。素地は灰白色である。底部の器壁は1.4cmあり、かなり厚い。底部を粘土で接着していることから碗ではなく、袋物である可能性が高く、水注の可能性がある。

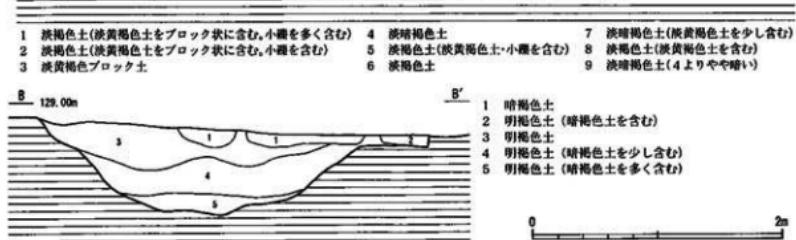
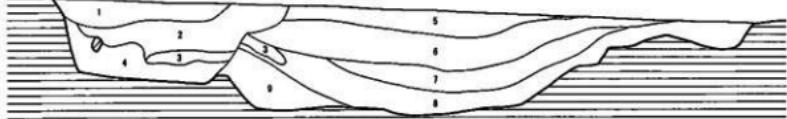
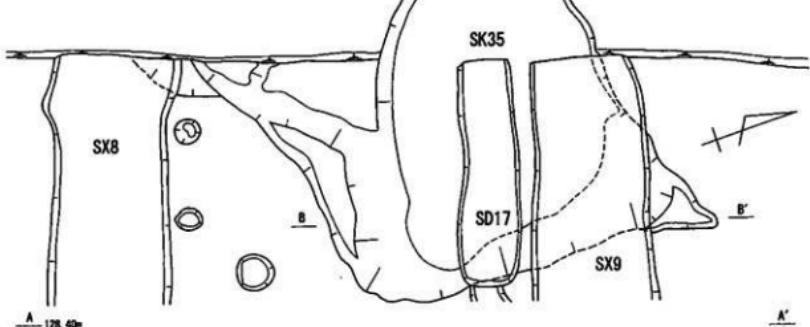
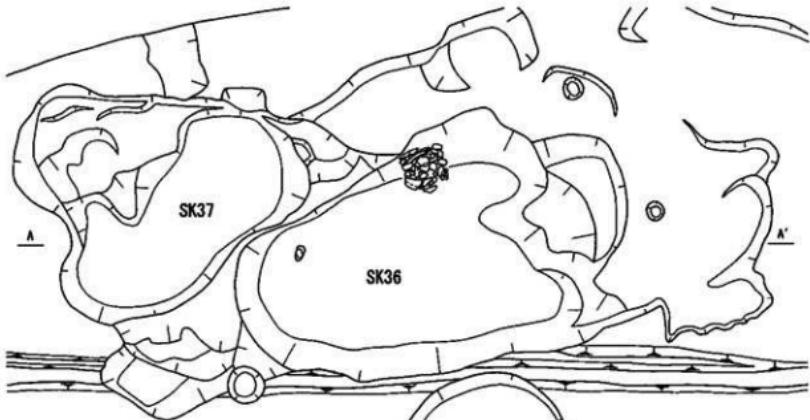
その他、瓦質土器の擂鉢、亀山焼の擂鉢、青磁が出土したが、細片のため図示できなかった。

鉄製品類は上層から下層にかけて出土している。243～248を含め鉄釘36点、266・267の金具2点、275の刀状鉄製品1点、268・278・279を含め用途不明鉄製品7点、284・285の板状鉄製品2点が出土している。また、古銭片と鉄滓1点（133.21g）が出土した。

#### ⑫ SK37

#### 検出遺構（第29図、図版15-a）

1 郡北部西端に位置する土坑である。SK36と重複しており、SK37の方が新しい。平面形は不整円形で、長径2.38m×短径1.95m、深さ1.05mである。南西部にいくつかの段を有し、底面は北西側が深くなっている。埋土は4層である。



第29図 SK35~37実測図 (1 : 40)

#### 出土遺物（第33・53・56図、図版28・39・40）

瓦質土器の火鉢（83）、東播系須恵器の擂鉢（84）、鐵釘（249）、用途不明鉄製品（280）が出土した。

83は下層から出土した瓦質土器の火鉢の体部片である。体部は内湾気味に立ち上がり、外面に2条の突帯と連続する円形浮文を貼り付ける。

84は東播系須恵器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。内面に擂り目はない。

その他、土師質土器（皿など）、瓦質土器の鍋、備前焼の甕が上層から下層にかけて出土し、亀山焼の甕が上層から中層にかけて、須恵器系土器が上層から、白磁が中層から出土した。いずれも細片のため、図示できなかった。

鉄製品は上層から下層にかけて出土した。249を含め鐵釘4点、280の用途不明鉄製品1点である。また、中層から古錢片と鐵滓3点（24.19g）が出土した。

#### ⑩SK38

##### 検出遺構（第28図、図版15-b）

1郭北部西寄りに位置する土坑である。平面形は長円形で、南部は二段になっている。長径1.24m×短径0.64m、深さ0.49mである。埋土は3層からなる。

##### 出土遺物（第33・53図、図版28・39）

瓦質土器の鍋（85）、鐵釘（250）が出土した。

85は瓦質土器の鍋で、中層から出土した。体部は内湾気味に立ち上がり、外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。

その他、土師質土器（皿など）が上層及び中層で出土した。細片のため図示できなかった。鉄製品は250の鐵釘1点のみで、他に鐵滓2点（18.01g）が出土した。

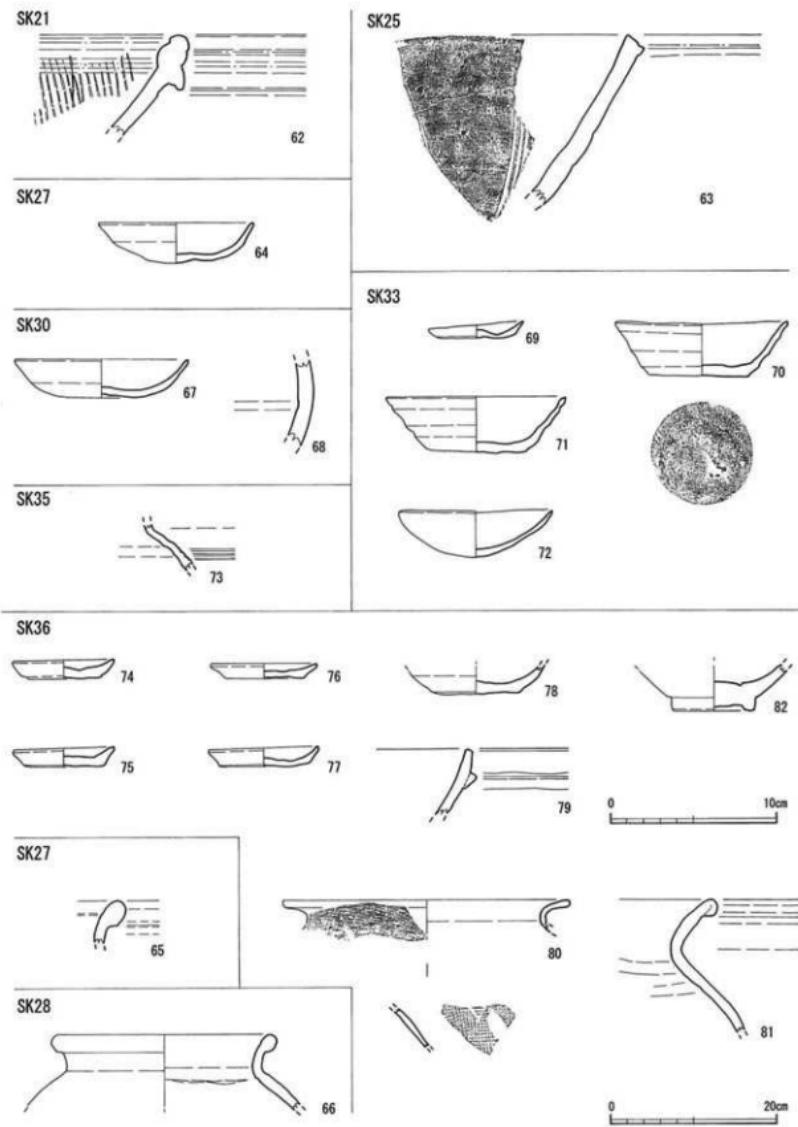
#### ⑪SK39

##### 検出遺構（第31図、図版15-c）

1郭北西端付近に位置する土坑である。SK36の1.8m北東にあり、1.5m東にはSK40がある。平面形は不整形で、北部は二段で、西部は幾つかの段が見られる。長径2.76m×短径2.60m、深さ0.95mである。断面図を見ると1基の土坑ではなく、数基の土坑が重複している可能性もある。

##### 出土遺物（第33・50・51・54図、図版29・36・37・39）

土師質土器の皿（86・87）・杯（88・89）・小鉢（90）、瓦質土器の鍋（91）・擂鉢（92）、古瀬戸の御皿（93）、亀山焼の甕（94）、軒丸瓦（195）、石鍋加工品（206）、鐵釘（251～255）が出土した。土師質土器は中層からも出土しているが、下層からの出土が多い。瓦質土器は上・中層から、亀山焼は中層から、軒丸瓦は下層から、鉄製品は上層から下層にかけて出土した。86・87は土師質土器の皿である。86は体部が内湾気味に立ち上がり、底部切り離しは回転糸切りと思われる。口径6.3cm、器高1.75cmである。87は体部が内湾気味に立ち上がるが、口縁部はやや外反する。



第30図 SK21・25・27・28~30・33・35・36出土土器類実測図 (1:3, 65・66・80・81は1:6)

底部切り離しは回転ヘラ切りと思われる。推定口径 7.0 cm, 推定器高 1.9 cm で、86 に比べ底部の器壁が厚い。

88・89 は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がる。88 は復元口径 10.8 cm, 器高 3.55 cm で、底部の切り離し方法は不明である。89 は復元口径 10.2 cm, 器高 3.1 cm で、底部の切り離しは回転糸切りである。

90 は土師質土器の鉢である。口縁部片と体部から底部にかけての破片があるが、2 片に接点はない。体部は内湾しながら立ち上がるが、口縁部は強く外反する。推定口径 13.5 cm である。内面全体に暗褐色の漆が 0.5 ~ 2 mm の厚さで付着している。

91 は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、外面上に断面三角形の突帯を貼り付けた。口縁端部は平坦に近い。

92 は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めにまっすぐ立ち上がり、口縁端部は平坦に近く、内側にやや肥厚させている。内面に粗い擂り目があり、6 条単位と思われる。

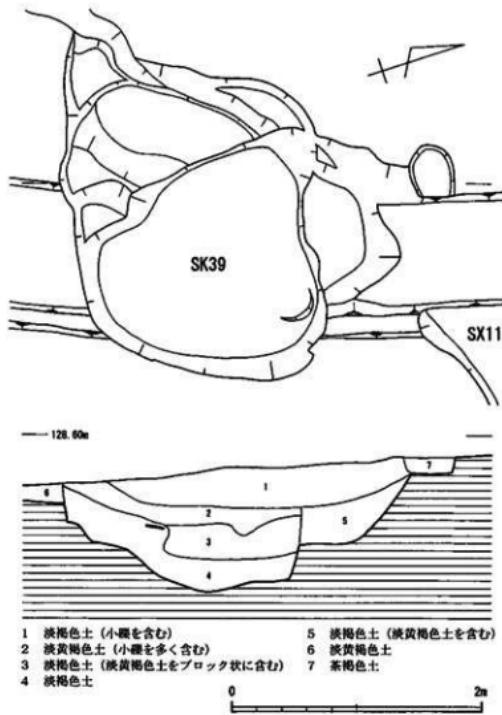
93 は古瀬戸の卸皿である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内側にわずかに引き出し、外傾する平坦な面をもっている。内面底部全体に格子状の卸目が鋭く刻まれている。底部切り離しは回転糸切りで、外面底部の一部を除き淡緑黄色の釉が薄く施されている。器高は 2.8 cm であるが、口径は 17 cm 前後と推定される。

94 は亀山焼の甕の胴部片である。外面に格子目タタキを施す。格子の単位は 4 mm × 4 mm である。その他、備前焼甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

鉄製品は、251~255 を含む鉄釘 14 点、用途不明鉄製品 1 点が出土した。

#### ㊱ SK40

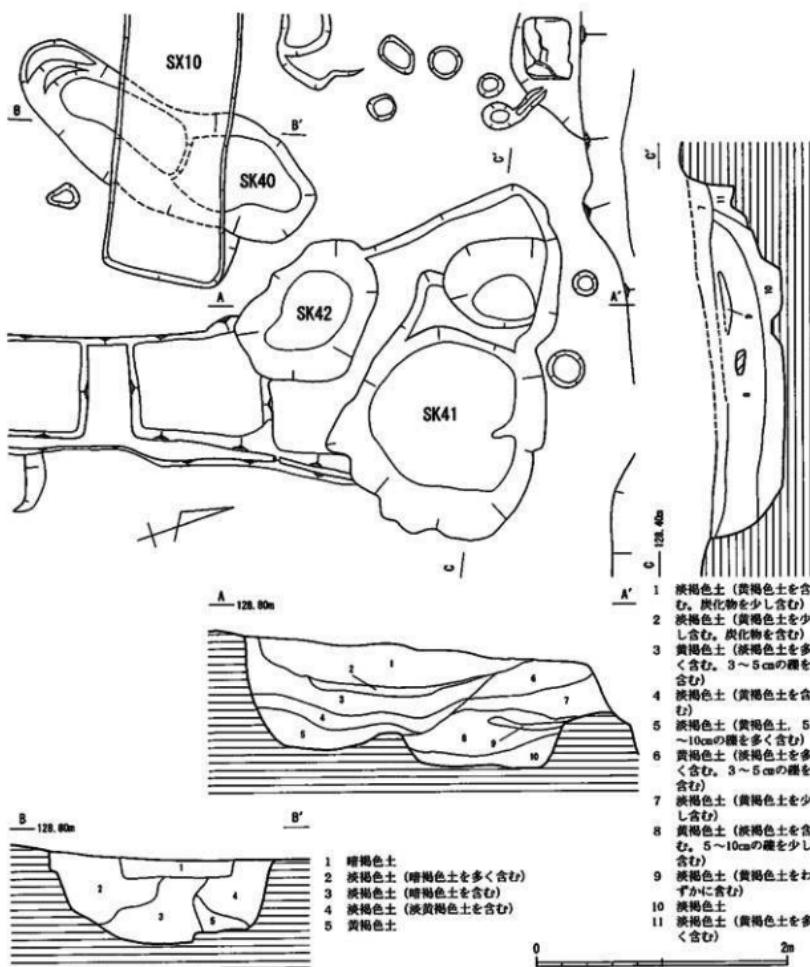
検出遺構（第 32 図、図版 16-a）



第31図 SK39実測図 (1:40)

1 郡北西部に位置する土坑である。SK39の東1.5mにある。SX10と重複しており、SK40の方が古い。平面形は長円形で、北東部は2段、南西部は3段になっている。長径2.59m×短径0.92m、深さ0.80mである。埋土は基本的に3層である。

出土遺物（第33・54図、図版29・39）

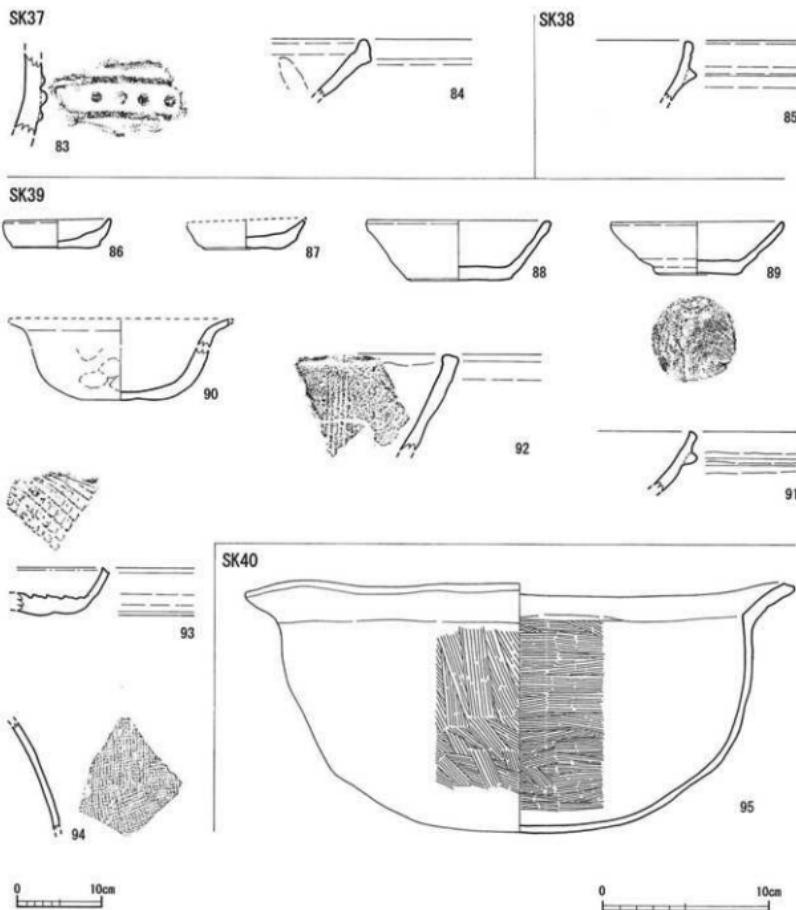


第32図 SK40～42実測図 (1:40)

土師質土器の鍋（95）、鉄釘（256～258）が出土した。

95は土師質土器の鍋である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は平坦に納め、内面頸部に稜をもつ。形が歪んだ部分もあり、口径 32.2～33.5 cm、器高 14.9 cm である。外面は底部を除き、ススが付着している。破片が SK36 からも出土している。

その他、土師質土器（皿など）が下層を中心に出土しているが、細片のため図示できなかった。



第33図 SK37～40出土土器類実測図 (1:3, 94は1:6)

鉄製品は、256～258を含め鉄釘4点が出土した。

#### ⑩ SK41

##### 検出遺構（第32図、図版16-b）

1 郭北西端付近に位置する土坑である。SK40の北東1.0mにある。SK42と重複しており、SK41の方が古い。平面形は長円形で、底面は3段からなり、中央北西寄りが高くなり、それを境に北側と南東側が円形に窪んでいる。長径2.47m×短径1.62m、深さ0.78mである。埋土は基本的に4層である。

##### 出土遺物（第54図、図版38・39）

鉄釘（259・260）が出土した。

その他、土師質土器（皿など）、瓦質土器の鍋・擂鉢、龜山焼の甕、磁器が出土したが、細片のため図示できなかった。

鉄製品は中層などから、259・260を含め鉄釘7点、不明鉄製品2点が出土している。

#### ⑪ SK42

##### 検出遺構（第32図、図版16-a）

1 郭北西端付近に位置する土坑である。SK40の北東に隣接する。SK41と重複しており、SK42の方が新しい。平面形は長円形で、現状で長径1.31m×短径0.95m、深さ0.94mであるが、本来はさらに北方向に拡がり、長径2.3m×短径1.3m以上の規模になると推定される。

##### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### （6）溝状遺構

##### ① SD1

##### 検出遺構（第9図）

1 郭南部東寄りに位置する東西方向の溝状遺構である。北西0.4mにSK1が、北東2.4mにSD2がある。SD1の西側は調査区外に延びている。現状で、長さ1.28m、幅0.18～0.54m、深さ0.03～0.09mで、西に向かうに従い次第に広くなる。底面はほぼ平坦で、東に向かって下っている。

##### 出土遺物

遺物は出土していない。

##### ② SD2

##### 検出遺構（第9図）

1 郭南部東寄りに位置する南北方向の溝状遺構である。SD1の北東2.4mにある。長さ1.52m、幅0.21～0.23m、深さ0.09～0.15mの小規模な遺構である。底面は平坦ではなく、ピット状に深くなる部分も見られ、東に向かって下っている。埋土は灰黄褐色土の単層である。

##### 出土遺物

土師質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。他に鉄滓2点(14.68g)が出土した。

### ③SD3

#### 検出遺構(第11・13図)

1 郭南部中央、SX2内に位置する北西-南東方向の溝状遺構である。SK5と重複しているが、新旧関係は不明である。現状で、長さ1.03m、幅0.25~0.31m、深さ0.03~0.12mである。底面は平坦である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### ④SD4

#### 検出遺構(第9・11・13図)

1 郭南部中央、SX2内に位置する北西-南東方向の溝状遺構である。SK5と重複しているが、SK5によって削られていることから、SD4の方が古い。長さ6.92m、幅0.24~0.43m、深さ0.07~0.14mである。南東に向かって次第に広くなる。底面はほぼ平坦であるが、中央部がやや高くなっている、両端が深くなる。埋土は灰黄褐色土の単層である。

#### 出土遺物

土師質土器(皿など)、瓦質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。

### ⑤SD5

#### 検出遺構(第9図)

1 郭南東部に位置する北東-南西方向の溝状遺構である。SK4と重複しているが、新旧は不明である。現状で、長さ3.42m、幅0.13~0.64m、深さ0.01~0.07mである。北東側が広くなり、北東部と南西部にそれぞれ25~30cm程度の石がある。底面はほぼ平坦である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### ⑥SD6

#### 検出遺構(第10図)

1 郭中央東寄り、SB1内の南西部に位置する溝状遺構である。北西-南東方向に延び、長さ1.56m、幅0.16~0.22m、深さ0.03~0.07mである。底面はほぼ平坦である。SB1と同時存在したとは考え難い。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### ⑦SD7

#### 検出遺構(第10・14図)

1 郭中央東寄りに位置する溝状遺構である。北東-南西方向に延びるが、SD8・9・12とは方向がずれている。南東端でSD8・9と重複しているが、いずれも同一の埋土で新旧は不明である。また、南西側はSK11と重複しているが、南西端の形状が不明瞭となり、新旧は不明であ

る。現状で、長さ 1.63m、幅 0.08~0.16m、深さ 0.06~0.12m である。底面はほぼ平坦で、南西方向に向かって下っている。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑧ S D 8

##### 検出構構（第 14 図）

1 郡中央東寄りに位置する構状構である。北西一南東方向に延び、北東にある S D 12 と 0.3 m 間隔で平行し、S D 9・10 とも平行または直交する。南東端で S D 9 と切り合い関係にあるが、いずれも同一の埋土で新旧は不明である。S D 9 を越えて南東部に延びていないため、同時期である可能性が高い。また、北西端はピットと重複している。現状で、長さ 1.87m、幅 0.18~0.28m、深さ 0.12~0.14m である。底面はほぼ平坦で、南東に向かって下っており、S D 9 に流れ込む溝と思われる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑨ S D 9

##### 検出構構（第 10・14 図、図版 6-a）

1 郡中央東寄りに位置する「L」字形の溝状構である。北東一南西方向に延び、途中で直角に折れ曲がり、北西一南東方向になる。全長約 6.8m で、北東一南西方向の長さ 4.62m、幅 0.25~0.69m、深さ 0.07~0.14m、北西一南東方向の長さ 2.20m、幅 0.13~0.23m、深さ 0.04~0.07m である。北東一南西方向の南西部で幅が広くなっている。底面はほぼ平坦である。北東端は S B 1-P 1 と重複しているが、新旧は不明である。本来は北東端で北西一南東方向の延びる S D 10 とつながっており、「コ」字状の溝であった可能性がある。また、S D 7・8・12 とも重複しているが、いずれも同一の埋土で新旧は不明である。S D 8・12 とは平行または直交しており、関連があるものと思われる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑩ S D 10

##### 検出構構（第 10・14 図、図版 6-a）

1 郡中央東寄りに位置する構状構である。南東一北西方向に延び、長さ 2.33m、幅 0.14~0.19m、深さ 0.06~0.09m である。北西端は S B 1-P 1 と重複しているが、新旧は不明である。底面はほぼ平坦で、南東方向に向かって下っている。S D 9 と直交または平行しており、本来は北西端で「L」字形の S D 9 とつながり、「コ」字形の溝であった可能性が高い。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑪ S D 11

### 検出遺構（第14図）

1 郭東寄り、SB 4 内に位置する溝状遺構である。北東—南西方向に延び、長さ 2.14m、幅 0.13~1.23m、深さ 0.02~0.06m である。南西方向に向かって徐々に広くなっている。底面はほぼ平坦である。南西端は SD 12

と重複しているが、SD 12 を超えて南西には延びない。新旧は不明である。また、SB 4-P 19 とも重複している。埋土は灰黄褐色土の単層である。

### 出土遺物（第34図、図版29）

青白磁の梅瓶（96）が出土した。外面に渦巻文を陰刻している。同一個体と思われる破片が SX 2 から出土している。また、SB 2 出土の底部（第12図1）と同一個体である可能性が高い。

その他、滑石製の石鍋の体部片が1点出土しているが、細片のため図示できなかった。

### ⑫ SD 12

### 検出遺構（第14図）

1 郭中央東寄りに位置する溝状遺構である。北西—南東方向に延び、SD 8 と 0.3m 間隔で平行し、SD 9・10 とも平行または直交する。長さ 4.32m、幅 0.13~0.52m、深さ 0.03~0.11m である。南東端で SD 9 と重複しているが、埋土はいずれも同一の灰黄褐色土で新旧は不明である。SD 9 を越えて南東部に延びていないため、同時期である可能性が高い。底面はほぼ平坦で、南東方向に向かって下っており、SD 9 に流れ込む溝と思われる。

### 出土遺物（第34・51図、図版29・37）

古瀬戸の入子（97）、墓石（201）が出土した。

97 は古瀬戸の入子である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は輪花になるよう仕上げている。底部の切り離しは回転糸切りで、復元器高 7.6 cm、器高 2.5 cm である。内面は使用時に擦ったと思われる痕跡が残る。

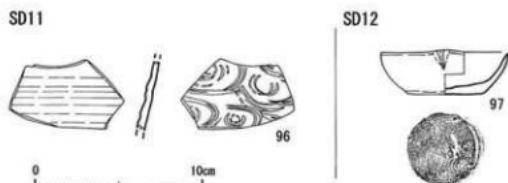
その他、土師質土器片（皿など）、亀山焼の甕、青磁が出土しているが、細片のため図示できなかった。他に鉄滓 1 点（123.06 g）が出土した。

### ⑬ SD 13

### 検出遺構（第9図）

1 郭東部中央に位置する溝状遺構である。SB 1 の北東、SB 4 の東にある。SK 30 と重複しているが、新旧は不明である。北西—南東方向に延び、現状で長さ 4.80m、幅 0.60~1.57m、深さ 0.24~0.34m である。幅は一定ではなく、広い部分や狭い部分が見られる。底部は南東方向に向かって下っている。埋土は灰黄褐色土の単層である。

### 出土遺物



第34図 SD 11・12出土土器類実測図（1:3）

土師質土器（皿など）、備前焼の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。他に鉄滓1点（8.07g）が出土した。

⑩ S D14

検出遺構（第10図）

1 郭中央東寄り、S B 1 の南端に位置する溝状遺構である。北西—南東方向に延び、S B 1 の方向とはわずかにずれているが、南端の柱穴列（P 9～11）と重なる。北西端はP11と重複しており、現状で長さ4.74m、幅0.18～0.62m、深さ0.03～0.08mである。底面は南東に向かって下っている。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑪ S D15

検出遺構（第11図）

1 郭中央南寄り、S X 2 内の北端に位置する溝状遺構である。北東—南西方向に延び、S X 2 及びS B 2 の方向と一致することから、これらの遺構に伴う可能性がある。長さ1.70m、幅0.22～0.48m、深さ0.14mである。底面はほぼ平坦である。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑫ S D16

検出遺構（第9・17図、図版10-a）

1 郭中央西寄りに位置する北北東—南南西方向の溝状遺構である。1郭高所部の西裾付近にあたり、西側0.6mにはS D16と平行するようにS A 1が存在する。長さ8.74m、幅0.14～0.34m、深さ0.03～0.23mである。南南西方向に向かって下っている。

出土遺物

遺物は出土していない。

⑬ S D17

検出遺構（第29図）

1 郭北西部に位置する東南東—西北西方向の溝状遺構である。北東には同方向のS X 9 が隣接する。西北西端はブドウ畠に伴う新しい溝によって切られている。西北西部はS K35と重複しており、S D17の方が新しい。現存長2.55m、幅0.26～0.52m、深さ0.04～0.15mである。底面はほぼ平坦で、西北西方向に向かって下っている。埋土は上層が暗褐色土、下層が淡暗褐色土である。S X 9 と隣接して平行し、埋土も同じことから同時期の遺構の可能性が高い。

出土遺物

遺物は出土していない。

(7) 1郭出土遺物

### ① 1郭ピット（第35図、図版30）

ここでは土器類のみ記載し、それ以外の1郭ピット出土遺物については、それぞれグリッド毎に記載する。1郭ピットから土師質土器の皿（98・99）・椀（100・101），瓦質土器の鍋（102）が出土した。

98・99は土師質土器の皿である。98はH11区ピット、99はH9区ピットから出土した。体部は内湾気味に立ち上がる。98は底部の切り離しが回転ヘラ切りで、板目痕が残る。全体的に丁寧な作りである。口径6.1cm、器高1.35cmである。99の底部切り離し方法は不明で、復元口径6.4cm、器高1.2cmである。

100・101は土師質土器の椀である。100はH9区ピットから、101はG12区ピットから出土した。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。底をわずかに窪ませている。100は口径8.2cm、器高2.3cmである。101は形が歪んでおり、口径8.4～9.1cm、器高2.5cmである。

102はF10区ピットから出土した瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、外面上に断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯の幅は0.7cmで、他の鍋に比べ、幅がある。口縁端部は平坦に近く、復元口径29.0cmである。二次焼成を受けている。

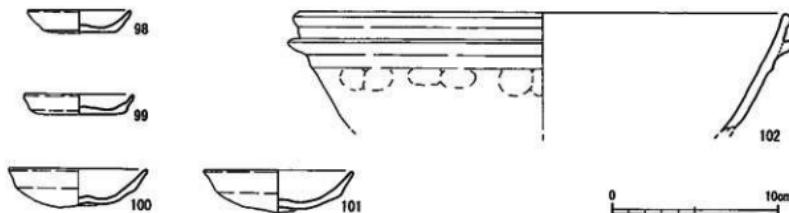
### ②トレンチ1（第36・51・55図、図版30・37・40）

弥生土器の甕（103・104）、土師質土器の椀（105）、柱状高台土器（106）、石製サイコロ（199）用途不明石製品（200）、鐵鏃（273）、刀状鐵製品（274）が出土した。

103・104は弥生土器の甕である。103は複合口縁で、口縁端部の立ち上がりが内傾する。外面口縁部に3条の浅い凹線を有している。胴部は最大径がやや上位にあり、緩やかに湾曲している。104は平底で、底径3.3～3.5cmである。外面にヘラミガキの痕跡がかすかに残る。103と同一個体である可能性が大きい。

105は土師質土器の椀である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、底を窪ませている。復元口径9.5cm、器高2.9cmで、内外面に漆と思われるものが付着している。

106は柱状高台土器である。椀形の器形に径6.5cm、高さ約1.5cmの柱状高台がつく。上部を狭めており、柱状というよりは、椀に台を取り付けたような器形である。



第35図 1郭ピット出土土器類実測図 (1:3)

その他、土師質土器の皿・鍋、瓦質土器の鍋・擂鉢、須恵器系土器、備前焼の甕、平瓦片が出土したが、細片のため図示できなかった。土師質土器・須恵器系土器は黄褐色土から、瓦質土器・備前焼は黄褐色土及び明褐色から出土した。

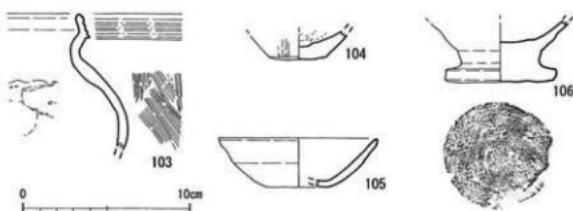
鉄鏃（273）は黄褐色土からの出土で重量 45.28 g、刀状鉄製品（274）は暗褐色土からの出土で重量 10.89 g である。また、黄褐色土を中心に鉄釘 8 点、板状鉄製品 1 点、用途不明鉄製品 4 点が出土しており、他に鉄滓 10 点（395.88 g）が出土した。

### ③トレンチ 2（第 37 図、図版 30）

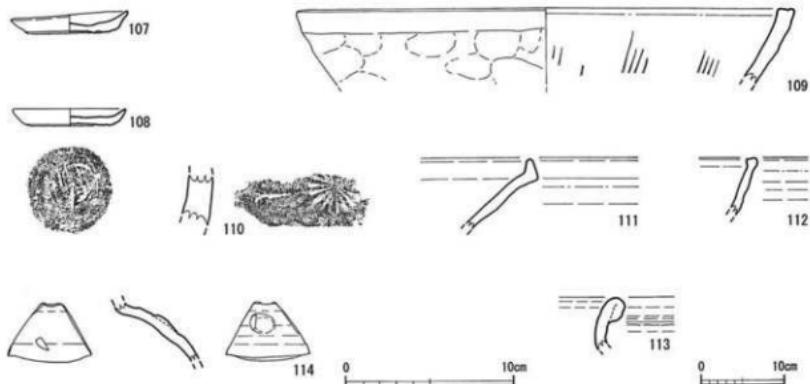
土師質土器の皿（107・108）、瓦質土器の擂鉢（109）・火鉢（110）、東播系須恵器の擂鉢（111）、古瀬戸の卸皿（112）、備前焼の甕（113）、白磁の四耳壺（114）が出土した。

107・108 は土師質土器の皿である。107 は明褐色土から出土した。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。底部切り離しは回転ヘラ切りと思われる。口径 6.9 cm、器高 1.3 cm である。108 は黄褐色土から出土した。体部は内湾気味に立ち上がり、底部切り離しは回転ヘラ切りで、板目痕が残る。口径 6.7 cm、器高 1.0 cm で、口径の割には浅い器形である。

109 は瓦質土器の擂鉢である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は平坦で、中央がわずかに窪んでいる。内面は摩滅しているが、粗い掘り目があり、単位は 4 条と思われる。復元



第36図 1郭トレンチ1出土土器類実測図（1:3）



第37図 1郭トレンチ2出土土器類実測図（1:3, 113は1:6）

口径 29.7 cm である。

110 は瓦質土器の火鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、外面体部に菊花文のスタンプを施す。

111 は東播系須恵器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。全体的に器壁が薄い。内面に擂り目はない。

112 は古瀬戸の卸皿の口縁部から体部にかけての破片である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部で肥厚させ、水平の面を作り出している。内側がやや突出している。体部下半を除き、淡黄緑色の釉がかかる。

113 は備前焼の甕の口縁部片である。口縁部は外反し、端部を折り曲げて玉縁を形成している。

114 は白磁の四耳壺の肩部片である。肩部に耳を貼り付けている。素地は淡灰色で、全体に透明釉を施す。

その他、瓦質土器の鍋が黄褐色土から、亀山焼の甕が明褐色土及び黄褐色土から、須恵器系土器が明褐色土から、軒平瓦と思われる瓦片が暗褐色土から出土した。いずれも細片のため、図示できなかった。

また、鉄釘 34 点、鉄滓 1 点 (12.29 g) が明褐色土・黄褐色土から出土した。

#### ④トレンチ 3 (第 38・49・51・54・55・58 図、図版 31・36・37・39・40)

土師質土器の皿 (115~119)・杯 (120・121)・椀 (122~127)、東播系須恵器の擂鉢 (128)、備前焼の甕 (129)、青磁の碗 (130・131)、土鍤 (192)、碁石 (202・203)、棒状鉄製品 (263)、鉄製兜片 (276)、古錢 (299) が出土した。土師質土器は黄褐色土及び黒灰色土から、備前焼は黄褐色土及び明褐色土から、青磁は明褐色土から出土した。

115~119 は土師質土器の皿である。115 は体部が直線的に立ち上がり、底部切り離しは糸切りと思われる。口径 5.2 cm、器高 0.8 cm である。内面底部が高くなっている、浅く非実用的な皿である。116・117 は口径 5.8~6.0 cm、器高 1.1~1.4 cm である。底部切り離しは回転ヘラ切りと思われる。

117 は口縁部がわずかに外反する。118・119 は底部の切り離しが回転ヘラ切りである。118 は口径 6.5 cm、器高 1.35 cm、119 は口径 7.0 cm、器高 1.4 cm である。119 は口縁部がわずかに外反する。

120・121 は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。121 は口径 10.4~11.0 cm、器高 3.5 cm である。

122~127 は土師質土器の椀である。122・123 は口径 9.3~10.0 cm、器高 2.4~2.6 cm であり、器高が低い。124 は口径 9.6~9.8 cm、器高 3.3 cm、125 は底部を欠損するが、復元口径 10.7 cm で器高は高い。125 は口縁部が内湾気味で、外面底部を瘤ませていた可能性もある。126・127 は口径 8.7~9.3 cm、器高 2.95~3.0 cm で、底部が瘤んでいる。127 の内面にはススが付着している。

128 は東播系須恵器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。内面に擂り目はない。復元口径 22.8 cm である。二次焼成を受けて

いる。

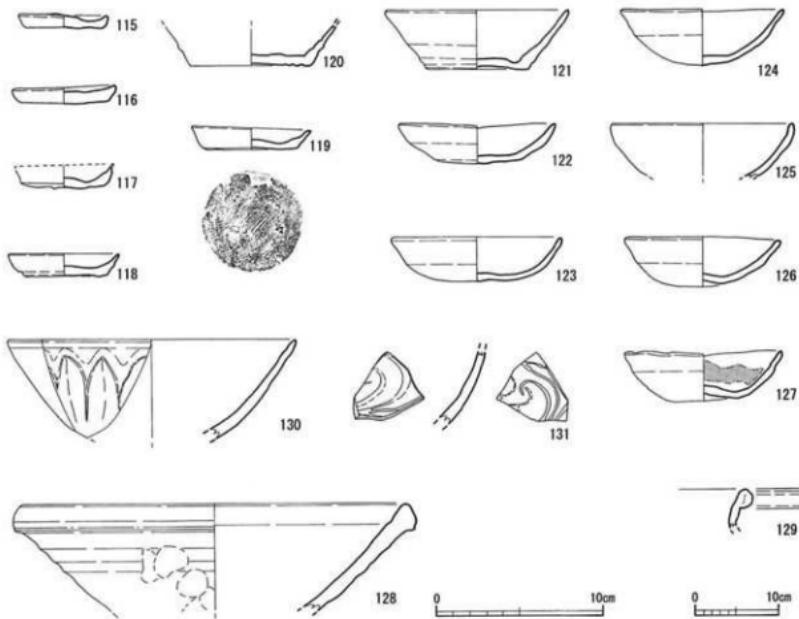
129は備前焼の甕の口縁部片である。口縁部は外反し、端部を折り曲げて玉縁を形成している。130・131は青磁の碗である。130は高台部分を欠損するが、復元口径17.2cmで、全体に淡緑色の釉がかかること。体部外面に片刃彫りによる蓮弁文を配す龍泉窯系の碗である。131は体部であるが、淡緑色の釉がかかり、釉の厚さは約0.5mmである。内外両面に文様を配し、外面はラマ式蓮弁文である。

その他、弥生土器が黒灰色土から、瓦質土器が明褐色土から、亀山焼の甕が黒灰色土及び明褐色土から、須恵器系土器が明褐色土から、常滑焼が黄褐色土から、備前焼の擂鉢が明褐色土から、平瓦片3点が明褐色土などから出土し、滑石製の石鍋加工品と思われる破片も出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品は、棒状鉄製品(263)、鉄製兜片(276)がある。黄褐色土・明褐色土を中心に鉄釘21点、用途不明鉄製品1点が出土しており、他に鉄滓2点(89.4g)が出土している。

⑤F9区(第56・59図、図版41・42)

板状鉄製品(286)、古銭(320)が出土した。



第38図 1郭トレンチ3出土土器類実測図(1:3, 129は1:6)

その他、土師質土器、瓦質土器の鍋、亀山焼の甕、備前焼の甕、磁器が表土を中心に、須恵器系土器（甕など）が表土から出土した。ピットから平瓦が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品類は表土及びブドウ畠に伴う新しい溝から出土した。鉄釘 10 点、286 の板状鉄製品 1 点、用途不明鉄製品 4 点が出土しており、他に鉄滓 3 点 (90.73 g) が出土した。

⑥ F10 区（第 54 図、図版 39）

鉄製金具（269）が出土した。

その他、土師質土器（皿など）、瓦質土器の鍋、亀山焼の甕、備前焼の甕、磁器、滑石製の石鍋の体部片が表土を中心に出土した。いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品は表土及びブドウ畠に伴う新しい溝から出土した。鉄釘 4 点、269 の金具 1 点、不明鉄製品 3 点が出土している。

⑦ F11 区（第 39・58 図、図版 31・42）

土師質土器の皿（132）、古銭（298）が出土した。古銭はピットからの出土である。

132 は表土から出土した土師質土器の皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、底部の切り離し方法は不明であるが、切り離し後ナデと思われる。全体的に丁寧な作りである。口径 5.5 cm、器高 0.95 cm である。

その他、瓦質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。また、表土から鉄釘 2 点が出土している。

⑧ F12 区（第 51・57 図、図版 37・41）

ピットから砥石（209）、表土から鉛玉（289）が出土した。

その他、土師質土器が表土を中心に出土したが、細片のため図示できなかった。

⑨ G8 区（第 39・59 図、図版 31・32・42）

土師質土器の椀（133）、瓦質土器の鍋（134）、古銭（318）が出土した。土器は 1 郡北端表土から出土した。

133 は土師質土器の椀である。底部を欠損するが、体部は内湾気味に立ち上がる。口径 9.4 cm、推定器高 3.1 cm である。

134 は瓦質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。

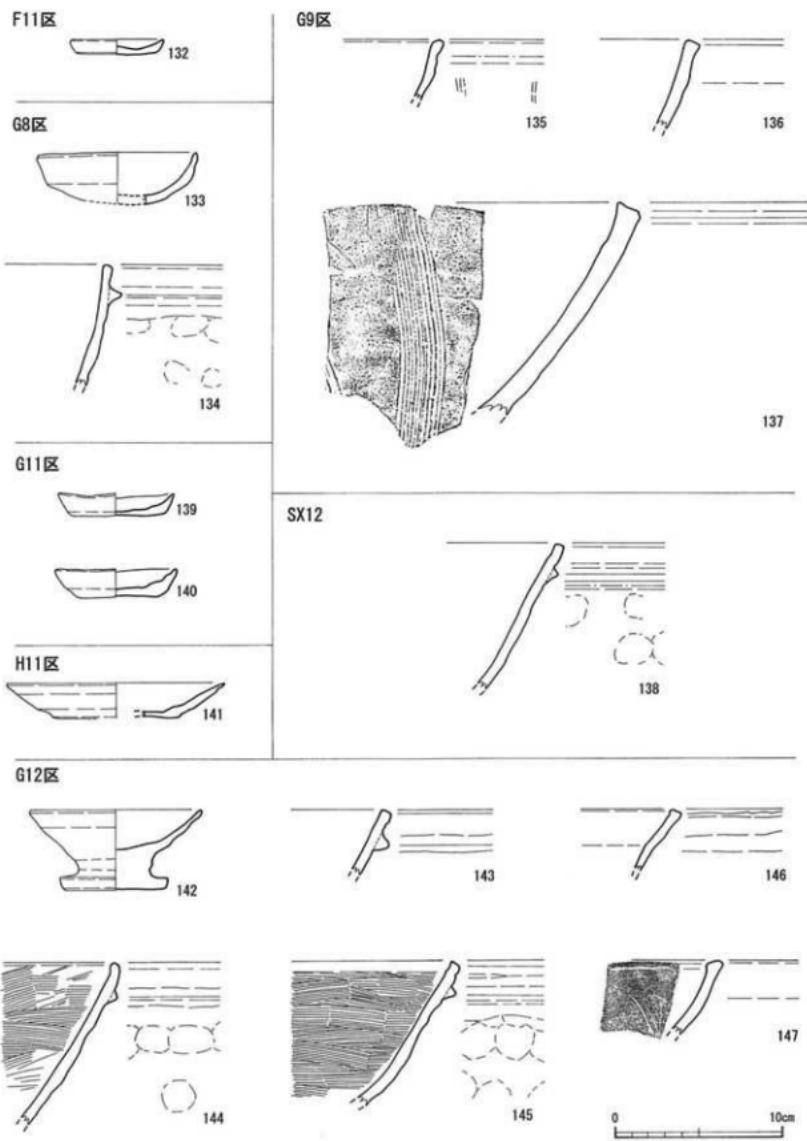
その他、表土から平瓦片 3 点、北端表土から鉄釘 2 点が出土した。

⑩ G9 区（第 39・51・58 図、図版 32・37・42）

土師質土器の鍋（135）、瓦質土器の擂鉢（136）、備前焼の擂鉢（137）、砥石（208）、古銭（316）が出土した。

135 は土師質土器の鍋である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。調整は口縁部が回転ナデ、外面体部がハケ目と思われる。

136 は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めに内湾気味に立ち上がり、口縁端部は面をなす。本



第39図 SX12・1 郭遺構外出土土器類実測図（1）（1:3）

破片には内面に壠り目がない。

137 は備前焼の擂鉢である。口縁部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや強く外傾させて面を作る。口縁端部及び内面に淡黄褐色の自然釉がかかる。内面に縱方向の壠り目があり、単位は11条である。SK11出土の57と同一個体の可能性が高い。

その他、土師質土器の皿・鍋、瓦質土器の鍋、亀山焼の甕、須恵器系土器、備前焼の甕、白磁が表土を中心に出土しているが、細片のため図示できなかった。

鉄製品が表土及びブドウ畑に伴う新しい溝から出土している。鉄釘3点、鐵板1点、不明鉄製品3点が出土している。

#### ⑪G11区（第39図、図版32）

遺物はすべて包含層からの出土である。土師質土器の皿（139・140）が出土した。139は口径6.7～6.9cm、器高1.4cmで、底部切り離しは回転糸切りである。140は口径7.2cm、器高1.7cmで、底部切り離しは回転ヘラ切りである。

その他、土師質土器の鍋、瓦質土器が出土したが、細片のため図示できなかった。また、鉄釘3点、鐵滓1点が出土した。

#### ⑫G12区（第39・49・54・55・57・59図、図版32・36・39・41・42）

轆の羽口（193）、鉄釘（261）、鐵鎌（272）、用途不明鉄製品（291）がピットから出土した。遺構外から柱状高台土師器（142）、瓦質土器の鍋（143～145）・擂鉢（147）、土師質土器の鍋（146）、轆の羽口（194）、鉄製リング（264）、鉄製金具（270）、銅製金具（290）、古錢（323・338）が出土した。古錢のうち338は包含層からの出土で、寛永通寶である。

142は柱状高台土師器である。口径10.2cm、器高4.7cmである。椀形の器形に径6.4cm、高さ約1.5cmの柱状高台がつく。椀部と柱状高台の接合部は狭まっており、柱状というよりは、椀に台を取り付けたような器形である。

143～145は瓦質土器の鍋で、外面体部にススが付着している。体部が斜めに直線的に立ち上がり、外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。143はG11区出土の破片と接合した。145は口径33.7cm程度と思われる。

146は土師質土器の鍋である。口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は平坦に近い。

147は瓦質土器の擂鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は内傾して面をなす。内面に斜め方向の粗い壠り目があるが、単位は不明である。

その他、土師質土器の皿、亀山焼の甕、須恵器系土器（甕など）、備前焼の甕、青磁、滑石製の石鍋片、銅製品片3点が出土しているが、いずれも細片のため図示できなかった。遺物は包含層からの出土が多い。滑石製の石鍋片には煤が付着している。

ピットを含め本グリッドから出土した鉄製品は、261を含め鉄釘87点、264のリング1点、270の金具1点、272の鐵鎌1点、用途不明鉄製品12点の他、鐵滓14点（332.34g）が出土した。

#### ⑬G13区（第40・55図、図版32・40）

土師質土器の椀（148）、瓦質土器の擂鉢（149）、鐵鎌（271）が出土した。

148 は土師質土器の椀である。体部は内湾しながら立ち上がる。口径 9.1 cm, 器高 2.85 cm である。

149 は瓦質土器の擂鉢である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は面をなす。復元口径は 36.0 cm である。内面に斜め方向の粗い擂り目があるが、摩滅のため単位は不明である。G14 区出土土器の破片と接合した。

その他、土師質土器の皿、瓦質土器の鍋、亀山焼の甕、須恵器系土器、備前焼の甕などが包含層から出土しているが、細片のため図示できなかった。

鉄製品は、包含層から鉄釘 8 点、271 の鉄鎌 1 点が出土しており、他に鉄滓 2 点 (32.09 g) が出土した。

⑩ H11 区 (第 40・54・57 図、図版 32・33・39・41)

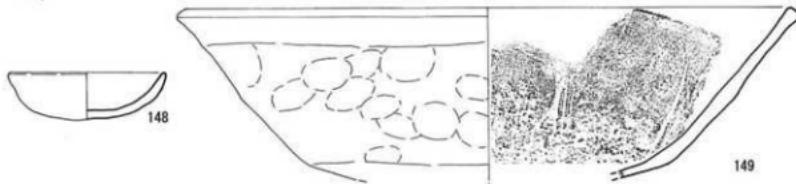
鉄釘 (262)、用途不明銅製品 (293) がピットから出土した。遺構外の包含層から土師質土器の皿 (141)、瓦質土器の擂鉢、常滑焼の甕、白磁の四耳壺が出土した。

141 は土師質土器の皿である。体部は直線的に立ち上がり、底部切り離しは回転ヘラ切りである。復元口径 12.9 cm、器高 2.05 cm で、口径の割に器高が低いタイプである。

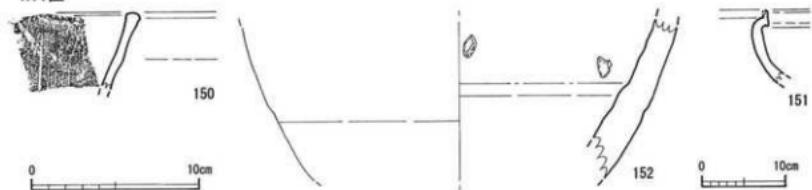
150 は瓦質土器の擂鉢である。体部は斜めにまっすぐ立ち上がり、口縁部は面をなす。内面に粗い擂り目があるが、単位は不明である。

151 は常滑焼の甕の口縁部片である。頸部は内傾し、口縁部は短く外反する。口縁端部を上下に拡張している。

G13 区



H11区



第40図 1 郭遺構外出土土器類実測図 (2) (1:3, 151は1:6)

152 は白磁の四耳壺の体部片である。外面に透明釉、内面に淡青灰色の釉がかかる。内面に粘土が付着している。器壁が厚く、1.4~2.0 cmである。

その他、亀山焼の甕、瓦質土器の鍋、須恵器系土器、備前焼の甕・擂鉢、青白磁が出土したが、細片のため図示できなかった。

ピットを含め本グリッドから出土した鉄製品は、262 を含め鉄釘 39 点、293 を含め用途不明鉄製品 5 点の他、鉄滓 19 点 (152.94 g) が出土した。

#### ⑯ H12 区 (第 50 図、図版 36)

包含層から丸瓦 (197)、土師質土器、鉄釘、鉄滓が出土した。ピットを含め、瓦質土器の鍋、備前焼の甕、鉄釘 2 点、鉄滓 2 点 (5.83 g) が出土している。

#### ⑯ H13 区 (第 41 図、図版 33・34)

盛土から弥生土器の甕 (153~159)・高杯 (160)・鉢 (161・162)、土師器の椀 (163) が出土した。

153~159 は弥生土器の甕である。153~157 は複合口縁で、口縁端部の立ち上がりは 153 が外傾し、155 が直立し、それ以外が内傾する。外面口縁部に凹線を有している。157 は胸部最大径がやや上位にあり、胸部はかなり張っている。158・159 は底部である。平底で、159 の外面はヘラミガキである。

160 は弥生土器の高杯の脚部である。脚端部を上下に拡張し、その外面に 2 条の浅い凹線を有する。摩滅のため調整は不明である。脚部にいくつかの円孔が見られる。

161・162 は弥生土器の鉢である。胸部が「く」の字に屈曲し、161 は口縁部を大きく外反させ、162 は口縁部を若干拡張し、ともに口縁上端部に浅い凹線を有する。外面胸部はヘラミガキである。

163 は土師器の椀である。高台がつく大型の椀で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部の器壁が 1.4~2.0 cm と厚く、口縁部に向かって次第に薄くなる。高台は貼り付けではなく、粘土から挽きだしたものと思われる。推定口径 23.1 cm、復元高台径 13.2 cm、推定器高 7.05 cm である。S X13 出土の 49 に似るが、これよりもさらに大型である。

その他、土師質土器 (皿など)、瓦質土器の擂鉢、亀山焼の甕、須恵器系土器、備前焼の甕が表土・盛土から出土しているが、細片のため図示できなかった。

鉄製品類も盛土から出土しており、鉄釘 2 点、鉄滓 1 点 (32.18 g) がある。

#### ⑰ I 10・11 区 (第 42 図、図版 34)

土師器の壺 (164)、土師質土器の皿 (165)・椀 (166・167)、東播系須恵器の擂鉢、亀山焼の甕が出土した。土師質土器は盛土からの出土が多く、亀山焼は表土及び盛土からの出土である。

164 は古墳時代の土師器の壺の口縁部である。内面は緩やかに外反するが、外面は「く」字状に外反する。

165 は土師質土器の皿である。体部はやや外反気味に立ち上がり、底部切り離しは回転ヘラ切りである。口径 6.2 cm、器高 1.3 cm である。

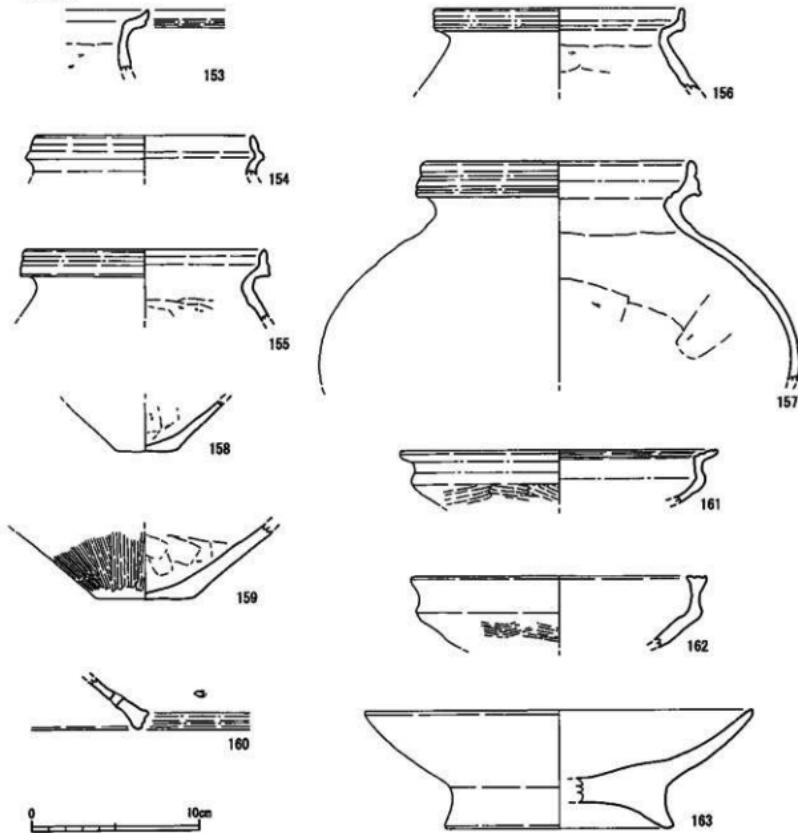
166・167は土師質土器の椀である。体部は内湾気味に立ち上がる。166は口径9.8cm, 器高3.15cm, 167は復元口径10.5cm, 器高2.8cmである。

168・169は東播系須恵器の擂鉢である。ともに体部は直線的に立ち上がり、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。擂り目はない。

170は龜山焼の甕の胴部である。外面に格子目タタキを施し、格子の単位は3mm×4mmである。

その他、瓦質土器の擂鉢、須恵器系土器が盛土から、備前焼の甕・瓦質土器の鍋が盛土及び第

H13区



第41図 1 郭邊構外出土土器類実測図 (3) (1 : 3)

2層から、平瓦片2点が第2層から出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

鉄製品は、盛土から鉄釘3点、用途不明鉄製品1点が出土した他に、鉄滓3点(29.40g)が出土している。

⑩ I12区(第42・59図、図版35・42)

盛土から土師質土器の鍋(171)が出土した。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反する。口縁端部は平坦に納め、内面頸部に稜をもつ。

その他、盛土から土師質土器の皿が出土したが、細片のため図示できなかった。

また、表土から古銭(337)、鉄釘1点が出土した。337は寛永通寶である。

⑪ 1郭第4次調査区(第42図、図版35)

土師質土器の碗(172)、東播系須恵器の擂鉢(173)、白磁の皿(174)が出土した。

172は土師質土器の碗である。体部は内湾気味に立ち上がる。復元口径9.6cmである。

173は東播系須恵器の擂鉢である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。擂り目はない。

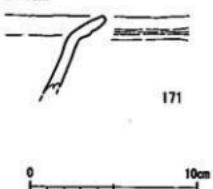
174は白磁の皿である。底部切り離しは回転ヘラ切りである。口縁端部と外面底部を除き、透明釉がかかる。復元口径8.8cm、器高2.8cmである。

⑫ その他のグリッド

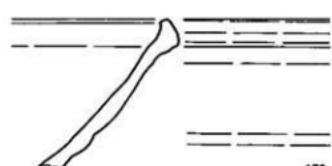
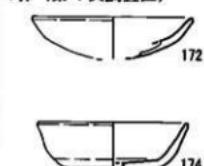
I10・11区



I12区



1郭(第4次調査区)



第42図 1郭遺構外出土器類実測図(4) (1:3, 170は1:6)

G10 区から土師質土器、不明鉄製品 1 点が出土した。

G14 区包含層・盛土から土師質土器（皿など）、瓦質土器の鍋・擂鉢、須恵器系土器の甕、備前焼の甕、鉄釘 1 点、鉄滓 11 点（489.60 g）が出土した。

H9 区の包含層から土師質土器の皿、備前焼の甕・擂鉢が出土した。

H10 区の包含層から土師質土器、瓦質土器の鍋、須恵器系土器、備前焼の甕、鉄釘 3 点が出土した。

I9 区の盛土から土師質土器（皿など）、備前焼の甕が出土した。

以上の遺物は、いずれも細片のため図示できなかった。

## 2 1 郭東側切岸

1 郭東側の切岸で平坦面 2、通路 1、土坑 1 を検出した。

### （1）平坦面

① 平坦面 10

検出遺構（第 43 図）

1 郭東側切岸の中央部付近に位置する平坦面である。切岸が南北方向から北東－南西方向に向きを変えるコーナー部分にあたる。1 郭東端との標高差は 1.5m である。平坦面は長さ 7.3m、幅 1.7m である。

出土遺物

遺物は出土していない。

② 平坦面 11

検出遺構（第 7・43 図）

1 郭東側切岸の南部に位置する平坦面である。1 郭東端との標高差は約 6 m である。北東－南西方向の細長い平坦面で、南西部に向かって次第に広くなる。平坦面は長さ 12.0m、幅 2.0m である。

出土遺物

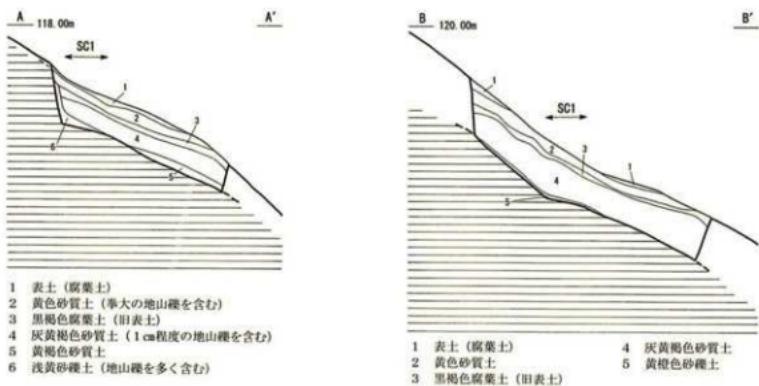
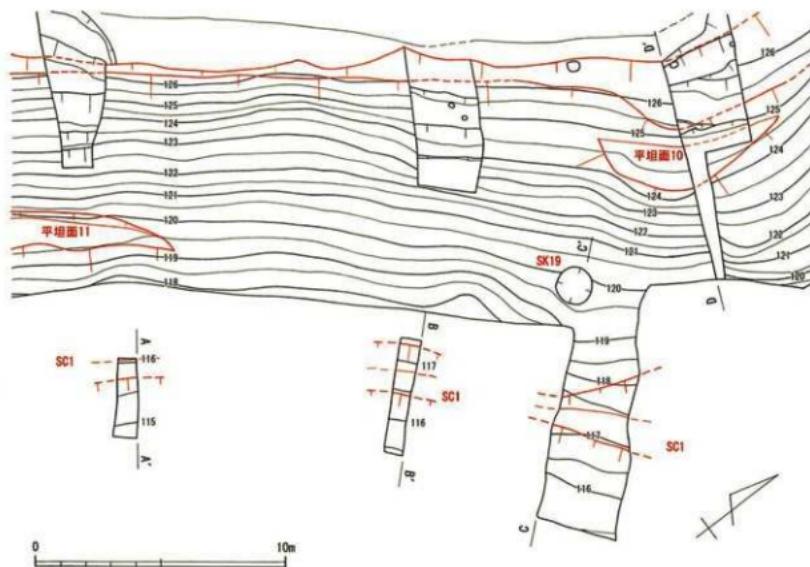
遺物は出土していない。

### （2）通路

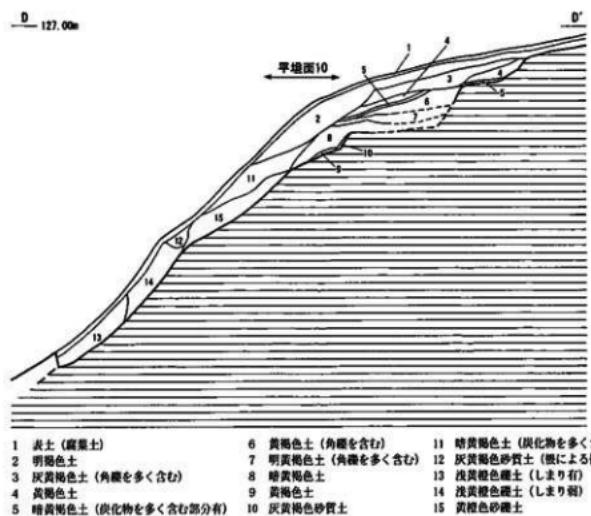
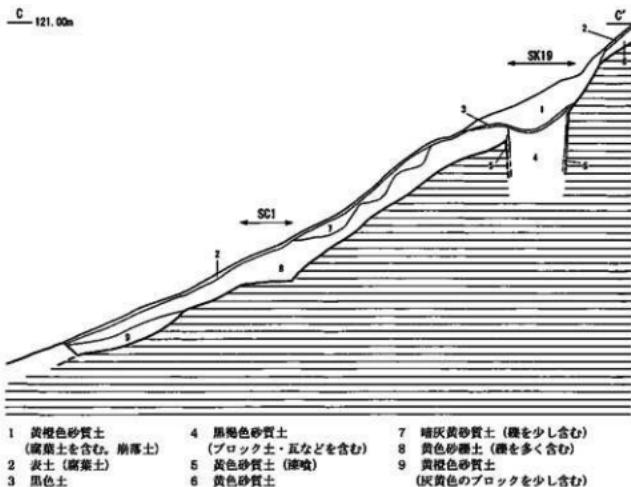
① S C 1

検出遺構（第 43 図）

1 郭東側切岸のトレンチ調査によって確認した通路である。平坦面 10・11 よりも低い場所に位置し、1 郭東端との標高差は約 10m である。等高線に沿って北東－南西方向に延び、検出した部分は、長さ 20.6m、幅 0.7～1.3m である。南側は 1 郭と南東尾根を結ぶ通路、あるいは南尾根まで続いていた可能性がある。北側は北東尾根の平坦面 1 まで続いていたものと思われる。



第43図 1 郭東側切岸実測図 (1 : 200), S C 1 土層断面図 (1 : 100)



0 5m

第44図 郭東側切岸土層断面図 (1 : 100)

## 出土遺物

S C1 付近から土師質土器（皿など），瓦質土器の鍋・擂鉢，亀山焼の甕，備前焼の甕が出土したが，いずれも細片のため図示できなかった。

### （3）土坑

#### ①SK19

##### 検出遺構（第43図）

東側切岸が角度を変えるコーナー付近に位置する土坑である。平面形は円形で直径 1.4m である。壁全体に黄色砂質土（漆喰）を塗っており，埋土は黄褐色砂質土である。近現代の肥溜と判断した。

##### 出土遺物

近現代と思われる瓦片が出土した。

### （4）1郭東側切岸出土遺物（第45・50・51・58図，図版35～37・42）

#### ①H14区

青磁の碗（175），白磁の皿（176）が出土した。

175 は青磁の碗である。直線的に立ち上がる外面に片刃彫りによる蓮弁を配す龍泉窯系の碗である。全体に暗緑色の釉を施す。

176 は白磁の皿？である。体部は内湾しながら立ち上がり，全面に透明釉を施す。小片のため皿と断定できない。その他，土師質土器（皿など），瓦質土器（鍋など），備前焼，鉄釘5点が出土したが，細片のため図示できなかった。

#### ②J9区

盛土から土師質土器の椀（177），滑石製石鍋（204・205），古錢（304）が出土した。

177 は土師質土器の椀で，本城跡唯一の高台貼付けの椀である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。外面底部に断面台形の高台を貼付ける。復元口径 12.0 cm，高台径 5.0 cm，器高 3.25 cm である。

その他，土師質土器の皿，瓦質土器の鍋・火鉢，亀山焼の甕，備前焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

204 は滑石製の石鍋の口縁部，205 は底部である。

205 と同一個体の体部も出土したが，細片のため図示できなかった。

また，用途不明鉄製品1点が出土している。

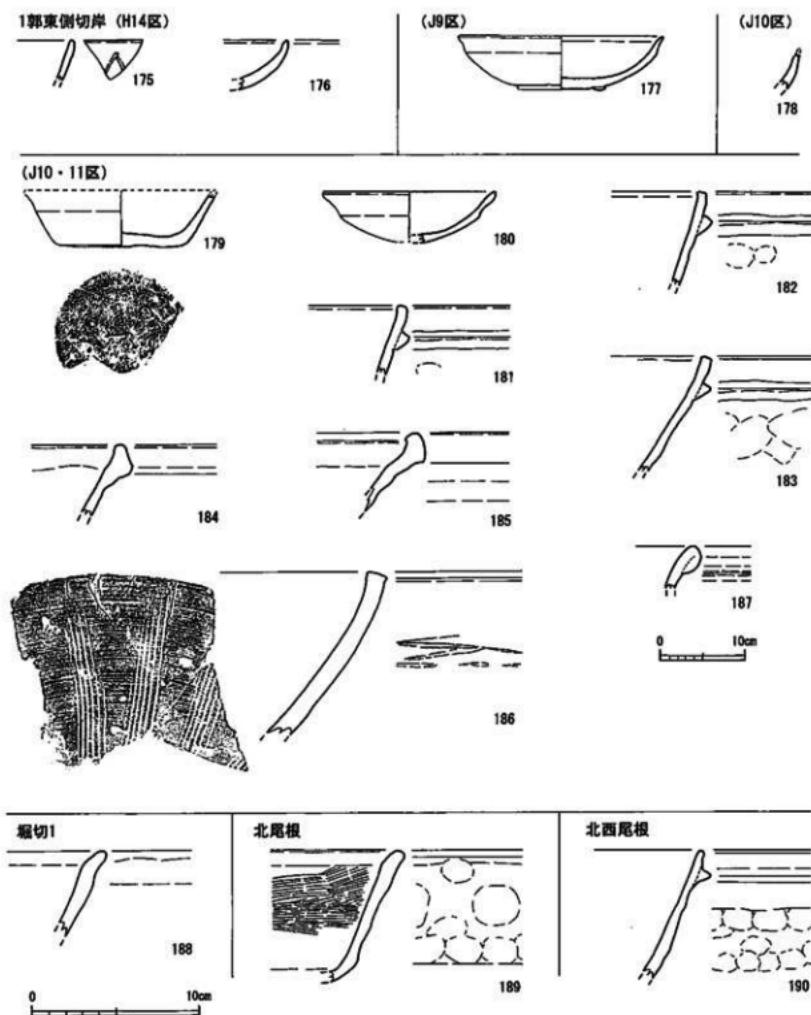
#### ③J10区

天目茶碗（178）が出土した。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部でわずかに外反する。素地は淡茶灰色で，全体に黒褐色の釉を施す。胎土から中国産と考えられる。

その他，亀山焼の甕が出土したが，細片のため図示できなかった。

④ J10・11区

土師質土器の杯(179)・椀(180), 瓦質土器の鍋(181~183), 東播系須恵器の擂鉢(184・185), 備前焼の擂鉢(186)・壺(187), 丸瓦(198), 古銭(302)が出土した。



第45図 1 郡東側切岸・掘切1他出土土器類実測図 (1:3, 187は1:6)

179 は土師質土器の杯である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を欠損するが口縁部はわずかに外反するようである。底部は回転ヘラ切りで、板目痕が残る。復元底径 7.4 cm、器高は 3.3 cm 程度と推定される。

180 は土師質土器の碗である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。復元口径 10.3 cm、器高 3.05 cm である。

181～183 は瓦質土器の鉢である。いずれも体部は斜めに直線的に立ち上がり、外面に断面三角形の突帯を貼付ける。口縁端部は平坦に近い。

184・185 は東播系須恵器の擂鉢である。いずれも体部は斜め上方に立ち上がり、短く直立し端部を尖り気味に納める玉縁状の口縁部がつく。擂り目はない。

186 は備前焼の擂鉢である。口縁部から体部にかけての破片である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや強く外傾させて面を作る。外面体部にヘラ状工具による傷が残る。内面に縦方向の擂り目があり、単位は 6 条である。

187 は備前焼の甕である。口縁部は外反し、端部を折り曲げて丸い玉縁を形成している。玉縁は比較的幅広である。

その他、土師質土器の皿、瓦質土器の擂鉢、須恵器系土器、平瓦片が出土したが、細片のため図示できなかった。

### 3 北東尾根（第 46 図、図版 17）

1 郭から北東方向に延びる尾根で、平坦面 3、その他の遺構 1 を検出した。いずれの平坦面も岩盤を削り込んで階段状に造っており、緩やかな傾斜をもつている。北東尾根は調査区外にさらに数 10m 延びており、小規模な平坦面がいくつか存在する可能性がある。

#### （1）平坦面

##### ① 平坦面 1

###### 検出遺構（第 46 図、図版 18-a）

北東尾根上段の平坦面で、1 郭北東端との標高差は 7.5m である。長さは約 17m、幅 8.0m である。南西の高所側に 0.2～0.5m の段差があり 2 段になっている。南端は S C 1 につながり、西端は S C 2 につながるものと思われる。

###### 出土遺物

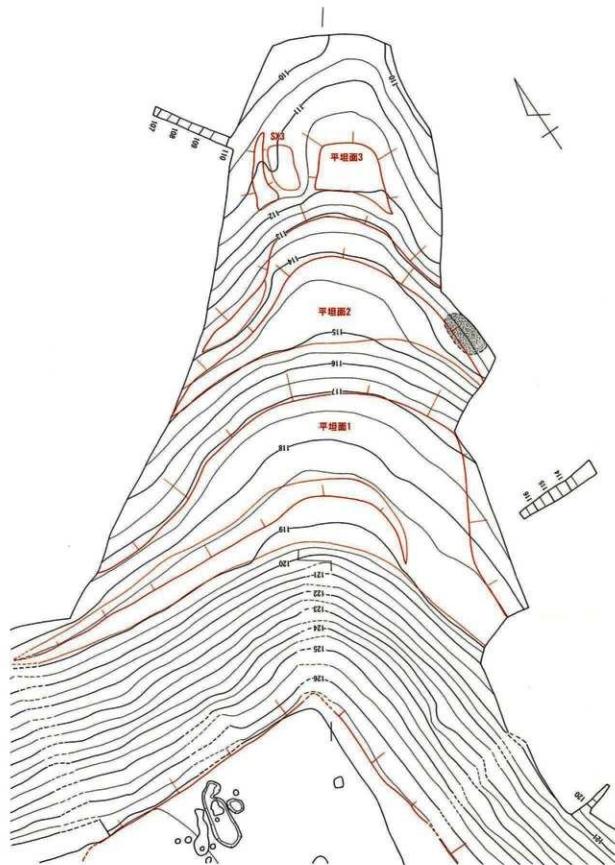
遺物は出土していない。

##### ② 平坦面 2

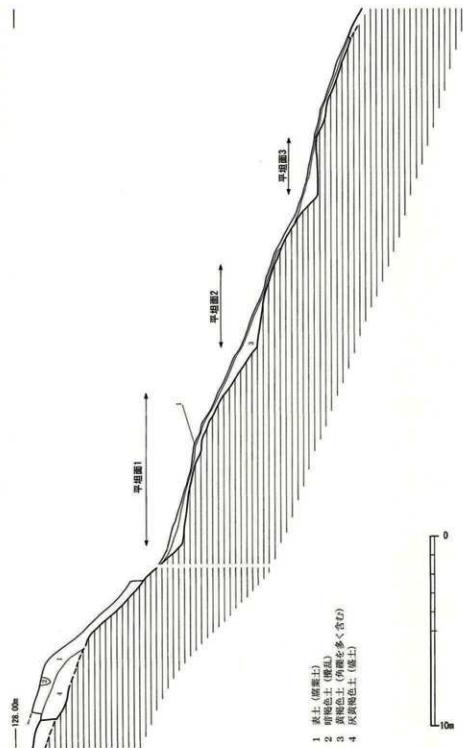
###### 検出遺構（第 46 図、図版 18-b）

北東尾根中段の平坦面で、1 郭北東端との標高差は 11.5m、平坦面 1 との標高差は 2 m である。長さは 16.8m、幅 4.5m である。

###### 出土遺物



第46図 北東尾根造構配図 (1:200) (アミ目は漸集中範囲)



遺物は出土していない。

### ③平坦面 3

#### 検出遺構（第46図、18-c）

北東尾根下段の小規模な平坦面で、西側にSX3がある。1郭北東端との標高差は14.5m、平坦面2との標高差は2mである。長さは4.3m、幅2.5mである。

#### 出土遺物

付近から鉄釘1点が出土したが、細片のため図示できなかった。

### （2）他の遺構

#### ①SX3

#### 検出遺構（第46図）

最下段の平坦面3の西側にある遺構である。斜面を削って平坦面3を造り出した後、平坦面の西側を尾根方向に向かって、長さ3.6m、上端幅2.0~3.2m、下端幅1.1~1.4m、深さ0.6mほど掘り込んでいる。尾根方向に向かって掘り込んでいるため、堀切とは呼べず、短いながらも堅堀に近い遺構である。西側に上端の長さ4.1m、幅0.2~1.3mの平坦面があり、土壘状になっている。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### （3）北東尾根出土遺物

I8区表土から土師質土器（皿など）、瓦質土器の鍋、須恵器系土器、備前焼の甕、滑石製の石鍋体部片1点が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。滑石製の石鍋には煤が付着している。また、鉄釘が5点、鉄滓1点（14.30g）が出土している。

北東尾根トレンチAの黄褐色土から土師質土器（皿など）、瓦質土器の擂鉢、備前焼の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。

## 4 北尾根・北西尾根（第47・48図、図版19-a・b、22-a）

1郭から北及び北西に延びる尾根である。両者を明確に区別することができないので、まとめて記載する。ここでは堀切2、平坦面6、通路1、溝状遺構1、その他の遺構1を検出した。堀切・平坦面などはいずれも岩盤を削り込んで造っている。平坦面は緩やかな傾斜をもっている。

### （1）堀切・土橋

#### ①堀切1

#### 検出遺構（第47・48図、図版20-c、図版21）

1郭の北西に位置する堀切である。1郭と小山状の平坦面4の間に位置し、北東から南西方向

に掘り込んでいる。北尾根との間を画する施設であるが、完全に掘り切って遮断するのではなく、土橋を形成しており、北西尾根との間を結ぶ通路としている。堀切の深さは1~3.5m程度で、東側の長さ12.5m、幅5.7~7.5m、西側は調査区外に続いており、現状で長さ5m以上、幅5~8m程度である。土橋の長さ7.0m、幅は上端で0.6m、下端で4.7mである。

#### 出土遺物（第45図、図版36）

遺物は西側表土から出土した。188は瓦質土器の鉢である。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は短く、緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。

その他、土師質土器（皿など）、亀山焼の甕、備前焼の甕が出土したが、細片のため図示できなかった。また、鉄釘が3点出土している。

#### ②堀切2

##### 検出遺構（第47・48図、図版20-a・b）

北西尾根の平坦面6の北側に位置する堀切である。平坦面7の南半部を東西方向に、長さ4.2~6.9m、幅2.8~3.0m、深さ0.6mの規模で掘り込んでいる。西側は完全に掘り切っていないが、その地形から土橋とは考えにくいので堀切とした。堀切1に比べると、防御機能は弱いものと思われる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

## （2）平坦面

#### ①平坦面4

##### 検出遺構（第47・48図、図版20-c）

1郭の北側にある小山状の高まりである。最高所の標高は124.2mで、1郭北端との標高差は4mである。規模は7.4m×6.5mで、1郭との間には堀切1及び土橋がある。なお、東側から堀切にかけて、ピットが並んでいるが、これはブドウ畑の支柱に伴う新しい穴である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ②平坦面5

##### 検出遺構（第47・48図、図版19-c）

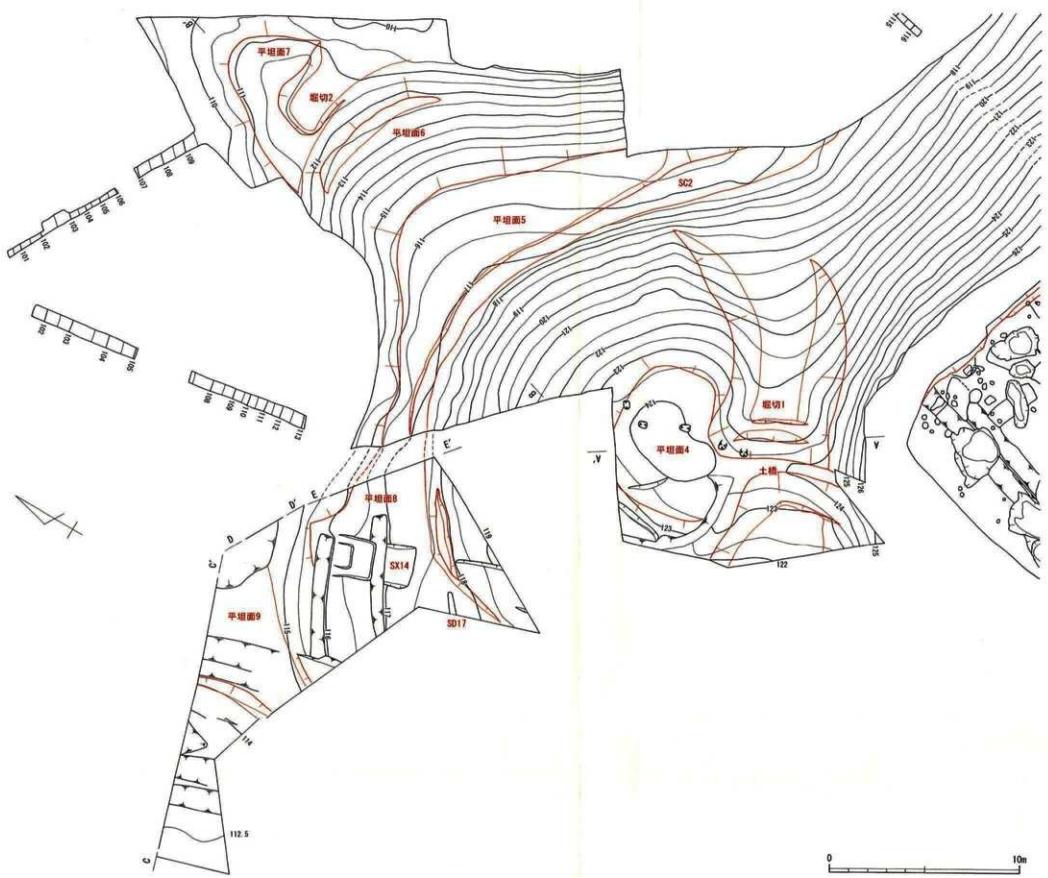
北尾根の最上段に位置する平坦面である。1郭北端との標高差は11mである。南の高所側には北尾根と北西尾根・北東尾根を結ぶ通路SC2が隣接する。平坦面の規模は長さ18.2m、幅4.9mである。

#### 出土遺物

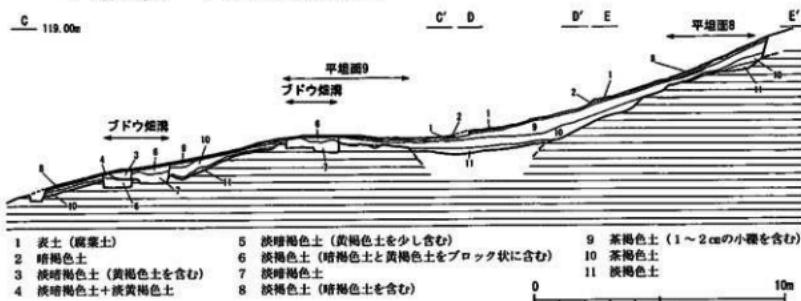
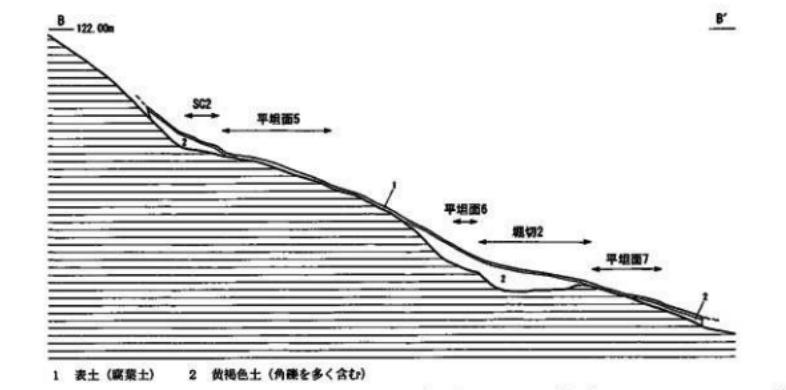
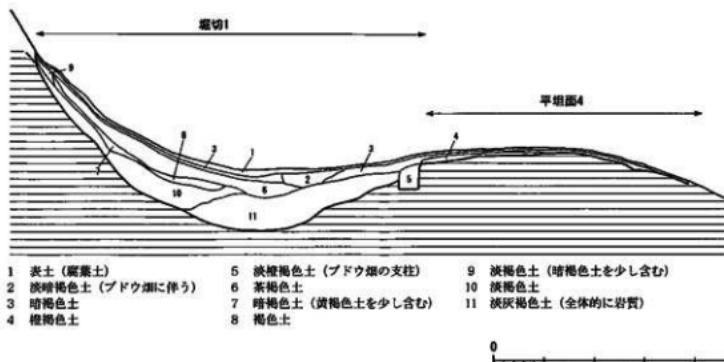
遺物は出土していない。

#### ③平坦面6

##### 検出遺構（第47・48図）



A - 128.00m A'



第46図 堀切1・平坦面4 土層断面図 (1:100), 北尾根・北西尾根土層断面図 (1:200)

北尾根の平坦面 5 と 7 の間にある細長い平坦面である。1 郭との標高差 15.5m, 平坦面 5 との標高差 3m である。平坦面の規模は長さ 7.7m, 幅 1.0m である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ④平坦面 7

##### 検出遺構（第 47・48 図、図版 20-b）

北尾根の下段にある平坦面である。1 郭との標高差 16.5m, 平坦面 6 との標高差 1m である。平坦面造成後に堀切 2 が造られている。平坦面の規模は長さ 9.2m, 幅 6.3m である。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑤平坦面 8

##### 検出遺構（第 47・48 図）

北西尾根の上段にある平坦面である。1 郭北端との標高差 10m, 平坦面 4 との標高差 5m である。南西側は調査区外となるため調査していないが、平坦面の規模は、現状で長さ 9.7m, 幅 6.2m である。平坦面の中央に S X14 があり、東側には北西尾根と北尾根及び北東尾根を結ぶ通路 S C 2 がある。南東の高所側に長さ 4.7m, 幅 0.4m の小さな平坦面がある。また、中央から北側にかけて、ブドウ畑に伴う東西方向の溝が 2 条ある。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### ⑥平坦面 9

##### 検出遺構（第 47・48 図）

北西尾根の上段にある平坦面である。1 郭北端との標高差 13m, 平坦面 8 との標高差 1m である。南西側は調査区外に続いている。また、北東側には深い落込みが見られる。中央から西側にかけて、ブドウ畑に伴う南北方向の溝が 2 条ある。本平坦面の規模は、現状で長さ 6.9m, 幅 6.9m である。南西側に向かって次第に幅が狭くなる。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

### （3）通路

#### ①S C 2

##### 検出遺構（第 47・48 図）

北尾根平坦面 5 の南の高所側に隣接する通路である。1 郭北端との標高差は 11m である。北西尾根・北尾根・北東尾根という 3 つの尾根を結ぶ役割をもつと思われる。平坦面 5 との間にはわずかな段差がある。検出した部分の長さ約 27m, 幅 0.7~1.9m で、東側が広くなっている。

#### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### (4) 溝状造構

①SD17

##### 検出遺構（第47図）

北西尾根の平坦面8の南部に位置する溝状造構である。東西方向に延び、西側は調査区外に続いている。現状で長さ1.25m、幅0.3m、深さ0.15mである。

##### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### (5) その他の遺構

①SX14

##### 検出遺構（第47図）

北西尾根の平坦面8の中央部に位置する方形の遺構である。1郭で検出したSX4～10と似ており、ブドウ畑に伴う新しい溝と直交するため、近現代の遺構の可能性がある。主軸は南東～北西方向で、北西部には方形の窪みが見られる。中央部はブドウ畑に伴う新しい溝によって切られている。現状で、長さ4.1m、幅2.2m、深さ0.2mである。

##### 出土遺物

遺物は出土していない。

#### (6) 北尾根・北西尾根出土遺物（第45図、図版36）

北尾根から瓦質土器の盤（189）が出土した。体部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く納めている。外面体部に指頭圧痕が残り、内面体部は横方向のハケ目である。

北尾根トレンチBの上段から土師質土器が出土した。北尾根E6区から土師質土器の皿、F5区から備前焼の甕、G8区から土師質土器の皿、須恵器系土器、備前焼の甕が出土している。H8区から備前焼の甕が出土している。いずれも細片のため図示できなかった。

北西尾根から瓦質土器の鍋（190）が出土した。体部は斜めに直線的に立ち上がり、外面に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁端部は平坦に近い。その他、土師質土器（皿など）が表土から出土したが、細片のため図示できなかった。

北西尾根D6区表土から備前焼の甕、E7区表土から瓦質土器（鍋など）、鉄釘1点が出土した。いずれも細片のため図示できなかった。

## 5 土器以外の遺物

### (1) 土製品（第49図、図版36）

191・192は土錐である。191はSB2-P3, 192はトレンチ3から出土した。ともに管状土錐で、中央に径0.1cmの細い孔があり、紡錘形をしている。

193・194は轆の羽口である。193はG12区ピットから出土した小型のものである。熱を受け、表面が黒変している。194はG12区包含層から出土した。熱を受け、内面が赤変している。

### (2) 瓦 (第50図、図版36)

195は軒丸瓦である。SK39から出土した。瓦当面の文様は巴文である。内面の調整は不明である。

196～198は丸瓦である。196はSK30, 197はH12区, 198は1区東側切岸であるJ10・11区から出土した。いずれも凹面に布目痕がある。凸面の調整は196が格子目タタキであるが、197・198は不明である。198には玉縁部分が残る。

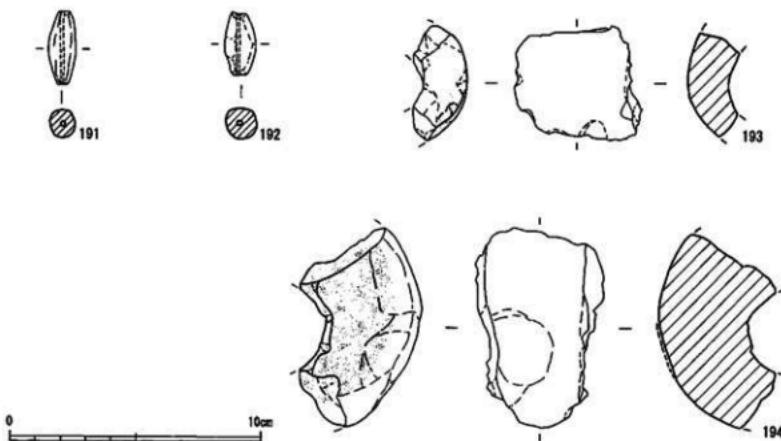
### (3) 石製品 (第51図、図版37)

199はサイコロである。トレンチ1から出土した。一边1.5cmで、「1の目」の面は大部分欠損しているが、他の面は一部欠けた部分もあるが、目を読み取ることができる。

200は用途不明石製品である。トレンチ1から出土した。球状の石の一部を平らにし、径0.9cm、深さ0.4cmの円形の穴を穿ったものである。

201～203は黒色の墓石と思われる。201はSD12, 202・203はトレンチ3から出土した。いずれも黒石で、全体を丁寧に磨き、形を丸くし、両面に平らにしている。

204・205は滑石製の石鍋である。ともにJ9区から出土した。304は口縁部で、口径35cm前後と推定される。外面全体にススが付着している。再加工が行われ、その時に使用された鋸の刃跡



第49図 1 郷周辺出土土製品実測図 (1:2)

と思われる痕跡が残る。205は底部である。底径28cm前後と推定される。一部残る外面体部にススが付着している。外面底部は平滑でなく、ススは付着していない。

206は滑石製の石鍋の加工品である。SK39から出土した。石鍋の体部を再加工したものと思われ、底径が11.5cmと推定される小型のものである。

207は温石である。SK9から出土した。滑石製の石鍋の体部を再加工したものと思われる。中央に径0.9cmと推定される孔が穿たれている。

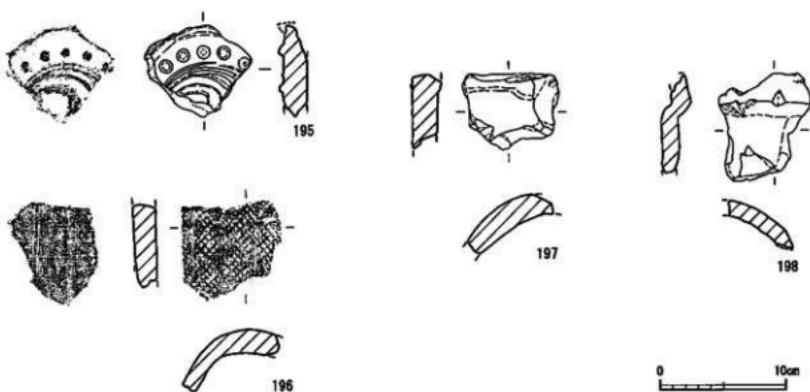
208・209は砥石である。208はG9区、209はF12区ピットから出土した。208は両端部は未使用であるが、それ以外の4面を使用している。3条の溝をもつ面があり、先端が尖ったものを磨いたものと思われる。209の断面は三角形に近く、3面を使用している。

#### (4) 鉄製品 (第52~56図、図版37~41)

210~262は鉄釘である。210~212はSX1、213~229はSX2、230~235はSX11、236はSX13、237はSK5、238はSK30、239はSK33、240~242はSK35、243~248はSK36、249はSK37、250はSK38、251~255はSK39、256~258はSK40、259・260はSK41、261はG12区ピット、262はH11区ピットから出土した。頭部が「T」字状、「L」字状になったものがあり、断面はいずれも長方形または方形で、厚さ0.5~0.8cmのものが多い。先端部が欠損しているものが多く、完形のものは少ないが、長さは4~6cmのものが多い。中には8cmを超える長いものもある。

263は棒状鉄製品で、トレンチ3から出土した。幅が1.25cmと広いのに対し、厚さは頭部が0.5cm、それ以外が0.3cmと薄いため、釘ではないと思われる。

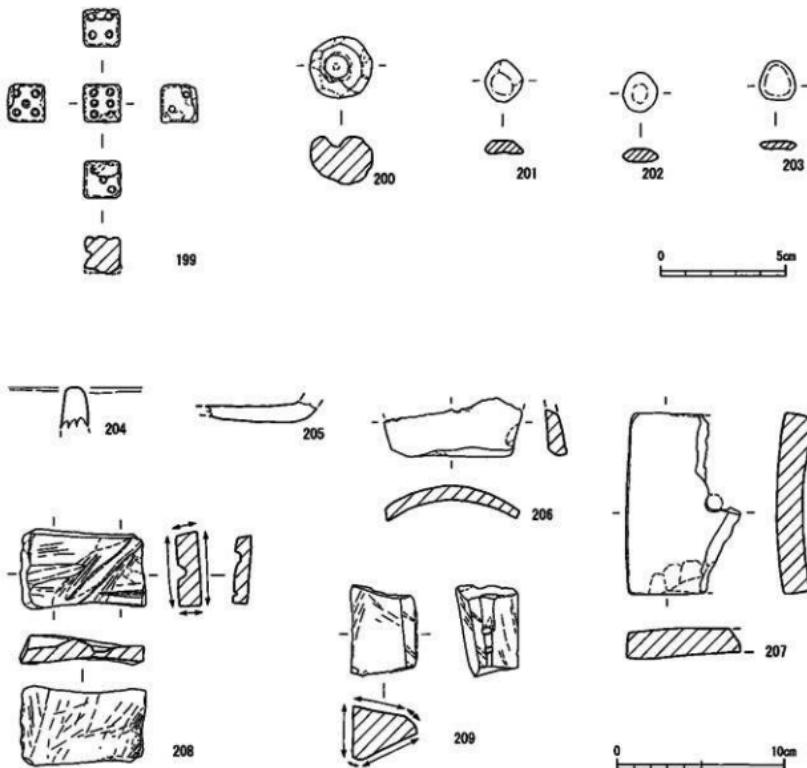
264は鉄製リングである。G12区から出土した。厚さは0.35~0.8cmと一定ではなく、また高さも一定ではない。全体的に端部付近が薄く、また低くなっている。両端部は密着せずにわずか



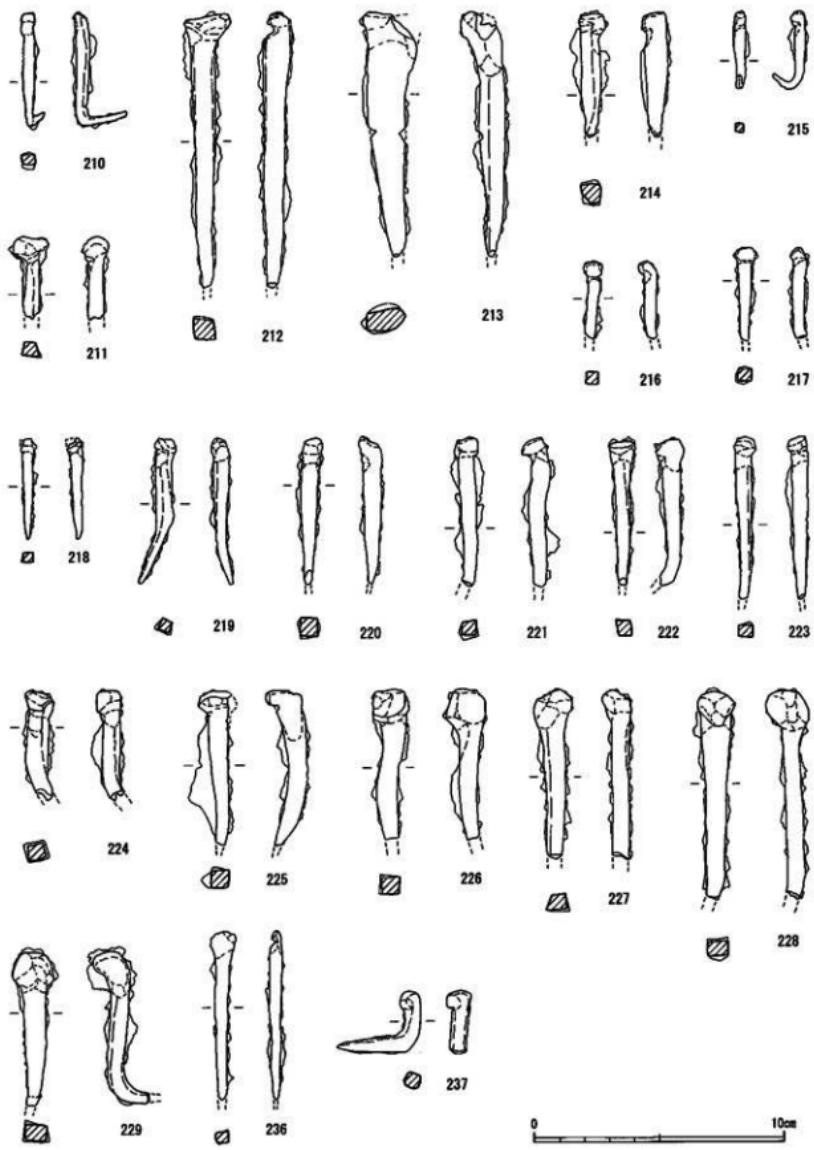
第50図 1 郡周辺出土瓦実測図 (1:4)

な隙間があり、「C」字状をなしている。

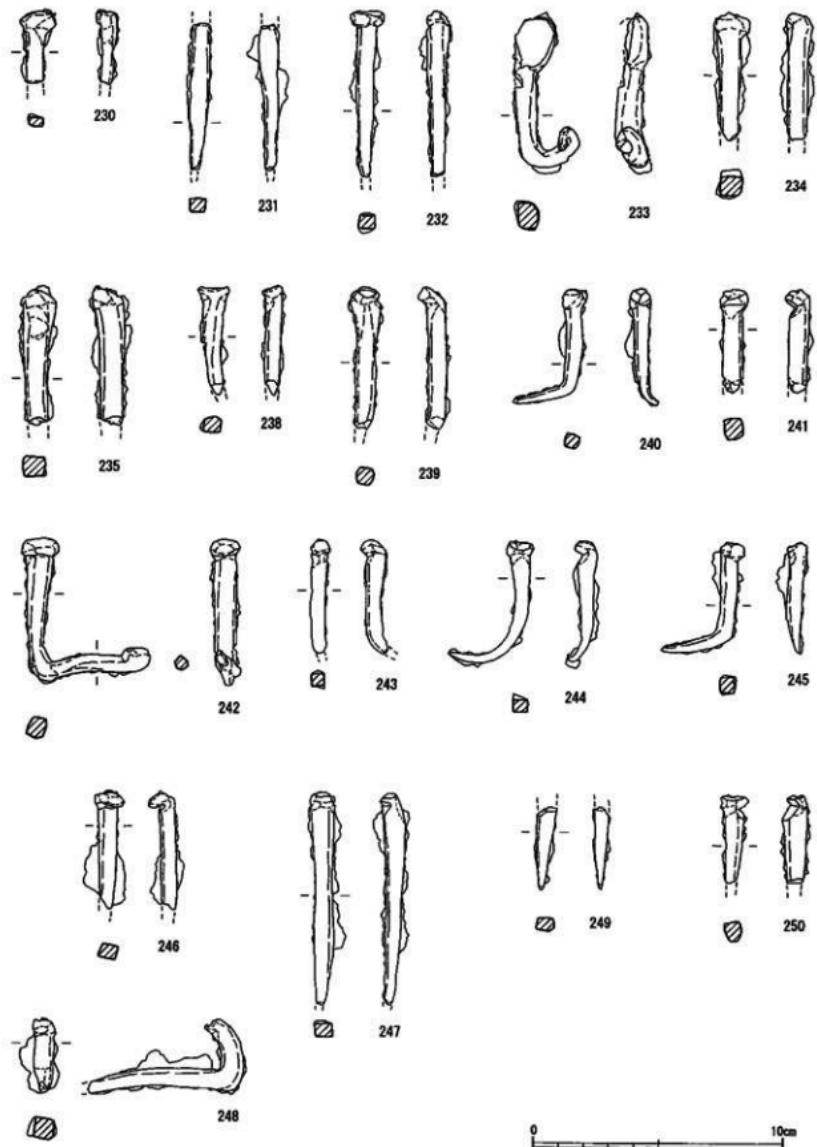
265～268・270は鉄製金具である。265はF10区、266・268・270はSK36、267はG12区から出土した。265は一方の側面中央付近がくびれており、下面両端部中央付近にピン状のものがつく飾り金具と考えられる。266は方形で、下面端部が縁状に厚くなっている。中央端部付近にある長径1.55cm×短径1.3cmの鉢で留めていたものと思われる。267は端部を直角に近い形に曲げている。もう一方の端部を欠損するが、「コ」字状であった可能性もある。下面に2つのピン状の突起がついている。268は菱形で、中央に径1.5cmの鉢がある。飾り金具と思われる。270は細長い金具で、湾曲している。先端は細くなり、尖っている。断面は平坦ではなく、中央が高くなつて稜線をもつ。内面端部と中央部につく2つのピン状のもので、何かに固定していたものと思われる。



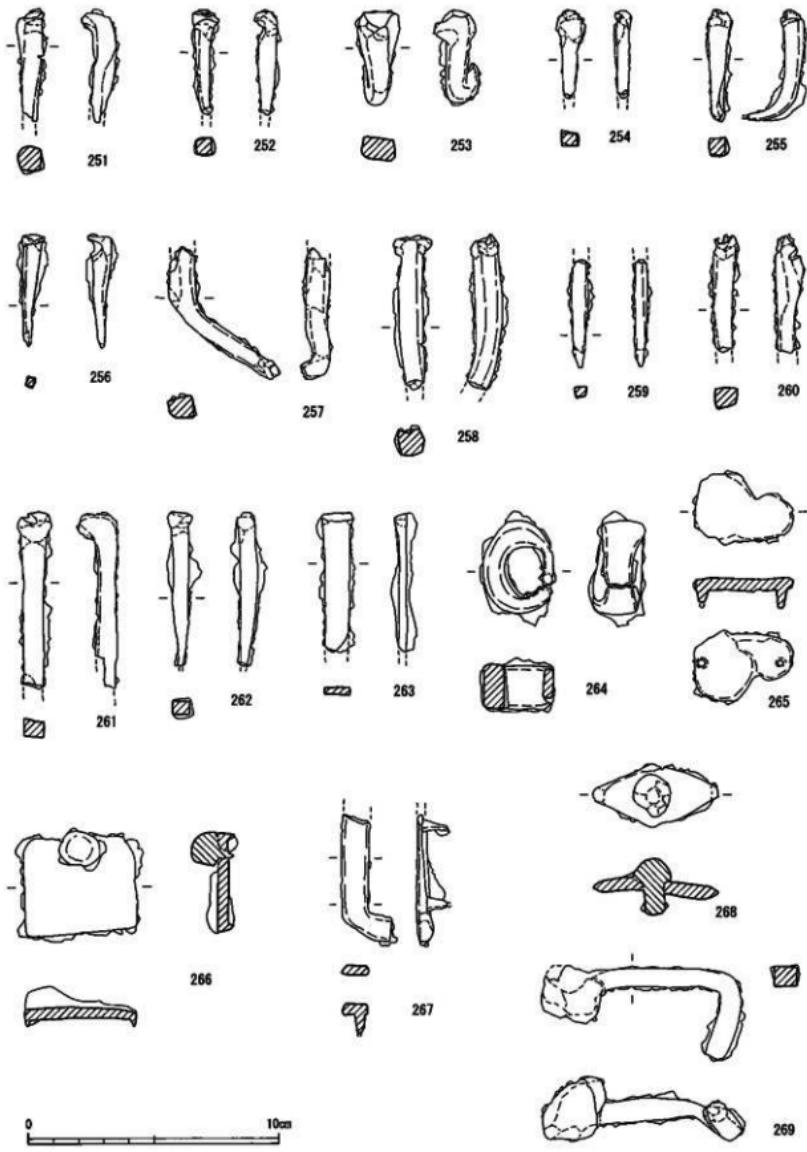
第51図 1郭周辺出土石製品実測図 (1:2, 204～209は1:3)



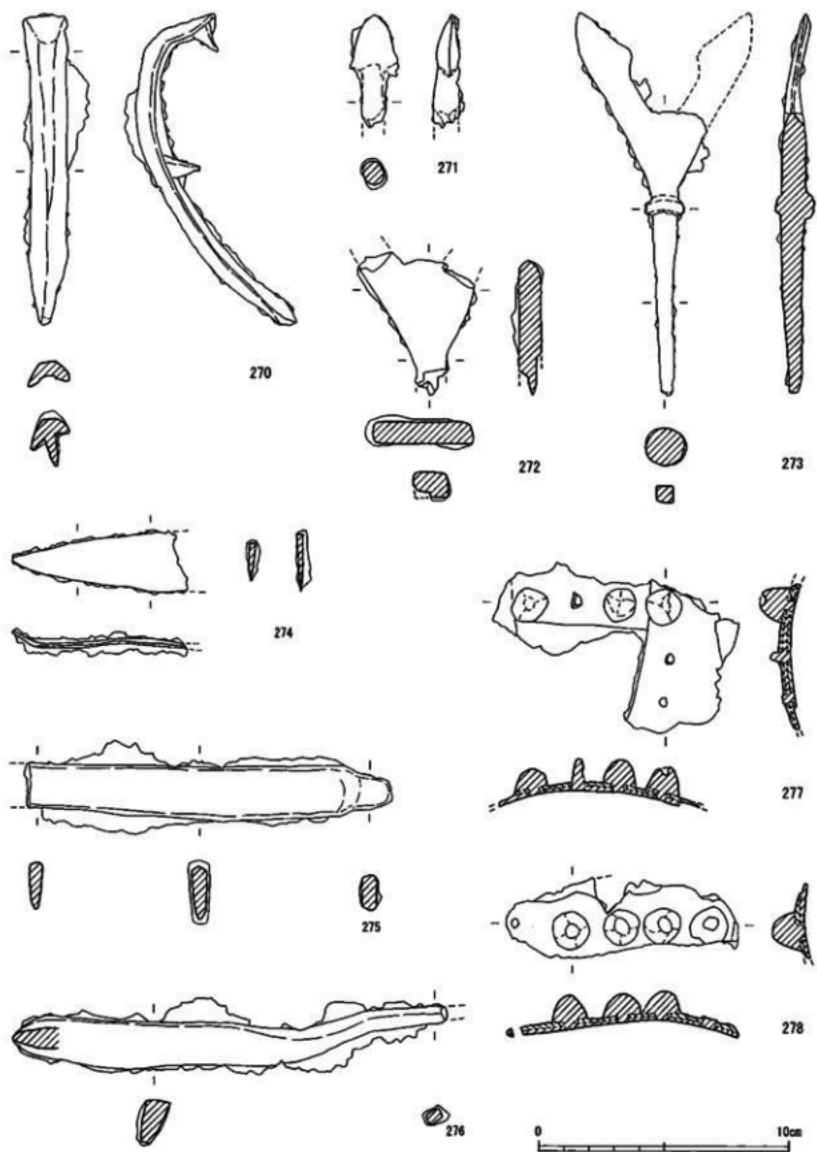
第52図 1 郡周辺出土鉄製品実測図 (1) (1 : 2)



第53図 1 郡周辺出土鉄製品実測図 (2) (1 : 2)



第54図 1 郡周辺出土鉄製品実測図（3）（1:2）



第55図 1 郭周辺出土鉄製品実測図 (4) (1 : 2)

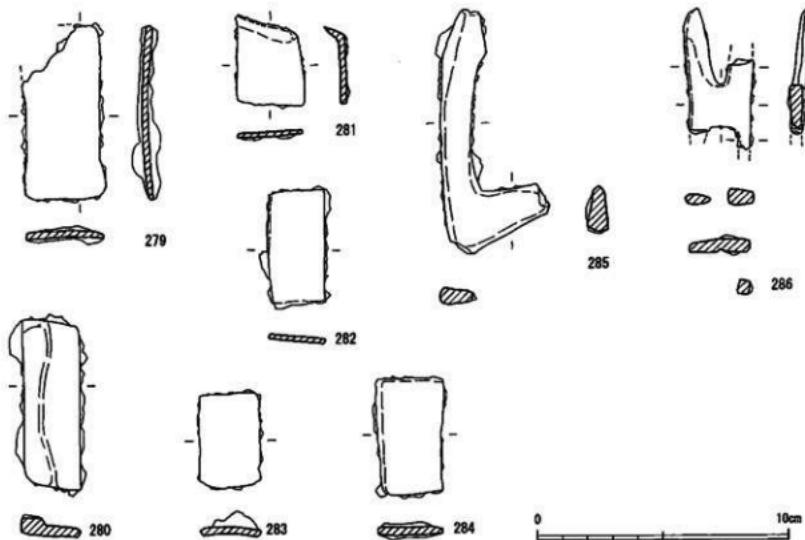
269は鉄製掛金である。SX2から出土した。戸の掛金部分で、先端を曲げて「L」字状にしている。もう一方の端部は鋒のため明確でないが、丸くなっていることから環状になっていると思われる。

271～273は鉄鎌である。271はG13区、272はG12区ピット、273はトレンチ1から出土した。271は定角の鉄鎌である。三角形で、断面はラグビーボール状の身部に断面円形の茎部がつく。272・273は雁股の鉄鎌である。272は身部のみで、先端部を欠損する。273は身部の片方の先端部を欠損するが、茎部も残っている。身部の断面は方形で、先端に向かうに従って次第に細く鋭くなる。身部と茎部の境は断面円形で、茎部の断面は方形である。

274・275は刀状鉄製品である。274はトレンチ1、275はSK36から出土した。274は厚さ3mmと薄い刃部の一部で、切先に向かって次第に細くして尖らせている。275は切先を欠損するが、刃部と茎部残存する。茎部は断面方形で、長さは1.6cmと短い。刃部は厚さ0.6cmで、刃は次第に細くなるが、あまり鋭く尖っていない。

277・278は鉄製兜片である。277はトレンチ3、278はSX1から出土した。いずれも厚さ0.15cmの鉄板を重ね合わせ、径1.3～1.5cm、高さ0.7～1.0cmの鉢を0.2～0.5cm間隔で使用して、繋ぎ合せたものである。277・278は同一個体の可能性がある。

279～284は板状鉄製品である。279はSB2ピット、281はSK5、282はSK35、280・283はSK36、284はF9区から出土した。長さによって3.6～3.8cm、4.6～4.7cm、6.7～6.9cmの



第56図 1郭周辺出土鉄製品実測図(5) (1:2)

3つに分類できる。幅は2.25~3.3cmである。鋸のため孔が確認されたものはないが、大きさからみて小札の未完成品の可能性がある。

276・285・286は用途不明鉄製品である。276・285はSK36、286はSK37から出土した。276は柄の部分と刃の部分に分かれ、柄の部分は細くなっている、刃部は先端と刃先がやや細くなっているが、刃物のように鋭く尖ってはいない。285は「L」字状の鉄製品である。286は「H」字状の鉄製品である。先端の2股に別れた部分の内側を尖らせて鋭くしていることから、鐵鎌など武器の可能性も考えられる。

#### (5) 銅製品他 (第57図、図版41)

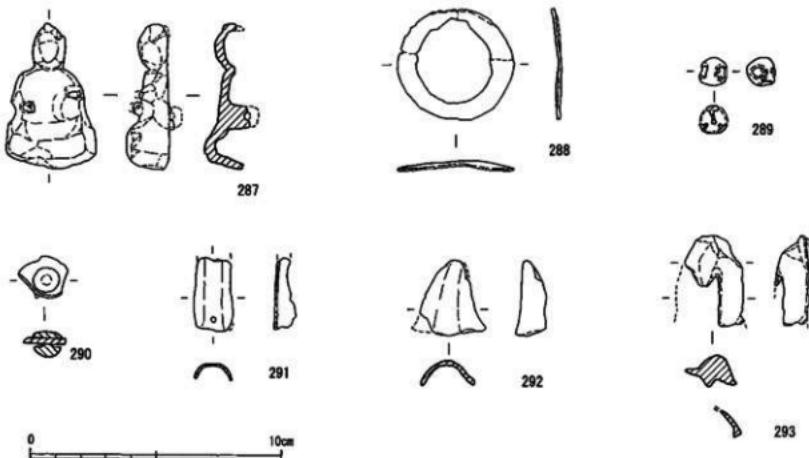
287は銅製懸仏である。SK35から出土した。坐像であるが、顔など不明瞭な部分が残る。両手先端を欠損しており、右手には径0.15cmの小孔がある。裏面に突起が有り、取付け用の径0.3cmの小孔があくが、突起の先端部は欠損している。

288は銅製リングである。SX1から出土した。長径4.6cm×短径4.4cmの円形の薄板に、径3.0cmの穴をあけたものである。本来は平坦であったと思われるが、現在では折れ目がつき、形が歪んでいる。用途は不明である。

289は船玉である。F12区から出土した。径1.1cmの球形であるが、きれいな球形ではなく、表面に径約0.5cmの孔が4つあり、内面に径約0.2cmの孔が4つある。鉄砲玉と考えられる。

290は銅製金具である。G12区から出土した。厚さ0.2cmの板を加工したものであるが、周囲はすべて欠損している。径1.0~1.2cmの鉢がついている。

291~293は用途不明銅製品である。291はG12区ピット、292はSB1ピット、293はH11区



第57図 1郭周辺出土銅製品他実測図 (1:2)

ピットから出土した。291 は方形の薄板を曲げて、断面を「U」字状にしている。端部中央付近に径 0.15 cm の小孔がある。292 は三角形に近い薄板を曲げて加工したもので、断面は「U」字と「V」字の中間である。293 の平面形は砲弾型で、高さは 1.3 cm であるが、先端部が厚く、後部は薄くなっている。

#### (7) 古銭 (第 58・59 図、第 2 表、図版 42)

古銭は破片を含め、49 枚出土した<sup>(1)</sup> (第 2 表)。いずれも背面には文字や文様がないため、本書では背面の写真や拓影は掲載していない。49 枚のうち、寛永通寶が 2 枚、破片のため銘不明のものが 4 枚である。古銭が出土した代表的な遺構として、S X 2 (24 枚)、S K35 (6 枚) をあげることができる。

294~299 は開元通寶 (初鋤 621 年) である。294 は S B 2、295・296 は S X 2、297 は S K35、298 は F 11 区ピット、299 はトレーナー 3 から出土した。

300 は景德元寶 (初鋤 1004 年) である。S X 2 から出土した。

301・302 は祥符通寶 (初鋤 1009 年) である。301 は S X 2、302 は 1 郭東側切岸から出土した。

303 は天聖元寶 (初鋤 1023 年) である。書体は篆書で、S X 2 から出土した。

304 は景祐元寶 (初鋤 1034 年) である。書体は篆書で、1 郭北東側切岸の J 9 区から出土した。

305~311 は皇宋通寶 (初鋤 1038 年) である。書体は 305・311 が篆書、306~310 は真書である。305 は S X 1、306~311 は S X 2 から出土した。

312 は嘉祐元寶 (初鋤 1056 年) である。書体は篆書で、S X 2 から出土した。

313 は嘉祐通寶 (初鋤 1056 年) である。書体は真書で、S K35 から出土した。

314~317 は熙寧元寶 (初鋤 1068 年) で、書体は 314~316 が真書、317 が篆書である。

第 2 表 1 郭周辺遺構別出土古銭一覧表

遺構名	古銭銘	初鋤年	枚数	遺物番号	合計枚数
S B 2	開元通寶	621年	1	294	2
	政和通寶	1111年	1	332	
	皇宋通寶	1038年	1	305	
	大觀通寶	1107年	1	330	
S X 2	開元通寶	621年	2	295, 296	24
	景德元寶	1004年	1	300	
	祥符通寶	1009年	1	301	
	天聖元寶	1023年	1	303	
	皇宋通寶	1038年	6	306~311	
	嘉祐元寶	1056年	1	312	
	熙寧元寶	1068年	1	314	
	元豐通寶	1078年	2	319, 321	
	元祐通寶	1086年	2	325, 326	
	紹聖元寶	1094年	1	327	
	元符通寶	1098年	2	328, 329	
	大觀通寶	1107年	1	331	
	政和通寶	1111年	1	333	
	宣和通寶	1119年	1	334	
S X 11	淳熙元寶	1174年	1	336	2
	宣和通寶	1119年	1	335	
S K13	不明(破片)	-	1	-	1
S K35	開元通寶	621年	1	297	6
	嘉祐通寶	1056年	1	313	
	熙寧元寶	1068年	2	315, 317	
	元豐通寶	1078年	1	322	
	元祐通寶	1	324		
S K36	不明(破片)	-	1	-	1
S K37	不明(破片)	-	1	-	1
F 9 区	元豐通寶	1078年	1	320	1
F 11 区ピット	開元通寶	621年	1	298	1
G 8 区	熙寧元寶	1068年	1	318	1
G 9 区	熙寧元寶	1068年	1	316	1
G 12 区	元豐通寶	1078年	1	323	2
I 12 区	寛永通寶	-	1	338	1
トレーナー 3	開元通寶	621年	1	299	1
1 郭東側切岸	祥符通寶	1009年	1	302	1
J 9 区(切岸)	嘉祐元寶	1034年	1	304	1
	合計				49

[なお、本書では錢貨の名前をできるかぎり既文のとおり記載するよう心がけたが、一部略字を使用したものもある。]

314 は S X 2, 315・317 は S K35, 316 は G 9 から出土した。また, 318 は錢文が不鮮明であるが、熙寧元寶と思われる。書体は篆書で、G 8 区から出土した。

319～323 は元豐通寶（初鑄 1078 年）である。書体は 319・320 が行書、321～323 が篆書である。319・321 が S X 2, 322 が S K35, 320 が F 9 区、323 が G 9 区から出土した。また、324 は欠損のため、「元〇通寶」としか判読できないが、元豐通寶の可能性が高いと思われる。書体は篆書である。

325・326 は元祐通寶（初鑄 1086 年）である。書体は 325 が行書で、326 が篆書である。いずれも S X 2 から出土した。

327 は紹聖元寶（初鑄 1094 年）である。S X 2 から出土した。

328・329 は元符通寶（初鑄 1098 年）である。書体は 328 が行書で、329 が篆書である。いずれも S X 2 から出土した。

330・331 は大觀通宝（初鑄 1107 年）である。330 は S X 1, 331 は S X 2 から出土した。

332・333 は政和通寶（初鑄 1111 年）である。書体は 332 が分楷、333 が篆書である。332 が S B 1, 333 が S X 2 から出土した。

334・335 は宣和通寶（初鑄 1119 年）である。書体は 334 が篆書、335 が分楷である。334 が S X 2, 335 が S X 11 から出土した。

336 は淳熙元寶（初鑄 1174 年）である。書体は真書で、S X 2 から出土した。

337・338 は寛永通寶である。338 は約 1/2 の残存で、「寛〇〇寶」としか判読できない。337 が I 12 区、338 が G 12 区から出土した。年代的に城に伴う遺物ではない。

各古錢の重量については第 12 表に記載しているが、破片については、S X 11 出土のものが 1.15 g, S K13 出土のものが 1.98 g, S K36 出土のものが 1.20 g, S K37 出土のものが 0.38 g である。なお、S K35 からも破片 0.13 g が出土しているが、322 または 324 の一部と思われる。

その他、出土点数には含めていないが、トレンチ 3 の明褐色土から大正 11 年発行の桐 1 銭青銅貨が出土している。

#### (8) その他の遺物（図版 41）

図示はしていないが、339・340 は S K36 から出土した漆紙である。淡黒褐色の漆が付着している。339 は 5.8 cm × 6.3 cm, 340 は 6.4 cm × 6.4 cm の大きさである。ともに 2 回以上折り畳まれ、墨書きの痕跡は認められない。

1 区東側切岸 J 9 区から巻貝の殻が出土した。アカニシと推定される。また、S X 1 からも貝殻の小片が出土している。

#### 註

(1) 古錢の分類については、次の文献を参考にした。

兵庫埋蔵鉄調査会『中世の出土銭—出土鉄の調査と分類—』 1994 年



294



295



296



297



298



299



300



301



302



303



304



305



306



307



308



309



310



311



312



313



314



315



316



317

第58図 1 郭周辺出土古銭拓影 (1) (原寸)



318



319



320



321



322



323



324



325



326



327



328



329



330



331



332



333



334



335



336



337



338

第59圖 1 郭周辺出土古錢拓影（2）（原寸）

第3表 1 郡周辺出土土器類観察表1

番号	出土 場所	種別・器種	計測値	調査	色調	胎土	備考
1	S B 2	青白磁・湯桶	底元径深：10.4cm	外面：高台付一ハラケズリ、その他の凹凸ナデ 内面：不明（輪がかかる）	淡青白地	砂粒	内外面とも底面に施釉。内面に朱土付着。96と同一個体の可能性。
2	S H 4	土師質土器・盆	底高：1.5cm	外面：体部一回転ナデ、底部一回転あつ切り？	淡黄褐色	砂粒を多く含む	
3	S B 4	土師質土器・杯	底元径：11.8cm 底高：3.0cm	外面：体部一回転ナデ、底部一ハラ切り 内面：体部一回転ナデ、底部一ナデ	淡青白地	砂粒を含む	内面底部に板目状痕有
4	S B 4	土師質土器・碗	底元径：9.7cm 底高：3.05cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内縁端部にスス付着
5	S X 1	土師質土器・瓶	口径：6.2cm 現存高：1.25cm	外面：体部一回転ナデ、底部一不明 内面：体部一回転ナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	
6	S X 1	土師質土器・瓶	口径：6.0~6.4cm 現存高：1.05cm	外面：体部一回転ナデ、底部一不明 内面：体部一回転ナデ、底部一ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	
7	S X 1	土師質土器・瓶	口径：5.5cm 底定径：0.95cm	外面：体部一回転ナデ、底部一回転あつ切り 内面：底部中央一ハラケズリ、その他の凹凸ナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	円形断面を鋸加工したもの 漆用器
8	S X 1	土師質土器・瓶	口径：6.1cm 底高：0.75cm	外面：体部一回転ナデ、底部一回転あつ切り 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡赤褐色	砂粒を含む	内面底部は中央が異なる 漆用器
9	S X 1	土師質土器・瓶	口径：6.7cm 底高：1.65cm	外面：体部一回転ナデ、底部一凹凸あつ切り 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡褐色	砂粒を含む	
10	S X 1	土師質土器・瓶	口径：6.4cm 底径：6.4cm	外面：体部一回転ナデ、底部一回転あつ切り 内面：不明	淡黄褐色	砂粒を含む	
11	S X 1	土師質土器・杯	口径：8.8cm 底高：2.3cm	外面：体部一回転ナデ、底部一不明 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	内面底部を若干削ませる
12	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.0~8.3cm 底高：1.95cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	全体的に摩耗が著しい
13	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.7~8.8cm 底高：2.25cm	外面：不明 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	焼成不良 外見は模様が著しい
14	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.5~8.6cm 底高：2.4cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	
15	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.6~8.7cm 底高：2.35cm	外面：不明 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	形が歪む
16	S X 1	土師質土器・碗	口径：9.0~9.4cm 底高：2.4cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面底部を若干削ませる 口縁部にスス付着
17	S X 1	土師質土器・碗	底元径11.5cm 口径：9.2cm	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	内面とも底面有 口縁部にスス付着
18	S X 1	土師質土器・碗	底元径：8.8cm 底高：2.4cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	
19	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.4cm 底高：2.2cm	外面：体部一回転ナデ？、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	地味やや不良
20	S X 1	土師質土器・碗	口径：9.0cm 底高：2.25cm	外面：不明 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	外見は焼成不良
21	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.7~9.3cm 底高：2.2cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面底部を削ませる
22	S X 1	土師質土器・碗	底元径：8.8cm 底高：2.2cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面底部を若干削ませる 内面に黒斑有
23	S X 1	土師質土器・碗	底元径：9.7cm 底高：2.15cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面底部を削ませる
24	S X 1	土師質土器・碗	底元径：8.9cm 底高：2.5cm	外面：口縁部一回転ナデ？、その他の凹凸ナデ 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	
25	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.3cm 底高：2.4cm	外面：不明 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	焼成やや不良 外見は模様が著しい
26	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.5~8.9cm 底高：2.4cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	
27	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.7cm 底高：2.4cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面に丁寧な仕上げ
28	S X 1	土師質土器・碗	口径：9.1~9.3cm 底高：2.7cm	外面：不明 内面：底部中央一ナデ？、その他の凹凸ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面に黒斑有。外見は焼成する
29	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.9~9.2cm 底高：2.7cm	外面：体部一回転ナデ、底部一ナデ 内面：底部中央一ナデ、その他の凹凸ナデ	淡黄白色	砂粒を含む	内面底部を削ませる
30	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.6~8.9cm 底高：2.9cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部一回転ナデ、底部一ナデ	淡黄白色	砂粒を多く含む	内面底部を若干削ませる
31	S X 1	土師質土器・碗	口径：9.0cm 底高：3.5cm	外面：体部一回転ナデ、底部一未調製 内面：底部一回転ナデ、底部一ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面底部を若干削ませる 内面に黒斑有。外見は焼成する
32	S X 1	土師質土器・碗	口径：8.45~9.7cm 底高：3.4cm	外面：体部一回転ナデ？、底部一未調製 内面：底部一回転ナデ、底部一ナデ	淡黄褐色	砂粒を含む	内面底部を削ませる
33	S X 1	瓦質土器・鍋	口径：8.0cm	外面：不明、その他のヨコナデ 内面：ヨコナデ	淡黄褐色、外縁は灰褐色	砂粒を含む	外面に突堤を疑り付ける
34	S X 1	常滑焼・壺	底元径11.5cm 口径：8.2cm	外面：ヨコナデ 内面：エビオサエロナデ	淡褐色	砂粒を含む	耳部に施したスタンプ文
35	S X 2	土師質土器・瓶	底元径11.5cm 口径：11.25cm	外面：体部一回転ナデ、底部一凹凸あつ切り 内面：底部中央一ナデ？、その他の凹凸ナデ	淡褐色	砂粒を含む	内面に陶質物付着
36	S X 2	土師質土器・杯	底元径：13.0cm 底高：3.0cm	外面：体部一回転ナデ、底部一不明 内面：回転ナデ	淡青白地	砂粒を多く含む	外面上部に突堤を疑り付ける
37	S X 2	瓦質土器・鍋	口径：8.0cm	外面：体部一頭輪正圧、11縫隙一ヨコナデ 内面：不明	淡褐色	砂粒を含む	外面底部に若干付着
38	S X 2	瓦質七器・鍋	口径：8.0cm	外面：体部一頭輪正圧、11縫隙一ヨコナデ 内面：体部一不明、11縫隙一ヨコナデ	淡褐色	砂粒を含む	外面上部に突堤を疑り付ける

第4表 1郭周辺出土土器類観察表2

遺物番号	出土遺構	種別・器種	計測値	調査	色調	断面	備考
39 S X 2	灰質土器・鍋			外底: 口縁部-ヨコナダ、体部-直脚E底 内底: 口縁部-ヨコナダ、体部-不定方向のナダ	外表面: 單皮胎色 内表面: 淡黄褐色	砂粒を含む 外側に突起を呈する	外側に突起を呈り付ける
40 S X 2	灰質土器・鍋			外底: 口縁部-ヨコナダ、体部-直脚E底 内底: 口縁部-ヨコナダ、体部-ヨコナダ中心	外表面: 細灰褐色 内表面: 淡灰褐色	砂粒を含む 外側に突起を呈り付ける	外側に突起を呈り付ける
41 S X 2	東腰系灰陶器・ 罐			外底: 口縁部-ナダ 内底: 口縁部-ナダ	灰褐色	細砂を含む	圓筒自燃
42 S X 2	東腰系灰陶器・ 罐			外底: 口縁部-ナダ 内底: 口縁部-ナダ	淡青灰褐色	粗砂を含む	片口が付く。片口付近に粘土付着
43 S X 2	龜山燒・雙 (鉢)			外底: 略不平タタキ 内底: ナカナ	淡青灰褐色	細砂を含む 格子の単位は3mm×3mm	外側に突起を呈する
44 S X 2	龜山燒・雙 (鉢)			外底: 略不平タタキ 内底: ヨコナダを中心としたナダ	淡青灰褐色	細砂を含む 格子の単位は3mm×3mm	外側に突起を呈する
45 S X 2	衛前焼・雙 (鉢下付)			外底: 体部-底の様なナダ、底部E底、底部-ナダ 内底: ヨコナダ、傾向のナダも混じる	淡青灰褐色	粗砂を含む 内面に粘土混合層が現る	内面に粘土混合層が現る
46 S X 2	衛前焼・雙 (鉢底)			外底: 口縁部-ナダ 内底: 口縁部-ナダ	淡青灰褐色	砂粒を含む 口縫部及び底面上面に自然釉	口縫部及び底面上面に自然釉
47 S X 2	片縫・四足			外底: 不明 (施がかかる) 内底: 不明 (施がかかる)	黒: 深緑色 基盤: 淡灰白色	粗砂	口縫部を除き施釉。外側に選択と思われる文様。二次焼成
48 S X 2	青磁・碗			外底: 不明 (施がかかる) 内底: 不明 (施がかかる)	施: 青磁色 基盤: 淡灰白色	粗砂	全表面に施がかかる 内側に印加文字
49 S X 3	土師器・瓶		直径: 18.9cm 標準定高: 6.35cm	外底: 体部-凹凸ナダ、底部-不明 内底: ヨコナダ	淡青灰褐色	砂粒を含む 高さがつく大判の胸	内外両とも厚底有。内面底溝
50 S X 3	瓦質土器・罐			外底: 体部-平窓、口縁部-凹凸ナダ 内底: 縦らかく斜面	淡青灰褐色	砂粒を含む 底がやや不良	内面にちぎれの跡り日
51 S X 3	白磁・碗			外底: 不明 (施がかかる) 内底: 不明 (施がかかる)	施: 淡青灰褐色 基盤: 淡灰白色	粗砂	口縫部を除き施釉がある 想が薄い。底の可塑性有。
52 S X 2	上師質土器・瓶		直径: 6.8cm	外底: 体部-凹凸ナダ、底部-凹凸ナダ 内底: 体部-凹凸ナダ、底部-不明	灰白色	砂粒を含む	底底不良
53 S X 5	上師質土器・瓶		直径: 9.8cm 標準定高: 3.8cm	外底: 口縫部-ナダ 内底: 口縫部-ナダ	粗砂	砂粒を含む 全般的に丁寧な作り	外側底部を除ませた施と思われる
54 S X 5	瓦質土器・瓶			外底: ヨコナダ 内底: 1口縫部-ヨコナダ、口縫部-ヨコナダ	淡青灰褐色 底面: 淡灰褐色	砂粒を含む 外側に突起を呈り付ける	施釉や不良
55 S X 5	瓦質土器・瓶			外底: 体部-斜面E底、口縫部-ヨコナダ 内底: 不明	灰褐色	砂粒を含む	底底不良
56 S X 5	東腰系須彌壺・ 雙(鉢底)			外底: ヨコナダ 内底: 上部-ハケ日、下部-折曲底	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	粗砂を含む 底の可塑性有。	内面に底溝がある
57 S K 11	衛前焼・罐			外底: 体部-凹凸ナダ、底部-ヨコナダ 内底: 体部-ヨコナダ、体部上部-自然釉	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む 内面に底溝がある	137回と同様の可能性有。
58 S K 11	龜山燒・雙 (鉢底)			外底: 略不平タタキ 内底: ナカナ	灰褐色	砂粒を含む 格子の単位は3mm×3mm	内面に底溝がある
59 S K 11	衛前焼・雙 (底付-鉢底)		直径: 34.8cm	外底: 腹部-ハケ日、ナダ、底部-ケメリ後ナダ 内底: 腹部-一側ひげヶ日、底部-ナダ	淡青灰褐色 内底: 一部淡青灰褐色	粗砂を含む 腹の可能性有。	S K 11から44個と思われる瓶 片が出土。
60 S K 12	上師質土器・瓶		直径: 9.0cm 基高: 2.55cm	外底: 見事中央ナダ、その他の凹凸ナダ 内底: 腹部中央ナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を多く 外側底部を除き作成せる	底底や不良。外側底部
61 S K 14	衛前焼・雙 (鉢底)		直径: 44.3cm 発見高: 12.5cm	外底: 腹部-ハクレナダ、ナダ、底部-ナダ 内底: 体部-ナダ、底部-凹凸ナダ	淡青灰褐色	粗砂を含む	底底や不良。
62 S K 21	青磁・罐			外底: 口縫部-ナダ 内底: 口縫部-ナダ	青磁色	粗砂・小砂 備考記。内底に9单甲の縁り日。 底底不良。	17世紀以降
63 S K 25	衛前焼・罐			外底: 口縫部-ナダ 内底: 口縫部-ナダ	暗青褐色 断面: 暗青褐色	砂粒を含む 内面に底溝の跡り日。底底不良。	内面に底溝の跡り日。底底不良。
64 S K 27	上師質土器・瓶		直径: 9.2cm	外底: 体部-凹凸ナダ、底部-素面 内底: 見事中央ナダ、その他の凹凸ナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む	底底不良。
65 S K 27	衛前焼・雙 (口縫部-罐)			外底: 口縫部-ナダ 内底: 口縫部-ナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む	外側及び底部に淡青褐色の白痕 111回と土藏片と接合
66 S K 28	衛前焼・雙 (木輪底-罐)		直径: 25.1cm	外底: ヨコナダ 内底: 体部-ヨコナダ、瓶底-口縫部-凹凸ナダ	暗灰色、口縫部 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む 外側底部を除き作成せる	111回と土藏片と接合
67 S K 30	瓦質土器・瓶		直径: 16.3cm 基高: 2.25cm	外底: 体部-凹凸ナダ、底部-未調 内底: 見事中央ナダ、その他の凹凸ナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む 内面底部から休部にかけて底底有。	外側底部に施釉がある。内面は施 釉がかかる。部分がある。
68 S K 30	白磁・瓶			外底: 不明 (施がかかる) 内底: ヨコナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	粗砂	底底や不良。底底有。施釉有。
69 S K 33	上師質土器・瓶		直径: 5.6cm 基高: 1.05cm	外底: 不明 内底: 不明	淡青灰褐色	砂粒を含む 底底や不良。底底有。	全般的に難作り。
70 S K 33	上師質土器・瓶		直径: 10.0~10.6cm 基高: 2.3cm	外底: 体部-凹凸ナダ、底部-凹凸ナダ 内底: 体部-凹凸ナダ、底部-小窓	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む 形が並んでる	底底不良。
71 S K 33	上師質土器・瓶		直径: 10.7cm 基高: 3.35cm	外底: 体部-凹凸ナダ、瓶底-凹凸ナダ 内底: 体部-凹凸ナダ、底部-ナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む	底底不良。
72 S K 33	上師質土器・瓶		直径: 8.7~9.2cm 基高: 2.8cm	外底: 不明 内底: 不明	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を多く 金属性に摩耗している	底底不良。
73 S K 36	陶器・小壺			外底: 口縫部-ナダ 内底: ヨコナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む 外側及び底部にナカナの底 底底不良。	外側及び底部にナカナの底 底底不良。
74 S K 36	上師質土器・瓶		直径: 6.0cm 基高: 1.15cm	外底: 体部-凹凸ナダ、底部-凹凸ナダ 内底: 体部-凹凸ナダ、その他の凹凸ナダ	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む 外側底部に白痕有。	外側底部に白痕有。
75 S K 36	上師質土器・瓶		直径: 5.9cm 基高: 1.2cm	外底: 体部-凹凸ナダ、底部-凹凸ナダ 内底: 不明	淡青灰褐色 内底: 不明	砂粒を含む 底底や不良。	底底有。
76 S K 36	上師質土器・瓶		直径: 6.2cm 基高: 0.9cm	外底: 不明 内底: 不明	淡青灰褐色 内底: 淡青灰褐色	砂粒を含む 底底や不良。	全般的に摩耗が著しい

第5表 1郭周辺出土土器類観察表3

番号	出土 遺構	種別・器種	計測値	調査	色調	胎土	備考
77	S K36	土師質土器・壺	口径: 6.5cm 高さ: 1.2cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転ヘラ切り 内面: 底部中央-ナデ、その他の回転ナデ	灰褐色	砂粒を含む	外側底部に板状窓がかずかに残る 全般的に穿な作り
78	S K36	土師質土器・壺	底径: 5.3~5.8cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転ヘラ切り?	灰褐色	砂粒を含む	
79	S K36	瓦質土器・鍋		外面: 1回転-ヨコナデ、体部-不明 内面: 1回転-ヨコナデ、その他の回転ナデ	灰白色	砂粒を含む	外側に突起を貼り付ける
80	S K36	瓦質土器・鍋	復元口径: 34.5cm	外面: 路子目タキ 内面: 1回転-ナデ、口縁部-ヨコナデ、体部-不明	灰黒灰色、褐褐色 内面は淡灰白色	砂粒を含む 成形や不良	路子の原寸は4.0×4.4cm
81	S K36	土師質土器・壺	(山陰然・附註)	外面: 1回転-ヨコナデ、底部-不明 内面: 1回転-ナデ、底部-ヨコナデ	外面: 灰褐色 内面: 淡灰色	砂粒を含む 成形	S K37-39、P 9(柱土の破片)と 接合
82	S K37	白磁・水注?	高台径: 4.8cm	外面: 高台-へたりによる折り出し、体部-陶かる 内面: 不明 (釉がかかる)	釉: 透明 底面: 成形	補織 成形	高台及び底面部は磨歴 底をねじ上げ
83	S K37	瓦質土器・火鉢		外面: 不明	淡黄灰色	砂粒を含む	外側に2条の突起と通達する円形 文を貼り付ける。成形不良
84	S K37	瓦質土器・火鉢		外面: 体部-不明、口縁部-回転ナデ 内面: 体部-指輪状底状み、1回転-ヨコナデ	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	張り目無
85	S K38	瓦質土器・壺		外面: 体部-不明、口縁部-ヨコナデ 内面: 体部-不明、1回転-ヨコナデ	暗灰褐色	砂粒を多く 含む	外側に突起を貼り付ける 成形や不良
86	S K39	土師質土器・壺	口径: 6.3cm 高さ: 1.75cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転身切り? 内面: 不明	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰白色	砂粒を含む 成形	内面は焼成している
87	S K39	土師質土器・壺	底定寸径: 7.0cm	外面: 体部-不明、底部-回転ヘラ切り?	灰褐色	砂粒、小破 砂粒を含む	成形
88	S K39	土師質土器・杯	復元口径: 10.8cm	外面: 不明	淡灰褐色	砂粒を含む	成形や不良
89	S K39	土師質土器・杯	高さ: 3.55cm	外面: 体部-見込、底部-回転ナデ 内面: 不明	外面: 淡灰褐色 内面: 一部灰白色	砂粒を含む 成形不良	
90	S K39	土師質土器・鉢	底定寸径: 13.8cm	外面: 体部-一部磨削頭、口縁部-ヨコナデ 内面: 暗褐色の色鉢が全面に付着しているため不明	淡赤褐色	砂粒を含む 口縫部と全体部に接点がないため、器蓋	口縫部と全体部に接点がないため、器蓋
91	S K39	瓦質土器・鍋		外面: 体部-不明、口縁部-ヨコナデ 内面: 体部-不明、口縁部-ヨコナデ	暗灰褐色	砂粒を含む	外側に突起を貼り付ける
92	S K39	瓦質土器・鉢		外面: 体部-不明、口縁部-ヨコナデ 内面: 体部-不明、口縁部-ヨコナデ	暗灰褐色	砂粒を含む 成形	内面に墨の痕有。6条単位?
93	S K39	古漆戸・鉢底	高さ: 2.8cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転身切り 内面: 体部-回転ナデ	淡灰褐色	砂粒を含む	底部一部を除き淡灰褐色の他か ら。内面底部の格子状の細目
94	S K39	亀山焼・甌(附註)		外面: 路子目タキ 内面: 不明	外面: 灰白色 内面: 淡灰白色	砂粒を含む 成形や不良	器の単位は4mm×4mm
95	S K40	土師質土器・鍋	口径: 32.2~33.5cm	外面: 体部-ハマナデ、底部-不明、口縁部-回転ナデ 内面: 体部-ハマナデ、底部-不明、口縁部-回転ナデ	外面: 暗赤褐色 内面: 暗赤褐色	砂粒を含む 成形	S K36上と重複し接合。外間にス タッフ有。底部に底足有。形が歪む
96	S D11	青白磁・海瓶		外面: 体部-ハマナデ、底部-回転ナデ 内面: 槌打の跡(かぶかる)	釉: 灰褐色 底面: 成形	砂粒 成形	外側に高輪文を貼り 1と2-側体の可能性
97	S D12	古幽玄・入子	復元口径: 7.6cm 高さ: 2.5cm	外面: 体部-不明、底部-回転身切り 内面: 回転ナデ	灰褐色	砂粒を含む 山縫部に擦れ。内部底面部に使用時の 内面底面部に使用時の痕跡	
98	H II K9	土師質土器・壺	口径: 6.1cm 高さ: 1.35cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転ヘラ切り兼ナデ 内面: 底部中央-ナデ、その他の回転ナデ	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒	全般的に穿な作り
99	H II K9	土師質土器・壺	復元口径: 6.4cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-不明 内面: 底部中央-ナデ、その他の回転ナデ	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒	底部外側に板状窓有
100	H II K9	土師質土器・壺	口径: 8.2cm 高さ: 2.32cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転身切り 内面: 底部中央-ナデ?、その他、回転ナデ	外面: 灰褐色 内面: 淡灰白色	砂粒を含む 成形	底部外側をわずかに残せる
101	G 12区	土師質土器・瓶	口径: 8.4~9.1cm 高さ: 2.5cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-未調査 内面: 底部中央-ナデ?、その他の回転ナデ	外面: 灰褐色 内面: 淡灰白色	砂粒を含む 成形	成形が歪んでいる
102	F 10区	瓦質土器・瓶	復元口径: 29.0cm	外面: 体部-一部磨削頭、口縁部-ヨコナデ 内面: 体部-不明、口縁部-ヨコナデ	外面: 灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	外側に突起と3条の凹溝 底部不規則。二次成形
103	トレント1	御生土器・壺		外面: 磨削ヘタリ、底部-ヨコナデ 内面: 回転-ヨコナデ?、底部-ヨコナデ?	淡赤褐色	砂粒を含む 成形	104-同1-側体の可能性有
104	トレント1	御生土器・壺 (直鉢)	底径: 3.5cm	外面: 磨削ヘタリミガキ、底部-不明 内面: 摩擦直鉢	淡赤褐色	砂粒を含む 成形	外側に直鉢有
105	トレント1	土師質土器・壺	復元口径: 9.8cm 高さ: 2.9cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-未調査 内面: 回転ナデ	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	103と同1-側体の可能性有
106	トレント1	往状高台土器	台高径: 6.5cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転身切り後ナデ 内面: 体部-回転ナデ、底部-ナデ	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	
107	トレント2	土師質土器・壺	口径: 6.9cm 高さ: 1.3cm	外面: 体部-回転ナデ、底部-回転ヘラ切り? 内面: 底部中央-ナデ?、その他の回転ナデ	暗赤褐色	砂粒を含む 成形	成形
108	トレント2	土師質土器・壺	口径: 6.7cm 高さ: 1.0cm	外面: 体部-回転ナデ?、底部-回転ヘラ切り? 内面: 底部中央-ナデ?、その他の回転ナデ?	暗赤褐色	砂粒を含む 成形	成形や不良
109	トレント2	瓦質土器・壺	復元口径: 29.7cm	外面: 体部-回転ナデ?、底部-ヨコナデ? 内面: ヨコナデ	外面: 灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	内面に4条単位の横目有
110	トレント2	瓦質土器・火鉢 (附註)		外面: 花押文のスタンプ 内面: ヨコナデ?	成形褐色 外面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	成形や不良
111	トレント2	瓦質土器・火鉢 (附註)		外面: 回転ナデ?	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	成形不良
112	トレント2	古漆戸・鉢底		外面: 回転ナデ?	淡灰褐色	砂粒	外側底部の一部を焼き詰がかかる
113	トレント2	御生土器・壺 (附註)		外面: 回転ナデ?	外面: 淡灰褐色 内面: 淡灰褐色	砂粒を含む 成形	全面に焼詰がかかる
114	トレント2	白磁・耳環 (附註)		外面: 回転ナデ?	釉地: 灰褐色	砂粒	前面に耳环有

第6表 1郭周辺出土土器類観察表4

遺物番号	出土品名	鉢形・器種	計測値	調査	色調	胎土	備考
115	トレンチコ	土師質土器・瓶	口径: 5.2cm 高さ: 0.8cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転系切り? 内面: 回転ナダ	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色	砂粒を含む	浅く実用的な型
116	トレンチコ	土師質土器・瓶	口径: 6.0cm 高さ: 1.1cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転ヘタリ切り? 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	外面部に板目痕有
117	トレンチコ	土師質土器・瓶	確定口径: 5.8cm 底定高: 1.4cm	外面: 体部一回転ナダ、底部ヘラ切り? 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	
118	トレンチコ	土師質土器・瓶	口径: 6.5cm 現存高さ: 1.35cm	外面: 体部一回転ナダ?、底部一回転ヘタリ切り? 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ?	淡褐色	砂粒を含む	外面部に板目痕有 焼成や不良
119	トレンチコ	土師質土器・瓶	口径: 7.0cm 高さ: 1.4cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転ヘタリ切りナダ? 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色	砂粒を多く含む	外面部に板目痕有 含む
120	トレンチコ	土師質土器・杯	復元底径: 7.2cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転ヘタリ切り 内面: 回転ナダ	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色	砂粒を含む	
121	トレンチコ	土師質土器・杯	口径: 10.4~11.0cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転ヘタリ切り 内面: 回転ナダ	淡褐色	砂粒・小石 を含む	
122	トレンチコ	土師質土器・鉢	口径: 9.3cm 底定高: 2.4cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	外面: 黄白色 内面: 淡黃褐色	砂粒を含む	
123	トレンチコ	土師質土器・鉢	復元口径: 10.0cm 底定高: 2.5cm	外面: 体部一回転ナダ?、底部一回転 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色 内面: 淡褐色	砂粒を含む	全般的に輪郭が著しい
124	トレンチコ	土師質土器・鉢	口径: 9.6~9.8cm 底定高: 3.3cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色	精良	
125	トレンチコ	土師質土器・鉢	復元口径: 10.7cm	外面: 回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	
126	トレンチコ	土師質土器・鉢	口径: 8.7~9.1cm 底定高: 2.95cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色 内面: 淡褐色	砂粒を含む	形がかなり歪む 外底部を削ませる
127	トレンチコ	土師質土器・鉢	口径: 9.0cm 底定高: 3.0cm	外面: 体部一回転ナダ?、底部一回転 内面: 見込み中央ナダ、その他の回転ナダ?	淡褐色 内面: 淡褐色	砂粒を含む	内面にスス付有
128	東廠系須恵器 縫跡	復元口径: 22.8cm	外面: 回転ナダ、体部に縫跡が残る 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色 内面: 淡褐色	砂粒を含む	焼成不良。二次焼成 織り目無	
129	トレンチ (11区)	復元口径: 17.2cm	外面: 回転ナダ 内面: 不明(織がかかる)	外: 淡褐色 内: 淡褐色	砂粒を含む		
130	トレンチ 青磁・瓶	復元口径: 9.0cm	外面: 不明(織がかかる) 内面: 不明(織がかかる)	物: 淡褐色 内面: 淡褐色	砂粒	全体に白い5mmの粒がかかる。 内面部に織文。外縁にツマラ式蓋弁付	
131	トレンチ 青磁・瓶	口径: 5.5cm 底定高: 0.95cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転系切り? 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む		
132	F 11区	土師質土器・瓶	口径: 9.4cm 底定高: 3.1cm	外面: 回転ナダ 内面: 回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	全体的に丁寧な作り
133	G 8区	土師質土器・瓶	底定高: 3.1cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転 内面: 壁部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	
134	G 8区	瓦質土器・瓶	口径: 6.7~6.9cm 底定高: 1.4cm	外面: 体部一回転ナダ?、口縁部一回転ナダ 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	外面上部に突起を貼り付ける
135	G 9区	土師質土器・鍋	口径: 9.3cm 底定高: 3.0cm	外面: 体部一回転ナダ?、口縁部一回転ナダ 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	焼成や不良
136	G 9区	瓦質土器・鍋	口径: 9.3cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部一回転ナダ?、口縁部一回転ナダ 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	内面に握り算
137	G 9区	衛燒鏡・環跡	口径: 9.3cm	外面: 回転ナダ 内面: 回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	口縁部・内面に淡褐色の自然釉 内面に11条筋の笠り目
138	S X 2	瓦質土器・鍋	復元口径: 12.9cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部一回転正直、口縁部一回転コナダ 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	外面上部に突起を貼り付ける 内面にスス付有。施塗や不良
139	G 11区	土師質土器・瓶	口径: 6.7~6.9cm 底定高: 1.4cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転系切り? 内面: 底部ナダ、体部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	
140	G 11区	土師質土器・瓶	口径: 7.2cm 底定高: 1.7cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転ヘタリ切り? 内面: 底部中央ナダ、その他の回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	
141	H 11区	土師質土器・瓶	復元口径: 12.9cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転ヘタリ切り? 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	外底部に板目痕有
142	G 12区	柱状高台・土器	口径: 10.2cm 底定高: 4.7cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転系切り後ナダ? 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	底径 4.8cm の台がつく 丁寧な作り
143	G 12区	瓦質土器・鍋	口径: 9.3cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部一回転ナダ、底部一回転ナダ 内面: 体部不明、口縁部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を多く含む	外面上部に突起を貼り付ける 外底部にスス付有。施塗不良
144	G 12区	瓦質土器・鍋	口径: 9.3cm 底定高: 2.85cm	外面: 体部一回転正直、口縁部一回転ナダ 内面: 体部一回転ヘタ、口縁部一回転コナダ	淡褐色	砂粒を含む	外面上部に突起を貼り付ける 外底部にスス付有
145	G 12区	瓦質土器・鍋	口径: 9.3cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部一回転正直、口縁部一回転コナダ 内面: 体部一回転ヘタ、口縁部一回転コナダ	淡褐色	砂粒を含む	外面上部に突起を貼り付ける。外底部 のスス付有。H 11区 33.7cm 程度?
146	G 12区	瓦質土器・鍋	口径: 9.3cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部不明、口縁部一回転ナダ 内面: ボコナダ	淡褐色	砂粒を含む	外面上部に突起を貼り付ける 内面に隙り有
147	G 12区	瓦質土器・鍋	口径: 9.3cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部不明、口縁部一回転ナダ 内面: ボコナダ	淡褐色	砂粒を多く含む	内面に突起がつかない
148	G 13区	土師質土器・鍋	口径: 9.1cm 底定高: 2.85cm	外面: 口縁部一回転ナダ、その他の不明 内面: 見込ナダ、体部一回転ナダ	淡褐色	砂粒を含む	
149	G 13区	瓦質土器・鍋	復元口径: 36.0cm 現存高さ: 10.1cm	外面: 第一部折正直、口縁部一回転コナダ 内面: 体部不明、口縁部一回転コナダ	淡褐色 一部灰褐色	砂粒を含む	内面に壊れ日有。焼成不良 G 1区出土錐片と接合
150	H 11区	瓦質土器・鍋	口径: 9.1cm 底定高: 2.05cm	外面: 体部不明、口縁部一回転コナダ 内面: 不明(自然剥がかかる)	淡褐色	砂粒を多く含む	焼成や不良
151	H 11区	瓦質土器・鍋	口径: 9.1cm (11区)	外面: 回転ナダ、透明釉がかかる 内面: ボコナダ	淡褐色	砂粒を含む	表面は暗褐色の釉がかかる
152	H 12区	瓦質土器・鍋	口径: 9.1cm (体部)	外面: 回転ナダ、透明釉がかかる 内面: ボコナダ	淡褐色	砂粒を含む	全面上部に釉がかかる 内面に軽く剥げ有

第7表 1郭周辺出土土器類觀察表5

遺物 番号	出土 遺構	種類	計測値	調査	色調	胎土	備考
153	H12K	弥生土器・甕		外面：頭部不明、底部ヨコナダ 内面：頭部一ハラケズリ？、口縁部一ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に1条の浅い凹線
154	H13K	弥生土器・甕	腹元口径：12.9cm	外面：ヨコナダ	淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に1条の浅い凹線
155	H13K	弥生土器・甕	腹元口径：14.2cm	外面：ヨコナダ	淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に1条の浅い凹線
156	H13K	弥生土器・甕	腹元口径：14.7cm	外面：頭部不明、底部ヨコナダ 内面：頭部一ハラケズリ、底部ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に3条の浅い凹線
157	H13K	弥生土器・甕	腹元口径：15.9cm	外面：頭部一ハラケズリ、頭部一ヨコナダ 内面：頭部不明、底部ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部が大きく低張
158	H13K	弥生土器・甕 (底部)	底径：3.7cm	外面：不明 内面：ハラケズリ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外面上にスス付着？
159	H13K	弥生土器・甕 (底部)	腹元底径：5.9cm	外面：頭部一ハラケズリ、底部不明 内面：ハラケズリ？	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外面上に黒斑有
160	H13K	弥生土器・高杯 (底部)		外面：不明 内面：不明	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	頭部が底面有。地状や不良
161	H13K	弥生土器・杯	腹元口径：15.7cm	外面：体部一ハラミガキ、頭部一ヨコナダ 内面：ヨコナダ	底部暗褐色 外面：淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に3条の浅い凹線
162	H13K	弥生土器・杯	腹元口径：17.5cm	外面：体部一ハラミガキ、頭部一ヨコナダ 内面：ヨコナダ	底部暗褐色 外面：淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部に2条の浅い凹線
163	H13K	土師器・罐	推定口径：23.1cm	外面：不明	外面：淡赤褐色 内面：絶端灰褐色	砂粒を含む	大型の高台付罐。全体に草芽が着 しい。施成や不良
164	H10-11K (口縁部)	土師器・壺	推定底径：7.05cm	外面：ヨコナダ？	素赤褐色	砂粒を含む	全体的に施成している
165	H10-11K 11K	土師質土器・瓶	口径：6.2cm	外面：頭部一回転ナダ、底部一回転ヘタ切り 腰径：1.3cm	底部暗褐色 外面：淡赤褐色	粗砂を多く 含む	口縁部は脚状褐色
166	H10-11K 11K	土師質土器・瓶	口径：9.8cm 腰径：3.15cm	外面：頭部一回転ナダ、底部一未調製 内面：体部一回転ナダ、底部一ナダ	外面：淡赤褐色 内面：暗灰褐色	砂粒を多く 含む	施成が底面有
167	H10-11K 11K	土師質土器・瓶	腹元口径：10.5cm 腰高：2.8cm	外面：頭部一回転ナダ、底部一未調製 内面：底部中央一ナダ、その他の丁寧なナダ	底部暗褐色 外面：淡赤褐色	砂粒を含む	全体に草芽が着しい 施成不良
168	H10-11K 11K 腰鉢	東扇系乳芯器・ 腰鉢		外面：ヨコナダ 内面：ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	口縁部は脚状褐色 腰り目無
169	H10-11K 11K 腰鉢	東扇系乳芯器・ 腰鉢		外面：ヨコナダ	灰色	砂粒を含む	腰り目無
170	H10-11K (腰鉢)	亀山型・甕		外面：株子日のタクキ 内面：ナダ	灰色	砂粒を含む	外歯2-3帯に淡赤褐色の付着物有 椎子の直径は3mm×4mm
171	I-12K	土師質土器・瓶		外面：体部一不明、口縁部一ヨコナダ	外面：黄褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外表面にスス付着
172	I-12	土師質土器・瓶	腹元口径：9.6cm	外面：不明 内面：不明	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	全体に草芽が着しい 施成不良
173	I-12	東扇系系統器・ 腰鉢		外面：ヨコナダ 内面：体部一ナダ、口縁部一回転ナダ	淡灰色	砂粒を含む	腰り目無 施成不良
174	I-12	白磁・豆？	腹元口径：8.6cm 腰高：2.8cm	外面：体部一回転ナダ、底部一回転ヘタ切り 内面：不明(釉がかかる)	輪：透明 基地：白色	精緻	口縁部・外表面隙部に軸から
175	東切削 H14K	青磁・瓶		外面：不明(釉がかかる)	輪：暗緑色	精緻	外面上に墨文有
176	東切削 J14K	白磁・豆		内面：不明(釉がかかる)	輪：暗緑色	精緻	全体に墨文がかかる
177	東切削 J-9区	土師質土器・瓶	腹元口径：12.0cm 腰高：3.25cm	外面：不明 内面：不明(釉がかかる)	輪：透明 基地：淡黃色	精緻	全体に墨文がかかる
178	東切削 J10K	脚器・日々茶碗		外面：不明(釉がかかる)	輪：黒褐色	粗面	中国産とされる
179	J-10- 11K	土師質土器・杯	腹元底径：7.4cm	外面：体部一回転ナダ、底部一回転ヘタ切り	底部暗褐色	砂粒を多く 含む	外底部は板口有 施成や不良
180	J-10- 11K	土師質土器・杯	腹元口径：10.3cm 腰高：3.05cm	外面：体部一不明、口縁部一回転ナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	施成不良
181	J-10- 11K	瓦質土器・瓶		外面：体部一回転ナダ、底部一ナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を多く 含む	外面上に突起を貼り付ける 施成不良。全体的に厚誠
182	J-10- 11K	瓦質土器・瓶		外面：体部一不明、口縁部一ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外面上に突起を貼り付ける
183	J-10- 11K	瓦質土器・瓶		外面：体部一不明、口縁部一ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外面上に突起を貼り付ける
184	J-10- 11K	東扇系乳芯器・ 腰鉢		外面：体部一不明、口縁部一回転ナダ	底部暗褐色	砂粒を含む	腰り目無
185	J-10- 11K	東扇系乳芯器・ 腰鉢		外面：ヨコナダ	灰色	砂粒・小顆 砂粒を含む	腰り目無
186	J-10- 11K	備前焼・腰鉢		外面：ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒・小顆 砂粒を含む	外面上にヘラ状工具による傷。内面 に6条単位の縦り有。施成不良
187	J-10- 11K (口縁部)	衛前焼・甕		外面：ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	施成不良
188	切削I	瓦質土器・瓶		外面：体部一不明(釉がかかる)ナダ、口縁部一ヨコナダ 内面：ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	瓶底は淡赤褐色
189	瓦質I	瓦質土器・瓶		外面：体部一沿頸正直、口縁部一ヨコナダ	灰褐色	砂粒を含む	外面上に突起を貼り付ける 外表面部にスス付着
190	瓦質II	瓦質土器・瓶		外面：体部一沿頸正直、口縁部一ヨコナダ 内面：体部一不明、口縁部一ヨコナダ	外面：淡赤褐色 内面：淡赤褐色	砂粒を含む	外面上に突起を貼り付ける 外表面部にスス付着

第8表 1郭周辺出土土製品・瓦計測表

( )は現状値

造物番号	出土遺構	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
191	S B 2	土錐	2.9cm	1.1cm	—	3.25 g	淡橙灰色。ナデによる整形。中央に径1mmの孔
192	トレンチ3	土錐	2.5cm	1.25cm	—	3.52 g	淡橙褐色。ナデによる整形?。中央に径1mmの孔
193	G 12区ピット	轆の羽口	(5.1cm)	(4.5cm)	(2.15cm)	41.51 g	橙褐色。熱により黒変
194	G 12区	轆の羽口	(5.1cm)	(7.85cm)	(5.85cm)	150.95 g	淡茶灰色。熱により赤変
195	S K 39	軒丸瓦	(8.5cm)	(7.2cm)	2.35cm	91.70 g	橙褐色。瓦当面は巴文。内面調整不明
196	S K 30	丸瓦	(8.1cm)	(7.8cm)	1.8cm	149.08 g	淡黒褐色。凸格子目叩き。凹面布目痕
197	H 12区	丸瓦	(5.95cm)	(7.5cm)	2.25cm	116.39 g	暗褐色。凸面調整不明。凹面布目痕
198	1郭東側切岸	丸瓦	(8.5cm)	(7.25cm)	1.5cm	104.31 g	暗茶灰色。凸面調整不明。凹面布目痕

第9表 1郭周辺出土石製品計測表

( )は現状値

造物番号	出土遺構	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
199	トレンチ1	サイコロ	1.5cm	1.5cm	1.5cm	6.34 g	石英?
200	トレンチ1	不明	2.5cm	2.4cm	1.9cm	14.32 g	花崗岩?。径0.9cm, 深さ0.4cmの孔
201	S D 12	基石	1.65cm	1.5cm	0.5cm	1.71 g	石材不明
202	トレンチ3	基石	1.5cm	1.35cm	0.5cm	1.96 g	石材不明
203	トレンチ3	基石	1.55cm	1.4cm	0.3cm	1.01 g	石材不明
204	J 9区	石錐加工品	9.7cm	2.2cm	1.6cm	50.99 g	滑石。口縁部使用。外面にスス付着
205	J 9区	石錐	9.0cm	6.6cm	1.2cm	98.75 g	滑石。底部。外面にスス付着
206	S K 39	石錐加工品	8.2cm	3.45cm	1.0cm	43.33 g	滑石。体部を加工したもの
207	S K 9	滑石	10.5cm	(6.9cm)	1.7cm	236.69 g	滑石。石錐体部加工。径0.9cmの孔
208	G 9区	砥石	7.5cm	4.8cm	1.5cm	74.27 g	粘板岩?。4面を使用。
209	F 12区ピット	砥石	5.4cm	4.0cm	3.4cm	93.27 g	粘板岩?。断面三角で、3面使用

第10表 1 郭周辺出土金属製品計測表 1

( ) は現状値

遺物 番号	出土遺構	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
210	S X 1	鉄釘	—	0.5cm	0.6cm	4.81 g	完形
211	S X 1	鉄釘	(3.3cm)	0.65cm	0.65cm	(5.63 g)	先端部欠損
212	S X 1	鉄釘	(11.0cm)	1.0cm	1.0cm	(28.22 g)	先端部わずかに欠損
213	S X 2	鉄釘	(9.8cm)	2.0cm	1.1cm	(32.67 g)	頭部及び先端部わずかに欠損
214	S X 2	鉄釘	(5.0cm)	0.8cm	0.9cm	(9.65 g)	先端部欠損
215	S X 2	鉄釘	—	0.4cm	0.4cm	1.87 g	完形。先端部が曲線的に曲がる
216	S X 2	鉄釘	(3.0cm)	0.5cm	0.5cm	(2.18 g)	先端部欠損
217	S X 2	鉄釘	(3.7cm)	0.55cm	0.5cm	(3.07 g)	先端部欠損
218	S X 2	鉄釘	4.0cm	0.4cm	0.45cm	(1.40 g)	頭部の一節わずかに欠損
219	S X 2	鉄釘	5.8cm	0.65cm	0.6cm	5.66 g	完形。先端部が少し曲がる
220	S X 2	鉄釘	(5.8cm)	0.7cm	0.7cm	(7.05 g)	先端部わずかに欠損
221	S X 2	鉄釘	(5.9cm)	0.6cm	0.75cm	(9.69 g)	先端部欠損
222	S X 2	鉄釘	(5.75cm)	0.7cm	0.7cm	(7.55 g)	先端部欠損。少し曲がる
223	S X 2	鉄釘	(6.45cm)	0.65cm	0.6cm	(6.44 g)	先端部欠損
224	S X 2	鉄釘	(4.3cm)	0.9cm	0.7cm	(8.82 g)	先端部欠損。少し曲がる
225	S X 2	鉄釘	(6.2cm)	0.8cm	1.0cm	(14.57 g)	先端部わずかに欠損。少し曲がる
226	S X 2	鉄釘	(5.9cm)	1.0cm	0.8cm	(15.67 g)	先端部欠損
227	S X 2	鉄釘	(6.7cm)	1.0cm	0.7cm	(12.82 g)	先端部欠損
228	S X 2	鉄釘	(8.2cm)	1.2cm	0.7cm	(18.21 g)	先端部欠損
229	S X 2	鉄釘	—	0.9cm	0.7cm	(16.60 g)	先端部欠損。直角に曲がる。
230	S X 11	鉄釘	(2.9cm)	0.7cm	0.6cm	(4.65 g)	先端部欠損
231	S X 11	鉄釘	(5.9cm)	0.7cm	0.75cm	(10.18 g)	頭部及び先端部欠損
232	S X 11	鉄釘	(6.6cm)	0.75cm	0.8cm	(9.94 g)	先端部欠損
233	S X 11	鉄釘	—	0.9cm	1.0cm	(13.78 g)	頭部表面剥離。曲線的に曲がる
234	S X 11	鉄釘	(4.1cm)	0.9cm	0.9cm	(12.83 g)	先端部欠損
235	S X 11	鉄釘	(5.4cm)	1.1cm	1.0cm	(16.55 g)	先端部欠損
236	S X 13	鉄釘	(6.65cm)	0.6cm	0.5cm	(5.26 g)	先端部わずかに欠損
237	S K 5	鉄釘	—	0.6cm	0.7cm	4.90 g	完形。直角に曲がる
238	S K 30	鉄釘	(4.4cm)	0.8cm	0.65cm	(5.34 g)	先端部欠損
239	S K 33	鉄釘	(5.6cm)	1.0cm	0.7cm	(10.48 g)	先端部欠損
240	S K 35	鉄釘	—	0.6cm	0.6cm	4.96 g	完形。直線的に曲がる
241	S K 35	鉄釘	(4.1cm)	0.75cm	0.8cm	(7.40 g)	先端部欠損
242	S K 35	鉄釘	—	1.05cm	0.9cm	(17.26 g)	ほぼ完形。直角に曲がる
243	S K 36	鉄釘	(4.5cm)	0.6cm	0.75cm	(5.28 g)	先端部欠損。少し曲がる
244	S K 36	鉄釘	—	0.7cm	0.7cm	5.95 g	完形。曲線的に曲がる。
245	S K 36	鉄釘	—	0.65cm	0.6cm	7.46 g	完形。直線的に曲がる。
246	S K 36	鉄釘	(4.6cm)	0.75cm	0.6cm	(9.26 g)	先端部欠損
247	S K 36	鉄釘	(8.45cm)	0.9cm	0.85cm	(14.45 g)	先端部欠損
248	S K 36	鉄釘	—	0.7cm	0.9cm	(17.14 g)	先端部欠損。直角に曲がる。
249	S K 37	鉄釘	(3.3cm)	0.75cm	0.55cm	(2.73 g)	頭部欠損
250	S K 38	鉄釘	(3.5cm)	0.75cm	0.95cm	(4.79 g)	先端部欠損
251	S K 39	鉄釘	(4.4cm)	1.0cm	0.9cm	(7.21 g)	先端部欠損
252	S K 39	鉄釘	(4.15cm)	0.65cm	0.7cm	(5.75 g)	先端部欠損
253	S K 39	鉄釘	—	1.4cm	0.95cm	(14.78 g)	先端部欠損。曲線的に曲がる
254	S K 39	鉄釘	(3.5cm)	0.6cm	0.5cm	(3.84 g)	先端部欠損
255	S K 39	鉄釘	—	0.75cm	0.75cm	(5.79 g)	先端わずかに欠損。曲線的に曲がる
256	S K 40	鉄釘	4.45cm	0.7cm	0.7cm	5.74 g	完形
257	S K 40	鉄釘	—	1.0cm	0.9cm	(12.42 g)	頭部欠損。直線的に曲がる
258	S K 40	鉄釘	(6.2cm)	0.95cm	1.1cm	(14.61 g)	先端部欠損
259	S K 41	鉄釘	(4.3cm)	0.7cm	0.5cm	(3.53 g)	頭部欠損

第11表 1 郭周辺出土金属製品計測表2

( ) は現状値

遺物番号	出土遺構	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
260	S K41	鉄釘	(4.65cm)	0.85cm	1.1cm	(7.50 g.)	先端部欠損。頭部も欠損の可能性有
261	G12区ビット	鉄釘	(7.0cm)	1.0cm	0.9cm	(15.62 g.)	先端部欠損
262	H11区ビット	鉄釘	(6.1cm)	0.6cm	0.65cm	(8.93 g.)	先端部わずかに欠損
263	トレンチ3	棒状鉄製品	(5.55cm)	1.25cm	0.5cm	(10.20 g.)	先端部欠損。頭部が厚くなる
264	G12区	鉄製リング	3.7cm	2.8cm	1.9cm	24.37 g	厚さ0.35~0.8cmの板を曲げたもの
265	F10区	鉄製金具	3.9cm	2.8cm	1.2cm	(10.26 g.)	厚さ0.4cmの板を加工。ピンで留める
266	S K36	鉄製金具	4.4cm	3.8cm	1.2cm	36.36 g	厚さ0.4cmの板を加工し、紙を付ける
267	G12区	鉄製金具	(5.0cm)	2.0cm	1.3cm	(8.79 g.)	厚さ0.4cmの板を加工。ピンで留める
268	S K36	鉄製金具	5.0cm	2.5cm	2.25cm	17.70 g	厚さ0.5cmの板を加工し、紙を付ける
269	S X 2	鉄製掛金	7.9cm	3.7cm	0.85cm	29.64 g	後部に環が付く
270	S K36	鉄製金具	12.4cm	1.5cm	1.9cm	57.52 g	内面に2つピン状のものが付く
271	G13区	鉄鎌	(4.5cm)	1.9cm	1.0cm	(9.55 g.)	軸部欠損
272	G12区ビット	鉄鎌	(5.7cm)	(4.7cm)	0.95cm	(30.01 g.)	先端部及び軸部欠損
273	トレンチ1	鉄鎌	15.2cm	復元7.0cm	1.6cm	(45.28 g.)	先端部片側欠損
274	トレンチ1	刀状鉄製品	(7.0cm)	(2.4cm)	0.3cm	(10.89 g.)	刀を作り出しているが、全体に薄い
275	S K36	刀状鉄製品	(14.6cm)	2.1cm	0.6cm	(103.17 g.)	先端部欠損。刃部は鋭くない
276	S K36	不明鉄製品	(17.3cm)	1.85cm	0.9cm	(92.50 g.)	先端を少し尖らせるが、観くはない
277	トレンチ3	鉄製兜片	(9.8cm)	(5.9cm)	1.4cm	(34.34 g.)	厚さ0.15cmの板を紙で繋ぎ合させる
278	S X 1	鉄製兜片	(9.2cm)	(3.1cm)	1.3cm	(25.65 g.)	厚さ0.15cmの板を紙で繋ぎ合せる
279	S B 1	板状鉄製品	6.9cm	3.3cm	0.25cm	(19.33 g.)	一部欠損
280	S K36	板状鉄製品	6.7cm	2.25cm	0.7cm	20.85 g	厚さが一定ではない
281	S K 5	板状鉄製品	3.6cm	2.7cm	0.25cm	7.21 g	斜めに折れ曲がる
282	S K35	板状鉄製品	4.7cm	2.25cm	0.2cm	7.47 g	
283	S K36	板状鉄製品	3.8cm	2.5cm	0.3cm	11.13 g	
284	F 9区	板状鉄製品	4.6cm	2.7cm	0.3cm	13.73 g	
285	S K36	不明鉄製品	(9.7cm)	4.3cm	0.8cm	(36.69 g.)	端部一部欠損。L字状
286	S K37	不明鉄製品	(5.55cm)	(2.6cm)	0.65cm	(9.85 g.)	先端を2つに分け、尖らせる
287	S K35	銅製懸仏	5.75cm	3.6cm	1.7cm	33.33 g	取り付けのための孔有
288	S X 1	銅製リング	4.6cm	4.4cm	0.4cm	3.67 g	厚さ0.1cmの板を加工。若干曲がる
289	F 12区	船玉	1.1cm	1.1cm	1.1cm	3.94 g	数か所孔有
290	G 12区	銅製金具	(1.95cm)	(1.65cm)	1.0cm	(6.92 g.)	厚さ0.2cmの板を加工。紙が付く
291	G12区ビット	不明銅製品	(2.9cm)	1.5cm	0.85cm	(1.72 g.)	厚さ0.1cmの板を加工。小孔有
292	S B 1	不明銅製品	2.95cm	(2.65cm)	1.2cm	(7.15 g.)	
293	H11区ビット	不明銅製品	(3.6cm)	(2.3cm)	1.3cm	(7.60 g.)	

第12表 1 郡周辺出土古錢一覧表

遺物番号	出土遺構	銭種	直径	重量	備考
294	S B 2	開元通寶	2.55cm	(2.20g)	初鋤621年。端が一部欠ける
295	S X 2	開元通寶	2.4cm	3.57g	初鋤621年
296	S X 2	開元通寶	2.4cm	3.24g	初鋤621年
297	S K35	開元通寶	2.45cm	2.18g	初鋤621年
298	F11区ピット	開元通寶	—	(1.20g)	初鋤621年。欠損部があるため怪不明
299	トレンチ3	開元通寶	2.2cm	(2.17g)	初鋤621年。端がかなり欠ける
300	S X 2	景德元寶	2.3cm	3.06g	初鋤1004年
301	S X 2	祥符通寶	2.4cm	3.46g	初鋤1009年
302	I 郡東側切岸	祥符通寶	2.5cm	2.99g	初鋤1009年
303	S X 2	天聖元寶	2.45cm	3.40g	初鋤1023年。篆書
304	J 9区(切岸)	景祐元寶	2.45cm	3.45g	初鋤1034年。篆書
305	S X 1	皇宋通寶	2.5cm	(2.77g)	初鋤1038年。篆書。端が一部欠ける
306	S X 2	皇宋通寶	2.4cm	3.70g	初鋤1038年。真書
307	S X 2	皇宋通寶	2.3cm	1.46g	初鋤1038年。真書
308	S X 2	皇宋通寶	2.5cm	2.08g	初鋤1038年。真書
309	S X 2	皇宋通寶	2.5cm	3.47g	初鋤1038年。真書
310	S X 2	皇宋通寶	2.35cm	2.60g	初鋤1038年。真書
311	S X 2	皇宋通寶	2.4cm	3.41g	初鋤1038年。篆書
312	S X 2	嘉祐元寶	2.4cm	3.69g	初鋤1056年。篆書
313	S K35	嘉祐通寶	2.3cm	(1.96g)	初鋤1056年。真書。端が一部欠ける
314	S X 2	熙寧元寶	2.3cm	4.05g	初鋤1068年。真書
315	S K35	熙寧元寶	2.45cm	(3.38g)	初鋤1068年。真書。端が一部欠ける
316	G 9区	熙寧元寶	2.45cm	2.81g	初鋤1068年。真書
317	S K35	熙寧元寶	2.3cm	3.26g	初鋤1068年。篆書
318	G 8区	熙寧元寶?	2.35cm	2.02g	篆書
319	S X 2	元豐通寶	2.2cm	2.48g	初鋤1078年。行書
320	F 9区	元豊通寶	2.3cm	1.78g	初鋤1078年。行書
321	S X 2	元豊通寶	2.4cm	3.30g	初鋤1078年。篆書
322	S K35	元豊通寶	2.4cm	(2.36g)	初鋤1078年。篆書。一部欠損
323	G 12区	元豊通寶	2.3cm	(1.63g)	初鋤1078年。篆書。端が一部欠ける
324	S K35	元祐通寶?	2.4cm	(1.76g)	篆書。一部欠損
325	S X 2	元祐通寶	2.3cm	3.10g	初鋤1086年。行書
326	S X 2	元祐通寶	2.4cm	3.38g	初鋤1086年。篆書
327	S X 2	紹聖元寶	2.35cm	3.39g	初鋤1094年
328	S X 2	元符通寶	2.4cm	3.70g	初鋤1098年。行書
329	S X 2	元符通寶	2.3cm	3.19g	初鋤1098年。篆書
330	S X 1	大觀通寶	2.4cm	(2.56g)	初鋤1107年
331	S X 2	大觀通寶	2.4cm	3.32g	初鋤1107年
332	S B 2	政和通寶	2.4cm	2.19g	初鋤1111年。分楷
333	S X 2	政和通寶	2.4cm	3.48g	初鋤1111年。篆書
334	S X 2	宣和通寶	2.4cm	3.11g	初鋤1119年。篆書
335	S X 11	宣和通寶	—	(1.20g)	初鋤1119年。分楷
336	S X 2	淳熙元寶	2.2cm	1.80g	初鋤1174年。真書
337	I 12区	寬永通寶	2.45cm	2.93g	
338	G 12区	寬永通寶	2.3cm	(1.04g)	約1/2欠損

## V 遺構と遺物（南東尾根）

### 1 平坦面

尾根頂部中央に、長さ 18.9m、幅 7.4m、高さ約 1.5m の小山を削り残しており、その周囲で平坦面 5 箇所を確認した。

#### (1) 平坦面 1 (第 60 図、図版 46-a)

尾根頂部小山の西側の平坦面である。小山の南側で平坦面 2 とつながっている。長さ約 19m、幅 1.6~3.4m である。小山の北端あたりから北側の尾根頂部にかけては、尾根線から東西両方向に向かって緩やかに下っており、人工的に造成した痕跡は見られない。この部分が平坦面 1・2 の北端と考えられる。平坦面 1 の北端 (SX 2 の北側) で、高さ 0.2~0.3m の段差を形成しており、一段下がった平坦面 1 で土師質土器の椀 (342) が出土した。

平坦面の中央で、焼土面 SX 2 を検出した。

#### (2) 平坦面 2 (第 60 図、図版 46-b)

尾根頂部小山の東側の平坦面である。小山の南側で平坦面 1 とつながっている。小山の北端あたりが平坦面の北端と考えられ、長さ約 20m、幅 6.4~8.6m の比較的広い平坦面である。東斜面の角度は 60° と急傾斜で、切岸をなしている。

平坦面の南半で土坑 SX 1 と溝状遺構 SD 1 を検出した。

#### (3) 平坦面 3 (第 60 図、図版 46-c)

平坦面 2 の南側 (尾根先端側) に、低く緩やかな傾斜の段差を介して存在する平坦面である。東側と南側が調査区外へ続いている。現状で長さ約 13m、幅 6.4m である。平坦面 1 とは南に緩やかに下る幅 2.0m の通路状部分でつながっている。平坦面 1・3 の西斜面は傾斜角度が 35~40° と比較的急な傾斜で切岸状を呈する。

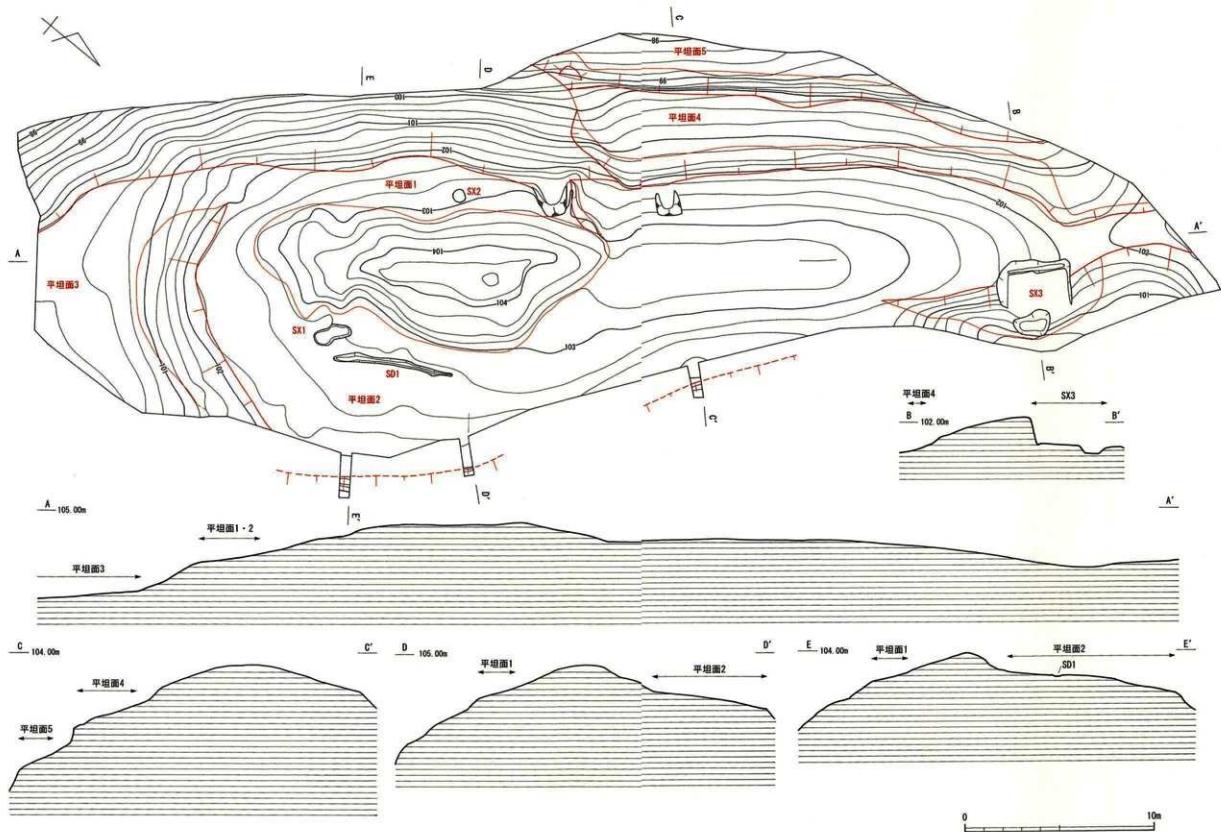
#### (4) 平坦面 4 (第 60 図、図版 47-a・b)

尾根の北西部に位置する平坦面である。尾根頂部とは緩やかな段差を介し、その標高差は約 3m である。形態は帯状で、長さ約 21m、幅 3.6m である。東から西に緩やかに傾斜している。

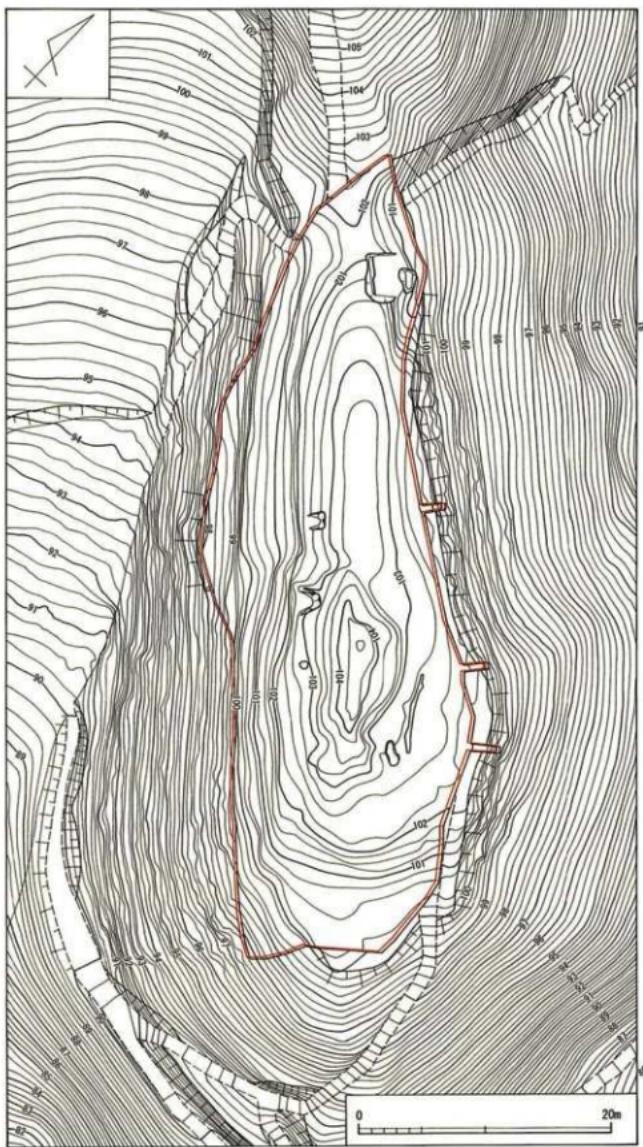
遺物は瓦や陶磁器類が若干出土しているが、遺構に伴う可能性は低く、後世のものと見られる。

#### (5) 平坦面 5 (第 60 図、図版 47-b)

平坦面 4 の北西に位置する平坦面である。尾根頂部との標高差 5m、平坦面 4 との標高差 1.2m で、平坦面 4 との間には傾斜角度 60° の急斜面となる。形態は帯状で、東側が調査区外となり、現状で長さ約 16m、幅 1.2~1.8m である。東から西に緩やかに傾斜している。平坦面の西斜面は



第60図 南東尾根構造配置図 (1:200)



第61図 南東尾根地形図 (1:400)

傾斜角度約60°と急峻な崖状で切岸をなしている。

## 2 溝状遺構

### (1) SD1 (第64図、図版48-a)

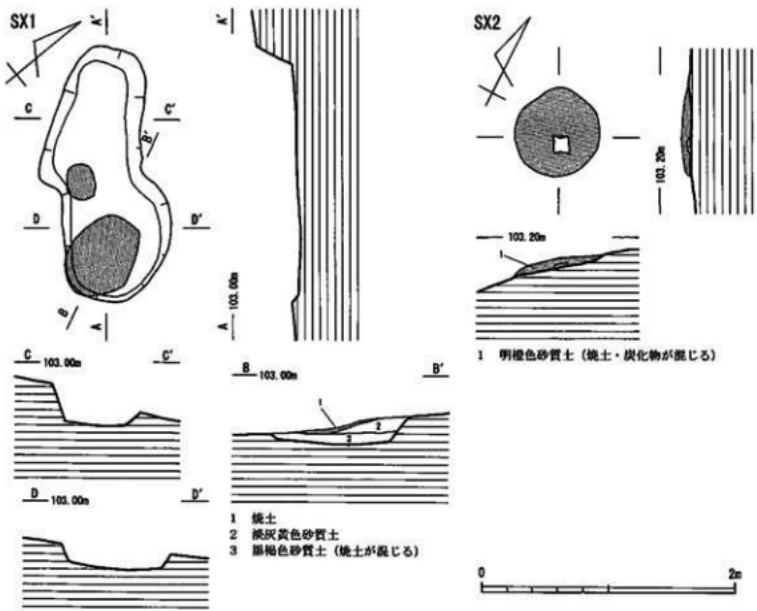
平坦面2の南半に位置する南北方向の溝状遺構である。南0.6mにはSX1がある。長さ6.36m、幅0.15~0.52m、深さ0.04cmの深い溝である。底面は北から南に向かって下っている。

## 3 その他の遺構

### (1) SX1 (第62図、図版47-c, 48-a)

平坦面2の南半に位置する土坑である。平面形は不整橢円形で、南東部に焼土を伴う。長径2.02m、短径0.87m、深さ0.31mである。焼土は2か所あり、中央南寄りのものが長径0.29m、短径0.23m、南側のものが長径0.70m、短径0.52m、厚さ0.04mである。

### (2) SX2 (第62図、図版48-b・c)



第62図 南東尾根SX1・2実測図 (1:40)  
(アミ目は焼土範囲)

平坦面 1 のほぼ中央で検出した焼土面である。平面形は円形で、長径 0.70m、短径 0.67m、厚さ 0.08m である。

中央付近の焼土下から平瓦（344・345）が出土した。

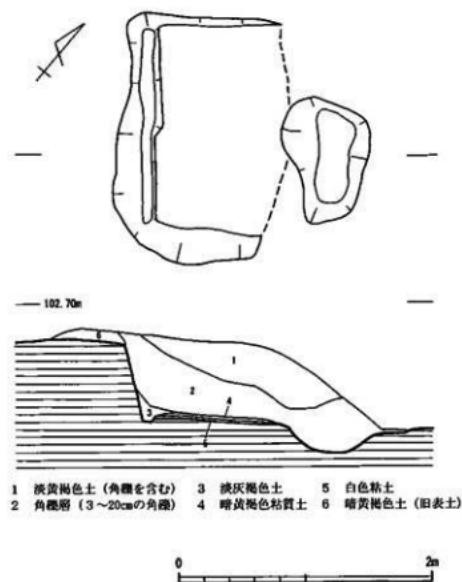
### （3）SX3（第63図、図版49）

尾根北部東側に位置する遺構である。平面形は長方形で、東側が斜面にかかり、底面が流れていると考えられ、現状で長さ 3.89m、幅 2.75m である。底面には約 5cm の厚さの白色粘土を貼っている。また山側である西側壁際には、長さ 3.07m、幅 0.16~0.26m、深さ 0.06cm の溝が掘られている。底面は山側である西側から谷側である東側に向かってわずかに傾斜している。東側には不整形の長径 2.01m、短径 1.40m、深さ 0.37m の土坑が接している。

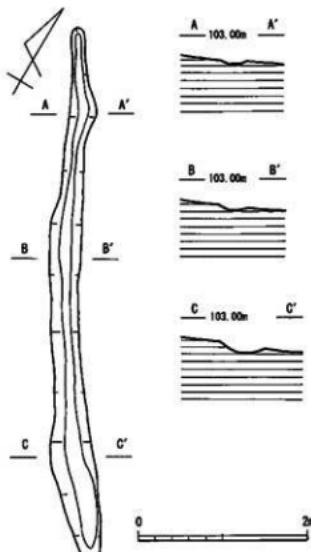
遺物は鉄釘や用途不明銅製品（346）が出土している。鉄釘は細片のため、図示できなかった。

### 4 遺物（第65図、図版50）

土師質土器の椀（342）、瓦質土器の鍋（343）、平瓦（344・345）、用途不明銅製品（346）が出



第63図 南東尾根 SX3 実測図（1:40）



第64図 南東尾根 SD1 実測図（1:60）

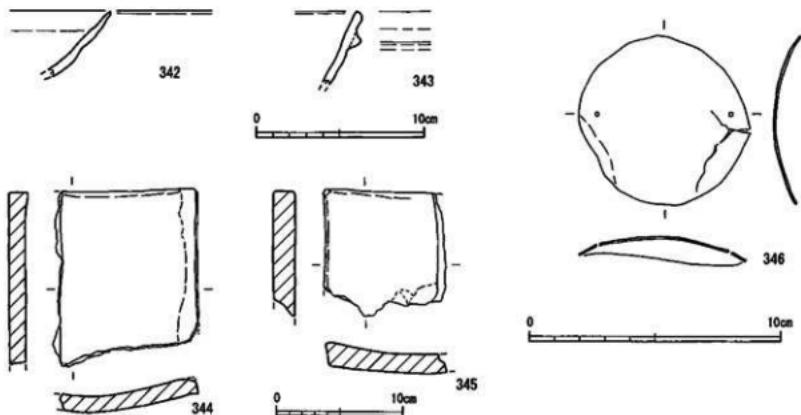
土した。

342 は平坦面 1 から出土した土師質土器の楕である。体部は直線的に立ち上がる。口径 16 cm 前後の大型品と推定されるが、形に歪みがあるため、正確な数値は不明である。

343 は小山西斜面から出土した瓦質土器の鍋である。体部は直線的に立ち上がり、外面に突帯を貼り付ける。

344・345 は SX 2 から出土した平瓦である。調整は凹面・凸面ともナデと思われる。

346 は SX 3 から出土した用途不明銅製品である。皿状円盤で、一部ひび割れや変形した部分もあるが、ほぼ完形である。両端付近に径 1.5 mm の小孔があることから、皿を伏せた状態で何かに取り付けたものと思われる。



第65図 南東尾根出土遺物実測図 (1:3, 344・345は1:4, 346は1:2)

第13表 南東尾根出土土器類観察表

遺物番号	出土遺構	種別・断面	計測値	調査	色調	胎土	備考
342 平坦面 1	土師質土器・楕			外側：体部下部一不明。その他の一部ナゲ 内側：体部下部一不明。その他の一部ナゲ	淡黄灰色	砂粒を含む	口径 16 cm の大型品と推定される。 成形やや不良
343 瓦質土器 斜面	瓦質土器・鍋			外側：体部一不明。口縁部一部コナゲ 内側：不明	淡黄灰色	砂粒を含む 削出しは淡黄灰色	外面に突帯を貼り付ける 便成不良

第14表 南東尾根出土土器・銅製品計測表

( ) は現状値

遺物番号	出土遺構	種別	長さ	幅	厚さ	重量	備考
344	S X 2	平瓦	(9.9cm)	(9.5cm)	1.8cm	248.68 g	淡黒灰色。凹面・凸面ともナデ?
345	S X 2	平瓦	(13.9cm)	(11.2cm)	1.5cm	352.27 g	淡黒灰色。凹面・凸面ともナデ?
346	S X 3	皿状銅製品	径6.6cm	高さ1.3cm	0.1cm	12.97 g	小孔が有り、何かに取り付けたもの

## VI まとめ

家ノ城跡は、14世紀中葉を中心とする中世の山城である。ここでは調査成果を整理して、本遺跡について若干の考察を行い、まとめとしたい。

### (1) 南東尾根について

第1・2次発掘調査を実施した南東尾根では、小規模な平坦面5箇所などを検出したが、建物跡や堀切・堅堀などの山城に通常見られる防御施設は確認できなかった。しかし、平坦面2・3の東斜面は急峻で切岸をなし、平坦面1・3～5の西斜面は切岸状を呈している。また、平坦面3は木梨川の谷に面した丘陵の先端にあり、谷の交通をおさえる位置にあることや、南東尾根は1郭から尾根続きであることなどから、これらの平坦面や急斜面が山城の造成に伴うものである可能性は高いといえる。

S X 3は簡便な構造ではあるが、底面に粘土を貼り、集水地点に隣接して落ち込みがあることなどから、水を集める施設であったと推測できる。

### (2) 1郭周辺の遺構について

1郭では多くの遺構を検出した。1郭の中央が高く残り、櫓台などがあった可能性もある。建物跡は5棟復元できたが、多くのピット、礎石と思われる上面が平らな石があることから、本来の建物数はさらに多かったものと思われる。建物の建替え、後世の削平により、失われた柱穴や礎石があるものと推測される。本書では、確実と思われる建物跡5棟のみを掲載した。

建物跡は重なっているものが多く、建物の主軸方向はS B 1・2・5が北東—南西方向で、S B 3・4が南北方向である。建物跡の変遷は、S B 1→S B 4→S B 5、S B 2→S B 3で、3時期の移り変わりが考えられる。同時期に建てられた建物は主軸を揃えるのが一般的であるため、主軸方向の違いや建物の重複から、S B 1・2→S B 3・4→S B 5という変遷も考えられる。

底に粘土を貼った長方形土坑が6基検出されている。水と関係があるものと思われる。丘陵頂部であるため、井戸を掘っても水が湧かない。また、地山の岩盤が広がる部分が多く、そのままでは水が溜まらないことから、土坑の底に粘土を貼って水を溜めていた可能性が高い。長方形土坑も主軸方向の違いや重複から2時期以上が考えられる。主軸方向はS K 2・4が南北方向、S K 8が東西方向、S K 5・11が北東—南西方向、S K 12が北北東—南南西方向である。重複から想定される時期差はS K 11→S K 8・9である。さらに、長方形土坑の中には建物跡と重なるものもあり、S X 2・S B 2→S K 5→S B 3という3時期の遺構の変遷が確認できる。これらのことから建物跡と同じく、主軸が北東—南西方向(S K 5・11)→主軸が南北あるいは東西方向(S K 2・4・8)へと変遷したことが考えられる。なお、曾川1号遺跡J地区では底面及び壁面に漆喰を塗った近世から現代にかけての土坑が数多く検出されており、水溜と考

えられている。本城跡でもSK21の底面及び壁面に漆喰が塗られており、17世紀以降と見られる備前焼系の擂鉢が出土している。このことから中世の水溜は粘土を貼っていたが、近世以降は粘土にかわって漆喰を使用するようになったことが考えられる。

1郭北部中央で検出した3基並ぶ円形土坑（SK10・13・14）は、SK14の底面に備前焼の壺が据え置かれていることから水甕であった可能性もある。しかし、3基は一直線に並ぶのではなく、中心線がずれていることから、同時期に存在したのではなく、時期が異なる可能性がある。

### （3）出土遺物について

本城跡から比較的まとまった量の遺物が出土した。<sup>(2)</sup> 多量の土師質土器の皿・椀・青磁の水注？、白磁の四耳壺、青白磁の梅瓶、鐵鑓・兜片などの武具類、鐵滓、轆の羽口、炉壁など特徴的な遺物が出土している。さらに、中世だけではなく、弥生時代から近現代の遺物まで出土している。ここでは代表的な遺物について若干の考察を行う。

#### ① 弥生土器

弥生土器が1郭のH13区から10点、トレンチ1から2点出土している。弥生時代後期中葉（備後V-2様式）を中心とする。遺構を確認することはできなかったが、弥生時代の遺跡があり、城の造成時に壊されたものと思われる。

#### ② 柱状高台土師器

柱状高台土師器が2点（106・142）出土した。<sup>(3)</sup> ともに遺構からの出土ではないが、楕形で、下に円盤状の台がつく。柱状というよりは、椀に円盤状の台を取り付けた器形である。底部切り離し技法はいずれも回転糸切りである。柱状高台については八峰興氏の論考があり、分類や年代・使用方法などについて考察が行われている。<sup>(4)</sup>

柱状高台は広島県内でこれまでに富士神社南<sup>(5)</sup>（鷄子原遺跡）（山県郡北広島町大朝）、須倉遺跡<sup>(6)</sup>（同町有田）、曾川2号遺跡<sup>(7)</sup>（尾道市御調町大町）の3遺跡で出土している。富士神社南、須倉遺跡出土のものは皿形で、台部は円柱状で垂直方向に立ち上がる。切り離しはいずれも回転糸切りである。富士神社南は窯道具が出土していることから窯跡と考えられている。多量の土器が出土しているが、その内的一部が報告書の付録として掲載されている。底部に焼成前穿孔が行われているもの8点、底部に穿孔されていないもの5点が掲載されている。須倉遺跡では底部に焼成前穿孔が行われているものが3点出土している。曾川2号遺跡では4点出土しており、皿形で台部は内傾して立ち上がる。底部の穿孔はない。切り離しは回転糸切りである。灯明・儀式などの補助的な器として使用され、他の土器とともに一括して土坑に廻棄されたと考えられている。

八峰氏は11世紀に柱状高台が成立し、12世紀末から13世紀前半に上部が皿状から杯（椀）状に変化し、その後衰退すると考えている。このことから本城跡出土のものは城に伴うものではなく、築城以前のものと考えられる。時期としては八峰氏が指摘するように12世紀末～13世紀の可能性が高い。柱状高台の形態としてはさまざまなものがあるが、その用途は日常生活に使用さ

れたものではなく、儀式に使用されたものと考えられる。時代は異なるかもしれないが、古瀬戸の仏供に本城跡出土の柱状土師器とよく似た形態のものがある。本城跡出土のものは仏具ではないにしろ、祭祀を含む儀式に使われた可能性がある。

なお、本城跡から高台の付いた大型の土師器の椀が2点(49・163)出土している。大型の土師器の椀も出土例は少ないとから日常生活に使用された可能性は低く、柱状高台土師器と同様の性格をもって儀式に使用された可能性が高いと思われる。

このように柱状高台土師器や大型の土師器の椀の出土からみて、周囲がよく見渡せるこの丘陵頂部(山頂)は城が造られる以前から儀式が行われるような地政学上重要な場所であった可能性がある。このことから、地域の有力者がこの場所を押えることはこの地域を支配するうえで大きな意義があったと考えられる。

### ③ 土師質土器

本城跡から土師質土器が多数出土している。備後地域の中世土器は、草戸千軒町遺跡での成果が基準となっている。<sup>(18)</sup> 底部の切離し技法が確認できるものは、皿25点のうち回転糸切りのものが8点、回転ヘラ切りのものが17点で、杯7点のうち回転糸切りのものが1点、回転ヘラ切りのものが6点である。皿・杯ともに回転ヘラ切りのものが圧倒的に多い。近隣の調査では、いずれも本城跡の北側にある御調町内の末近城跡の皿は回転糸切り、牛の皮城跡の皿はほとんどが回転ヘラ切りで、曾川1号遺跡の皿は回転ヘラ切り、曾川2号遺跡の皿は回転ヘラ切りで、杯は回転糸切りであることが報告されている。近隣の遺跡でも回転ヘラ切りの皿が多いことがわかる。皿は1点(H11区出土141)のみ口径12.9cm、器高2.05cmの大型のものがあるが、残りは口径5.5~7.2cm、器高0.75~1.9cmの小型のものである。141は皿AIIで草戸IV期後半(15世紀末~16世紀初頭)に位置付けられる。

草戸II期になると無高台の椀Aが加わる。II期は椀の口径の小型化や高台が付く椀Bの出土量の減少などにより、II期前半(14世紀前半の古い段階)、II期後半(14世紀前半の新しい段階~14世紀中葉)に分けられる。II期後半はさらに古段階、新段階、新段階、最新段階に細分されている。椀Bの出土量は次第に減って2期後半最新段階にはほとんど出土しなくなる。本城跡の土師質土器椀Bは、J9区の東切岸から出土した177のみで、復元口径12.0cmと比較的大型で、他の土師質土器よりも古い可能性がある。しかし、高台が粘土紐を貼り付けただけの雑な作りのため断定はできない。外面底部中央を大きく壅ませた土師質土器椀Cの可能性があるものはいくつかあるが、確実なものはSX1出土の32のみである。口径9.7cm、器高3.4cmである。外面底部中央をわずかに壅ませたものは多くあるが、器高が低く椀Aの範疇に入るものが多い。椀Aのうち口径がわかるものは41点で、口径8.2~10.5cm、器高1.95~3.8cmで、口径の平均9.25cmである。SX1から椀Aが20点まとめて出土しており、その平均は8.92cmである。SX1以外の平均が9.57cmであり、SX1の椀Aが小型であることがわかる。草戸II期後半最新段階の椀Aの口径は9.2~9.6cm程度であることから本城跡の土師質土器の大部分はこの時期に位置づけることができよう。

草戸Ⅱ期後半の曆年代を示す資料としては、尾道市浄土寺阿弥陀堂龜腹出土の土師質土器があり、阿弥陀堂造営の貞和元（1345）年を前後する時期に比定されている。椀Aが25点出土しており、口径の平均値9.5～9.6cm程度である。これは草戸Ⅱ期後半最新段階に相当する寸法規格であることから、Ⅱ期後半最新段階は14世紀中葉と考えられている。

なお、草戸Ⅲ期（15世紀前半～中葉）になると椀が消滅し、大小の皿の組み合わせが出現する。本城跡では大型の皿がほとんどないことから15世紀前半には城としての機能は失われていた可能性が高い。

#### ④ 瓦質土器

備後地域（広島県東部）で多く出土する土師質土器の鍋が本城跡では少なく、瓦質土器の鍋が多い。瓦質土器の鍋は外面に突帯を貼り付けており、草戸千軒町遺跡の分類では鍋Fにあたる。安芸地域（広島県西部）から出土することが多く、数量的には少ないが草戸千軒町遺跡や尾道遺跡でも鎌倉時代後期以降出土している。

S X13出土の瓦質土器の擂鉢（50）は口縁端部を平坦にし、内側に突出することから防長系の可能性がある。14世紀以降の遺物と考えられる。

#### ⑤ 国産陶器

国産陶器としては、備前焼が最も多く出土しており、壺と擂鉢がある。壺の口縁部の玉縁は幅広でなく丸い。擂鉢の口縁端部の平坦面も幅広ではなく、口縁部を平らに切った形状である。間壁忠彦氏編年のⅢ期にあたり、13世紀代と考えられる。本城跡よりも古いもので、伝世品が使用された可能性がある。

常滑焼の出土量は少なく、破片数で9点、図示できたものは2点である。口縁部の拡張はそれほど大きくない。草戸千軒町遺跡の貯蔵容器は「Ⅱ期後半になると備前の比率が急速に高くなり、それに追われるようにならん山・常滑の比率は低下していく。」との指摘があり、本城跡でもそれを反映して常滑焼の出土量が少ないものと思われる。

瀬戸焼は3点出土している。古瀬戸の入子が1点、古瀬戸の卸皿が2点である。S D17出土97の入子は前期様式<sup>[12]</sup>で13世紀代、SK39出土93の卸皿は中期様式で14世紀前半、トレンチ2出土112の卸皿は口縁端部が内側が突出していることから93より新しく、後期様式で14世紀中頃から後半と考えられる。

擂鉢は瓦質土器、東播系須恵器、備前焼の3種類が認められ、当時の流通を考えるうえで貴重な資料である。なお、東播系須恵器には内面に擂り目がないが、擂り目がある鉢と同じ用途に使用されたと思われる擂鉢に含めた。

#### ⑥ 输入陶磁器

輸入陶磁器の出土点数は少なく、そのなかで口縁部が残存するものはさらに少ない。S X2出土47は内外全面に施釉され、口縁部を鉗状に折り曲げる皿で、森田・横田編年の龍泉窯系青磁皿類の碗・皿に相当するものと思われる。トレンチ3出土130は片彫りによる蓮弁文を巡らせる青磁碗で、森田・横田編年の龍泉窯系青磁碗I～5類に相当する。H14区1郭東側切岸出土175も





蓮弁文を巡らせる青磁の碗であるが、蓮弁が幅広のものから沈線に近くなっている、130よりも新しいものと思われる。1郭4次調査区出土174は口縁部の釉を搔き取る口禿の白磁で横田・森田編年の白磁IX類の碗・皿に相当すると思われる。その他、SB2出土1・SD11出土96の青白磁の梅瓶、SK36出土82の青磁の水注と思われるもの、トレンチ2出土114・H11区出土152の白磁四耳壺、J10区1郭東側切岸出土178の天目茶碗なども出土している。数は少ないがこうした奢侈品が出土している。

#### ⑦土器類の組成

1郭周辺出土の中世土器類の組成を、第15表は遺構毎、第16表は全体についてまとめたものである。出土点数とともに、重量についても記してみた。一般的に備前焼などの陶器は大きい製品が多く、重量があることから、点数による比率と重量による比率ではかなり差が出る傾向にある。全体の出土点数を見ると土師質土器が80.2%と圧倒的に多いのに対し、重量では国産陶器が57.2%と半数以上を占める。これに対し、輸入陶器は出土点数で1.3%、重量で0.9%にしかすぎない。青磁と白磁の比率はそれほど違はずなく、少数ながら青白磁、天目も出土している。

#### ⑧金属製品

本城跡から、鉄製品を中心に多くの金属製品が出土している。鉄錠・兜片の出土は、山城の性格を物語るものである。なお、鉛玉が出土しているが、城よりも新しいものと考えられる。

中国地方の中世城館跡から検出された鍛冶遺構や鍛冶関連遺物については、小都隆氏によってまとめられており<sup>(14)</sup>、広島県内でも多くの中世城館跡で、鍛冶遺構や鍛冶関連遺物が報告されている。本城跡では、多くの鉄釘が出土しているが、すべて建物に使用されていたとは考えにくく、鋤直して別の鉄製品を作っていた可能性が考えられる。SB1の柱穴上で検出した焼土4は、その形状から鍛冶炉と考えられ、SB1の建物が無くなった後、その跡地で鍛冶が行われたようである。また、遺跡内から轆の羽口、炉壁、鉄滓が出土しており、鍛冶を行っていたことを示す資料である。

#### (4) 城の時期・性格について

備前焼・瀬戸焼・磁器などは13世紀代と思われるものが出土しているが、日常生活に使用される土師質土器は13世紀代のものは出土していない。陶磁器類は伝世されることも多く、古い時代のものが使用されることはある。また、15世紀と思われる土師質土器も出土していない。草戸千軒町遺跡のⅡ期後半最新段階(14世紀中葉)に相当する土師質土器が中心であることから、本城跡は14世紀中葉の城跡で、短期間しか使用されていないものと思われる。しか

第16表 1郭周辺中世土器類組成表

	点数	重量(g)
土器	土師質土器	2099 73.1% 24919.40 34.1%
	灰質土器	203 7.1% 5654.68 7.8%
	小計	2302 80.2% 30565.08 41.9%
	亀山焼	94 3.2% 2241.12 3.1%
国産陶器	夏嘗系須恵器	18 0.6% 754.96 1.0%
	須恵器系土器	38 1.3% 521.55 0.7%
	備前焼	359 12.5% 35721.82 48.9%
	常滑焼	9 0.3% 2297.87 3.2%
輸入陶器	瀬戸焼	3 0.1% 93.39 0.1%
	不明	16 0.4% 129.66 0.2%
	小計	531 18.5% 41751.36 57.2%
	青磁	16 0.6% 149.98 0.2%
金銀	白磁	12 0.4% 419.18 0.6%
	青白磁	8 0.3% 97.19 0.1%
	天目	1 0.0% 5.15 0.0%
	小計	37 1.3% 671.50 0.9%
	計	2870 72987.94

し、建物は何回かの建て替えが行われている。二次焼成を受けた土器類が比較的多く、炭・焼土層が広がる部分もある。鍛冶作業や日常の煮炊きに伴うというより、火事にあったことを物語るものと思われる。短期間のうちに何度も建替えが行われたことは、火事による焼失と関係がある可能性も考えられる。

先述したように、建物跡は主軸方向の違いや重複から、SB1・2→SB3・4→SB5という変遷も考えられる。そうであれば、当初は2間×4間のSB1、2間×3間のSB2という2棟の庇をもつ比較的大規模な建物が同時存在し、後にSB3・4という倉庫と推定される総柱の建物跡2棟が同時存在したことになる。同じ用途の建物が2棟同時存在することに疑念はあるが、建替えによって城の機能が大きく変わったことも考えられる。最終的には、城としての機能のほかに、鍛冶炉と考えられる焼土や鉄滓などの出土から鍛冶関係の作業場としても利用されたものと思われる。

本城跡は南北朝時代に杉原氏によって築城されたと伝えられ、約1km北側にはその本拠城とされる鷺尾山城跡が存在する。文政8(1825)年に完成した広島藩の地誌である『芸藩通志』によると、鷺尾山城の城主は杉原信平で、家ノ城跡の城主はその弟為平とされる。『福山志料』所収の建武3年(1336)「足利尊氏袖判下文」によると、多々良浜の戦い(筑前国、現在の福岡市東区)の功績によって、杉原信平に木梨荘の地頭職が与えられている。木梨荘は尾道市木ノ庄町木梨を中心としたかなり広い荘域であったと考えられている。信平は杉原氏の庶流であったが、次第に勢力を拡大し、杉原氏一族の中でも有力な地位を占めることになったようである。

本城跡が所在する場所は、独立丘陵で周囲を見渡すことができる。現在でも城跡の北側に東西を結ぶ道路、東側には南北を結ぶ道路があり、古くから交通の要衝であったものと思われる。城が築かれる以前に柱状高台土師器や大型土師器碗を使用して祭祀が行われたと考えられることからも、この地は地政学上重要な場所であったものと推察される。1郭西側は土坑中心なのに対し、東側に建物跡が集中していることから、東が正面であったものと思われる。1郭の中でも空間による性格・用途の違いがあったようである。本城跡で中心となる郭は1郭から南尾根にかけて連なっており、南と東を意識した城といえることができる。なお、北西に土橋を伴う堀切があり、登城路の1つであったものと思われる。

小都隆氏によれば、城は「14世紀に緊急時に臨時に掘籠ることを想定した小規模城として現れ、15~16世紀には国人領主の本拠となつた中・大規模城が多く造られる。」とされている。<sup>(19)</sup> 本城跡は、山城としては早い段階の、しかも大規模な城跡であるといえる。

山城跡では比較的小規模な建物が検出されることが多いが、本城跡では庇を持つ比較的大規模な建物跡が検出され、土師質土器の皿などがまとめて出土していることから、それを使用した饗宴が行われた可能性が高い。また、奢侈品と考えられる輸入陶磁器も出土している。このことから館としての機能があつたものと思われる。土師質土器などから14世紀中葉を中心とする城跡とすれば、時期的には杉原信平・為平兄弟がそれぞれ城を築いた時期と一致す

る。最終的に城主を特定することは困難であるが、城の規模や検出遺構・出土遺物などからみて、かなりの有力者が造った城と考えられ、出土遺物の時期や鷺尾城との位置的な関係などから、鷺尾城と密接な関わりをもって築城された城の1つと考えられる。以上のように今回の調査によって、この地域の城館研究や歴史的な様相を考えるうえで良好な資料が得られた。

## 註

- (1) 財団法人広島県教育事業団『曾川1号遺跡（G～J地区）』 2008年
- (2) 出土土器類については、広島県立歴史博物館鈴木康之氏のご教示を得た。
- (3) 柱状高台土師質土器と呼ばれることが多いが、古代末から中世初期の遺物と考えられるため、土師質土器ではなく、土師器とした。同様に本遺跡出土の高台付大型瓶についても、古代末の時期である可能性も考えて、土師質土器ではなく、土師器と表記した。
- (4) 八峰興「柱状高台考」『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』 中世土器研究会 2001年
- (5) 潤見浩「大朝町・千代田町の遺跡・遺物」『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 1976年
- (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 III』 1998年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡』 2005年
- (8) 鈴木康之「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』 V 広島県教育委員会 1996年
- (9) 雑原芳秀「尾道市浄土寺所蔵の土師質土器」『草戸千軒』No.114 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1982年
- (10) 間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60 ニュー・サイエンス社 1991年
- (11) 鈴木康之「土器・陶磁器の出土傾向」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』 V 広島県教育委員会 1996年
- (12) 藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』 高志書院 2008年
- (13) 横田賀次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年
- (14) 小都隆『中世城館跡の考古学的研究』 漢水社 2005年
- (15) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『三太刀遺跡（I）』 2003年
- (16) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
- (17) 広島県教育委員会『恵下城跡発掘調査概報』 1978年
- (18) 墓土古墳発掘調査団『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』 1989年
- (19) 註(14)と同じ



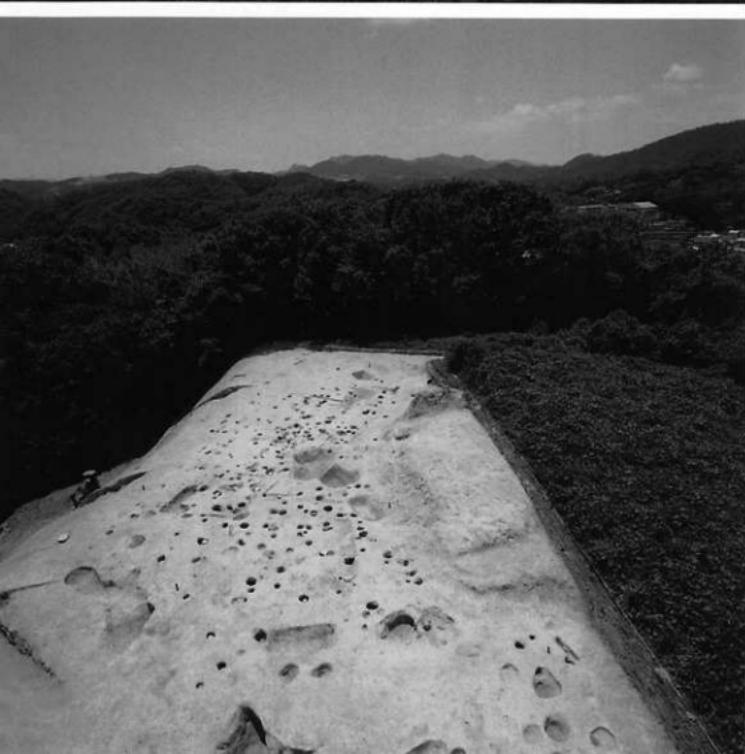
a 家ノ城跡発掘調査後遠景  
(北東上空から)



b 第3・4次調査区調査後  
全景(北上空から)



a 第3・4次調査区調査後  
全景（直上から）



b 1郭東半部（第3・4次  
調査区）完掘全景  
(北上空から)



a 第5次調査区調査後全景  
(北西上空から)



b 1郭西半部（第5次調査区）完掘全景  
(直上から、上が東)



a 第5次調査前遠景  
(北東から)



b 第5次調査前近景  
(北東から)



c 第5次調査後近景  
(北から)

a 1郭東半部（第3・4次  
調査区）完掘状況  
(南から)



b 1郭西半部（第5次調査  
区）完掘状況  
(南西から)



c 1郭西半部（第5次調査  
区）完掘状況  
(南東から)





a SB 1 全景  
(北東から)



b SB 1 西側根石列検出状況  
(北東から)

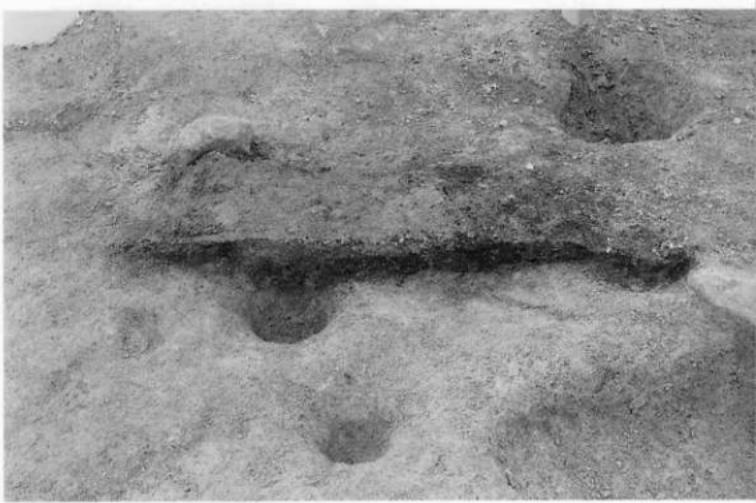


c SB 2・SX 2 検出状況  
(西から)

a SX2・SK5土層断面  
(南西から)



b 焼土1検出状況  
(南西から)



c 焼土2検出状況  
(南から)

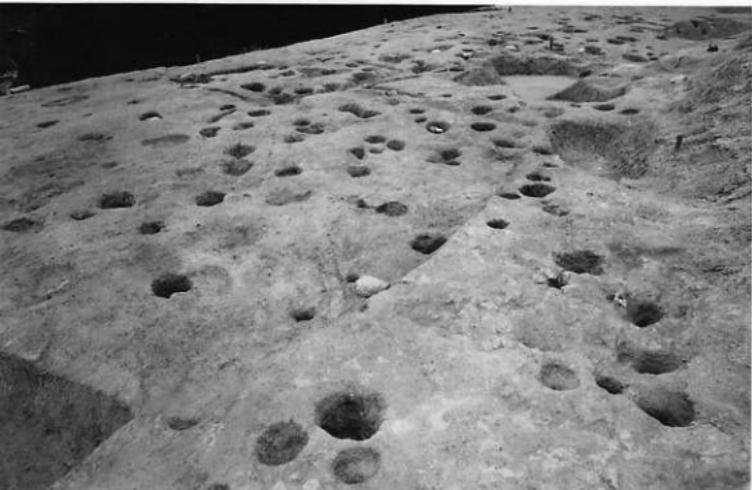




a S B 3 全景  
(北から)



b S B 3 全景  
(北から)



c S B 4 全景  
(北から)



a 焼土4・SB1-P2  
土層断面（南西から）



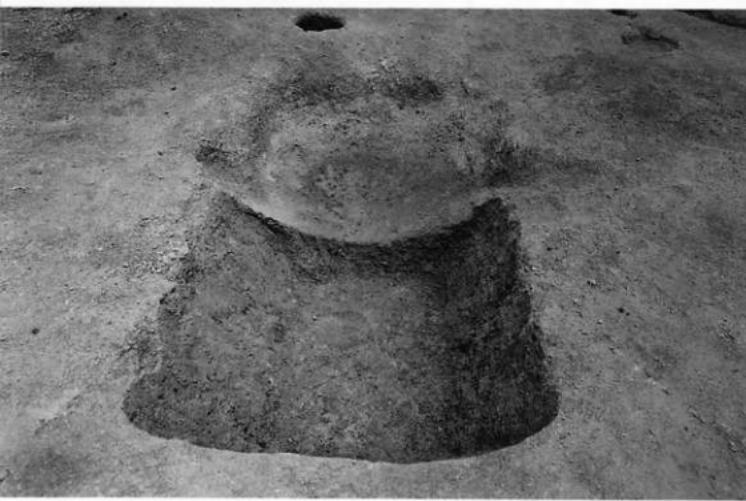
b 焼土4 完掘全景  
(北西から)



c SB5・SX1 検出状況  
(北から)



a SA 1 全景  
(南東から)



b SK 2 粘土部分半裁  
(南から)



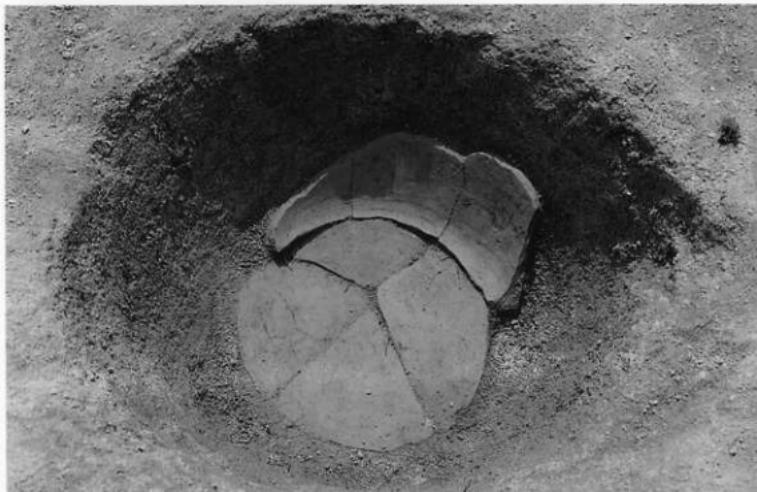
c SK 8 砂検出状況  
(南から)



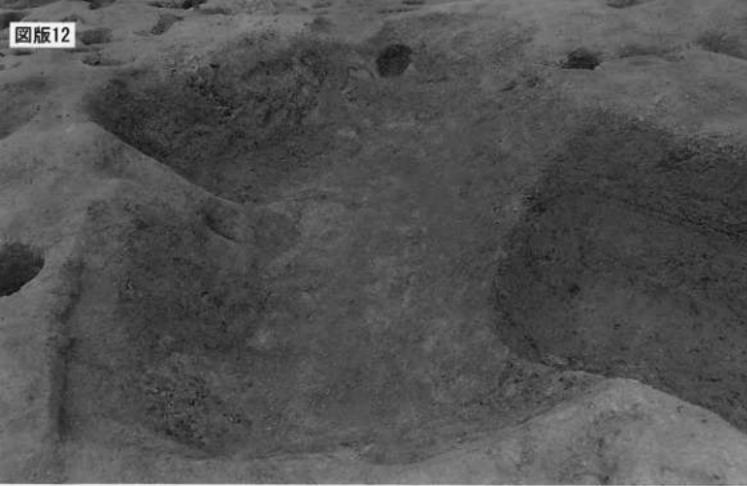
a SK 9 碓検出状況  
(東から)



b SK 10・13・14完掘状況  
(南西から)



c SK 14遺物出土状況  
(西から)



a SK11検出状況  
(北東から)



b SK12検出状況  
(西から)



c SK21完掘状況  
(南東から)



a S K25窯検出状況  
(南から)



b S K32窯検出状況  
(北西から)



c S K33遺物出土状況  
(東から)



a SK33・34完掘状況  
(西から)



b SK32完掘状況  
(北西から)



c SK33遺物出土状況  
(東から)



a SK 36・37完掘状況  
(東から)



b SK 38完掘状況  
(南東から)



c SK 39完掘状況  
(北西から)



a SK 40完掘状況  
(南東から)



b SK 41・42完掘状況  
(南東から)



c SX 12・13完掘状況  
(北から)



a 北東尾根完掘状況  
(西から)



b 北東尾根完掘状況  
(南西から)



c 北東尾根完掘状況  
(北から)



a 北東尾根平坦面 1 土層  
断面（東から）



b 北東尾根平坦面 2 土層  
断面（東から）



c 北東尾根平坦面 3 土層  
断面（東から）



a 北尾根完掘状況  
(東から)



b 北尾根完掘状況  
(南から)



c 北尾根平坦面 5 土層断面  
(東から)



a 北尾根堀切 2 土層断面  
(東から)



b 北尾根堀切 2・平坦面 7  
完掘状況 (南から)



c 北側平坦面 4・土橋完掘  
状況 (南東から)



a 堀切1 土橋部分  
(北東から)



b 堀切1 土層断面  
(北東から)



c 堀切1 北東部  
(北東から)



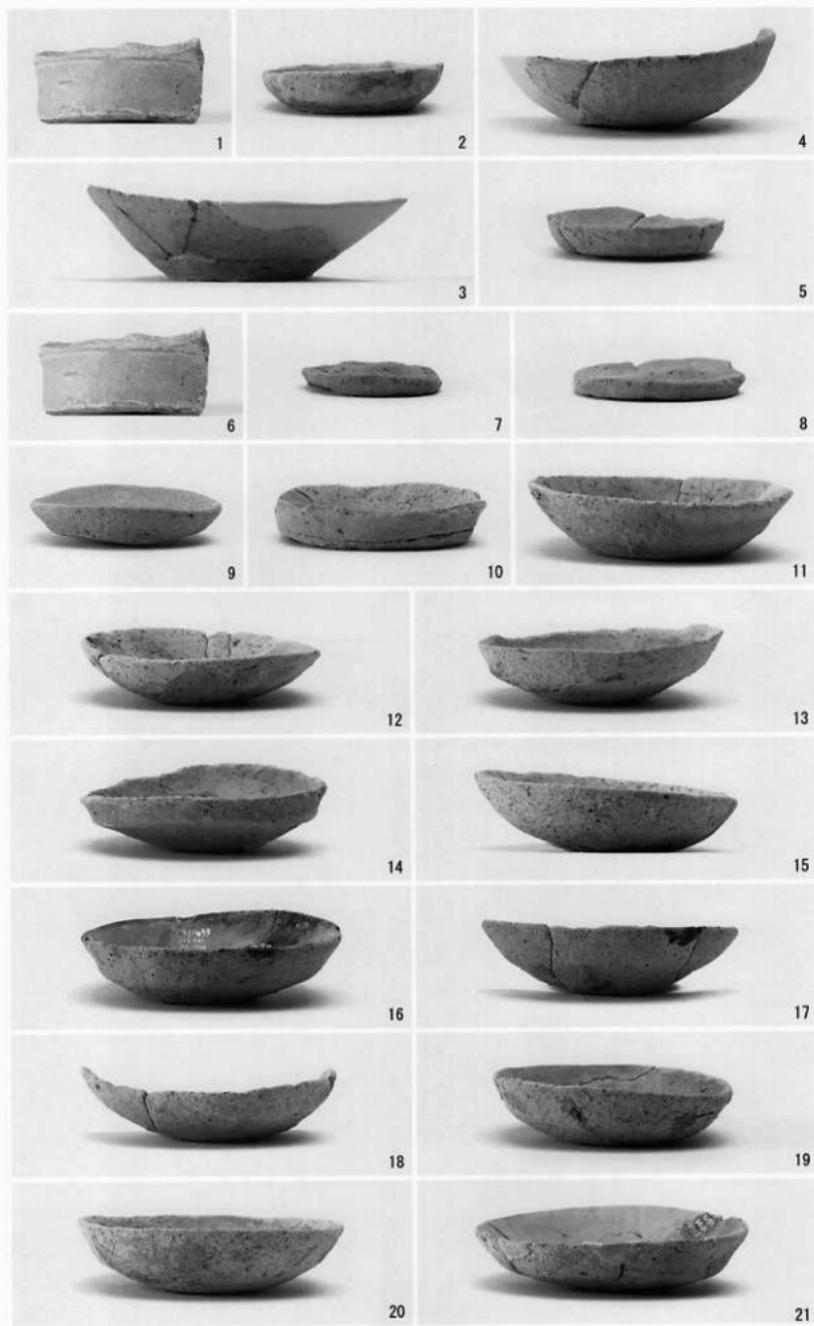
a 北西尾根完掘状況  
(南東から)



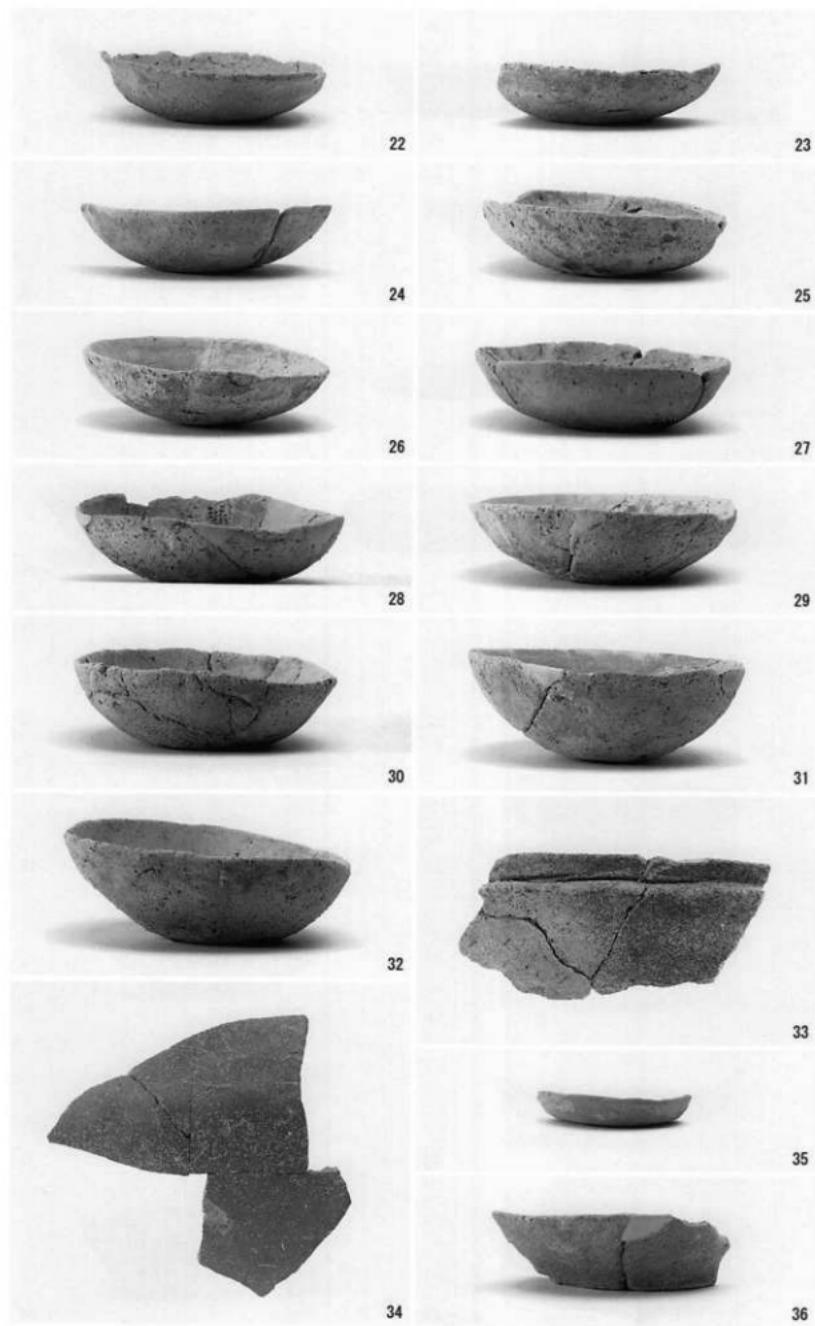
b 1郭西半部調査風景  
(南西から)



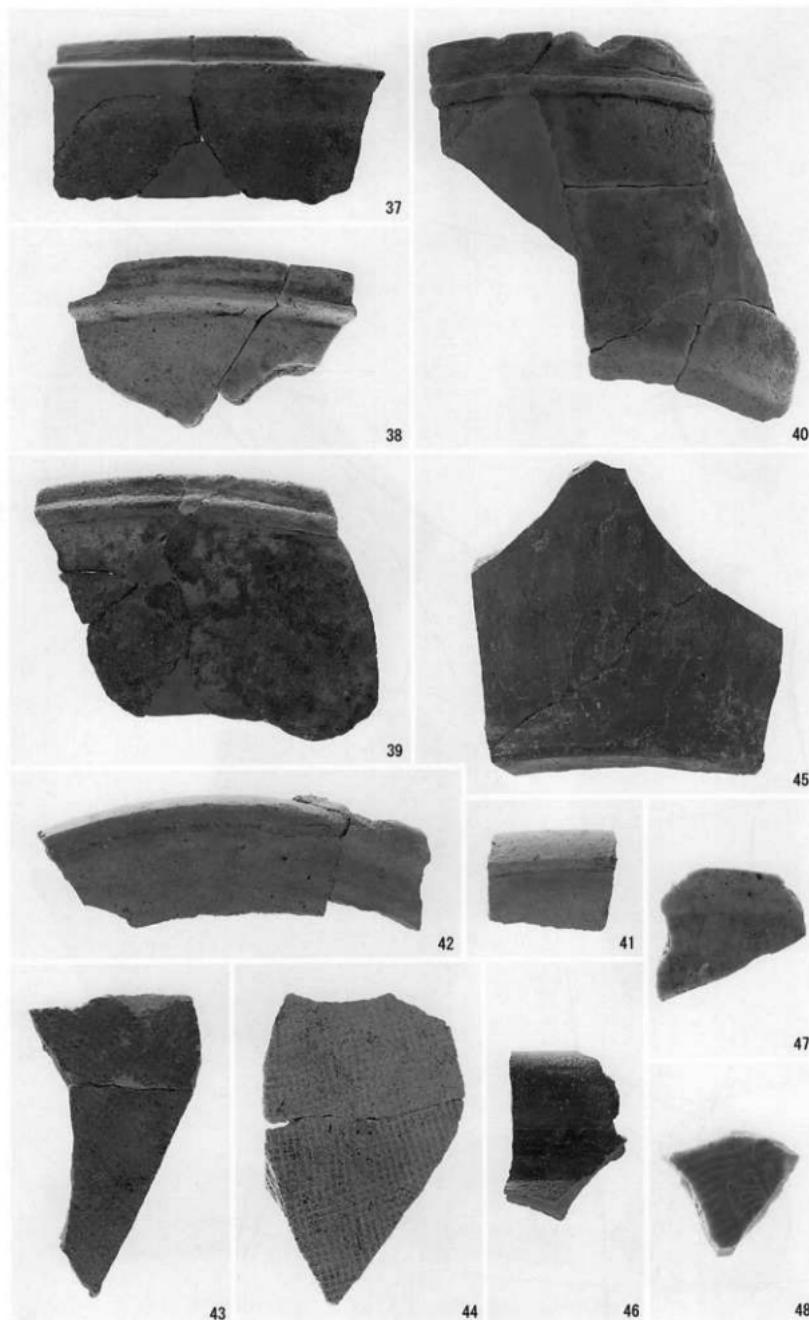
c 家ノ城跡から鷲尾山城を望む (南から)



1 郭周辺出土土器類（1）（SB 2・4, SX 1）



1 郭周辺出土土器類（2）（S X 1・2）



1 郭周辺出土土器類（3）（S X 2）



49



52



53



50



51



57



55



59



56

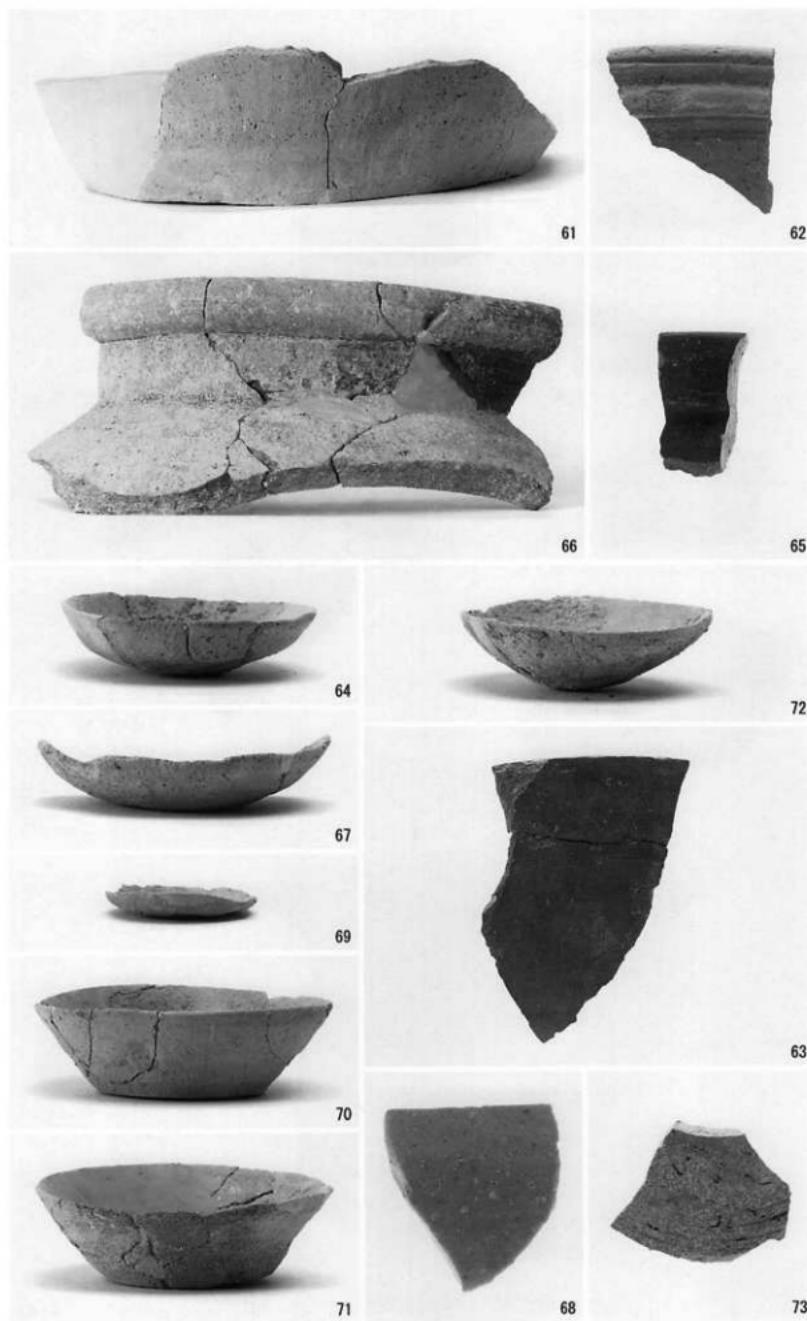


58

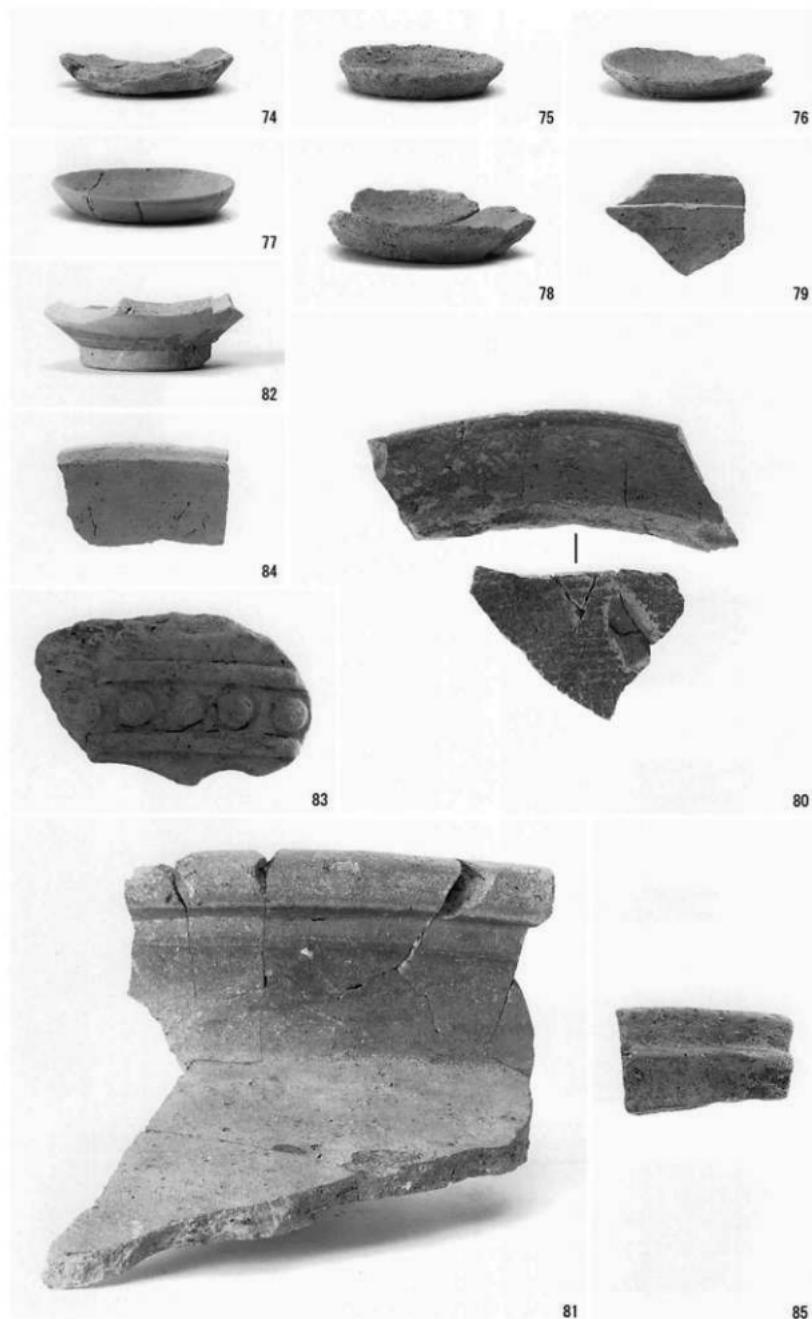


60

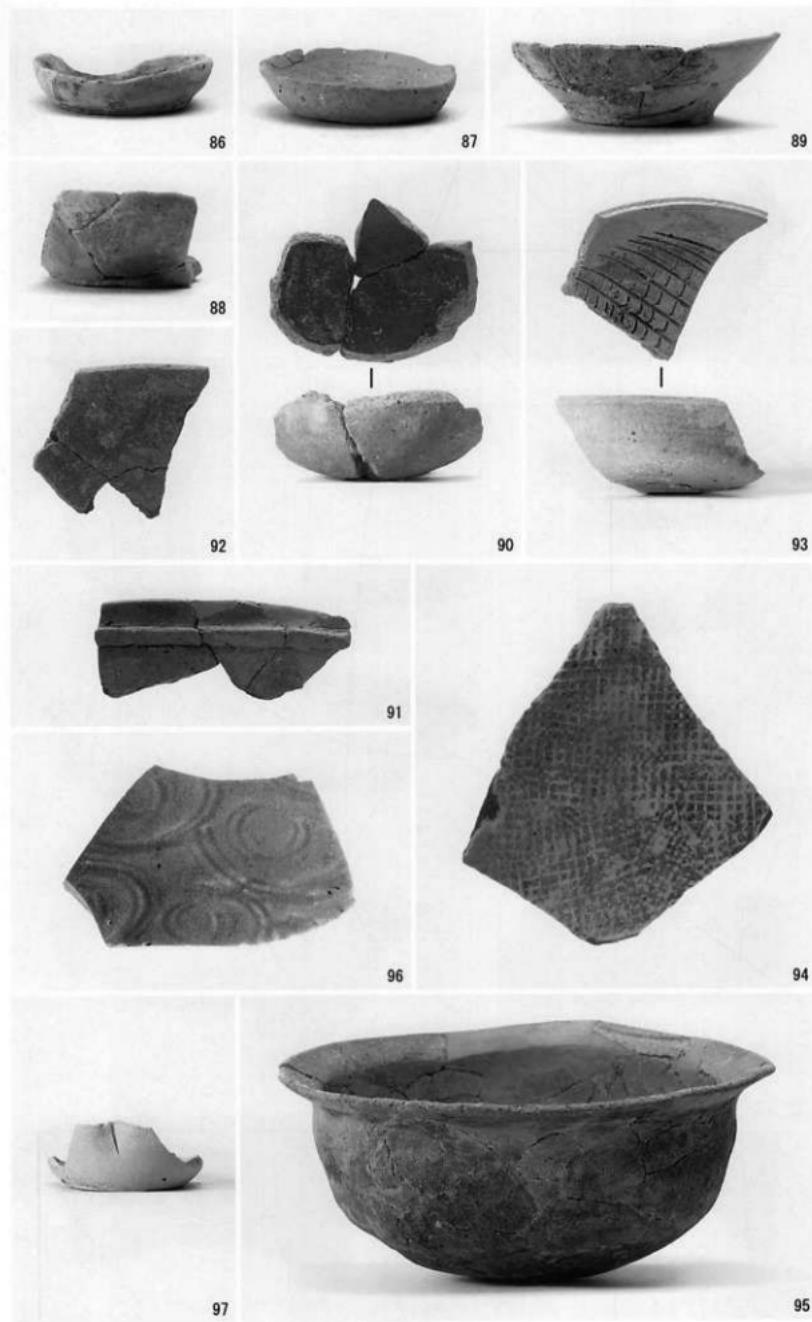
1 郡周辺出土土器類（4）（S X 13, SK 2・5・11・12）



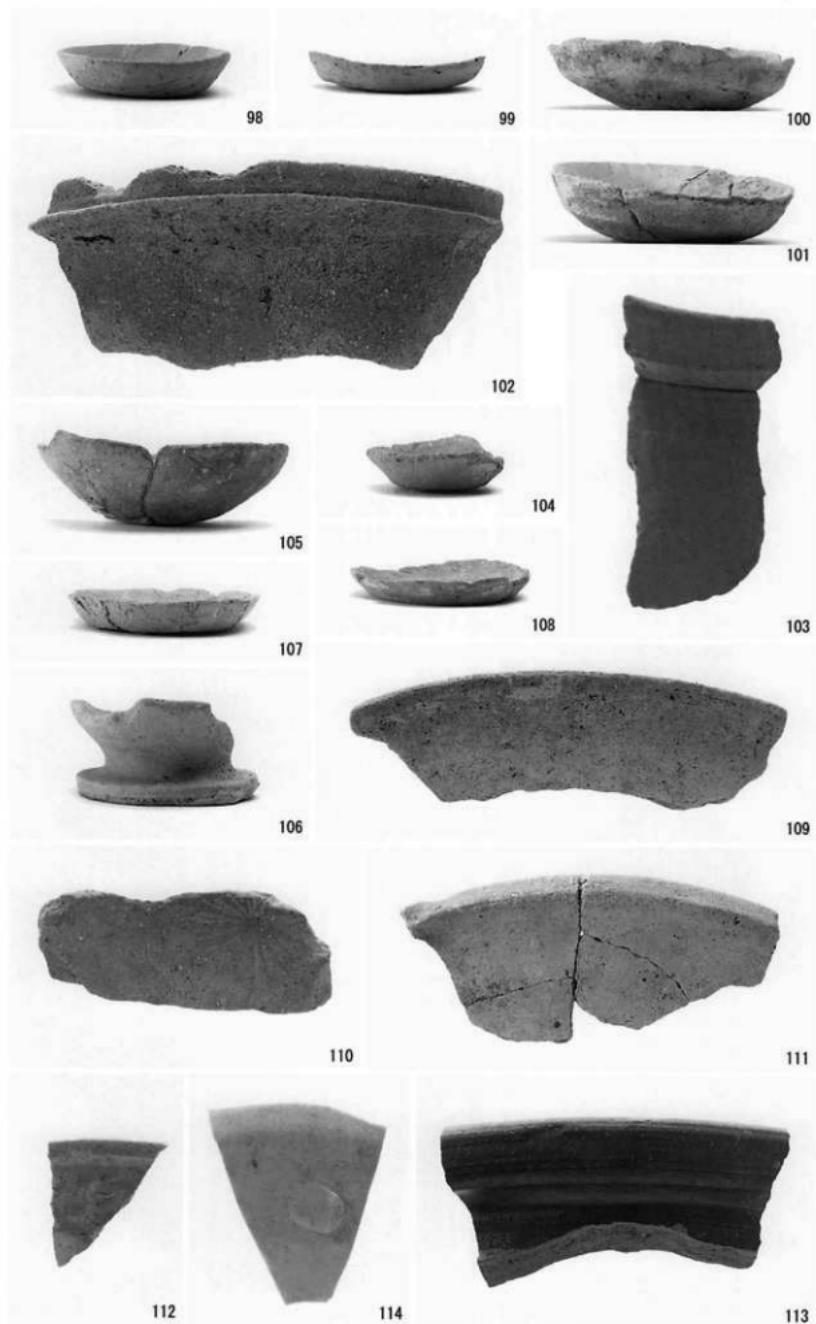
1 郭周辺出土土器類（5）（SK 14・21・25・27～30・33・35）



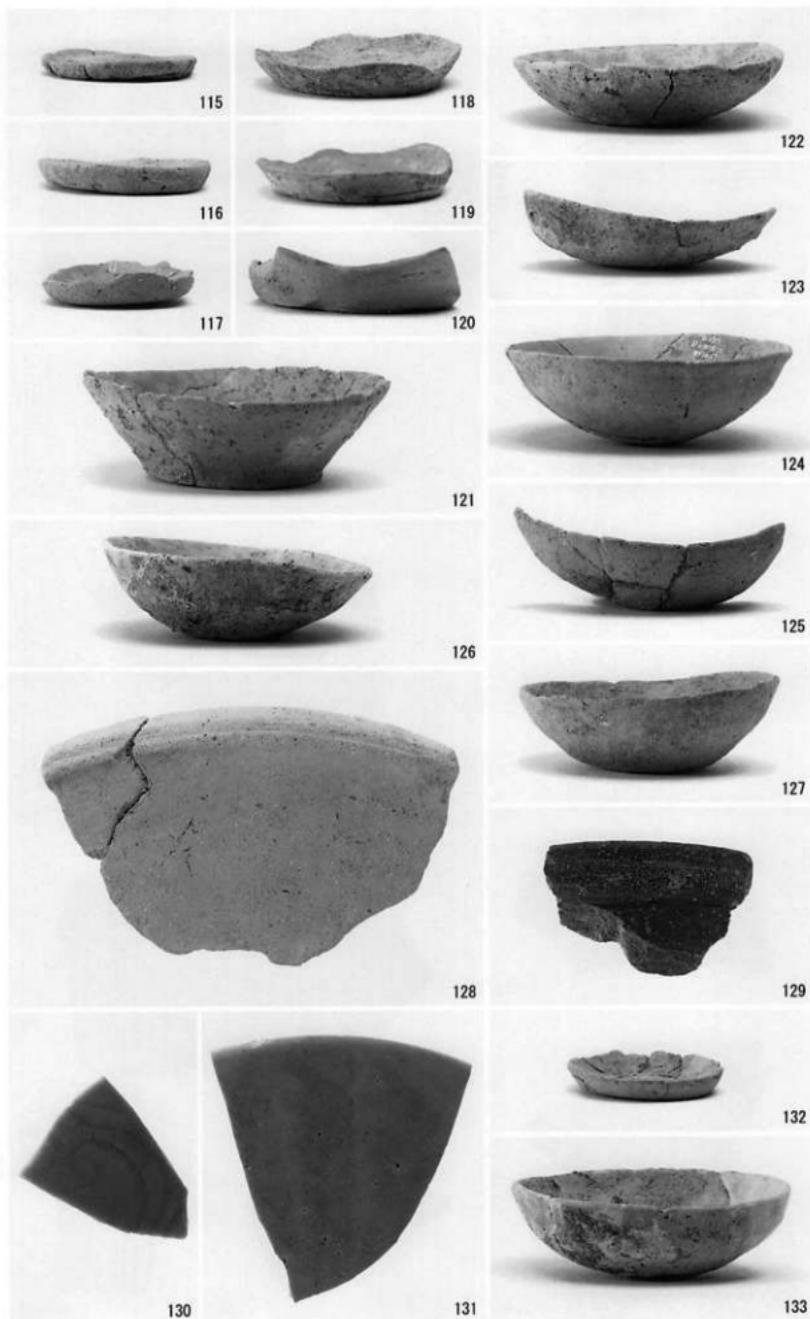
1 郭周辺出土土器類（6）(SK 36～38)



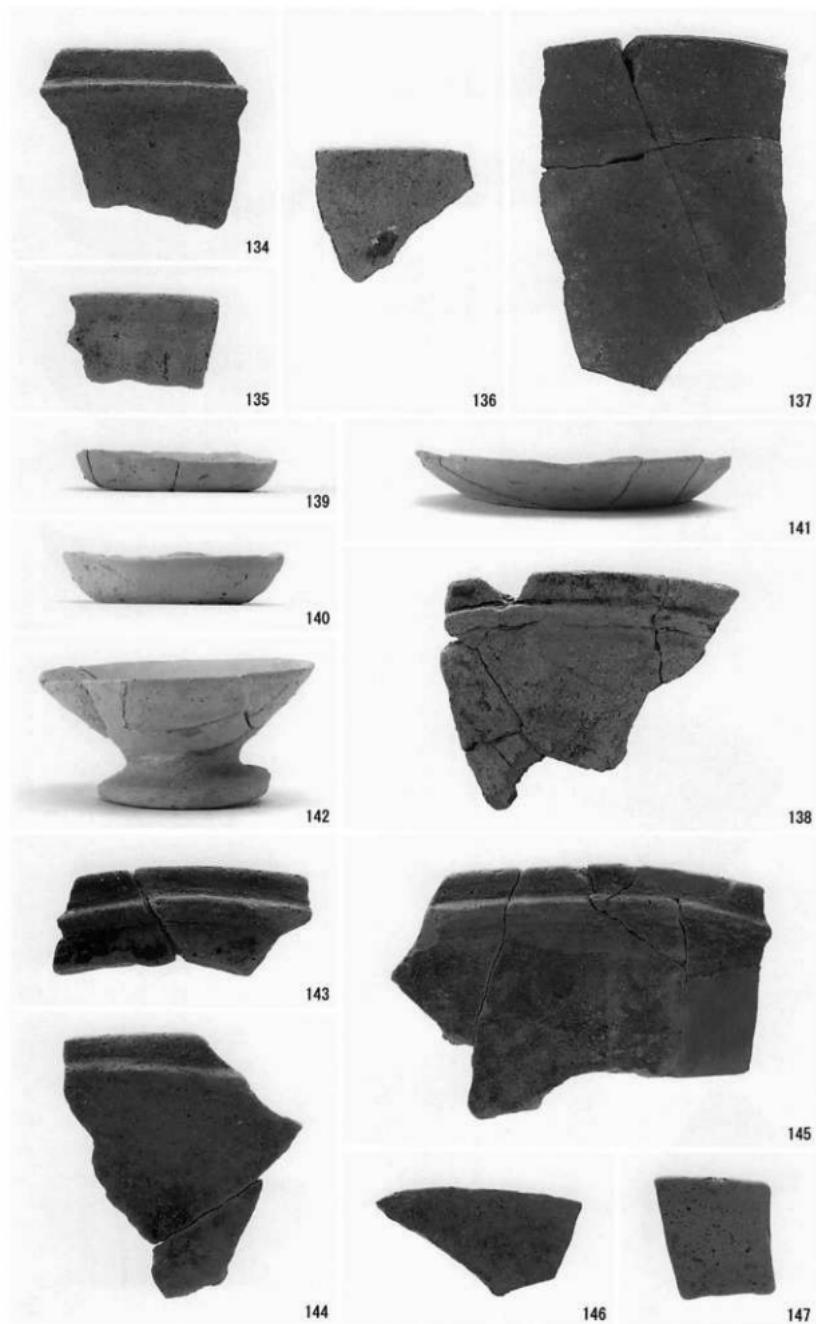
1 郭周辺出土土器類（7）（SK 39, SD 11・12）



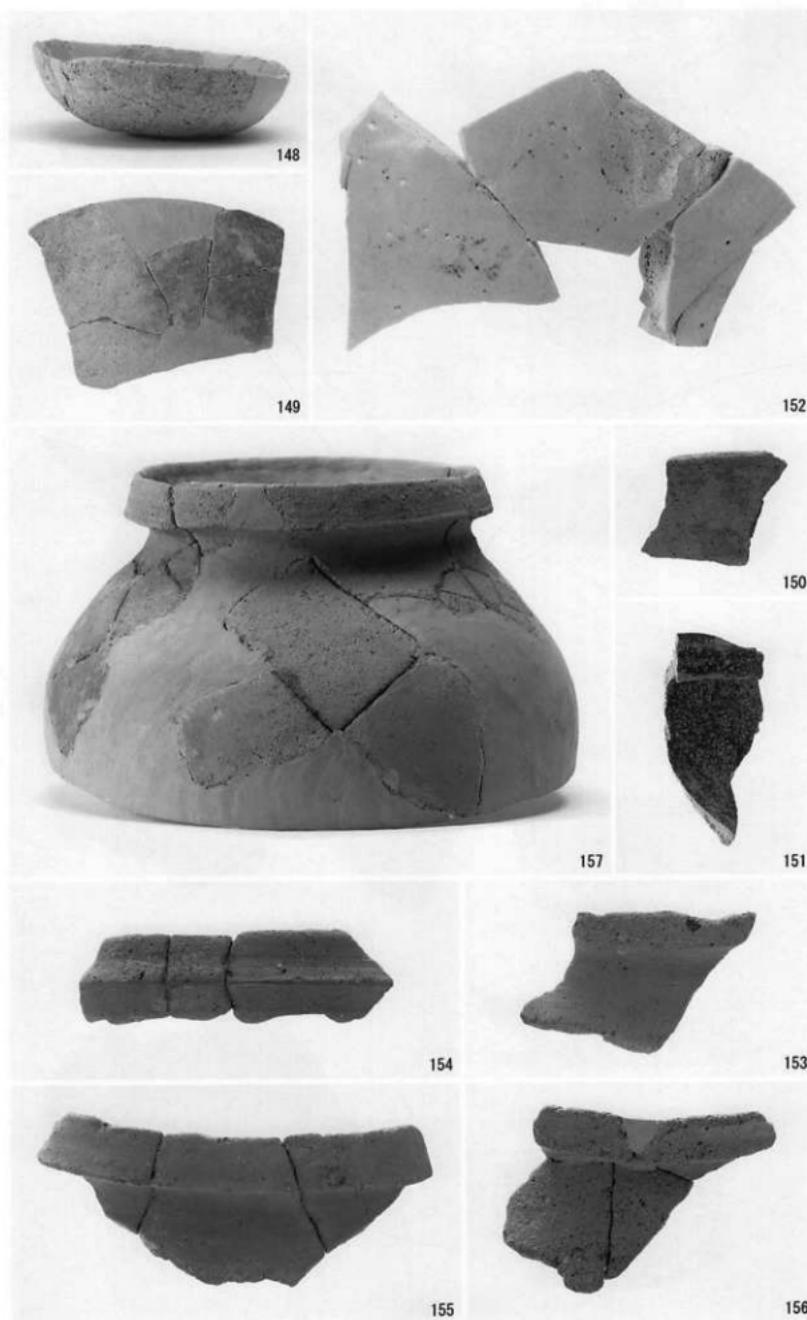
1 郡周辺出土土器類(8) (1 郡ピット, トレンチ1・2)



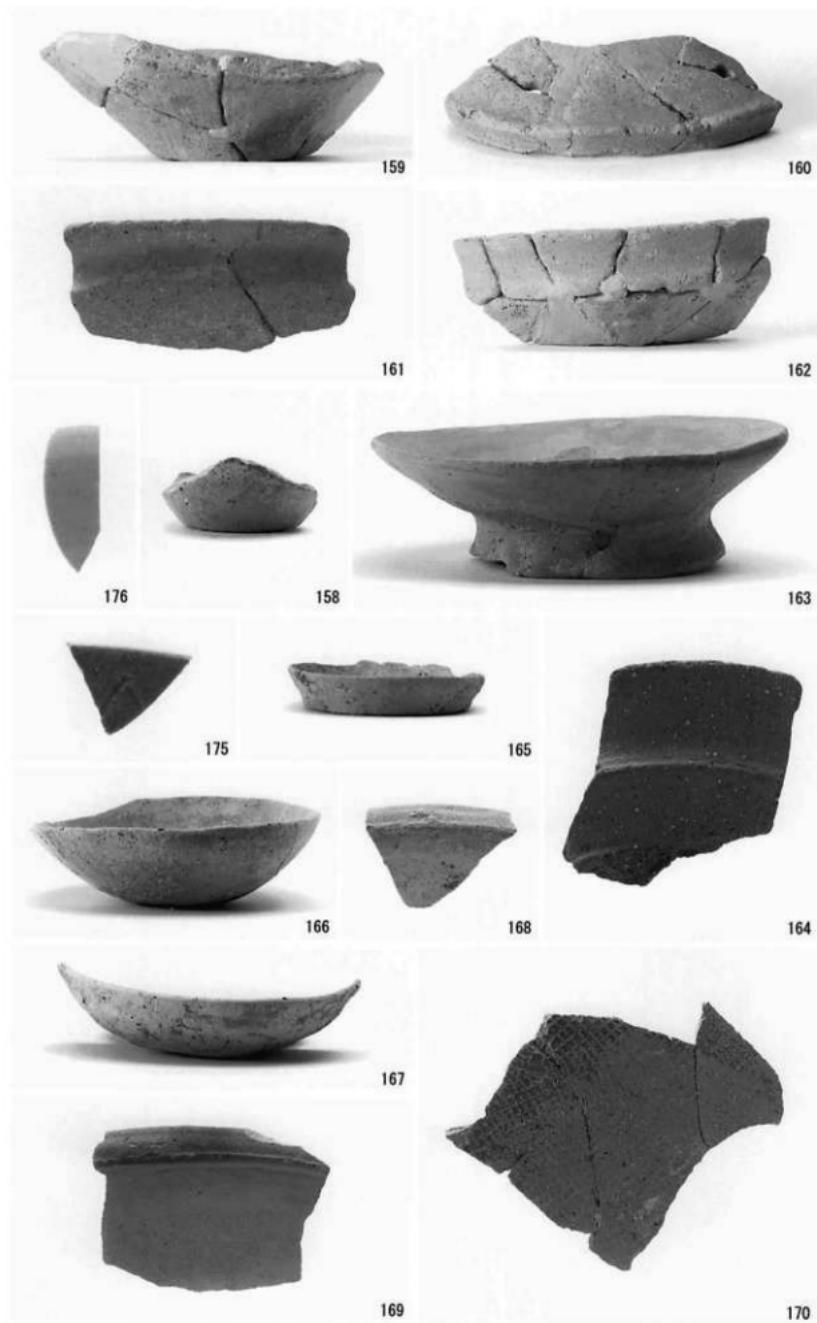
1 郡周辺出土土器類（9）（トレンチ3, F 7, G 8区）



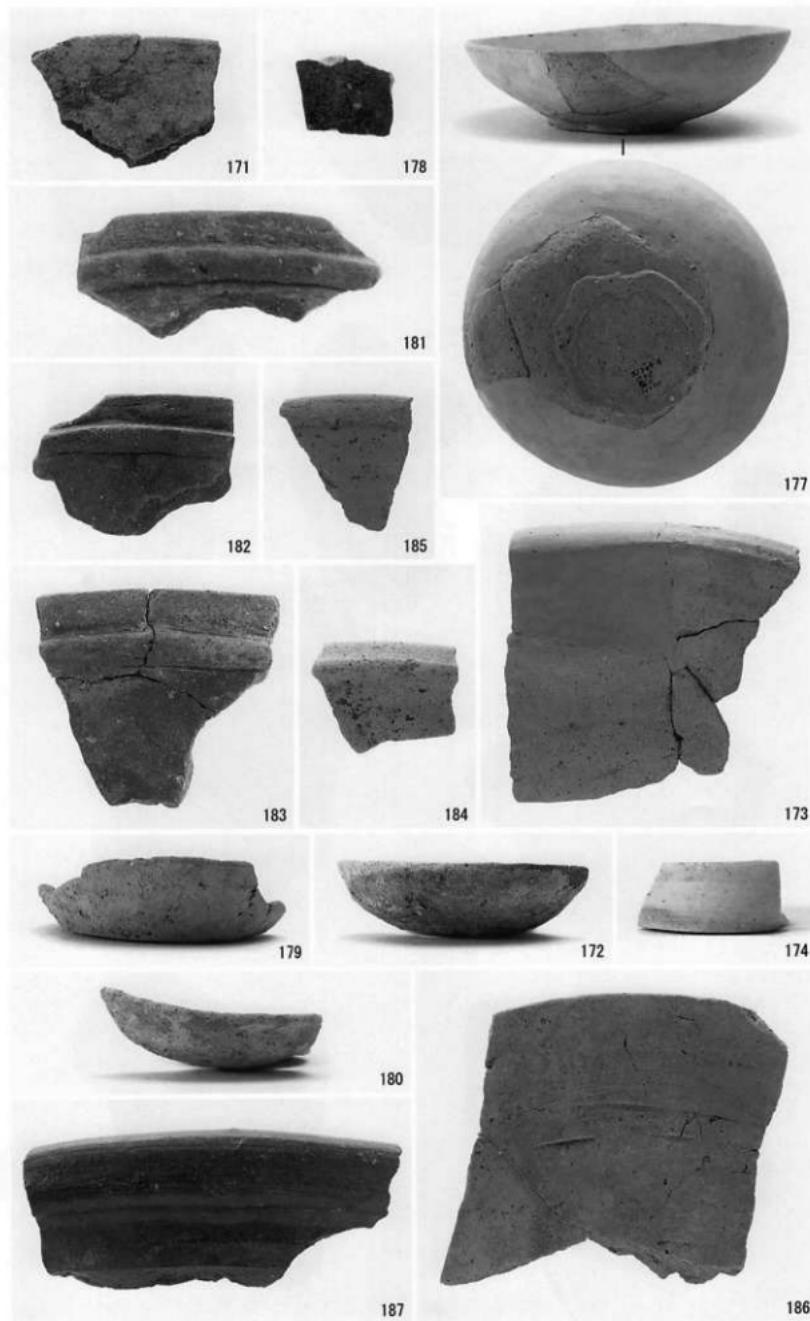
1 郭周辺出土土器類(10) (G 8~12区)



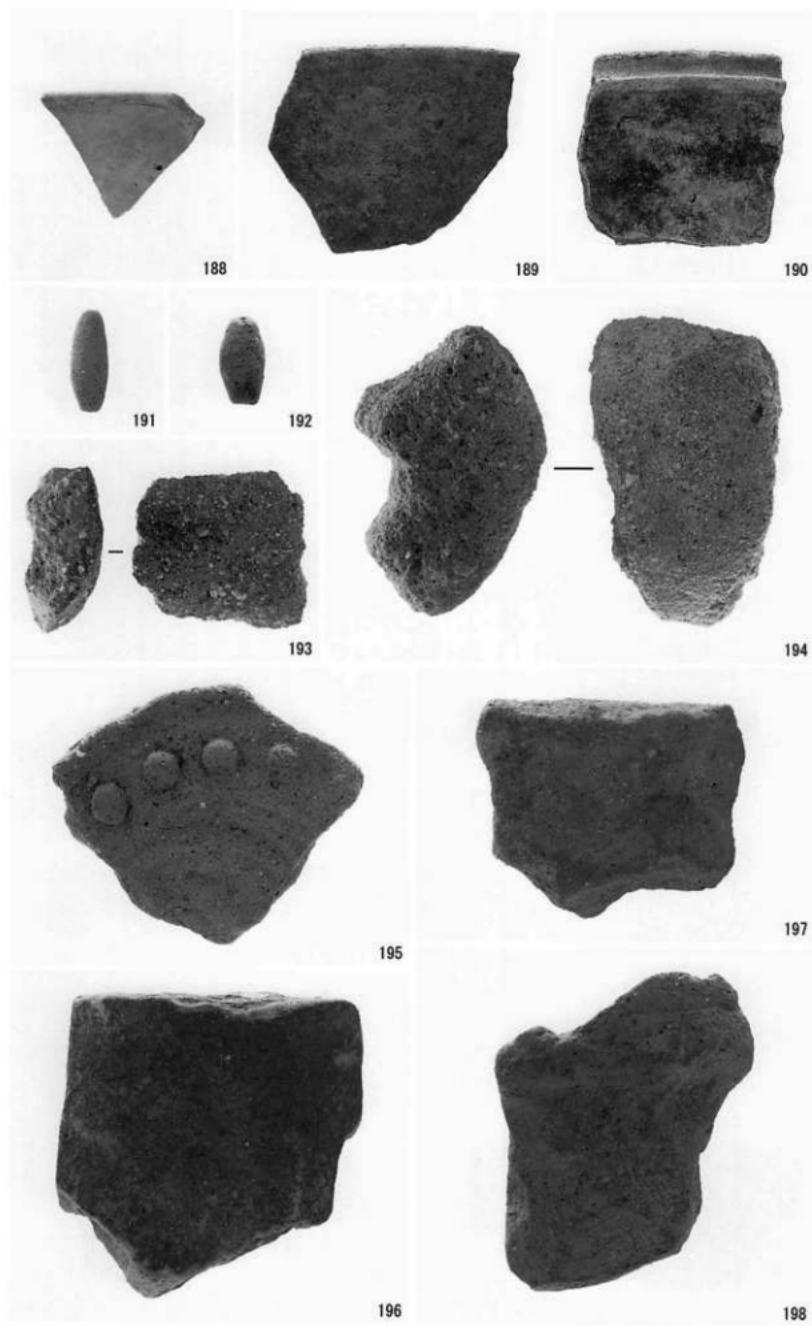
1 郡周辺出土土器類 (11) (G 13, H 11・13 区)



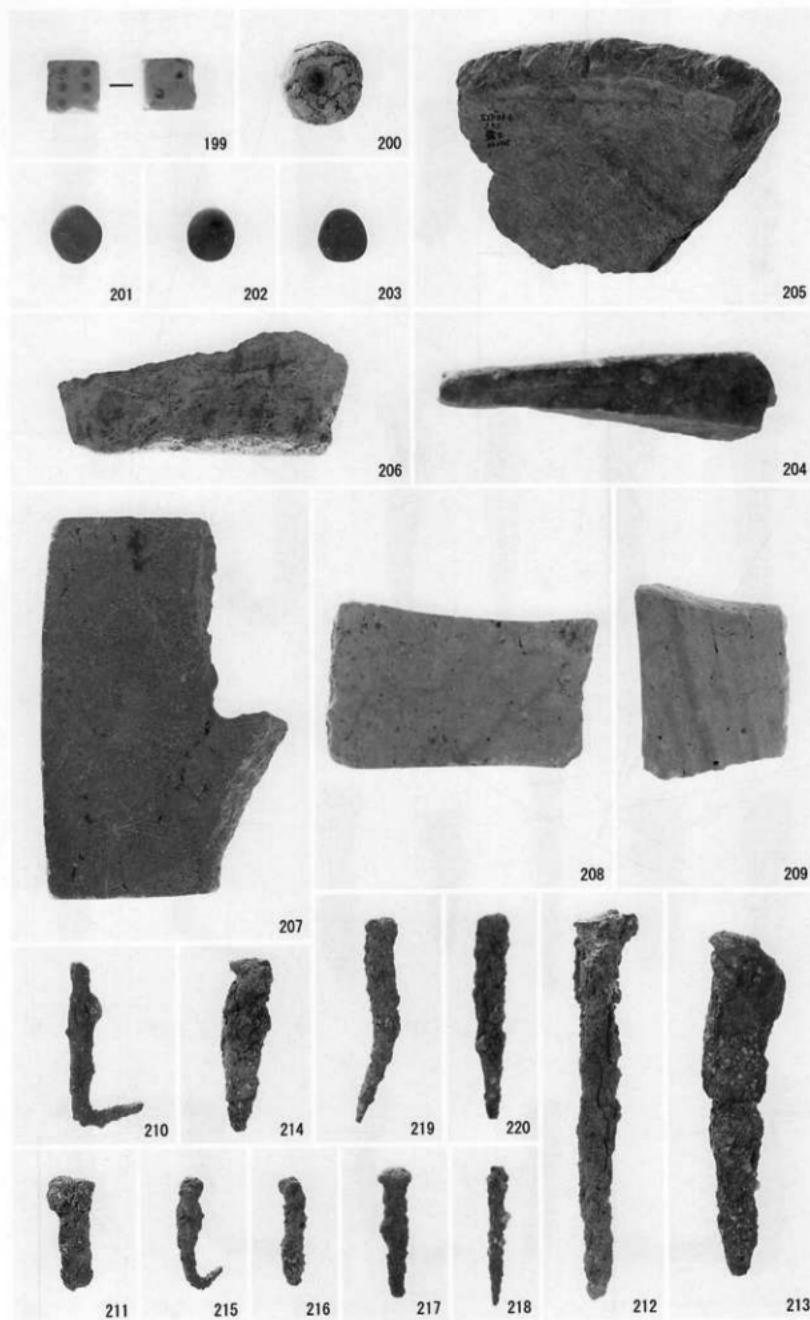
1 郭周辺出土土器類 (12) (H 13・14, I 10・11区)



1 郭周辺出土土器類 (13) (I 12, J 9・10区, 1郭第4次調査区, 1郭東側切岸)



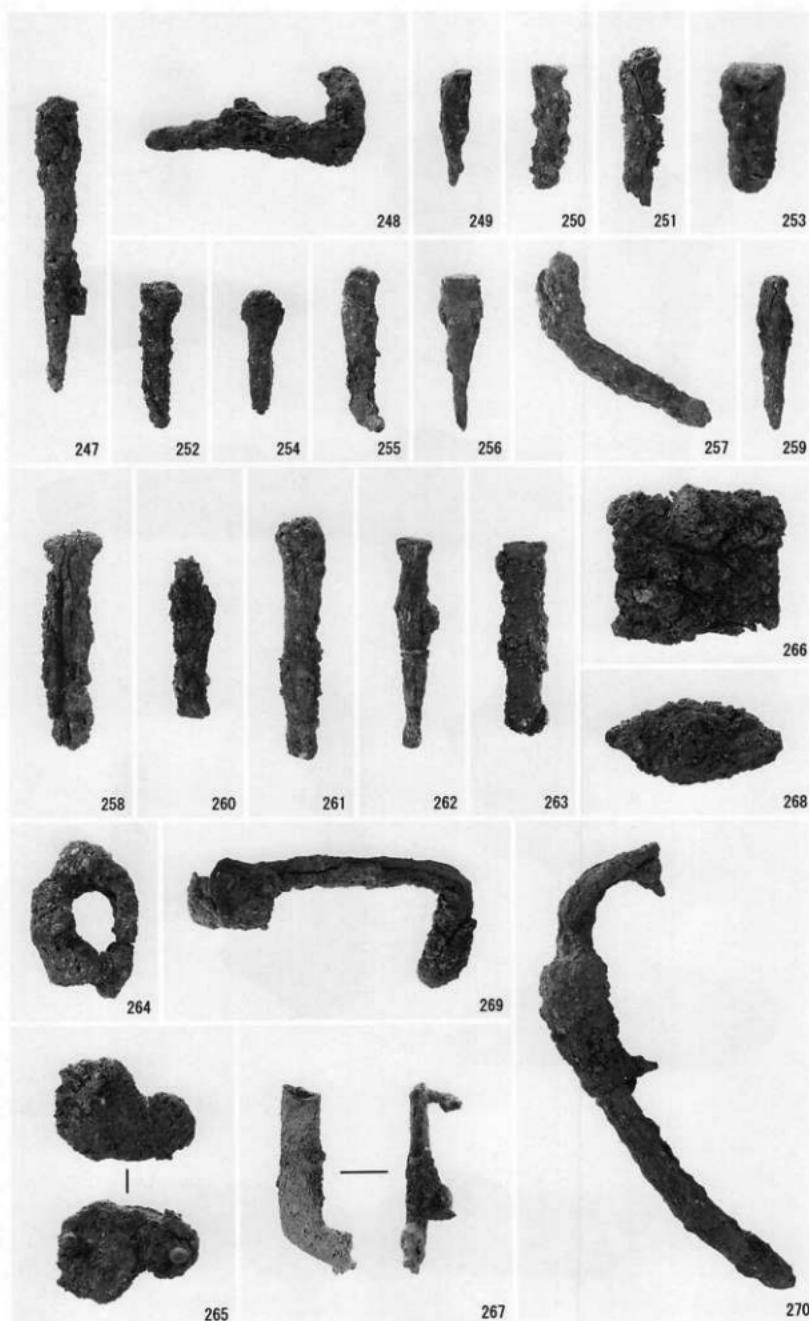
1 郭周辺出土土器類 (14) (堀切 1, 北尾根, 北西尾根), 2 郭周辺出土土製品, 3 郭周辺出土瓦



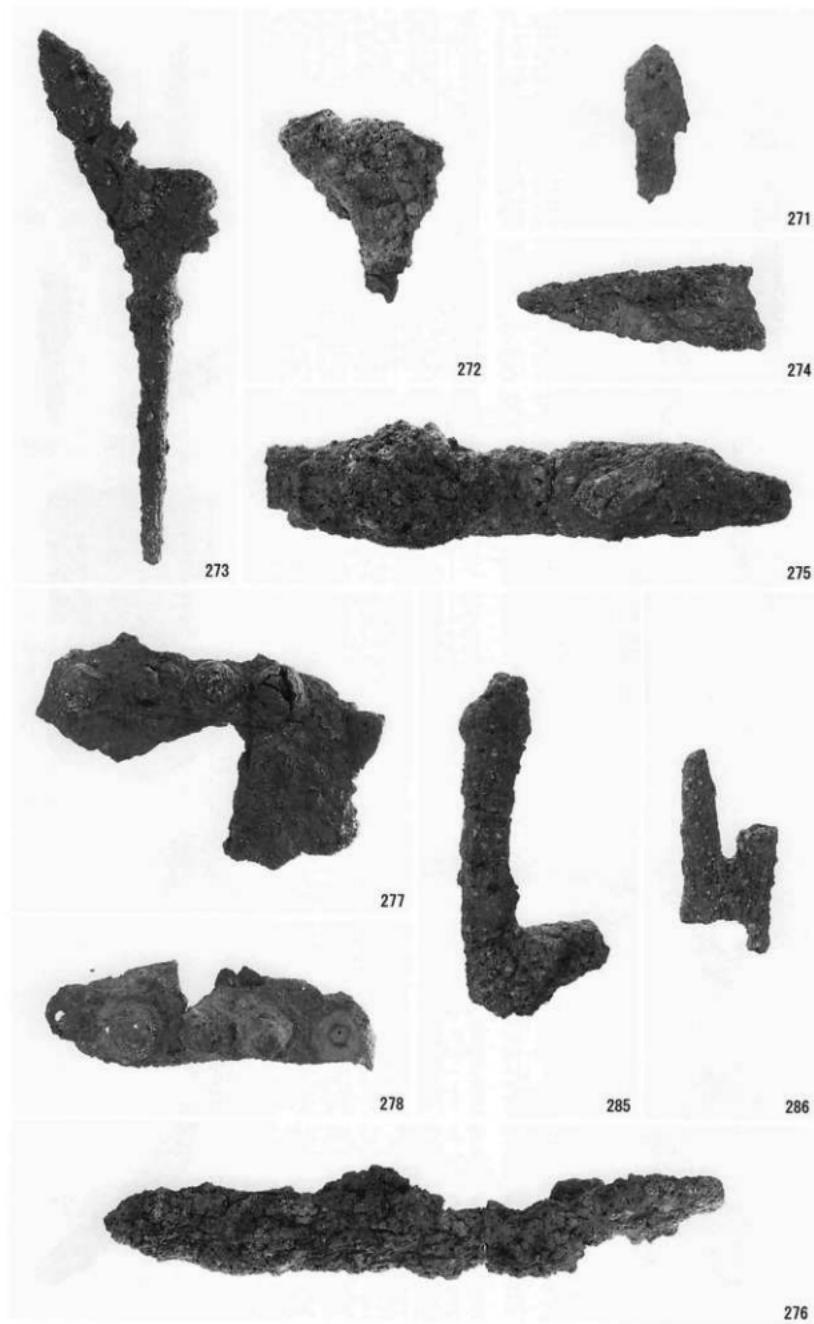
1 郭周辺出土石製品、1 郭周辺出土鐵製品（1）



1 郭周辺出土鉄製品（2）



1 郡周辺出土鉄製品（3）



1 郭周辺出土鉄製品（4）



279



281



283



282



280



284



287



288



289



290



291



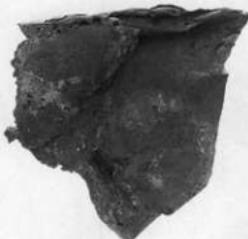
292



293

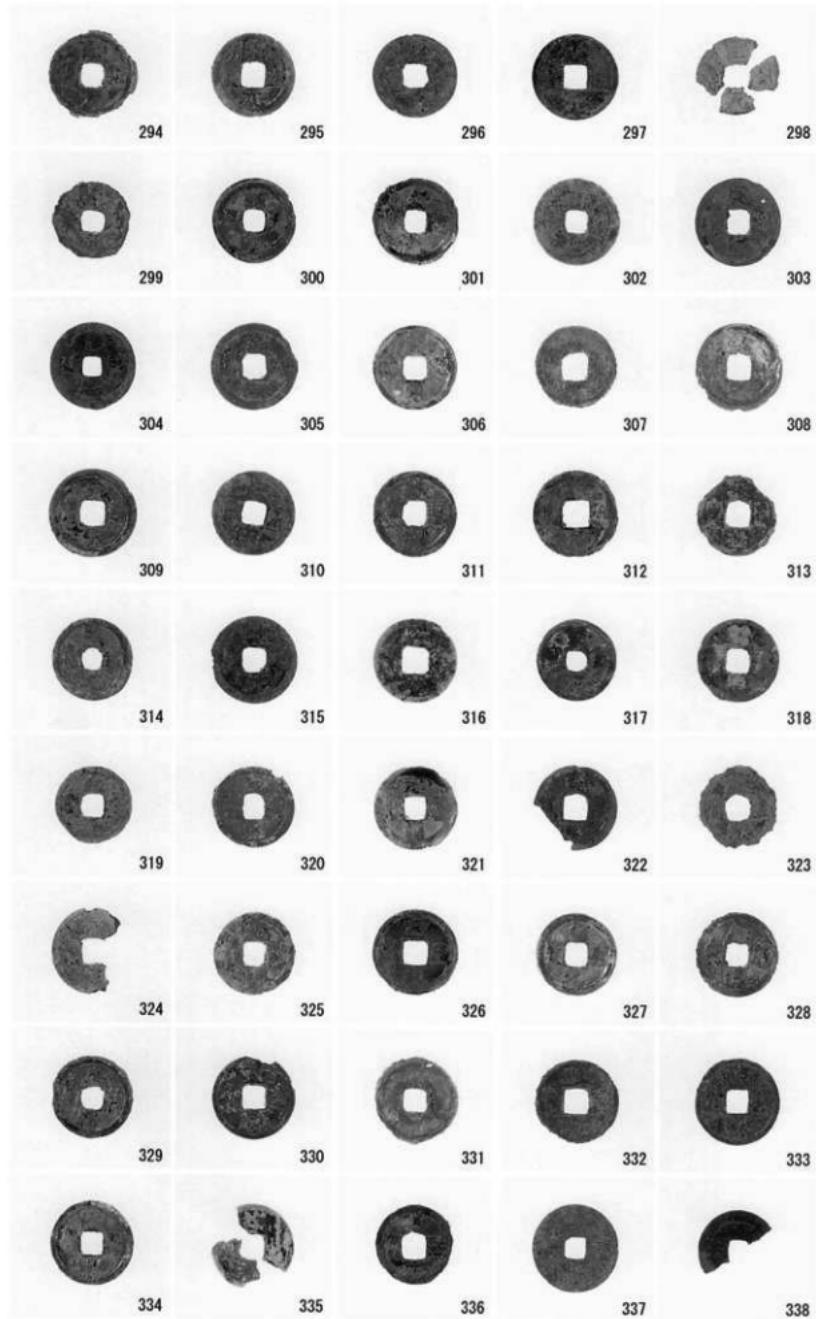


339



340

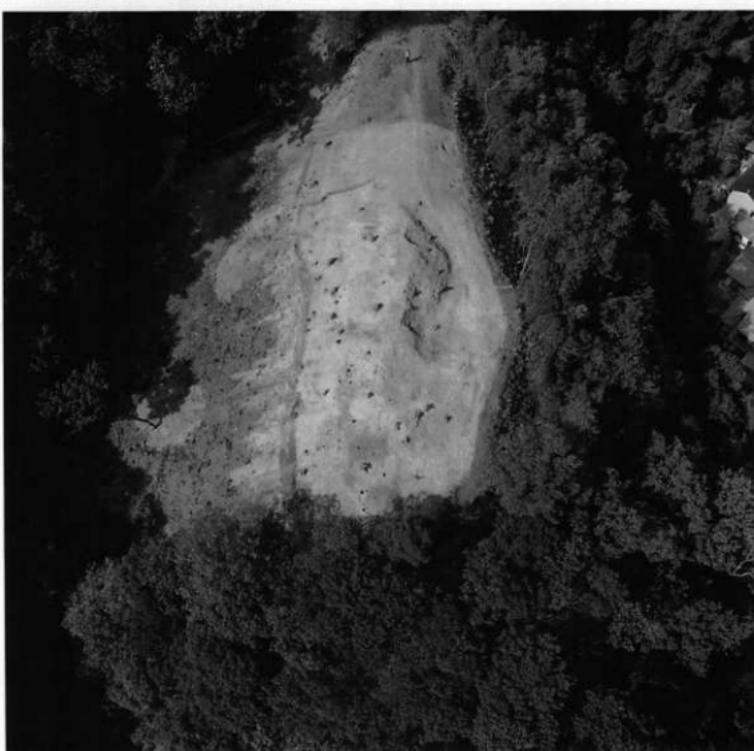
1 郭周辺出土鉄製品（5）、1 郭周辺出土銅製品、1 郭周辺出土漆紙



1 郭周辺出土古銭



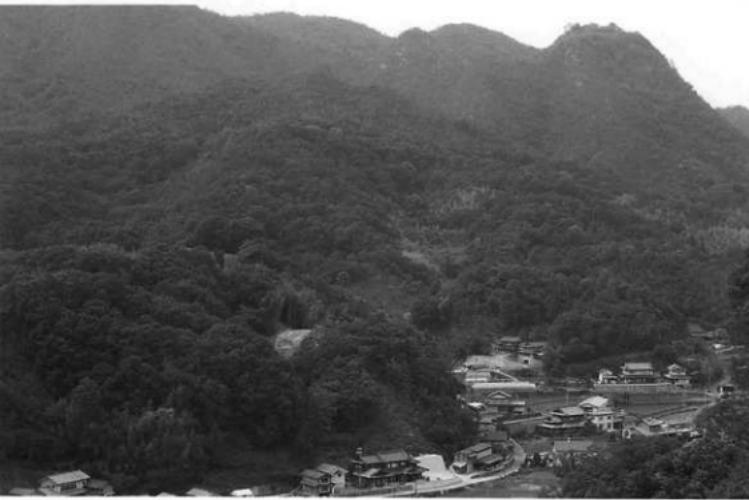
a 南東尾根南半部（第1次  
調査区）調査後遠景  
(南上空から)



b 南東尾根南半部（第1次  
調査区）完掘全景  
(南東上空から)



a 家ノ城跡（第2次調査後）  
遠景  
(北・鷲尾山城跡から)



b 南東尾根北半部（第2次  
調査区）調査後遠景  
(南から)



c 南東尾根南半部（第1次  
調査区）完掘全景  
(北から)



a 南東尾根南半部（第1次  
調査区）完掘全景  
(南から)



b 南東尾根北半部（第2次  
調査区）完掘全景  
(北から)



c 南東尾根北半部（第2次  
調査区）完掘全景  
(南から)



a 南東尾根平坦面 1  
(北から)



b 南東尾根平坦面 2  
(北から)



c 南東尾根平坦面 3  
(北東から)



a 南東尾根平坦面4  
(北から)



b 南東尾根平坦面4・5  
(北から)



c 南東尾根S X 1 完掘状況  
(東から)



a 南東尾根SD1・SX1  
完掘状況（北から）



b 南東尾根SX2土層断面  
(東から)



c 南東尾根SX2瓦出土状  
況（東から）

a 南東尾根S X 3 土層断面  
(南東から)



b 南東尾根S X 3 完掘状況  
(北東から)



c 南東尾根S X 3 完掘状況  
(北西から)





342



343



344



346



345

南东尾根出土遗物

## 報 告 書 抄 錄

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書40集

中國横断自動車道尾道松江線建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告(17)

家ノ城跡

発行日 平成24(2012)年3月5日

編 集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL(082)295-5751 FAX(082)291-3951

発 行 財団法人 広島県教育事業団

印 刷 株式会社エル・コ